

藤原千花は愛されたい～天然彼女の恋愛無脳戦～

ちゃん丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恋愛は戦である――。

好きになつた方が負けなのである――。

秀知院学園・生徒会室。

白銀御行と四宮かぐや。繰り広げられる二人の恋愛頭脳戦に、知らず知らず巻き込まれた生徒会書記・藤原千花。

愛されたい、奪われない願望のある彼女が、ラーメン屋で働く一人の男子高校生に出会う。

これは、恋愛頭脳戦の横で繰り広げられる、天然彼女の恋愛無脳戦である。

本編

目次

かぐや様は選ばれたい	1
藤原千花は満足したい	9
伊井野ミコは信じない	17
藤原千花はお礼したい	24
藤原千花は読んでみたい	33
早坂愛は確かめたい	42
早坂愛は確かめたい②	50
藤原千花は聞かれたい	58
早坂愛は発散したい	66
白銀御行は仲良くしたい	74
藤原千花は笑いたい	83
生徒会は終わりたくない	91
生徒会は終わりたくない②	99
石上優は同情したい	107
かぐや様は守りたい	115
かぐや様は信じたくない	123
藤原千花は行ってみたい	131
藤原千花は眺めたい	139
藤原千花は誘いたい	147
伊井野ミコはザコじゃない	155
藤原千花のアイスはあまい	163
早坂愛は恋を知りたい	172
藤原千花を笑わせたい	181

藤原千花に会いたい

189

白銀御行は伝えたい

197

紅茶が冷めるまで見つめていたい

205

意気地なしの隣に居たい

214

かぐや様は告らせたい

223

月は笑い太陽は涙する

233

白銀御行は奪わせたい

242

かぐや様は奪わせたい

251

ねえ、私を見つけて

261

一緒に帰ろう、喜んで

270

後日談

くちびるバレンタイン

278

桜の下で君に見惚れる

287

恋味リングはいかが？

296

雨の音で誤魔化そうか

305

それが恋と背中を押す

313

本編

かぐや様は選ばれない

高校生の恋愛というのは、単純なようで複雑である。

同じ高校。同じクラス。小さな箱の中にも、社会というものが存在する。いわゆるカースト。頂点に立つ者は、毎日伸び伸びと。底辺にある者は、毎日縮こまり。

そんな中で、男女が過ごすのである。否が応でも、何かしらの情が湧くのも不思議ではない。いや、それは至って普通なこと。

誰々と誰々が付き合った、誰々と誰々が別れた。その度に当の本人たちを差し置いて、周囲の人間が騒ぎ立てる。誇張された事実がクラスを超え、学年を超え、言い伝わっていく。変な空気に包まれ、浮き足だった感覚が彼らを襲うのである。

だがしかし。

その感覚が堪らなく好きな人間も居るわけで。

「いいですか？　恋愛というのは、そんな悩みを乗り越えてこそ、とっても幸せな気持ちになれるんです」

私立秀知院学園。生徒会室。

生徒会書記の藤原千花は、一人の女生徒の悩みに答えていた。頼まれても居ないのに。一方的に。

女生徒の悩みに答えていた生徒会副会長の四宮かぐや。呆れたような、軽蔑するような視線を千花に向ける。それからも分かるように、かぐやにとっても、彼女の出現は想定外だったよう。「はあ」と、一つため息をついた。不思議なことに、千花の言葉を聞いた女生徒は、自身の言葉の時より大きく頷いているように見えた。

「……藤原さん。いつから聞いていたのですか？」

「えへへ。最初からですよ。私が恋バナに混ざらないわけないじゃないですかあ」

満足そうに帰っていった女生徒を見送った二人。かぐやが問いかけると、千花はクシヤツと笑って見せた。気の抜けるような表情。かぐやは自身の相談相手を取られたことがどうでも良くなるような。またため息をついた。

私立・秀知院学園。日本を代表する大手企業の社長などを親に持つ、いわゆる貴族と呼ばれる人種が通っている超が付くほどの名門校。ここから将来の日本を支える人間が出てくるわけで。要は、とんでもない金持ち高校なのである。

そしてその生徒会たるもの、一般庶民が生徒を束ねて良いわけもなく。副会長の四宮かぐや。日本四大財閥「四宮グループ」の長女として生を受け、名誉を欲しいままにしてきた才女中の才女である。胸は小さめ。

のんびりとした雰囲気藤原千花も、父親は政治家。母親は元外交官。れっきとした貴族階級の間人なのである。突拍子のない発言で周囲を混乱させる不思議ちゃんド天然。そして胸が大きい。

「最近は学校でも恋愛が流行ってるみたいですよ」

「それは流行るものなのですか……」

「もうすぐ夏休みですし、みんな浮かれてますもんね」

千花は「流行る」と言ったが、あながち間違いでもないのだ。

思春期らしい、甘酸っぱい異性への意識。共学である秀知院に限らず、全国の共学高校はそれが普通なのだ。それを「流行る」と表現した千花の独特な感性に、かぐやは苦笑いする。

「そういえば、会長遅いですね」

「職員室に用があるとは言ってましたが……そのうちいらっしやるでしょう」

「確かにそうですね」

ルンっ、と軽くステップを踏む千花。それを横目で見るかぐや。

えらくご機嫌な彼女。かぐやは考える。元々そういうことをするタイプである千花だったが、今日はやけに機嫌が良かった。

問いかけようと喉まで出かかった言葉を、かぐやは飲み込んだ。気にはなったものの、わざわざ聞くまでもない。と判断。目の前に広げた書類に目を通す。

「かぐやさんは好きな人とか居ないんですか？」

唐突である。かぐやは握っていたペンを落とす。

いや、辛うじて恋バナの流れではあった……としてもだ。やはり唐突感は否めない。かぐやは思わず彼女に視線を送る。

分かりやすくニヤける千花。元々何を考えているのか分からないのだ。かぐやは思考を巡らせる。脳内お花畑の彼女のこと。深い意味は無いだろうと自身を律する。

「居ませんよ。そんな人」

嘘である。

平静を装って。感情のこもっていない言の葉。千花に当たったそれは、力無く天井に消えていく。

「そうなんですかあ」千花はあからさまにがっかりする。それなりに良い答えを期待していた彼女にとって、それは全く無駄な期待である。

四宮かぐや。結論。彼女はしっかりと恋をしている。

その相手こそ、秀知院学園生徒会長・白銀御行。一般入学でありながら、成績は常に学年トップ。知識と模範的な振る舞いで生徒会長の座を勝ち取った男だ。そして、かぐやが唯一勝てない相手でもある。しかししかし。彼女の高すぎるプライドのせいで「白銀御行のことが好き」だということを認めようとはしない。

恋愛は戦である——。

好きになった方が負けなのである——。

そんな捻くれた考え方のせいで、「どうしても言うのなら」そのスタンスを崩すことなく、半年。進展のないまま今に至っているわけだが。

「かぐやさん可愛いのに」

「そんなことありませんよ」

かぐやは謙遜するが、心の中ではその発言を鵜呑みする。スタイ

ル、ルックスには自信のあるかぐやである。ただ胸の大きさに関しては。逆立ちしても千花に勝てない。それを分かっているからこそ、疎ましい視線を送ってしまうこともしばしばあるが。

では、藤原千花はどうなのだろうか。かぐやの中で一つの疑問が生まれる。彼女との付き合いは中学の時から続いているが、千花に「彼氏が出来た」ましてや「好きな人が出来た」なんて聞いたことがなかった。人の恋愛話には介入するくせに。

「藤原さんは居ないのですか？　好きな人」

再び書類に目を落として、かぐやは問いかけた。

初めての質問。それなのに、気持ちは軽く。特に深く考えることもなく問いかけただけ。

かぐやに向かい合うように座った千花。「うーん」と考える。もしかして居るのだろうか、と考えたかぐや。大人しく彼女の回答を待つ。

「うーん。居ないです」

「ああそうですか……」

思わず期待外れのようなリアクションになってしまう。

千花が勿体ぶった反応を挟むからであるが、当の本人は全く気にしていない様子。そのことを問いかけるだけ無駄だろうと、かぐやは再びペンを走らせた。

「私、男の人を好きになったことないんです」

それが嘘か本当かは分からない。かぐやは頭の片隅で、ごく僅かな思考を巡らせる。藤原千花という人間というのは、かぐやとは違った意味で純粹無垢。ゆるふわガール。その抜群のプロポジションが霞んでしまうような天然娘なのだ。話していると、疲れてしまうような。

「そうなんですネ」

「好きになる、って感情がよく分からなくて」

二度目。かぐやはペンを止める。

千花の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかったのだ。そしてそれは、かぐやにとっても響くモノ。

(まあ確かに一理あります。恋、とは何なのでしよう)

今のかぐや自身を指す言葉なのだが。現実には背を向けるとはまさにこのことである。だが当の本人にはそのつもりは一切無い。カマトトぶって知らないフリをしているわけでもない。

恋愛頭脳戦——。

秀知院学園・生徒会室において、繰り広げられるソレ。

いかに相手に告白させるか。四宮かぐやと白銀御行。互いの天才的な頭脳をフル回転させ、時計の針が一瞬で回ってしまいがの如く。あの手この手で言の葉をぶつけ合う。側から見れば喧嘩しているように見えなくもない。一般人がその場に居合わせようものなら、それはもう耐えられるはずもない。

藤原千花。恋愛脳であるくせに、二人の関係性に全く気付いていない。それ故に、白銀に対してもハッキリと物を言うこともしばしば。その度に、かぐやの視線が彼女に刺さる。それが、白銀の誤解を生む。その繰り返し。

白銀とかぐやにとって、千花の存在は読めない。

彼女の行動に巻き込まれる側からすれば、極めて迷惑な話である。しかししかし。藤原千花の行動が無ければ、二人の関係性には一切進展が生まれてないのも事実。現に、かぐやは千花の行動を予測して、自身の戦略を練る。彼女にとって、千花はもう立派な駒なのだ。巻き込まれているとは露知らず。

「ねえねえ、かぐやさん。今日ラーメン食べに行きませんか？」

「なんです急に……」

「ラーメン食べたい気分なんです」

「(一人でわけよ)」

ラーメン。日本を代表する庶民的ジャパニーズフード。

しかし、四宮家に庶民的という言葉は存在しない。唐突な千花の提案を鼻で笑う。四宮家の人間である者、高級食材以外を口にすることがない。無論、かぐやもその一人である。

かぐやにとって、ラーメンのイメージは決して良いものでは無かった。店も汚く、味も個性のぶつかり合いで煩い。ズルズルと音を立て

て啜る、品のない食べ物。それが、四宮かぐやにとってのラーメンである。当然の如く、断り聞き流すつもりだった。

「生憎、私はそういったモノは食べた——」
「会長も誘って行きましようよー」

その思考に一筋の雷。白銀とかぐや。二人は互いに惹かれている。いかに相手に告白させるか。その理論に則ってきた彼女にとって、その発言は脳内に大きな火種を生み出すことになる。

（会長とラーメン……。私は食べたことがありませんが、イメージは掴めています。カウンターに並んで、肩を寄せ合い麺を啜る。時折ぶつかる肩。私がそんなモノを口にするのは癪ですが——悪くない）

「———ことがないのですが、良い機会ですね」
「美味しいところ知ってるんです」

（家のことは早坂に伝えておけばいいでしょう。問題は———どうやって会長を墮とすか）

かぐや、戦略を練る。

一般入学の白銀にとつて、ラーメンという食べ物は身近以外他ならない。敷居はだいぶ低いだろう。

そして何より、かぐや自身の存在が欲を駆り立てるだろう。二人で（藤原書記は居ないモノ）外食。こんな機会はまあ無い。

いや、待ってください———。かぐやは視線で千花を見る。考える。そして結論。使える。

咄嗟にカバンから饅頭を二つ、千花に差し出す。

「ラーメンであれば、カロリーも高めです。食べ過ぎないように、お腹を満たしてはどうですか?」

「えっ!。いいんですか?」

人を疑わない聖人。それが藤原千花という人間である。

饅頭で空腹を満たしたところで、ラーメンを食べることには変わらない。むしろカロリー過多!!

だが、それがかぐやの狙いであることは明らかである。今日の方針が決まったのだ。

『ふー。お腹いっぱいですう』

『おいしい。誘っておいて残すなんてどうなんだ？——つて、四宮も残すのか？』

『ええ。会長はもう食べてしまったんですね』

『一応、食べ盛りではあるからな。替え玉も考えたんだが……どうも金が勿体ない気がしてな』

『あらあらそうでしたか——』

腹四分目の白銀。目の前には、かぐやが残したラーメン。落とす視線。食欲が理性を揺らす。揺らす。

『でしたら、私たちの分も頂いたらどうです？』

『流石に二人分は食えん』

『でしたら……どちらを召し上がりますか？』

上目遣誘惑い。

甘い声、雰囲気、純真無垢。全てのスキルを使い、白銀に上目遣いをする。四宮かぐや。その魅力に、男であれば誰しも心が揺らいでしまう。そして、彼は首を垂れるだろう。

二人の異性。片方の食べかけのソレに手を出す。

すなわち、間接キッス!!

性欲にはフルブレーキの白銀も、食欲になれば気の緩みを見せることだってあり得るのだ。食欲に、かぐやの食べかけラーメン。万人が靴を舐めるがの如く同じ行動を起こすに違いない。

『あらあら。これでは間接キスですね』

『うっ……』

『そこまでして、私の食べかけが良かったのですか？』

偶然ではない。二人居る異性のうち、自ら選んだことに意味がある。特別な感情を持っていない方を選ぶはずもない。そう、それが意味するのは「好き」という絶対的なワード!!風前の灯となった白銀に、その言葉を使わせるのは至って簡単な行為。

決まった……!!

かぐや、渾身の方程式を導き出すことに成功。想像し、口元の緩みをグツと堪えてみせる。

「楽しみですねえ。石上くんは帰っちゃったので、三人で行きましよう」

そんな思惑にも、一切気付いていない藤原千花。

この物語のヒロインは、ラーメン屋に足を踏み入れた彼女自身であることを、今の千花は知る由もなかった。

藤原千花は満足したい

月が照らす路地裏。反社会的人間が蔓延っていきそうな雰囲気の場合に、白銀たちは居た。男一人の白銀。万が一、絡まれた時のことを考えて慌てて思考を巡らせていた。

(聞いてない!! こんな場所にあるラーメン屋だなんて聞いてない!!)

最近のラーメン屋と言えば、人通りの多い街中に出店されることが多い。女性でも入りやすい店も増え、テレビでも取り上げられる店は、そういったラーメン屋らしからぬラーメン屋が多い。その先入観。白銀の脳内にこびりついていた。

だが元々は、飲み会帰りのサラリーマンのシメ。店構えなんて気にすることなく、ただ鍋と湯切りが有れば一級品を作れるような職人たちが蔓延っている。ラーメン界というのは、そういうモノだった。

したがって、白銀たちが路地裏に居るのも一昔前なら至って普通なのである。東京都において、裏路地にあるラーメンは数知れず。一般家庭の白銀でさえ、その事実を知らない。

となれば、超が付くほどの貴族である四宮かぐやが知るはずもない。

「ふ、藤原さん? こ、こんな所にお店なんてありますの?」

「大丈夫ですよ。怖かったらくつついてもいいんですよ?」

「だ、誰がそんな……」

白銀。刹那の思考。

『会長、くつついてもいいですか……?』

(あ、めっちゃ良い)

そんなことを考える余裕があったことに、白銀は安堵した。少しばかり冷静になった頭で、周囲を確認する。

怯えるかぐやに対し、千花はかなり落ち着いていた。白銀は考え

る。彼女からの提案。「四宮が居る」というだけで二つ返事。裏を返せば、それ以外何も考えていなかったのだ。

無論、ラーメンは好きな白銀。微かに香るパンチの効いた豚骨が、彼の鼻を抜ける。目的地は近い。再び千花に視線を送る。

「良かったー。まだ開いてましたー」

壊れかけの街灯が照らす道。その先に輝く光。明かりというのはこれほどまでに人を安心させるのかと、かぐやは胸を撫で下ろした。無論、白銀でもある。たが互いに、そんなことを口に出してしまえば、何と言われるか分からない。目を見ることなく、千花に続く。

「こんばんはー」

「……………らっしやい」

アルミ色の引き戸。ガラガラと音を立てて三人を誘う。

瞬間。鼻腔を駆け巡る豚骨の匂い。かぐやは衝撃を受けた。

(こ、これが……………ラーメン!?)

しなやかさ、なんてものは存在しない。

敢えて表現するなら、硬く、ゴツゴツとした香り。頭をガツンと殴られたような初めての感覚を受ける。臭きすら覚えるというのに、不思議と嫌悪感が生まれない。これは好きな匂いだ。かぐやは固唾を飲む。

「なんというか……………渋い店だな」

「……………この醤油豚骨が絶品なんですよお」

一方で白銀。質素でカウンター席しかない店内。小慣れた様子の千花に若干の驚きを抱いていた。

それもそのはず。藤原千花という人間も、かぐやと同じように庶民とはかけ離れた生活を送っているのだ。そんな彼女が、そんな小慣れた感。どちらかと言えば、ヨレヨレのサラリーマンが立ち寄るような店構えのこの場所に。全く持って溶け込んでいない。

そんな彼を余所に、千花は「こっちですよー」と手招きする。店内の香りに気を取られていたかぐや、千花の浮き具合に注目していた白銀。自然と二人は隣合って座る。

「(注)注文は？」

「醤油豚骨、薄めでー」

千花の注文に続くように白銀とかぐや。考える。白銀はまだしも、かぐやにとつてはメニューの全てが初めてづくし。どれが良いのか分かるわけもなく。「彼女と同じものを」と続ける。

白銀。考える。ここで二人と同じモノを注文するのも悪くない。だが……隣には世間知らずの四宮かぐや。きつとラーメンすら食べたことがないだろうと察する。

ラーメンというのは奥が深い食べ物だ。

ダシによつて全く味を変える、カメレオン。その魅力を知らないかぐやは、当然ラーメンにも種類があることを知らないだろう。

『味噌味のラーメン……（羨望の眼差し）』

ふつ、白銀は心の中で笑う。首を垂れて「一口ください」と言われてしまえば、もうこつちのモノだ。それは「男であるとしても貴方が食べたラーメンが食べたい」と言ってるようなモノ。すなわち告白なのである!!

世間知らずというのは、単純で良い。世間という湯船に浸かってしまえば、一般庶民に分があるのは明らかなのである。

（庶民の味を見せつけてやる。覚悟しろ四宮!）

「そうだな……俺はみ——」

味噌ラーメン、と続けるつもりだった彼の喉。しかし、緊急回避命令が脳から伝達される。白銀の視界には壁に貼られたメニュー。しかし、そこには「味噌ラーメン」の文字が無い。それどころか、豚骨以外のラーメンが無いのだ。

（待て……この店の匂い。明らかに豚骨のソレだ。裏を返すとそれ以外の匂いがしない……ここはソツチ側か!!）

福岡県福岡市・博多。豚骨ラーメンの聖地である。

その味に感銘を受けた職人たちが全国に散らばって、魅力を発信する。それにより、豚骨ラーメンの知名度は全国区となった。この店の店主は体格の良い、頑固オヤジのような風貌。豚骨の魅力に取り憑かれた男が他のラーメンに手を出すわけが無い!!

『ウチ、豚骨以外やってませんので』

『あらあら。会長とあろうお方がメニューもしつかり見ていなかったのですか？ もしかして何か期待されてたりして』

『い、いや……』

『お可愛いこと……』

(駄目だ!! あまりにもリスクが高すぎる!!)

「——水を三つ。それと塩豚骨、濃い目で」

「はいよ」

白銀、無難を選択。

知識で自らのポジションを獲得した彼にとって、「無知」は死よりも恥!! 特にかぐやの前で知ったかぶりをしてみようモノなら、スープの鍋に身を投げたくなる。

体格の良い店主は、彼らに背を向けたまま作業に取り掛かる。二人の間でそんな頭脳戦が繰り広げられているとは露知らずに。

店内に客は白銀たち三人だけ。

厨房には店主と思われる男と、若い男。年は白銀たちと同じぐらいに見えた。

(バイト、か)

ふと、白銀は考えた。

学校終わりにバイトをする大変さはよく理解していたからだ。何も言わず皿を洗い続ける青年は、まるで修行僧のように神妙な面持ち。店構えからしても、チェーン店ではないだろう。そんなところでバイトをするのだ。余程のラーメン好きか、職人を目指しているのか。どちらにしても肝が座っていて、白銀は微笑む。「俺以外にもそんな男が居るとは」と。

「お水どうぞー」

青年、コップを三つ差し出す。躊躇いもなく受け取る白銀と千花。遅れて、恐る恐るかぐやが手に取る。普段水道水を飲むことのない彼女にとって、何とも言えない感情になる。

日本の水道は、世界的に見てもかなり整備されている。そのため直接飲んだところで腹を下したりする可能性はほぼゼロに等しい。

とはいってもだ。四宮家の人間である彼女が、蛇口に口を向けたこ

とがあるはずもない。庶民には無い抵抗感。隣で美味しそうに飲む白銀を横目に、彼女は手を付けることは無かった。

それからすぐ、千花とかぐやの前に置かれる醤油豚骨・薄め。

かぐやは目を見開いた。店内に入った時のゴツゴツとした匂いは、角が取れ洗練された食欲をそそる匂いに変わり。彼女の鼻を抜け、脳天に直撃する。

だが、ラーメンの食べ方すら知らない彼女。白銀の隣に居る千花の真似をするように、割り箸をパキツと二つ。生まれて初めて見るレンゲにスープを汲み、ふーつと息を吹きかける。

そして——舌に広がる旨味。

(こ、こ、これは……!!)

衝撃だった。これまで彼女が食べた料理のどれにも当てはまらない。一歩間違えれば「毒」のような濃い味。薄めでこれなのだ。濃いラーメンはどうなってしまふのだろう。そんなことを考えながら、丁寧に麺を啜る。スープとよく絡み、これが堪らないハーモニーを奏でている。

まもなく白銀の前にも、熱々の一品が置かれる。すでに割り箸はスタンバイ済み。かぐやと違い狼狽することもなく、一気に麺を啜る。男らしく、音を立てて勢い良く。

(な、なに……う？ この会長なんか凄く良い!!)

その夜。寝る前に、かぐやは早坂愛にこう言ったという。「生」を感じた」と。『性』の間違いでは？」早坂の問いかけには、決して首を縦に振ろうとしなかったらしいが。

麺を啜るという行為に深い意味なんて存在する訳はない。しかし、今の彼女は相当拗らせている。故に、白銀のそんな動作にもツイツイときめいてしまうのである。白銀についても、同様であるが。

二人を横目に、千花は慣れた手順で食べ進めていた。かぐやに貰った饅頭を平らげていたというのに、残す素振りは一切無い。計画性のあるかぐやにとって、それは大きな誤算である。しかし、本来なら早めに手を打つ彼女も「ラーメンの美味さ」と「隣に居る白銀」に気を取られてしまい、すっかりと頭から抜け落ちていた。

厨房。調理を終えた店主は裏に消えていき、青年が一人残った。そんな彼も洗う皿が無くなったらしく、手持ち無沙汰感を隠さずにいた。

チラリと白銀たちを確認する。夕飯時には、珍しすぎる客だった。普段であれば、この時間に客が来ることはまず無い。路地裏。家族連れは有名なチェーン店に行くことが多く、独身の疲れたサラリーマンが仕事終わりに顔を覗かせる程度。しかし、「知る人ぞ知る名店」としてSNSに取り上げられることもしばしば。というのに、客層は一向に変わることがないのだ。

そんな時に、白銀たちの来客。自身と同年代の彼らがこの店を見つけてくれたことに、心なしか喜びを覚えていた。

（え、リボンの人めっちゃ巨乳じゃん。黒髪の人は……まあ）

かぐやは鼻で笑われた。邪よこしまな考え。今はうるさい店主も居父親ないのだ。少しぐらいブーツとしてもいいだろう——。彼は開き直ったように三人に視線を送る。

（柔らかいんだろうなあ……いいなあ……）

何がいいのか。彼は自分でも良く分かっていない。

しかし、彼も思春期真っ只中の一人の男。異性の身体に興味が無いわけがない。店の客にそんな視線を送ることに、若干の申し訳なさを感じつつ、誤魔化すように店主が読んでいた新聞に手を伸ばした。

そんな彼に興味すら示さない千花。気が付けば、スープまで飲み干してしまい、満足感に満ちた表情を見せた。

「あれ、二人ともまだ食べ終わってないんですか？」

「藤原書記が早すぎるんだよ。おい四宮、俺たちも早く食べ終わるぞ。帰って勉強したいんだ」

「え、ええ……そうですね」

かぐや、ここで当初の作戦を思い出す。

が！ 時すでに遅し。作戦に不可欠な千花のラーメンは既に空っぽ。白銀も、かぐやに目もくれずラーメンを啜る。帰って勉強したい、と言われた時点で、彼女は察した。「こうなった会長はここに長居しない」と。勉強だけで登ってきた彼にとって、勉強の時間は精神安

定剤と化しているのだ。それはかぐやも十分に分かっている。だからか、不思議と何かを企てるつもりにならなかった。

白銀、完食。

かぐや、遅れること数分で完食。

思惑とはかけ離れた結果となったのは確かだ。しかし、初めてのラーメン屋、初めて見る白銀の姿。かぐやは満足感に包まれて店を後にした。

「あーとーございやしたー」

三人が店を出て、青年は皿を下げるために立ち上がった。

カウンター席に回り込み、一つずつ落とさないよう丁寧に厨房に運ぶ。そして最後。千花が座っていた座席の前に立った彼。

「ん？」

丸椅子の側に、手帳のようなモノが一つ。店内に不釣り合いの高級そうな革手帳。見覚えのなかった彼は、一瞬で落とし物だと判断する。

慌てて店を出ても、とつくに三人の姿は無く。念のため大通りに出ても、辺りは大人たちだけ。「はあ」と大きくため息を吐く。

最初に皿を下げていれば、追いついたのかもしれないのに。今さら考えたところで、もうどうすることも出来ないのだが。

ラーメン「天龍」の看板。立地の悪さが「隠れ家感」を出しているらしいが、彼的にはそうは思っていない。店内に入り、誰も居ないの良いいことに客用のカウンター席に腰掛けた。

(さて、どうしたものか……)

大事なモノであれば、気付いて取りに来るケースがほとんど。それまでしばらくは保管しておくのだが、彼はあることに気付いた。革に文字が彫られていたのだ。

「秀知……院……学園。つてアイツらめつちや金持ちじゃん……」

この近辺に住む人間であれば、秀知院のことを知らない人間は居ない。まして、その印象は彼の言う通り「金持ち」。モラルからかけ離れて、自由に過ごす印象が抜け切れていないのも事実なのだ。

何も考えず、パカッと手帳を開く。そこには先ほどスープまで飲み

干していた彼女の顔写真。

「藤原、千花」

青年、藤井太郎は呟いた。

伊井野ミコは信じない

「うわっ、入りづれえ……」

晴れ模様。所々にまん丸の白い雲。ニコニコと友人達と談笑しながら、秀知院学園の生徒たちは下校していた。

その様子を眺める一人の青年。ラーメン「天龍」の一人息子。藤井太郎は、秀知院学園の校門前で立ち尽くしていた。

ここは本当に学校か？ 自問する。一歩間違えれば、ホテルか何かにも見えなくない風格。耳をすませば「ご機嫌よう」なんて漫画の世界でしか聞いたことないセリフが聞こえてきそう。そんな彼とは裏腹に、生徒たちは平然とした様子で校内を歩いている。彼らからすれば、これが普通なのである。その中に他校生が足を踏み入れようモノなら、視線と大人の力で全力で排除されよう。

しかしだ。この由緒正しき秀知院学園に近づく他校生なんて滅多に存在しない。そのせい、か、すれ違う生徒たちは彼に興味とは違う視線を投げかけていた。

(帰りたい!! めちゃくちゃキツイこれ!!)

場違いとはこのことである。藤井は昨日の出来事を憎んだ。

本来であれば、忘れ物は保管するのが常。しかし、生徒手帳で持ち主が判明している。それを知った店主、彼の父親は一言。

『お前が届けて来い。同じ高校生だろ』

店主の狙いは正しいのだ。秀知院学園の生徒が、また店に来るとは限らない。早めに手を打つことが重要だと考えた。

しかし、彼は違った。そうなんだけど違うんだよ——。高校生同士にしか分からない違いがあるんだ。そんな願いも虚しく、生徒手帳の行く末は藤井に託されるのである。

高校生とさえ、同じなのは年齢ぐらい。学力も品も、生活習慣すら別次元にいる学校なのだ。この秀知院学園というのは。

考える藤井。どうやったらこの落とし物を届けることが出来るのか。

ふと、校門に設置されているインターホンが目に入る。これだ。ここで事情を説明して取りに来て貰えばいい。そうすれば、校内に入らず済む。導かれたように、彼は手を伸ばした。聞き慣れた呼び出し音に、少しだけ安堵する。

「……はい。秀知院学園・風紀委員会です」

出てきたのは女性の声。

風紀委員会。インターホン越しの彼女はそう言った。事務室の大人が出てくるとばかり思っていた彼は、「えっ」と声を上げそうになる。しかしグツと堪え、一息を呑み用件を話しはじめた。

「あ、えっと、突然申し訳ありません。貴校の生徒さんのものと思われる落とし物を拾ったのですが」

秀知院学園を前にしているからか、藤井はいつもよりも背筋が伸びていた。自らの語彙力を総動員させ、丁寧に丁寧に用件を伝える。

「左様でございましたか。わざわざご足労いただきありがとうございます。ただいま参りますので、しばらくお待ちいただいてもよろしいですか？」

「わ、分かりました」

そんな彼の気持ちに気付くはずもない彼女。決まり切った定型文をそのまま言霊にする。教室を出て、下駄箱で革靴に履き替える。モニター付きのインターホン。見慣れない制服を着た男子。普通であれば警戒はするもの。しかし、彼女はしなかった。下校時間で人の行き来も多い。可笑しいことはされないだろうと判断したのだ。

校門に向かう間も、校則ストレスの服装をした生徒たちへの指摘が止まらない。いつも通りの余裕。藤井とは正反対だった。その様子は、校門の外に居る藤井にもしつかり届いていた。

「お待たせいたしました。落とし物、ですな」

「え、ええ。恐らく生徒手帳だと思っんですけど」

藤井は風紀委員の彼女、伊井野ミコに差し出した。

「生徒手帳だと『思っんですけど』と彼は言った。ここで中身を見

たと告げるのは危ないと彼なりの危機感を感じたらしい。手帳の表に学校名が彫られているため、それを見てここに来たと説明が付くと判断したのだ。

彼女の手には木製のボード。何かプリントを挟んでいる。彼女の背が低かったからか、藤井は見るつもりもないのについて視界に入る。何かのチエツク表。風紀委員なら、きつと服装とかのアレだろう。

彼の視線に気付いていない伊井野は、革製のそれを受け取る。丁寧に中身を確認すると、そこには確かに「藤原千花」の名前。彼女はドクンと胸が高鳴った。まさかの名前だったのである。

伊井野にとって、千花は憧れの存在だった。

幼少の頃から彼女の姿を見てきた伊井野にとって、千花は特別な人。直接話したことは無いが、憧れを胸に秘めて常に学校生活を送っていた。

そんな彼女の落とし物。これは接点を作るチャンスではないか。まさかこんなところで絶好のチャンスが巡ってきた。風紀委員でありながら、そんな邪な考えよこしまが頭をよぎる。

「間違いありませんね。ありがとうございます。これはしっかりと本人に届けておきますので」

「あ、よかった」

一方の藤井は安堵する。これで今日の任務は完了だ。この場違いから脱することが出来る。だが、そう思ったのも束の間だった。

「ちなみになんです、どこで拾ったか教えて頂いてもよろしいですか？」

本来なら無理に聞く必要も無い問いかけだ。しかし、ここは由緒正しき秀知院学園。落とし主の行動パターンを把握する上で貴重な情報になる。だが、そこは藤原千花。父親は政治家で、母親は元外交官。そのことを伊井野も知っていたため、業務として問いかけただけ。

「あ、あーえっと、僕の家ウチです」

ポトリ。地面に転がるボールペン。

「あ、あの落ちましたよ？」彼の言葉が耳に届くこともない。口を半開きにした伊井野は、藤井の言葉を噛み砕いた。

(い、い、家……………?)

この人の……………? えっ、えっ、えっ???)

背の低い伊井野は、ブレザー姿の藤井を見上げる。

パツとしない普通の男。それが、千花を家に上げた。こんな地味な男が。黒髪短髪の地味男が。

年頃の高校生が異性を家に上げることの意味。それは伊井野。堅物であろうが、なかろうが。知らないはずもない。むしろ興味のある年頃だ。

「う、ウチとは……………い、家……………ですか…?」

「そ、そうですが何か?」

言説葉明足不ら足ず————。

この男。自分の発言が不味いことに気付いていない。

『自分の家です。ああラーメン屋やってるんですよ』とさえこんなことにならなかったのに。

確かに彼の家であることは事実。しかし、実は彼。そこまで気が回らなかったのだ。

(あ、あれ……………?)

やばい変に浮き足立ってる……………!)

藤井は緊張していた!!!

彼も思春期真っ只中の高校生。しかし、彼が通う都立桜川高校は、男子校なのである。

つまり、学校生活で女子と会話する機会がまず無い。人気のある男子は彼女持ちもいるが、藤井はそんなキャラじゃない。母親の居ない彼。同年代との女子との会話。それに面と向かっての会話は、実に何年ぶりか分からない。

さらに、伊井野ミコのルックス。かなりの美人である。ただでさえ女子に免疫のない彼が、余裕を持てるはずもない。良いところを見せようとしても、余裕が無いせいで見栄を張ることすら出来ない。したがって、説明不足が生まれるのである。一番ダサイパターンである。

「え、えっと……もうよろしいですかね……」

友人たちの会話では「女の子と話したいわー」なんて言う彼も、いざ面と向かえば何も出来ない。場の空気に耐えられなくなったようだ。しかし、話を切り上げたがる藤井に対して、伊井野はそれを許さなかった。

そもそも、生徒手帳が落とし物として届けられることはまず無い。なぜなら、秀知院学園の生徒は必ず身に付けているからである。自らの証明にもなるのだから、肩身離さず持っているのが普通なのだ。この高校では。

そんな大事なモノを落とした。カバンに入れていたとしても、外ではそんなにカバンを開く機会も無いはずだ。

なら、何故？ 彼女は考える。財布を取り出す際に落とした？

いや待て。落とした場所はこの男の家。そこで落としたのだから、何かしらのアクションがあったに違いない。伊井野はありもしない答えを導き出す。

それがどういうことか。彼女の頭の中に一つの答え。

「———ですか」

「は、はい？」

「ふ、藤原先輩とどういうご関係なんですか!？」

だが、あえて解答権を藤井に投げかける。伊井野ミコ、核心に迫る渾身の問いかけである。

勘違いなのか、友達なのか、恋人なのか———。落とし物を拾ってくれた優しい男に向ける視線ではない睨み付けるような眼。

一方で。藤井に心当たりは無く、内心めっちゃめっちゃ焦っていた。単純に質問の意味が分からないのだ。どういう関係と言われても、昨日初めて会った人。それだけだ。深い意味なんて無いのに、この子は何を言っているのだろうか———。それをそのまま伝えたかったのに、今の彼に彼女を茶化す勇氣は無かった。

「どういうって……昨日初めて会ったからよく分かりません」

一夜限り———。

伊井野ミコ、証明終了。Q. E. D。

あの憧れの藤原千花を、そんな粗末な扱いで。

伊井野。涙目になりながら、彼を睨み付ける。全くの誤解なのだが、今の彼女はそこまで考えることが出来なかった。

加えて、融通の利かない頑固な性格。一度思い込んでしまったら中々考えを変えようとしなない。

藤井からすれば、理不尽な話である。事実をそのまま告げただけなのに、その表情は想定外だった。

「ひどい……………けどもの……………」

「は、はい？」

「ふ、藤原先輩をあんな目に合わせて善人面しないでください!!」

藤井太郎。突然の罵倒に困惑。「藪から棒に」とはこのことである。

落とし物を届けたというのに、けどものなんて言われるとは思わなかったようで。彼は苛つきを覚えたものの、ここで騒げば色々不味いことは十分に理解していた。

「い、いや何のことですか？」

「惚けないでください…! 家で藤原先輩にひどいことを…………!」

「だから何の話ですか? それに何もしてませんって!」

「嘘です…………!! 連れ込んでおいて何もしないわけありません!」

「いやいや! 連れ込んでないし、向こうから勝手に来たんだよ!」

パリン、と心が割れる音がした。

(嘘…………藤原先輩はそんなに軽い人じゃ…………)

伊井野ミコ。イメージの崩壊である。

だが、これまで積み上げてきた千花の良いところを思い返す。

ピアノの腕前、マルチリンガル。伊井野の中で千花は、まさに高嶺の花。

(ち、違う違う!! 藤原先輩はそんなことしない!!)

この男…………藤原先輩を悪者に…………! 私を惑わすつもりだ…………!

千花が自ら男の家に上り込む、緩い女であるとは思えなかった。

いや、それ以前の問題なのだが。伊井野と藤井の会話は噛み合っていないのに妙に噛み合っているせいで、側から見ればただの痴話喧嘩にしか映らないのだ。

彼女である伊井野を差し置いて、彼氏の藤井が千花を家に連れ込んだ。そんなシチュエーションに見えなくも無い。通りすぎる秀知院学園の生徒たち。あの堅物の伊井野ミコが男とそんな会話をしているもんだから、注目を浴びない筈もない。

「藤原先輩はそんな人じゃないです……!!」

「い、いやだから——」

「帰ってください……!! 貴方は女の敵です……!!」

女の敵です——。

女の敵です——。

女の敵です——。

藤井の脳内を巡る言葉。ただ落とし物を届けただけなのに、全世界の女から否定されたような気持ち。何も言えず立ち尽くすしか無かった藤井と、逃げるようにその場を立ち去る伊井野。側から見て、悪いのは明らかだった。

（あれ、悲しい涙が止まらない。

嘘、恥ずかしい。けど、止まらないよ）

善意が空回りした、フワついた感覚が彼を襲う。手には彼女が落とされたボールペン。せっかく拾ったのに、これを返すことも出来ず。

藤井は大人しく校門に背を向けたが、歩く気になれない。早くこの場から立ち去りたいのに、身体が硬直したようで動かなかつた。

そんな時。一人の男子生徒が彼に声を掛ける。

「アイツの言うこと、そんなに気にする必要ないっすよ」

前髪の長い男。首にはヘッドホン。藤井は見分かった。陰キヤである。だが、秀知院の学ランを着ていることで、何かしら伊井野ミコさっきの彼女について知っていると察する。

「ありがとう」と力無く答えると、彼は何も言わず立ち去った。

そのまま帰宅した藤井は、父親に「孫の顔見せられないわ」と謝ったという。

藤原千花はお礼したい

その日の夜。

ラーメン天龍では、いつものように皿洗いをする藤井の姿があった。ただ彼の心境としては最悪そのもの。同年代の女子からあんな言葉を言われた経験の無い藤井にとって、それはどんな刃物よりも強烈に胸に突き刺さった。

(俺は女の敵……女の敵なんだ……)

一生彼女なんて出来ない童貞のまま死んでいくんだ……)

水洗いにより、手荒れがひどい藤井の手。幸い、季節は梅雨が明けようとしている。冷たさに悶えることは少ないが、やはりヒリヒリと染みる。だが、今はそんなことどうでも良かった。

深く考えすぎではあったが、彼はまだこの広い社会を知らない。大人であれば「そんなことは無い」と励ますだろう。しかし、彼の父親は元々寡黙である。敢えて口に出すことなく、大人の階段を登りつつあるのだろう、と前向きに捉えていた。別に間違いではないのだが。

時刻は夜の七時を回っていた。藤井は部活をやっていない、いわば帰宅部。その代わり、帰ってすぐ店の手伝う家族思いの青年。だが本音としては、バイト代と称した小遣いに直結するため、仕方なくである。本人的に、店を継ぐなんて気は毛頭ない。かと言って、夢もない。どこにでもいる男子高校生なのである。

「……うつしやい」

父親の気怠そうな声。来客。

客を迎え入れる態度ではないが、それが妙にこの店の雰囲気にもマッチしている。夕飯時。路地裏にあるせいで、チェーン店に比べると一日の来客は少ない。それでも、保証された味。根強いファンは多いのだ。

「こんばんはー」

そしてこの、藤原千花もその一人である。

昨日聴いた声。それが藤井の耳に直ぐ届いた。

台所に落としていた視線。それを入り口に向けると、昨日見た彼女の姿があった。上品でお洒落な制服。昼間伊井野の彼女とは違った魅力を醸し出すあの子が。

「あつ……」

図らずして、視線が合う。互いに思わず声を漏らす。

戸惑いの表情を見せる藤井。彼を見て笑みが溢れる千花。対照的な二人ではあったが、変な緊張感みたいなものは一切感じられなかった。

その段階では、千花が何をしに来たのか分からない。彼は皿洗いを止め、コップに水を注ぐ用意をする。しかし、その前に声を掛けたのは彼女だった。

「こんばんはっ」

「ど、どうも……」

店内に入ってきた千花は、彼と向かい合う。椅子に座る様子も無いことから、食事目的ではないのだろうと彼は察する。幸いなことに、店内に他の客は居ない。店主も何も言わずに新聞を読んでいる。少しぐらいならいいだろうと、藤井も彼女に向き合った。

「生徒手帳届けていただいたみたいで。ありがとうございます。無くしたと思ってたので助かりましたー」

「いやそんな。わざわざお礼なんて……。こちらこそありがとうございます」

藤井は素直に驚いていた。

あの金持ち高校に通う生徒。そんな彼女がこんな寂れたラーメン屋に来ることもそうだが、こうしてお礼を言いに来る律儀さ。自分がどれだけ先入観で判断していた人間か、彼は少し申し訳ない気持ちになる。

「それで何ですけど、何かお礼をしたくって」

「え、いやそんないですよ。お気持ちだけで」

「いえいえ！ それだと私の気が治らないんです！」

彼女は、あざとくムスツとした表情を見せる。もちろん無意識。しかし、伊井野とは違った可愛さを持った千花。それが藤井の目にどう映ったかは明らかである。

(は？ 可愛すぎるんですけど)

男なら誰しも美人には目が無い。面食いなんかじゃないのに、彼はそう自分に言い聞かせる。

とは言ってもだ。お礼なんて彼は受け取る気になれなかった。いくらしんどい思いをしたと言っても、店の落とし物を届けただけ。これが仮に交番に届けてたとしても、謝礼は要らないと告げていたぐら이다。

そんな彼に気付くはずもない彼女。必死に頭を捻っていた。

藤井からすればある意味当然の行いも、千花からしたら全く持つて違うもの。こうして律儀にお礼を言いに来たのも、彼が律儀に届けてくれたから。だが彼が「内心面倒くさい」と思っているとは知らず。それでも、彼の優しさが嬉しかったらしい。

だがそれは、表の理由に過ぎないのである。だが、本当の理由を彼に面と向かって言えるはずもなかった。

「何がいいですか？」

「本当に結構ですよ。逆に申し訳ないですし」

「だったら何が欲しいですか？」

「話聞いてました？」

自分の家だからか、彼は昼間のような緊張は無かった。二人きりではないこともあるが、不思議と千花の声、トーンが心地よかった。話は全く噛み合っていなかったが。

「でもわざわざ届けてくれたんです！ お礼の一つでもしないとバチが当たりそうです！」

「大丈夫です。それぐらいじゃありませんから」

甘々しい声で言われるもんだから、藤井も何とリアクションすればいいか分からなかった。加えて、頼もしかった父親の存在。こんな会話を聞かれることが恥ずかしくて堪らなかった。

ちょうどその時。引き戸を開けて入ってきたのは一人の中年男性。

どうやら普通の客らしいと、藤井は察する。店主である父親は、彼に目配せをする。

『このまま話すのなら、家に入れるか外に出るかしろ』

寡黙な父親ではあったが、何より客を大切に思う人間だった。ここで二人が話していれば、他の客に迷惑になる。それを十分に理解していた彼。返事に代わって、そのまま厨房を出た。

「藤原さん。ちよつと外に出ましよう」

「あ、はいっ」

藤井は思わず彼女の名前を呼んでしまう。

突っ込まれたらどうしようかと、頭を巡らせる。風紀委員のあの子から聞いたと適当に誤魔化そう。案外結論は早く出た。

彼らが生活するのは、ラーメン屋の上。二階である。しかし、そこに入れる選択肢は最初から無い。

「二度目まして」の千花にそんなことを言う勇氣なんて、藤井が持っているはずもなく。万が一上げてしまえば、彼女のボディに悩殺。何をしでかすか分からなかった。

一方で、千花は外に出るよう言われた理由が分かっていたいなかった。藤井の後ろ姿を眺めながら、彼へのお礼をバカ真面目に考えている。

(でもなんか、普通の人だなあ)

彼女がそう思うのには、自身の過去が大きく関係していた。

これまで出会ってきた人物。男女問わず、何か一つでも秀でたものがある人間ばかりだった。親が政治家と元外交官の子どもなんて、全国探してもごく一握りしか居ない。幼少の頃から「世間の普通」と掛け離れた生活を送っている。彼女にとっては、これまでの過去が「普通」なのである。

そんな彼女が抱いた第一印象。「普通の人」。

何を持って普通の人なのか。藤井は千花とはまるで違った生活を送ってきた。彼女の過去と重ね合わせるのであれば、彼を普通と呼ぶのは可笑しな話なのだ。

しかし、彼女は素直にそう思った。特徴のない人。そういう人間とは何度も会ったことがある。それとはまた違うのだ。

(あ、こんなに断る人初めてだ)

彼なりの遠慮。それが、千花の目にはそう映った。

落とし物を届けてもらったのは今回が初めて。しかし、これに似たケースは何度もあった。その度、両親が先方に「お礼」として菓子折りを贈っているのを彼女は見ていた。先方の大人も、遠慮しながら受け取るのが常。それなのに、彼は違った。

そして千花は気付く。妙に大人びた彼の雰囲気。同年代の男子で、こんな雰囲気の人は今まで居なかった。言わば、彼が初めて。年上かもしれない。はたまた、年下かもしれない。それだと言うのに、不思議な安心感。

二人、外に出る。

街灯もあまり多くない。この道を一人で来たのかと、藤井は申し訳なきに苛まれた。なるべく明るいところで、と思った彼は、店の目の前で千花と向き合った。

「あの、本当にいいんです。落とし物を届けただけでそんなお礼なんて」

「それが普通じゃないんですか？ 助けてくれたらお礼をするのが」

「ま、まあ……間違いないですけど。でも、俺的にはそんなことをしてもらうほどのことはしてませんから」

「私的にはお礼したいんです！」

いかにもお嬢様だ。藤井は考えた。

相手の心情を考えようとしないう、自己中心的な考え。お礼をしたいと言う気持ちはありがたかった。しかし、押しつけになっちゃえば、ありがた迷惑になる。それを彼女は理解していない。

藤原千花。彼の顔を見上げて、考える。

譲らない。自分がここまで言っているのに。名前も知らない彼は、やはり彼女にとって初めての人種だった。

お世辞にもカッコいいとは言えない顔立ち。いかにも年頃の男子らしく、小さなニキビが頬にある。秀知院学園にそんな男子がいるはずもない。身嗜みには恐ろしくうるさいのだ。常に上品でなければ、通うことが許されない。

「……お名前は何て言うんですか？」

「えっ、お、俺ですか？」

「貴方以外に居ますか？ この場所に」

「そ、そうですね……あはは……」

急に強気になる彼女に、藤井は思わず狼狽た。

ここで自身の名前を言う必要性を感じられない。しかし、お礼を受け取る受け取らないの話でここまで引っ張っているのだ。断るとまた面倒になるかもしれない。彼なりの冷静な判断。

「藤井太郎って言います……」

「おいくつですか」

「えっと、高校二年です」

「同級生じゃないですか！」

「あ、そ、そうなんです」

「もうっ！」千花はプンスカと頬を膨らませた。怒っているように見えて、怒っているわけではない。彼の無駄な年上感が違ったことに妙な感情を抱いていたのだ。それが何なのか、千花に分かるはずもない。無論、藤井に分かるはずもない。

「藤井くん、いいですか？ ここは素直に私の言うことを聞いてください。同級生としてお願いします」

「なんでですか。要らないと言ってるじゃないですか」

「生徒手帳を落とすのは、秀知院生として恥なんです。それを助けてくれた感謝をしたいんです」

彼女にとつて、落とし物を届けてくれたことじゃないのだ。落とし物が悪すぎた。それを悟られないように、これまで誤魔化してきたが、その余裕が無くなってきたらしい。一方で、藤井は。

（いや重い!! そんな大袈裟すぎる!!）

彼からすれば、たかが生徒手帳。落としただけで何の痛みもない。い。

しかし、今この世の中。顔写真付で名前まで載った手帳を落としただけで、悪用される危険すらあるのだ。

特に、秀知院学園生。親は金持ちが多い。過去に、それで揺すられ

る事案もあつたとか無かつたとか。その噂を、千花は知っていた。仮に、彼が生徒手帳を落としたことを「藤原家」に密告したとすれば、自身の小遣いに直結する。

口封^賄じ^賂——。

政治家の娘、藤原千花。汚職である。

怪しい分子は、圧力で黙らせる。悲しいことに、これもまた政治家気質なのである。それぐらい、彼女にとって小遣いというのは重要で、比重の重いもの。これが無ければ、何も出来ないのだから。

だが、藤井は彼女が政治家の娘であるなんて知るはずもない。彼女の今の苦労は全て無駄なのである。悲しいかな、政治家の父親を見てきたせいか、かなり用心深くなってしまったようだ。

生徒手帳を届けてくれた伊井野ミコには、ジューズを一本ご馳走している。そして一言。「このことは内緒だよつ」と。元々、千花のことを尊敬していた彼女を墮とすのは簡単だった。無論、千花は無意識であるが。

「受け取れません。大通りまで送りますから、気を付けてお帰りください」

切り上げるように、藤井は大通りの方を指差す。

次の発言を考えていた千花。あからさまに顔を歪める。そして、視線は大通り——ではなく。彼の手に行った。

(ひどい手荒れ……)

手伝いで毎日皿洗いをしていることもあり、彼の手はかなりカサついていた。保湿する柄でもない彼は、特に気にしている素振りもない。

ゴツゴツとした男の人の手。これもまた、彼女には珍しく見えていて。加えて、ラーメン屋の手伝い。きつと沢山苦労をしてきたのだからと自己完結させる。やがて、自らの鞆から小さめのソレを出す。

「手荒れが酷いです。良かったら、これ使ってください」

「ハンドクリーム……ですか？」

「そうです。お母様から貰ったんですけど、保湿に良いですから」「いやそんな！ 本当がいいんです！」

「もうっ！ いい加減私の言うことを聞いてください。大丈夫ですから」

彼女の圧力。食らいついたら離さない執念。恐るべし金の力。

ここまで断り続けた藤井だったが、根負けである。大きいため息を吐いて、彼女に向き合う。

「……分かりました。使わせていただきます」

「それで良いんです。はい、手を出してください」

「はあ」

彼の右手に乗せられる液体。それを手に馴染ませると、それまで乾き切った両手が喜んでいるのが分かった。一年中乾燥している手。この湿った感覚は久々だった。そのまま、彼女はケースごとギュツと握らせる。

「えっ、ちよつと」

「差し上げますっ。お礼ですから」

「で、でもお母さんから貰ったものを……」

「いいんです。だって、藤井くんが使った方がいいと思うから」

「(は？ 天使じゃん)」

微笑む千花、照れる藤井。ここがラーメン屋の前というのが何とも可笑しな話である。ロマンチックの欠片も無い。

照れ臭そうに「ありがとう」と言う彼を見て、千花は申し訳ない気になる。本音では口封じでしか無いそれを、素直に喜んでくれたのが。

その場に居るとボロが出そうになった彼女は、一言言ってそのまま立ち去ろうとする。

それなのに、今度は藤井が呼び止めた。

「あ、あのっ！」

「はい？」

「よ、良かったら……ま、また来てください」

もう二度と会えないかもしれない。不思議な彼女。

そんなことを思ってしまったのだ。すると、自然と口が動いた。ただ、会えなくなるのは嫌な気がしただけ。友達になりたい、付き合い

たい、そんな感情ではない。藤井にとってそれは、生まれて初めての気持ちだった。ハンドクリームを受け取った時点で、彼女に買収されたと知る由もないが。

「はい。また食べに来ますねっ」

その言葉は事実。このラーメンは彼女のお気に入りでもある。放っておいても勝手に来るのだ。それは千花本人がよく分かっていた。

「二度目ましての彼」。その認識は、彼女の中にしっかりとびりついていた。

そして、これまでの男子とは違った何かを持っている人として。不思議な高揚感があった。そして、そのまま大通りに。慣れた手つきでタクシーを呼ぶ。

(内緒にしてって言うの忘れちゃった)

変に浮き足立っていたせいか、肝心なことを伝え忘れる。

千花らしいと言えばそれまでだ。彼女は考えた。これから戻って言うべきかどうか。

だが、ここで戻って念を押すように言えばかえって怪しまれるかもしれない。幸い、藤井は千花とは生活レベルが違うのだから。彼女は無意識のうちにそんなことを考えてしまう自分が嫌だった。

「タクシー遅いなあ」

そんな自分に嘘を吐くように。いつもより来るのが遅いタクシーに愚痴りながら、昨日のラーメンの味を思い出していた。

藤原千花は読んでみたい

「えっと……何にするかな」

学校終わりの藤井は、ショッピングモールの中にある本屋に居た。時間的にも、彼と同じ高校生が多い。放課後だというのに、参考書を覗く彼ら。藤井は鼻で笑う。

そんな彼がこの場にいる理由。店に置くためのマンガを買いに来たのだ。

ラーメン屋と言えば、出来上がるまでの時間潰しのためにマンガが置かれている所が多い。天龍も例外ではなく、年季の入ったモノがズラリと並んでいた。だが、こうして定期的に本屋を覗くのも彼の役目。父親から渡されたお金で「必要であれば買ってこい」との命を受け。

だが、これが意外と難しい。客の年齢層に合わせた選択をしないといけないのだ。これまで一度買っていた続編を買うだけで済んでいたが、そのマンガが完結してしまったため、また一から考える必要があった。

そうして頭を悩まして、三十分が経った時。ふと店外に視線を送る。すると、目の前の玩具屋に見覚えのある顔があった。

藤原千花。思いがけぬ遭遇である。

彼女は定期的に天龍に足を運んでいた。その都度、藤井と少し会話する程度の関係に。以前のような距離感は無かった。とは言っても、互いに連絡先も知らない。だからこそ、彼にとってここでの遭遇が不思議でならなかった。

幸い、手には商品を持っていない。せっかくだから、と彼なりに勇気を振り絞って目の前の玩具屋に顔を出した。

「何してるの？ 藤原さん」

「あっ！ 藤井くんー」

初対面の時より、緊張感は無い。彼は安堵する。自分から話しかけておいて、しどろもどろになるのはあまりにもダサすぎるからだ。千花も彼に会うとは思っていなかったからか、素直に驚いていた。

「テーブルゲーム部で使う新しいゲームを探しに来たんです」

「何か珍しい部活だね……」

「それが面白いんですよ」

藤原家では、父親である藤原大地の検閲がかなり厳しい。ゲームはおろか、マンガに関しても読むことを許されない。そんな父への僅かな反骨心。テーブルゲームは、彼女なりに見つけた逃げ口だった。それでもテレビゲームを知らない千花にとって、それは十分な娯楽になっている。

本来であれば、部員と一緒に探しに来るのだが、この日はたまたま一人。彼女も変に気を遣うことなく、藤井に向き合っていた。

「決まったの？ 新しいゲームは」

「うーん。気になってるのはこの『人生は二度目だよゲーム』です」

「……なにそれ？」

「妻に逃げられた四十歳男性が、第二の人生を送る軌跡……だそうです」

「いや重いわそれ。途中で投げ出しそう」

「でも全年齢対象なので、社会勉強目的かもしれませんね」

「逆に子どもの夢壊さない？」

彼女の選ぶゲームは、一癖も二癖もあるものばかり。他の部員もそれは重々分かっていった。それなのに、妙にリアリティがプレイヤーの遊び心をくすぐるみたいで。結果的に熱中してしまうという。

藤井も、彼女に対して軽口を叩けるようになっていた。人とは違う感性を持った千花。突拍子もないことを言う彼女の言葉が面白かった。他の女子には無い魅力を持った彼女。見ているだけで笑みが溢れてしまうような。

「藤井くんは何してたんですか？」

「ああマンガ買いに来たんだよ。店に置くためのやつ」

「そうだったんですね」

「でも決まらなくて。今日は諦めようかな」

父親からも、無理に買ってくる必要はないと言われていた。お金を使わないのならそれで問題も無いのだから。苦笑いをするしかない。ところが。千花はそんな彼を見て思う。これはチャンスじゃないかと。

「だったら私、オススメのマンガありますよ」

「え、もしかして詳しくかったり?」

「まあそうですね。あはは。とりあえず行きましょう」

嘘である。

この女、親の都合でもつばら世俗的な単行本は読めない。世間一般で流行しているマンガの知識は一切無い。

だが、そこには抜け道もある。電子書籍だ。流石に彼女の持っているスマートフォンには手を出していない。そこでひたすら自分が読みたかったジャンルのマンガを読み漁り、その界限への知識は十分。したがって一概に嘘とは言えないのだが、ここでは嘘に当てはまるだろう。時代に感謝する千花であった。

ここでそんな嘘を吐いたのは、彼の信頼を得るためである。

詳しい知識を持っていけば、藤井も素直に自身の提案を受け入れると考えたのだ。千花らしい浅はかな考え。手に持っていた『人生は二度目だよゲーム』を定位置に戻し、先導するように本屋へ行く。

藤井的にも、彼女の発言を疑おうとしなかった。

妙にそれっぽいのだ。彼の先入観。オタク気質がありそうという雰囲気。そのせいで、説得力があった。大人しく彼女の後に付いていく。

少年マンガ、でもない。青年マンガ、でもない。そこで藤井は、足を踏み入れたことが無いコーナーに進んでいることに気付いた。

「これですこれ! すっごく面白いらしいですよー!」

「な、なにこれ? 『壁ドン・ロマンス』……?」

「女子高生の間で話題沸騰中なんですっ」

この女。家では読めないマンガを、天龍で読むつもりでいた。

彼に買ってもらえれば、小遣いの節約にもなる。したたかさという

か、ただ腹黒いだけである。しかし彼女はその事実には背を向けて、ひよいつと一冊差し出す。

しかしだ。彼はさすがに領けなかった。確かに彼女オススメのマンガであるのは分かるが、何せ路地裏のラーメン屋に置くようなマンガではないのは明らかだ。

「でも流石にウチのお客さんは読まないんじゃないかな……」

「大丈夫です！ 壁ドンにグツとこないお客さんは居ませんよ！」

「ウチの客層知ってる？ 中年オヤジ9・5割だよ？」

「関係ないですっ！ ラブはサラリーマンを救います！」

「何言ってるの？」

話の筋が通っていない彼女の提案。普段からこう言った類のマンガを読まない彼女にとつて、少女マンガは一番選択肢に無いモノだった。とは言っても、どうしても勧めてくる彼女のことを蔑ろにするのも気が引けた。

(参ったなこりや……)

藤井のマンガ代は、父親から預かったモノ。だから下手に選ばないのだ。その分、自らの小遣いから差っ引かれるのが目に見えていたため。本来ならすぐ断る彼も、千花の子犬のような視線が痛く胸に突き刺さっていた。

「でもラーメン屋には不釣り合いだよ」

「……あはは。そうですね。ごめんなさい熱くなっちゃって」

冷静な判断をしたのは藤井。流されることなく、しっかりと目の前の状況と先のことを見据えて判断することが出来た。

一方の千花。お礼の時と同じように譲らない彼に、むすつと頬を膨らませる。しかし、今回はあの時と状況が違う。口では謝るも、残念さを隠しきれずにいた。

「それじゃ私、テーブルゲーム買ってくるので！」

「あ、ああそれじゃ」

後ろ姿。明らかに落ち込んでいる。彼はそんな彼女を見ないように視線をマンガに落とした。先には「壁ドン・ロマンス」。すると、彼女は気付いていなかったらしいが、人気マンガにありがちな「試し読

み」が出来るようになっていた。

特に深いことを考えることもなく。無料なのだから、そんな軽い気持ちで藤井はそれを手に取った。

『お前、俺のものになれよ』

「(うわあ……)」

彼の中でそれは、THE・少女マンガである。

現実でこんなことをやってしまえば、ただの痛い奴。これが流行っているのだから、世間の女子高生がどれだけ飢えているのかがよく分かる。一度開いてしまったソレを、途中で閉じる気にもなれなかったらしく。続けてページを読み進めていく。

『私、あなたが居ないとダメなのっ!』

『そんなに俺が良いのか?』

『あなたの……あなたの彼女にしてください!』

『やれやれ。可愛い子猫だな、お前も』

DS彼氏の誕生である。だが、現実でこんなカップルが居たらどうなるか。モラハラ、DVに繋がるだろうと周りの友達から叩かれるのが目に見えている。だからこそ、リアルに無いロマンチックを読者は求めるのである。試し読みを終えた彼はどうか。

(なにこれめっちゃ良い!!)

女子^{女々}的^し思考^い。――。

藤井の中に眠る女々しき。覚醒の瞬間である。だが決して恋愛対象が男とかでは無く、マンガへの感情移入の一つ。世間一般の女子高生の気持ち少し理解できた彼であった。

試し読みをしてしまったせいで、続きが気になって仕方がない。千花にあんなことを言った手前、買いづらくなったのも事実だが、幸い彼女はこの場に居ない。発売されている五巻までまとめ買いを決意する。

父親に何と言われるかは目に見えている。それでもいいのだ。気になるから。小遣いの使い道の一つだと割り切って購入した。

「あれ? 藤井くん何買ったのー?」

「ふ、藤原さん!? 帰ったんじや……」

「そんなに驚かなくてもいいじゃないですか。私はこれから学校に寄って帰るところです。ここ出た所にタクシー呼んだので」

「タクシー……さすがつすね……」

千花も学校終わり。帰宅するのにタクシーを使うことが彼は理解出来なかった。それは単純に、藤原家が金持ちだからである。藤井の同級生にタクシー通学している人間なんて居ない。歩きだったり、電車だったり。それが普通なのだ。

「もし良かったら途中まで乗っていきませんか？」

「電車で帰るのでいいですよ」

「外、雨降ってるみたいですよ」

「……マジっすか」

「マンガ、濡れちゃいませんか？」

傘を持ってきていない彼。それは大きな問題である。

ここで千花の提案に乗れば、それは無事解決する。しかし、タクシーで帰宅することに大きな抵抗感は否めなかった。

しかし。彼は既に、彼女の厚意を一度踏みじっている。結果的に購入したわけだが、千花はその事実を知らない。

「……お世話になります」

「はい了解ですっ」

一度ぐらいいいだろう。幸い、財布には余裕がある。

彼女の隣に並ぶと、甘い匂いが鼻を刺激する。側から見たら、カッブルに見えなくもない二人。すれ違う高校生たちの懐疑的な視線にも、藤井は気付いていなかった。

シヨップピングモールの目の前には、彼女が呼んだであろうタクシー。見慣れたデザインの車。藤原家専用とかではないらしい。雨に濡れまいと、彼女はそそくさと乗り込み、彼も後に続いた。

車内は微かに冷房が効いていて、心地の良いものだった。運転手は彼女一人と思っていたのか、藤井の存在に少し驚く。だが彼が目的地を告げると、深いことを考えず車を走らせた。

二人だけの車内。互いの膝の上にはテーブルゲームとマンガ。千花の視線は、無意識にマンガに向けられていた。

憧れだった。マンガ本を、普通に買えることが。電子書籍で簡単に読める世の中になってはいるが、マンガ本を手にした時の喜び。小さな頃に買ってもらった絵本と同じ感覚。彼女の中で、もう二度と味わうことが出来ない。そう思っていた。

「……マンガとか読めないの?」

「えっ?」

「いや、何か……そういうの厳しそうだから」

窓の外ばかり見ていた藤井。二人きりの空気。何か話しかけないと、変な気まずさがあつた。だから、素直に頭に浮かんだ言葉を投げかけたのだ。それが、今の彼女の心情と重なっていたと知る由もない。

「……父の検閲が厳しくて。そういったものは読んじゃダメと言われてるんです」

「辛いな、それ」

「それが私にとっては普通なので、何とも思いませんけどね」
嘘である。

そんな健気な憧れは、そう簡単に消えるはずもない。あのマンガの匂い、厚み。それを簡単に買うことが許される彼のこと羨ましかった。

少しだけイタズラしたくなった。だから、あのマンガを勧めてしまった。また悪いことをしたなと心の中では思っている。彼は疑うことをせず諭してくれる。同級生と男子とは思えないほど、落ち着いていた。

そこで初めて、藤井は千花を見る。

笑っている。微笑んでいる。そう見える。

でもなんだろうか。少しだけ寂しそうな顔をしている。

彼は荒れたままの右手を頬に当て、考える。読めなくても、詳しいのは事実だろう。何かしら抜け道があるに違いない。

それはそれで、ここで何を言うのが正解なのだろう。いや、そもそも正解なんてあるのだろうか。こうして彼女と話しているが、千花も立派なお客さんスポンサーなのである。下手なことを言って、離れていくのは違

うと頭では理解していた。

「でもいいんです。今のままでも十分楽しいので」

「そっか」

「生徒会、テーブルゲーム部、大切な人たちと過ごせてるから」
本心である。

これまで、彼女の日常には生徒会のメンバーや、同じ部員が居て当たり前だった。彼らが居れば、飽きない。毎日が楽しくて、キラキラしてて、心がふわついてしまうような。

だけどそれは、自分に言い聞かせているように。

千花は、心の奥底に眠るそんな感情誤魔化しに気付くことはない。

それからすぐ、天龍の近く。

「停めやすいところで」藤井が言うと、店から最短距離の場所に停める。プロの運転技術である。

ドアが開き、お金の用意をする。しかし、彼女はそれを受け取らなかった。差し出しても、一向に受け取ろうとしない。あの時とは違って、タクシーの中。あまり長く問答を繰り返すことが出来ず、藤井は引かざるを得なかった。

「それじゃまた来ますね」

「……あの藤原さん」

「はい？」

千花に勧められたマンガを買った。検閲が厳しくてマンガを読めない彼女が、教えてくれたのだ。それを黙り込むのはどうなのだろう。

彼女の厚意。また踏みこじるのはどうなのか。買ったマンガを貸してあげる、これはダメだ。きつとすぐにバレる。だから、一番の解決策は一つだけだった。

「……用意してるから。君が読みたいマンガ」

「え……？」

「また来てください」

でも、やっぱり恥ずかしさを拭えなかった。

藤井のような男子高校生が、少女マンガを買ったという事実を、バ

リバリの女子高生である千花に伝えることが。だから、こんなカツコ付けた言い方になってしまう。

タクシーを降りた彼は、逃げるように走って店の中に消えて行った。

それを待たずして、走り出すタクシー。千花は彼の座っていた場所を見つめる。妙な空白感。不思議だった。

藤井の言葉の意味は理解出来なかった。でも、自分のことを思ってくれた発言だったことには違いない。微笑む。幸せな気持ちだった。

「すみません。やっぱり秀知院学園には寄らなくて大丈夫です」

口が緩んでしまうから、今は誰にも会いたくない。

彼女はこの日初めて、自分に素直になった。

早坂愛は確かめたい

夏休みまで一週間。秀知院学園生徒会。

白銀たちは一学期の総仕上げ、生徒総会に向けての最終準備に追われていた。千花も例外でなく、放課後遅くまで残る毎日。そのせいで、天龍にはしばらく顔を出せていなかった。

藤井と一緒に帰ったあの日。彼の発言が気になった彼女は、その三日後に顔を出した。勿論、食事目的で。するとどうだ。あれだけお勧めしていた『壁ドン・ロマンス』が全巻用意されていた。

思わぬサプライズを受けた気分だった。あれだけ嫌がっていたのに、どうしてだろう。彼女が藤井に問いかけると、彼は苦笑いしながら言った。

『面白いと思ったからだよ』

無論、ブラフ。

面白いと思っただことは事実。だが、千花のためだとは口が裂けても言えなかった。それこそ、重い意味になってしまう。

あつという間に五巻全てを読破した彼女。最新巻も仕入れていくとのことで、続きが楽しみで思わず口が緩む日々を送っていた。それ以上の理由はない。彼に会うことが楽しみだなんて、全く思っていない。初めて読む単行本での少女マンガ。電子書籍にはない感覚。まるで自分がマンガの主人公に恋をしているみたいで。それがとても心地良かった。そんな彼女に、一つの視線。言葉をかけるわけでもなく、ただじつと見つめていた。

その日の夜。視線の主、四宮かぐやはこう言った。

「藤原さんに恋人が出来たかもしれません」

制服から着替えた彼女。いきなりそんなことを言い出す主人に、近侍の早坂愛は返答に困った。「はあ」と相槌を打ったところで、この話は終わりそうもない。また面倒事に巻き込まれるのだろうと、力なく

察してしまつたのである。

かぐやとは主従関係にあるが、素性を隠して同じ秀知院学園に通っている。主人としてもベというよりは、姉妹のような。かぐやが唯一気を許すことが出来る相手でもあつた。

「どうしてそう思うのですか。聞いたんですか」

「ち、違います！ そんなこと聞けるわけ無いじゃない…！」

「ならどうして」

「——— たんです」

「はい？」

「彼女が男の人とタクシーに乗るところを見たんです！」

かぐや的には、その結論に結び付けるには十分な理由だと判断。しかし、早坂は呆れる自分を抑え込むので必死だつた。

「いつ、どこで見たのですか」

「えっと……確か一週間ぐらい前。近くに大きなショッピングモールがあるでしょう？ そこから出てきて、二人で乗り込んだの」

「送迎の車の中よ。いつもは通らない道だつただけど……あの日は偶然。行き先までは分からないけど……」

気になつたことは、追跡でもさせて知りたがる彼女。それが出来なかつたということは、相当テンパつていたのだろうと察する。早坂も、その様子が容易に想像出来た。

だが、どうしてこのタイミングで言ってきたのだろうか。考える。用心深いかぐや。この一週間、千花のことを彼女なりに観察していたらしい。そして、時折見せる艶っぽい表情。それが決定打になつたよう。

「別にいいじゃないですか。書記ちゃんも彼氏ぐらい作りますよ」

「早坂は気にならないの!? 藤原さんに恋人よ!？」

「いえ全く。気にしてどうするんですか」

「それは……その……」

早坂の本音。気にならないと言えば嘘になる。あの藤原千花に彼氏。想像出来そうで、想像出来ない。まず、あの彼女を墮とすことが

出来る男なんているのだろうか。恋の「こ」の字も知らないような女の子が。

椅子に腰掛けて、パソコンと向かい合う。そして覚えたてのSNSを開き、千花のアカウントを早坂に見せつける。

『思い出すだけできゅんきゅんする……』ですか。これが何か」

「こんなの恋人以外あり得ないじゃない！」

「……まあどうなんですかね」

「これは決まりよ。間違いないわね」

早坂は返答しかねた。

確かにその文言だけを見れば、かぐやのような捉え方をするのも一理ある。だが、それは果たして正解なのだろうか。

大体こういう場合は、主語をつけるのが普通。それが無い時点で、これは何かしらの意図があるのかもしれない。早坂は考える。が、あの藤原千花だ。こういう場合、大した意味なんて無いのが常である。「もし書記ちゃんに恋人が居たとして。かぐやはどうするおつもりですか」

「決まってるじゃない。説明してもらおうのよ。恋人が出来た経緯を」

「はあ。それは教えを乞うという意味ですか？」

「ど、どうしてそうなるの。あくまでも説明。別にそれを参考にするつもりなんて無いんだから」

嘘である。

四宮かぐや。天才すぎるが故のプライドが邪魔をする。そんな彼女が同級生の藤原千花に教えを乞うなど断じて許すはずもない。恋愛相談なのではない。白銀御行を墮とすためのテクニクに繋がる何かを得るため。その説明を受けるだけなのだ。純粹にそれを認めたくない彼女なりの言い訳。

無論、早坂にそれが通じるはずもないのだが。彼女はいつものことだと聞き流した。

「説明を受けたところで、何か変わることがあるとは思えませんが」

「私の周りにはそういう人は居ません。生の声を聞くことに意味があるとは思わないの？」

「……まあ。かぐや様らしいと言えららしいですね」

理屈を並べるのが抜群に上手いかぐや。自らの本心を曝け出すことなく、相手が納得してしまう理由を導き出す。早坂も彼女のしたたかさは理解しているが、同時にここでやり合うだけ無駄だということも分かっている。

「……で。私に何をしろと言うんですか」

「話が早いわね。早坂には、藤原さんに探りを入れて欲しいの」

「ご自分でやったらどうですか」

「それが出来ないから頼んでるのっ！」

「はあ」

とは言え、早坂にとってそれは面倒。まあ面倒事である。

四宮かぐや。日頃の行いからは想像出来ないほどのワガママ。裏を返せば、早坂にしか見せない顔。それを白銀に見せるだけで簡単に墮ちるというのに。当の本人は一切気付いていない。

接点で言えば、圧倒的にかぐやの方がいる。ほぼ毎日、生徒会室で顔を合わせているからだ。一方で早坂。学校内ではいわゆる「ギャル」の皮を被っている。千花と頻繁に話すことは無いが、話しかけにくいわけでもない。むしろ、周りから見たら同類なのである。早坂自身、その認識はあまり気持ちの良いものではなかったが。

「いい？ 藤原さんに恋人が居た場合、二人きりでその話をしたいの。上手く誘導して」

「恋人の有無すら聞けないのに、書記ちゃんの説明を聞けると思ってるんですか」

「……どういう意味かしら。言ったでしょう。教えを乞うつもりではないと」

「いえそうではなくて」

かぐや。思いの外、早坂が食い下がらないことに若干の苛つき。千花の説明を受けて、白銀攻略の糸口を探る。これが彼女の狙い。だが、千花に恋人が居ればの話。

事実、タクシーに乗っていたのは藤井で、彼氏でも何でも無い。ただのラーメン屋でバイトする高校生。ただそれだけなのだ。なのに、

恋人がいる前提で話を進めるかぐや。早坂の苛つきはそれに対してのモノだった。

「恋人が出来るまでの経緯なんて単純ですよ。片方が告白して、片方がそれを受け入れる。そんなの私でも分かります」

「……何が言いたいのか？」

「恋人が出来た後の話。要は今の話を聞くことが、白銀会長攻略には良いかと思えます」

「どうして？」

「交際する年頃の男女がすることと言えば、一つ。性行為です」
「性っ……!!」

唐突な早坂の発言に、かぐやは思わず顔を背けた。

男女が交際に至る経緯なんて、決まり切っている。早坂の言う通りである。それが素直に出来ない主人。だからこそ、ここまで悩んでいるのだ。面倒であることには変わりないが、彼女にとっては大切な主。親身になって考えているからこそその発言である。

早坂の狙い。かぐやと白銀の関係性を鑑みて。

常に彼女は「男は所詮、性欲で動くモノ」と言い続けている。かぐやの側に居る千花が大人の階段を登ったとなれば、当然。プライドの高いかぐやは焦るに違いない。そして、白銀も。

「説明を受けるのなら、白銀会長も同席してもらったらどうですか」

「か、会長も!? そんなの……ダメに決まってるじゃないっ!」

「プライドの高い会長のことです。書記ちゃんが大人になったと知れば当然焦りますよ」

「そうなれば……ああなるほど」

かぐや、早坂の狙いを察知する。

プライドの塊である白銀御行。あの千花よりも遅れていると知れば、慌てふためくに違いない。かぐや、早坂。二人の頭の中にそんな彼の姿が思い浮かぶ。そしてかぐや。口元が緩む。方向性が決まる。

だが、これはあくまで仮の話。千花次第で計画白紙になることだつてある。現に、今の二人の会話は全て無駄であるのだが、妙に楽しんでいるかぐやは、その可能性から背を向けていた。

「まあ、恋人が居たららの話です。いずれにしても、よろしくね。早坂」
かぐやの性知識は壊滅的。何を言い出すか分からない千花の発言に、頭がパンクしてしまう恐れだつてあるのだ。

それも、早坂は承知の上。恋愛に多少のリスクは付き物。大人びた考えで、喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

かぐやの部屋を出た彼女は、静かな廊下で一人考える。

千花に探りを入れるのは早い方がいいだろう。相談の場を設けるとなれば、尚更。

いつにする——。夏休み前に時間は取れるのだろうか。生徒総会前で慌ただしいのに。いや駄目だ。難しい。恋にうつつを抜かしている白銀もかぐやも、やることは責任持つてやる。仕事最優先。なら、夏休みに入つてからは？——。早坂の中で一つの結論に至る。

学生の特権。夏休み。一ヶ月近く。楽しみのオンパレードとなるはずのかぐやの夏休みも、今のところは白銀と過ごす予定が無い。どうせ中頃になつて泣き喚くのが目に見えている。これはいいチャンスなのだ。

白銀はバイト三昧かもしれないが、かぐやと会えるとなれば話は別だ。計画性のある彼。彼女に会えない夏休みを過ごすつもりは毛頭無いはず。白銀にとつても、悪い話では無いはずだ。

誘い方とすれば何か。「藤原千花の恋バナ講座」ということにもしておくか。直球すぎる己の発想に、彼女は思わずため息が出た。

(面倒……)

こう言つた悩み事の相談は、今に始まつたことではない。

早坂自身も、頼られ続けて長い。それなのに、慣れることは無かつた。自身を偽り、学校生活を送る。偽つた人間関係。ずっとそうだった。でも、それで良かった。早坂愛という人間は。四宮家に仕える人間として、四宮かぐやに仕える一人の女として。彼女の為に身を粉にして働くと決めたのだから。

心の中に眠る本心。時折こうして呟くように出てくる。そうしないと、自身の心が壊れてしまうから。溜まるストレス。一人で抱え込

むしかない彼女の本心は、とてつもなく大人びていた。

誰も居ない廊下。メイド服の彼女は、自らのスマートフォンを取り出す。先ほどかぐやに見せてもらったSNSを開く。普段から情報収集のため活用していたが、ここ数日は忙しく見る事が出来なかった。そのため、千花の発言も見逃していたのである。

千花のアカウントに飛ぶと、彼女らしい可愛らしいイラストのアイコン。らしいなと心の中では思いつつ、発言を読み進める。写真付きのケースが多く、目的の発言を探すのに苦労してしまう。

『思い出すだけできゅんきゅんする……』

「(見ている方が恥ずかしい)」

見つけた。一昨日の発言。互いにフォローしている訳ではないが、奔放な彼女らしく鍵は付けていなかった。早坂自身もアカウントを所持している。かぐやには伝えていない。しかし、呟くことはそうそう無い。単なる情報収集のため。

彼女は何を期待して、こんなことを呟いたのだろう。案の定、誰からもリアクションは無い。あるはずがない。目に見える地雷なのだ。仮に自分が同じ立場なら、絶対にこんなことは言いたくない。早坂は密かに誓う。

匂わせ、そう捉えられても仕方がない。

大抵、そう言った女は面倒くさいと相場が決まっている。早坂が最も苦手とするタイプである。学校でつるんでいる彼女たちも、どちらかと言えばそういった類かもしれないのに。

(恋人、ね)

自身の過去を思い出しても、そんな経験は無い。

これまで、かぐやに尽くしてきた彼女。そんなことをする暇が無かったといえは事実。だが心のどこかでは「ただの面倒事」と片付けてしまう自分も居て。思春期に突入した早坂の心の中は、自分が思っているより複雑に入り組んでいた。

「まあ……どうでもいい。どうでも」

誰も居ないことを良いことに。少し大きめな独り言を漏らした。自分に言い聞かせるように。自分を誤魔化すように。

千花の発言辿りもそこそこに。スマートフォンをしまい、再び仕事に向かう彼女。かぐやが千花を見たという一週間前。彼女は呟いていたというのに。

『嬉しかった。ちよつぴり』

早坂愛は確かめたい②

「書記ちゃん。ちよつとイイ〜？」

「あれ、早坂さん！ どうしたんですか？」

善は急げ、の精神で。

かぐやから依頼を受けた早坂は、その翌日に早速行動を起こした。放課後、かぐやと共に生徒会室へ向かう千花に声をかけた。二人きりで話がしたいと。しかし、彼女も生徒会の一員。仕事が山積みだったこともあり「今はちよつと……」と渋る。

が、それも想定内。隣に居たかぐやが追撃する。

「少しなら大丈夫ですよ。会長の方には伝えておきますので」「そうですか……でしたら」

四宮かぐやと早坂愛。抜群の連携である。

早坂のことだ、早めに仕掛けてくるだろう。そしてタイミングは放課後。かぐやの予想通りの展開である。早坂もそこまで一々報告しないが、何せ付き合いは長い。ある程度のこと互いに分かるようになっていた。

生徒会室に向かうかぐやを見送った二人。何のことか分からない千花は、大人しく早坂の後に続く。かと言ってそんなに遠くに行く訳でも無い。生徒会室から少し離れた廊下で早坂は立ち止まった。

「ごめんねえ〜忙しいのに」

「いえいえ！ どうしたんですか？」

予め人払いをしていたこともあり、妙に静かな雰囲気。しかし、早坂の甲高い声がそれを切り裂く。学校での早坂愛という人間はこれが普通なのである。千花は何も疑うことなく彼女を見つめていた。健気さすら感じるその表情。少しは人を疑った方がいいのに。なんて心の中で毒付いた。

「大したことじゃないんだけど。何か良いことあったのかなあ〜っ

て」

「えっ、どうして？」

「何か、時々ニヤニヤしてるしく。SNSで気になること呟いてるし」

ニヤニヤ。もちろんかぐやからの情報だが、そのフレーズを聞いた彼女は、分かりやすく顔を赤らめた。

「わ、分かります……？」

「分かりやすいよ。で、どうなの？ 彼氏とかあ？」

早坂、畳み掛ける。かぐやのためだと言い聞かせ、こんなキャラまで演じているのだ。これぐらい造作も無いことだった。

一方の千花。彼女の圧力に押されるように、心の堤防が壊れかける。「彼氏」という自分には関わりのないフレーズが出てきたのだ。何を持ってそんなことを聞くのか。千花に分かるはずも無かった。

「あはは。彼氏とかじゃないよ。ただ——」

少女マンガの続きが楽しみだけだよ。

そう言いかけた時、頭をよぎったのは自身の父親だった。

ここでその事実を伝えてしまったら、何かの拍子に家にバレるかもしれない。自身の呟きの件も、マンガを思い出して言ったこと。早坂と藤原家に繋がりは一切無いが、リスク管理という意味では言わない方が無難。

「ペスが可愛くて。思い出し笑いしちゃうんだ」

「……へえ」

早坂、察する。この女、嘘を吐いていると。

愛犬に逃げ道を見出した千花だったが、あからさまに視線を逸らす。そもそも嘘をつくことが出来ない性格の彼女。ただでさえ観察力のある早坂がそれを見逃すはずも無かった。

ただ彼女。そんな千花に若干の苛つきを覚える。

この女、私を騙そうとしている——。間違いなく何かを隠している言い方。そうなると、男の存在もあながち間違いじゃないのかもしれない。かぐやの推論にしか過ぎなかった戯言が、現実味を帯びてきた。

「ウチ、見ちゃったんだよねえ。書記ちゃんも男とタクシー乗ってるの」

ここぞとばかりにぶつける。あれだけ嘘をつくのが下手な千花。この言葉をぶつけるだけで、慌てふためくだろうと早坂は考えていた。

しかし、逆効果だった。彼女の顔から焦りの色が消えていく。早坂的にも想定外の展開。千花が何を考えているのか、頭を巡らせるも結論は出ず。

一方の千花。その発言で早坂の意図に気付く。ここでようやく！

藤井と一緒に帰ったあの日のこと。それが彼女の的には「彼氏」に見えていたらしい。早坂は最初からそのつもりで聞いていたのだが、何せ藤原千花。今は少女マンガの方が大事である。考え過ぎたと笑ってしまう。

「あはは。あの人は全然そんなじゃないですよ。顔もタイプじゃないですし」

本気である。藤井、知らないところでフラれる。

いつもの笑顔。藤原千花。先ほどの動揺は何だったのかと早坂は考える。少し揺さぶりをかける。

「なら誰？ お友達？」

「……なんだろう」

「そこ悩むところ？ やっぱり彼氏じゃないの？」

「ち、違います！ ただ落とし物を届けてくれた男の子っただけで

……」

「へえ。なら秀知院生じゃないんだ」

「そうですね。どこに通ってるかは知らないですけど……」

落とし物を届けた。紛れもない事実である。早坂の耳にもそのことは届いていた。しかし、それがどうしてそういった関係に繋がるのか。また新たな疑問に行き着く。ここまで来たなら引くこともない。問いかけるだけだ。早坂は自身に言い聞かせる。

「ただ知ってるのは、家がラーメン屋さんの同級生の男の子です。この間かぐやさんたちで行ったところの。よく分からないけど、多分良

い人だと思いません」

だが先に手を打ったのは千花だった。嘘偽りなく答える。正直に答えて損することはないと彼女なりに判断したらしい。それもそうだ。大事なのは少女マンガで、藤井ではないのだから。

それでも、早坂は腑に落ちない。かぐやからの依頼であることを忘れ、秀知院生・早坂愛としてこの話の行方を追っていた。

「そんな人と一緒のタクシー乗る普通？」

「うーん。あの日はたまたま一緒になっただけですからねえ」

「それ新手のナンパじゃないの？」

「な、ナンパ!? いやあく……えへへ。そんなんじゃないと思います
く……」

「(満更でもない顔してるし)」

元々、奪われたい願望の強い藤原千花。ナンパされて喜ぶちよつと危ない性格。流石の早坂もそこまでは読み取れなかったが、彼女も十分拗らせていると一瞬で理解する。

だがそんなリアクションをされると、ますますどつちか分からなくなる。千花を墮とすつもりで来た早坂は、どこか負けた気分になって沈む。チラチラと時計を確認する彼女。これ以上会話してもあまり意味が無い。そう判断した早坂は「もういいよ」とだけ告げ、生徒会室に向かう千花を見送った。

(よく分かんない……疲れた)

見事なまでに早坂愛を演じ切った彼女。誰も居ない廊下とは言え、言霊にするのは気が引けた。心の中に押し留める。

一人になったせいかな、長い廊下は不気味なほど静かになった。それからすぐ、彼女のスマートフォンに着信がある。相手は、依頼主だった。

「はい、かぐや様」

「早坂。今周りに誰も居ない？」

「ええこちらは。かぐや様の方は」

「問題無い。——それで。結果は」

「恋人は居ないと思われまます」

「そう」電話越しでも分かる、かぐやの力無い返事。

一つの戦略が水の泡になったのだ。早坂的にも、そうなる気持ちは分からなくはない。ただ早く告れよ思っているだけで。

だが、これで夏休み白銀とかぐやの邂逅が無くなってしまふ。早坂はそこに頭を悩ませた。かぐやは、計画だけは立てている。しかしそれは全て、白銀側からのアクションがないと始まらない。このままでは、部屋の中で喚く彼女の相手をしないといけない。考えるだけで早坂は頭が痛くなる。

「SNSでの発言は何だったの？」

「よく分かりませんが、男絡みではないです。これは断言できます」
「どうして言い切れるのかしら」

「かぐや様が見た男。ラーメン屋の男とのことです。ただ全くタイプじゃないと力強く言っていました」

「ラーメン屋……あああの時の。そう言えば何か居たわね。風景に溶け込み過ぎて人として認識してなかったけれど」

「(流石に可哀想)」

藤井、人認識されず。いつものかぐやではあるが、これには早坂も同情してしまう。こうなってしまえば、千花を利用する価値も無くなってしまった。早坂にも、かぐやの興味が薄れていくのがヒシヒシと伝わっていた。

「いかがなさいますか。身辺調査致しますか」

「お金の無駄よ。いいわ。放っておいて」

使えないと分かったら、トコトン突き放す。それが四宮かぐやという人間。自身によく似た人間であった。

「……かぐや様」

「なに？ もういいかしら。生徒会の仕事があるから」

「…いえ、何でもありません。それでは」

「そう」

自分の思い通りにならなかつたからか、心無しか電話を切る勢いに苛つきが込められていた。早坂にとっては、これも日常茶飯事なのだ。特に落ち込むこともなく、スマートフォンをカバンにしまふ。

彼女が言いかけたそれ。

ラーメン屋の男。藤井に会ってもいいか、ということ。

どうも分からなかったのだ。千花があんな嘘をついて、何かに気付いた途端「彼氏じゃない」と断言してきたあの様子。何か裏があると思っているのが普通だ。生徒会の仕事が終わるまで、まだ時間はある。早坂は決める。自らの足で調査すると。それで使えそうならかぐやに報告、そうでなければ黙っていればいい。それだけの話。要は、早坂自身が気になるのだ。千花と彼の関係性が。

急ぎ足で学校を出て、タクシーを拾う。普段はまず乗ることのない安っぽいシート。だが普段乗るそれも、自身のためではない。主人であるかぐやのために用意されたもの。おこぼれを貰っているだけなのだから。

かぐやからラーメンを食べたと聞いていた早坂は、微かな記憶を頼りに店の名前を伝える。運転手も食べたことがあるらしく、行き先は間違いなく決まった。そして、そこには男子高校生が一人居ることも聞き出すことに成功。早坂、親父狩りの一面を見せる。

路地裏には入ることが出来なかったため、運転手は大通りに停める。丁寧に行き方まで説明してくれたが、目の前をまっすぐ行くだけ。分かり切ったことを言わないでほしいと、早坂はそれを聞き流した。

タクシーを降りて、路地裏を進む。まだ夕方だと言うのに、少し不気味さすら感じる。やがて、一人の男と目が合った。

「……………お客さんですか？」

目が合ったせいで立ち止まっていた早坂。店の前を掃除していた藤井に声をかけられ、思わずハツとする。

Tシャツにジーンズ。まさしく「ラーメン屋でバイトしてます」という格好をしていた。

「まあ、そうかなあ〜」

「すみません。ちょっと店主が買い出し行ってる。今の時間店閉めてるんですよ」

「なんだ〜。残念」

申し訳なさそうに言う彼に、早坂は会話に困った。

そんな彼女に頭を下げて、箒を動かす藤井。こういった場合、すぐ立ち去るのが普通なのだが、そうしない女子高生に戸惑っていた。

しかも、あの秀知院学園の制服を着ている。しかも路地裏には不釣り合いなギャル。千花が何か吹き込んだのではないかと密かに不安になる。

「ねえ、書記ちゃん付き合ってるの？」

早坂、単刀直入の一撃。初対面でもう会うこともない男。彼女が想像していた以上に地味だった。かぐやがああ言うのも無理がない。それに、ここで恥をかこうが別に構わない。

一方で藤井。頭の上にクエスチョンマークが浮かぶ。

「しよ……誰？」

「藤原千花のこと。生徒会で書記やってるから」

「ああ藤原さん。……って、付き合ってるわけじゃないですよ」

タクシーで一緒になった時、彼女はチラツと生徒会のことを言っていた。その時に彼も漠然とは理解していたが、よりにもよって書記とは。あのふんわりした彼女にそれが務まるのだろうか、心の中で苦笑いする。

それはそうと、どうしてそんなデマが流れているのか。貴族の藤原千花。平民である自身が釣り合うはずもないのに。

「本当かなあ。ウチ、君が書記ちゃんと一緒のタクシー乗ってるところ見ちやっただろ」

「ああそれで……何か申し訳ないな。そんなあらぬ噂立てられて」

短く刈り上げられた頭を掻きながら、彼は恥ずかしそうに言う。彼も千花と同じで、嘘をつくのが苦手なタイプなのだろうか。いずれにしても、真実は見えてこない。

「なら本当に付き合っていないんだあ」

「そりやそうですよ。落とし物を届けただけで。あの時だって、たまに買った物中に会ったから。顔見知りになった程度です」

彼の話のトーンから、それは間違いないのだと結論付けるしかなかった。

ただハッキリしない千花とは違い、靄が晴れたような。その堂々と断言する辺り、そう判断するのが自然であった。

でも、落とし物を届けたぐらいで顔見知りになるのだろうか。

自分が同じ立場なら、早坂は考える。落とし物を届けてくれた相手にお礼を、そんな思考になつても不思議ではない。そこから関係が発展していくケースだつてなきにしもあらず。

「そっか。残念」

早坂自身、別に期待をしていたわけではない。何故かそんな言葉。事実と嘘が入り混じった頭の中。ごちゃごちゃしていて、よく分からない。

「何かすみません。良かったらまた来てください」

「はい」

藤井が謝ることもないのだが。期待させた分、謎の申し訳なきが彼の心を覆っていた。千花と同じように、一人の客として決まり切つた定型文を言う。

このまま長居するのは流石に迷惑。藤井に背を向け歩き出す早坂。名前も知らない彼は、本当に地味だった。間違いなく、秀知院学園には居ないタイプの男。だが、千花にはそんな男が合っているのかもしれない。世間知らずの彼女。こういった社会を知った人たちが通う店で、現場に立っている彼が。

「書記ちゃん、全然タイプじゃないって言つてたのに」

側から見て、彼女と彼の関係性。

何が嘘で何が本当なのか。分からないまま、早坂愛は空を見た。

藤原千花は聞かれない

夏休み。高校生にとっての楽園。海、花火、肝試し。青春の代名詞。学生全員に与えられた特権である。

藤原千花も例外ではない。生徒総会を終えるまでの激務。その間、遊びという遊びから遠ざけられていた彼女にとって、これから一ヶ月はフリーなのだ。何をしようが自由。勉強？ そんなものは彼女の頭に入っているわけもなく。課題以外机に向かう気はサラサラ無かった。

実際、彼女の予定はほぼ海外旅行で埋まっている。日本に居ないのだから、その本気度がうかがえる。ここ数年、姉妹たちと世界を巡ることが夏休みの決まり事になっていた。れっきとした貴族の生活。一般の高校生の青春が霞んでしまうほどのド派手な花火である。

夏休みに入って二日が経過。よく晴れた日に、藤原千花はいつものラーメン屋で『壁ドン・ロマンス』の最新巻（六巻）を読み進めていた。こうして彼女が来たのは久々。厨房でテレビを眺める藤井も、不思議と声を掛け辛そうにしていた。

そもそも、友達というわけではない二人。こうして会話をしないことの方が自然なのである。千花はもとより、藤井もそのことは理解している。下手に声をかける必要は無いと考えていた。

「また続きが気になる終わり方……この作者分かってますね……」

「次は三ヶ月後だね。今日もまた熱中してみたいで」

「待てませんよお。仕入れたら教えてくださいね」

笑う千花。冷静に見れば、自ら買うつもりが無い発言。だが、藤井は彼女の家の事情を知っている。特に何も感じない。

それに、この虫を殺さない笑顔。仮にイラついていたとしても、こんな顔を見せられれば気が抜けてしまうような。無意識にやっつしまう千花は、小悪魔的な素質が抜群である。

読み終えた丁寧に本棚に返す。その丁寧さに感心する藤井であったが、これまでの彼女とは大きく違うことが一つだけあった。

「すっかり夏ですねえ。外は半袖でも暑いですし」

「だねえ」

私服がエロい。――。

健全な男子高校生なら誰もが視線を奪われるであろう、藤原千花のプロポーション。破壊力抜群の胸部とそれにより強調されるクビレ。フワフワしている彼女がそんなダイナマイトボディを持っているのだから、ギャップ萌えという点でも男子のポイントは高い。

それを分かっているのか、分かっているのか。千花は比較的薄着で身体のラインがハッキリ分かる服装。暑いという彼女の発言を聞いた男共はきつとこう言うだろう。「その格好で暑いですか？ だったら裸になったらどうですか？」――。

無論、藤井も例外では無い。豚骨の匂いが強烈なラーメン屋においても、時折冷房の風に乗る彼女の甘い匂い。頭がビリビリ痺れてしまう感覚。そして何より。

巨乳好き――。

藤井太郎。高校二年生。おっぱいへの憧れが止まらないのである。貧乳、巨乳、程よいぐらい。人類の誕生から現在まで。全男共が繰り広げてきた論争。その中で巨乳派の彼。自分を慰める時には専らそう言う女の人が対象になる。

これは何もおかしなことでは無い。男であれば誰しものが通る道。特に思春期真っ只中の男子高校生である彼。男子校通いということもあり、性への知識だけが溜まっていく。

だが、男子校。女子と触れ合う機会が格段と減る。中学時代まで組み立ててきた抗体が日に日に減っていくのだ。彼的にも、千花を目の前にしてそれを痛感していた。

「そうだ。私明日から海外旅行なんです」

「へえ、海外……すごいね。本当に」

「藤井くんの夏休みの予定ってどんな感じなんですか？」

「特に何も。ずっと手伝いかなあ」

会話の続かない返答になってしまったが、事実なのだから仕方がない。藤井自身、友達が居ないわけではない。ただ毎日遊びに出るかと言われれば違う話。互いの利害が一致した友人とメツセーシアプリで連絡を取り合い、流れて遊びに行くぐらいだろうと。これと言って予定を入れていなかった。千花と正反対である。

「退屈じゃないですか？」

「まあ、退屈だね」

「……それなら！ 私がレポート送りますよお」

「レポート？」

唐突な彼女の提案。藤井は聞き返す。

同時に店主が「醤油豚骨・薄め」を差し出す。それ手に取った千花は、レンゲでスープを一口。安定の味に感動しつつ、藤井の問いかけに答える。

「私の海外旅行レポートですっ！ どうですか？ 気になりませんか？」

「(やべえ、全然気にならねえ)」

藤井的に、千花は不思議な人だった。

唐突にこんなことを言ってくるくせに、一緒に帰ったあの日のように、心に沈んでいるであろう闇を吐き出してくる。無視してもいい言葉でも、つい聞いてしまうような。それを魅力と捉えるのなら、藤井にとって千花は魅力的な女性だった。

ただ交際するとなれば、話は変わってくる。千花から見ても、藤井は明らかに平民である。生活環境も違えば、培ってきた常識も違う。それが分かっていたからか、彼は彼女と接する上で無意識に一線を引いていた。

「まあ……ね。麵伸びるよ。早く食べたなら？」

秘技・回答濁し。どういうつもりで言ったのか分からないが、下手に興味が無いと言えば傷つける可能性があった。ここは彼女を傷つけない、自分も傷つかない最善の選択。

——のつもりだったが。

藤原千花。回答を濁されたことに勘付く。この女、海外旅行レポ―

トとか言いながら、深層心理ではただ言いふらしたいという欲があるのだ。無論、深層心理である故、本人に自覚は一切無い。心の奥底に眠る承認欲求がこのような形で出てくる。そのせいで、自分にそんな思いがあるとは気付く筈もないのだ。

だがそれ以上に。この提案には「別の狙い」があった。

「興味……無いですか？ どうでもいいですか……？」

「いやめっちゃ気になるなあ」

藤井は優しい嘘をついた。

ここで興味が無いと言ってしまうえば、彼女の大切な何かが悪く壊れてしまいそうな気がして。

彼の嘘。咄嗟に出たこともあり、その表情には少しだけ遠慮が見える。決して鋭い方ではない千花も、藤井のその雰囲気の特徴的で。不思議な気分になる。

ラーメンを啜る。いつも通りの味。緊張しているわけではない。それでも、彼がそう言ってくれたことは決して嫌では無かった。

「それなら決まりですね」

「……だねえ」

そうは言われても。

海外旅行レポートなんて、彼にとつては何のことかよく分かっていない。彼女から何か言い出すだろうと溜まりかけの皿に洗剤を付けた。

ところが。千花は待っていた。彼から連絡先を聞かれるのを。

少女 マンガの影響

男から連絡先を聞かれることに、大した感情なんて気にしていなかった彼女。現に白銀や石上に対しては自分から「交換しよう」と投げかけている。

しかし「壁ドン・ロマンス」を読んでそれは大きく変わる。決してモテない女主人公に、モテモテの学校一のイケメン。そんな彼が恥じらいながら連絡先を聞いてくるシーンがあるのだが。

(これはやばいです。可愛いです)

そのシーンを読んでしまった彼女の中で、憧れという感情が生まれ

てしまう。そしてそれが「現実でも味わってみたい」と進化を遂げて。彼女の周りに居る男。連絡先を教えても損がない人間。したがって、目の前に居る藤井太郎に白羽の矢が立った訳だ。無論、海外旅行レポートなんてそれを味わいたいのが故の口実。

それだというのに、彼は自身に背を向けた!!

これでは当然、連絡先イベントは発生することもない。意識を皿洗いに向けた藤井に困った千花は、急いで麺を全て食べ終わる。そして頃合いを見て彼に話しかける。

「藤井くん、これ見てくださいよお」

「今ちよつと手が離せない。食べ終わったらお皿そこに置いてていいよ」

無視!!

正確にはリアクションしているため無視ではないのだが、今の千花には十分無視に値する。最新巻を読んだばかりで少女マンガ脳になってしまった彼女。明日からは海外。この欲求を満たすには、この瞬間だけしかないのだ。

店主は暇そうに新聞を読んでいる。とは言え、二人きりではないため変なことは言えない。

「この子、可愛いと思いませんか?」

「どれどれ?」

この女、男の欲求につけ込んだ一撃である。

全く興味を持たなかった藤井であったが、女子の写真なら話は別。画面には、先日撮影した写真。

そこには、四宮かぐやと千花が映る。彼女は、自らの欲求を満たすために親友であるかぐやを売ったのだ。彼女を指差しながら、彼にそう言っていると、藤井はうなずいた。それ以外、特に感想は無かった。四宮かぐやにこの事実を伝えれば、とんでもないことになるだろう。そんなことは知らずに、彼はそのまま皿洗いに戻る。

おかしい!!——。この行動の裏側には「連絡先を聞いてこい」という暗号が込められているなんて、伝わるはずもない。百人中百人が気付かないだろう。

藤原千花、万事休す。白銀やかぐやのように、頭の回転が速い訳ではない。これ以上、匂わせるのは無理があつた。となれば、話は変わる。こちらから聞き出すか、無かつたことにするか。

前者は有り得ない。それだと目的が変わってくる。今の彼女は「男に連絡先を聞いてほしい」だけ。言い方はアレだが、教えるとは言つてないわけで。そうなると、後者も意味が無い。こちら側からのアクションに限界を感じた彼女は、小さくため息。

「結局、その、なんだ。レポート？ 送ってくれるの？」

藤原千花、脳内に一筋の光!!

神は彼女のことを見捨てていなかった。皿洗いを終えた藤井は、肝心なことを言わない彼女を見かねて、そんな問いかけ。

この千載一遇のチャンスが彼女が見逃すわけがない。「むふふ」とお口にチャック。黙って彼のことを見つめる。

「そういう時はどうするのが正解だと思いますか？」

「はい？」

「連絡を取り合う時って……分かりますよね？」

彼女なりの最大級のパスを送つたつもりだ。

後は藤井がゴールに押し込むだけ。千花としては、ボールに触るだけで簡単にゴール出来るレベルのパスを送つたのだが――。

(は、何?! 何その目!?)

も、もしかして試されてる……!?)

藤井太郎。この男、そもそもが女子と面と向かつて話すのが苦手なタイプ。それが災いして、これまで交際経験も無い。彼女の言葉よりも、表情に意識が集中してしまったのだ。

流石の彼女も、近くに店主が居ることもあり、変なことは期待してないだろう。ならなんだ。何を求めているのだろうか。

いやそもそも、海外旅行レポートの話はどこにいったのか。頭の中に出てくるのは疑問符のついた事ばかり。しかし、ジツと彼女に見つめられれば、まともな判断が出来なくなるのも無理はない。

言葉が出てこない。何を期待しているのか分からない彼女に対して、何を言えいいのか分からなかった。

ところがだ。よくよく考えてみると、連絡する以前に連絡先を知らないことに気付く。途端に冷えていく頭。ああなんだ、と。嬉しいよ
うな、悲しいよな。

「……あつ。分かった。連絡先ね、連絡先。教えてよ」

俺としたことが——。こんな単純なことを忘れていた自身が
恥ずかしい。変な勘違いをしましてしまったが、寸前のところで
踏み止まることに成功する。

が!! そこは藤原千花。少女マンガのように聞いてくることを期
待していた彼女。ようやく吐き出させたソレが平然としたモノで、期
待を大きく裏切られる。

「違いますっ!! こういう感じじゃないですっ!!」

「え、違うの!?!」

違うないが、違う。言葉では上手く説明できない感情。

何度も言うが、少女マンガで熱くなった頭。思い通りにならないと
そうやって大声を出したくなる。藤原千花。熱くなった心。生徒会
のメンバーなら何度も見てきた彼女の姿。しかし、これを初めて見た
藤井は戸惑うだけ。そして思う。何か不味いことを言ったのかと。

「ごちそうさまでしたっ」

「ちよ、藤原さんっ! 待つて! 待つてっば!」

代金を支払った彼女は、店主への挨拶もそこそこに店を出る。後か
ら追いかけてくる藤井。側から見たら見事な痴話喧嘩である。

父親である店主に見られたくもない光景。だが、彼はすぐ彼女に追
いつく。ある意味、痴話喧嘩に近い雰囲気か二人を包んでいた。

「えつと……何か気に障ること言った?」

「……いいえ違います。ごめんなさい。藤井くんは何も悪くないで
す」

外に飛び出して、太陽の日差しを浴びたからか。不思議と、千花の
沸騰した頭は冷静さを取り戻していく。天龍の空気から解放された
のもあるのだろう。

彼女にとってそこは、ラーメンと共に少女マンガを読むことができ
る空間。まるで異世界に飛んだかのような。現実の自分とかけ離れ

た自分で居られる世界。決して広くない空間でも、時折来るこのラーメン屋は、千花にとって心地の良い場所になっていたのだから。

「いや……ならいいんだけど」

「……明日は早いので、今日は帰りますね」

自分は面倒くさい人間だ。

藤原千花。彼女は心の中に浮かんだ感情を、笑顔に変えて握り潰す。あんなワガママに付き合ってくれる人間なんて、居ないのだから。だから、生徒会のメンバーのことは好きだった。

ああ、痛い。笑いたくないのに笑うのは、すごく痛い。

昼下がり。大通りに出ようとする彼女を、藤井は呼び止めた。

まただ。また、そんな顔をする。一緒に帰ったあの日見せた顔。

何を考えているのか分からない、不思議な表情。自ずと言葉が出てくる。

「俺、藤原さんのレポート気になるんだよ」

「えっ……」

だから彼は、そんな優しい嘘を吐く。

あの日と同じように、柔らかくて、彼女の心の底を撫でるような。

あの日のこと。彼女。ついこの間のことなのに。すごく遠い昔に感じられて。だから、黙って藤井の言葉を待っていた。

「その……嫌じゃ無かったら連絡先、教えてくれないかな」

文言が変わっただけ。

言い方が優しくなっただけ。

たったそれだけ。

それだけなのに。さつきよりも胸に突き刺さる。

照れ臭そうに頭を掻く、藤井太郎という男子高校生の言葉が、深く、深く。

「もちろんですよ」

彼女は、日差しに負けない笑顔で彼に応えた。

早坂愛は発散したい

「身辺調査、ですか」

夏休みに入って一週間が経ったある日のこと。真夏の太陽が空の頂まで昇った時間帯。早坂愛は四宮かぐやから呼び出された。

自らの部屋。普段は張り詰めている彼女も、どこか気が抜けているように見える。私服も薄着で、男子の前では決して着ないような。

「ええ。ラーメン屋の男子高校生について」

「何故ですか。先日は必要無いと」

「考えたのよ。使えないかって」

早坂は返答に困った。

かぐやはこうして、気が変わることもしばしば。その都度無理難題を言いつけられることもある。それに比べたら、今回の件はこれと違って問題にならない。

かぐやのことである。ラーメン屋の男子高校生、藤井を使って白銀との接触を試みようと考えているのだ。夏休み。学校で会うことが無い二人にとって、これまでの状況とは全く違う。

どれだけ自然に、いつも通りに。その前提で遭遇しなければならぬ。今さらであるが、自ら遊びに誘うことは絶対に有り得ないのだから。

「ですが、別にその男を使う必要は無いのでは」

「どうして？　そう言い切れる根拠でもあるの？」

会って話をした早坂の直感、としか言えない。しかし、彼女はその事実を言うか迷った。

あの日彼女からは「放っておけ」と命令を受けたのだ。となれば、当然早坂の行動は命令違反になる。ただかぐやは、そういったモノをあまり気にする方ではない。特に早坂の場合。口頭で注意して終わることがほとんど。かぐやなりの優しさであることは間違いなかった。

「……私の直感です。彼は、あまりにも普通すぎます」

逆に下手な嘘をつけば、後が怖い。早坂は素直に理由を答えた。

彼女の言葉の意味。頭の回転が早すぎるかぐやは、その言葉の真意に気付く。そして案の定、一つため息。ただ無断で会いに行ったことを咎めることもなく、早坂に向き合う。その顔は、決して怒っているようには見えなかった。

「早坂の言う普通、というのがよく分からないわね」

「かぐや様と白銀会長。お二人のやり取りに付いていけないと」

「それは何？ 純粹に知識が足りないということ？」

「……まあ。そういうことですかね」

早坂は回答を濁す。かぐやと白銀。二人の知識は凡人を遥かに上回っている。それを自覚している彼女は、早坂の回答を疑うことなく鵜呑みする。絶対的な自信故の客観性不足である。

その発言の真意を、かぐやは見落としていた。

互いをいかに告白させるか。それだけ考えて生徒会活動を行ってきた約半年間。彼らからすれば見慣れた光景、会話でも、側から見たら話は変わってくる。

かぐやと白銀は、既に彼に会っている。彼女は当然の如く覚えていないが、藤井の場合はどうか。覚えていたとしても、協力するメリツトがない。ましてや、かぐやの性格。決して良いとは言えないソレに、無関係の人間を巻き込むのは気が引けたのだ。

仮に依頼するとしても、協力してもらおう口実はどうするのか。かぐやが素直に「白銀と付き合いたいから」なんて口にするはずがない。結論、彼女の提案には問題点が多く存在していた。

「せっかく他に計画を立ててるんです。白銀会長に連絡したらいかがですか」

「無理」

「ですよね。聞いた私が馬鹿でした」

この様子。早坂愛、今日一番のため息。こんな調子で、平気で一般人を巻き込もうとする彼女の無謀さに嫌気が差していた。

「それなら早坂。いつそのことその男に近づきなさいよ」

「嫌です。タイプじゃありません」

「ああそう……」

藤井、知らないところでフラれる。

ここ数日で何度目か。中々出来ない経験である。

こうして提案しては、問題点が明らかになり、暗礁に乗り上げる。かぐやからの相談は、この半年、専ら対白銀について。何度も何度も話を聞いて、助言すら何度も何度も否定されて。でも、それに対する苛つきをぶつけて良い相手じゃないのだ。彼女はいつも、グツと飲み込んで。

「もういいですか。今日は私もオフなんです」

「はあ……もういいわ。ご苦労様」

「では」

主人であるかぐやに対して出来ることは、せいぜい「そっけなく」することぐらい。それも悟られないぐらいの絶妙さ。性格に難のある彼女対策。だがそれを平然とこなしてしまう早坂自身も、自身の性格に難がある。それは自分でもよく理解していた。

オフの早坂は、今どきの女子高生らしいショートパンツに水色のトップス。今の時期、あのメイド服は暑苦しくて仕方がない。それから解放されただけでも、不思議と心は躍る。

せつかくの休みなのだ。このまま屋敷に残っていれば、またかぐやのワガママに巻き込まれる可能性が高い。時間も昼下がりに。動き出すには丁度いい時間帯である。

うつすらとメイクをして、今日もまた早坂愛という皮を被る。外での彼女の姿。仮の姿であるのに、世の中に上手く溶け込んでいて。それが少しだけ寂しかったりするのだ。

(……どうしようか)

外に出ると、照り付ける太陽。立っているだけで汗が吹き出してきそうな、蒸し暑さ。前日が雨だったら、より悲惨なことになっていただろう。

少し歩いて、彼女は電車に乗る。普段の移動はタクシーが多い。しかし、今は妙に人混みに入れたかった。現実から目を背けたくて。それなのに、昼下がりの電車は空いていた。

ショッピングモールの自動ドアをくぐる。以前、藤井と千花が会ったあの場所。そんなことは知らずに。一通り服など見回ったが、特に心を打つものはない。金を使うことがほとんどない彼女。貯蓄だけは貯まっっていく。

その足で、彼女はテナントで入っているチェーン店の喫茶店に足を運んだ。先ほどの電車とは違い、人でごった返す。止むを得ず、甘いフラペチーノをテイクアウトし、ショッピングモールの駐車場近くで口にする。日陰になっているが、夏の熱気は容赦をしない。それを、冷たい甘味がフオローする。

(つまらない)

いかにも女子高生の休日。早坂愛には不釣り合い。

こんなことをしていても、頭の片隅には必ず「四宮かぐや」という人間が居る。無意識のうちに、四六時中。彼女のことを考えている。幼い頃からそうやって生きていたのだ。彼女にとっては、それが普通だった。

なら、主人であるかぐやはどうか。生まれた時から将来が決められている彼女も、今や白銀御行に恋をする一人の女子高生。年頃の女の子ではないか。「氷のかぐや姫」なんて呼ばれていた頃から比べると、まるで別人。早坂的にもそれは嬉しい誤算。でも、毎日毎日。メールする、しないのレベルで一喜一憂している彼女を見ると、必然的に憧れてしまう。早坂愛という人間も、一人の女の子なのである。

フラペチーノを飲み干した彼女は、昼食を摂っていないことに気が付いた。甘いものを飲んでしまった口だったが、空腹感が消えていない。何を食べようかと考えるが、それとは関係ない言葉が頭をよぎった。

——— いつそのことその男に近づきなさいよ

かぐやのあの言葉。

その時は適当に受け流したが、一周回って面白そうだと考えた。暑さで頭がやられたとも考えたが、今の彼女はそれでも良かった。特に何の策略も無いが、前回は食べられなかったのだ。純粹にラーメンを味わいたかった。

ショッピングモールからは電車で十五分程度。タクシーならもつと早い。早坂は電車を選択。気持ち、先ほどより乗客は多く感じられた。電車を降り、歩くこと数分。久しぶりに通る路地裏に、ラーメン天龍。

が。普段は無いはずのシャツターが下りている。瞬間、彼女の中で嫌な予感。そしてそれは的中することになる。

(マジ最悪……)

こんなところまで来ておいて、定休日とは。

先ほどの自身の決断が憎たらしい。日の光が頭を灼いていくようで、気持ち悪さすら覚える。このまま立ち尽くすのも、熱中症になりそうで気が引ける。たった数分立っているだけで、背中には汗が滲んでいた。

「……あれ。この間の……」

「あ……まあ」

唐突だったせいで、彼女はつい素の返答をしてしまう。暑さでそこまで気が回っていなかったのだ。声を掛けてきた彼。早坂は二度目の遭遇である。Tシャツにジーンズ姿で、手には買い物袋。買い出しに行っていたらしく、額には汗が浮かんでいた。

ただ不潔感は無く、いかにも男子高校生らしい姿。早坂的にはそれがこの雰囲気にもマッチしていたという。

「何かすみません……一回とも閉めてて」

藤井としては、こう言うしかなかった。

彼に限らず、誰もが同じ場面に遭遇した場合。ほとんどの人間がそう言うだろう。世間的な発言。

彼女から見れば、自身の確認不足である。彼が謝る必要なんて無いのだが、話し方や雰囲気にも妙な愛嬌があった。つられて笑ってしまいたい。そうなる感情を、早坂はグツと抑え込んだ。

「別に気にしてないし」

「すみません本当に」

この女、本音を言えばめっちゃくちゃ気にしている。どうしてこうも上手くいかないのかと。今日は踏んだり蹴ったりだ。良いことから

かけ離れた一日。生きていれば、誰しもそんな日はある。だが、自分にはそれを励ましてくれる存在なんていない。

「それより、書記ちゃんとはどんな感じ〜?」

太陽が雲に隠れ、辺りが暗くなる。影に飲み込まれそうになった心を誤魔化すように、千花の話題を彼に振った。このまま帰ることも考えていたが、せっかくなのだ。これも身辺調査と考えて。

だがこの場合。本音を言えば、早く帰宅したいのは藤井の方だった。徒歩で近くのスーパーまで行ったこともあり、暑さにやられてしまいそうで。

加えて。彼はこの名前も知らない彼女が苦手だった。純粹にキラクターの癖が強いのだ。彼は彼女のようなタイプの人間と、上手く会話を繰り広げることができない。いわゆる、ギャルと呼ばれる人種。友達でも何でももないのに、軽々しくそんなことを聞いてくる。客として接する分には問題ないのだが、一個人として見たら自身と相性が悪い。適当に誤魔化すしかなかった。

「どんなと言われてもなあ……。夏休みに入ってからちよくちよくメールは来るぐらい」

「へえ〜。仲良いじゃ〜ん」

「まあ、そうですね」

そんな彼の様子に、早坂が気付かないはずもない。

先日千花ではないが、自身を欺こうとする姿勢の彼に、内心苛つきを覚える。いつもなら噛みつく気にはならないのに。踏んだり蹴つたりの一日だったせいかな、彼女の中で簡単に手放すつもりにはなれなかった。

「メールってどんな話してるの〜?」

「何というか……。旅行の話?」

「なんで疑問形なの」

「いやまあ……」

旅行の話であることには変わりないのだが、彼が思っていたより高い頻度で連絡が来るのだ。最初の頃は律儀に返信していた彼も、途中で面倒になったらしく。それでも送られ続けているため、千花も返信

を期待しているわけではなかった。

そろそろお引き取り願いたかった彼。だが早坂に対して直接それを言えないのが藤井の弱さでもある。それに気にしていないとは言いがら、少し苛ついているように見える彼女。ただでさえ女子に免疫がない彼が、そんなことを言えるはずもない。考える。疲れた頭を回す。

「ちよつと待つててください」

そう言うと、藤井はシャッターの横にある階段を登っていった。自宅スペースに繋がる階段だろう、早坂は察する。待つていると言われれば、勝手に帰るわけにもいかない。かぐやとのやり取りで身に付いてしまった律儀さである。

待つてこと数分。トントんと階段を降りてくる音が耳に響く。彼の手にあつた買い物袋は無くなっており、代わりに紙切れが二枚。

「二回も無駄足になったお詫びです。よければ」

「何これ？ 無料券？」

印刷されたポップな文字。そこには「ラーメン一杯無料」とある。一枚で一杯。ということとは二杯分タダで食べることができる。何故二枚なのかは、彼女が二回来ているから。至つて単純な理由だった。「へえ〜こういうのやつてるんだ〜」

「ウチでも一応作つてて。たまたま家に余つてたから」

「ふ〜ん」

「サービスですよサービス」

嘘である。

無料券の分は藤井のバイト代から差っ引かれるのだ。

つまり、家にはとんでも無く余つてている。当初は同級生に配つたりしていたが、明らかにバイト代が減つていたため父である店主を問い詰めたところ、この事実が発覚した。それからは一切配つていない。それもそうだ。

しかし、藤井的に早坂は怒らせたくなかつた。直感で面倒なことになりそうだと感じて。バイト代が減るとしてもだ。

「あつつい」と嘆きながら、彼はすぐ側にある自動販売機でスポーツ

ドリンクを購入。それを早坂に差し出した。

「良かったらどうぞ。お詫びです」

「いいの？」

「暑いですし。帰りは気を付けて」

「あ、ありがと……」

怒らせたくないのだ。これぐらいはする。そんな彼の思い。

一方で、早坂。こんなことまでしなくて良いと思いつながら、素直にソレを受け取る。スポーツドリンクは余り飲まなかったが、ここで断るのは野暮。早坂愛の皮が剥げないように、取り繕って答える。

「それじゃ」と逃げるように帰っていく藤井。早坂もそのまま天龍に背を向けて大通りまで歩き始めた。

無料券が二枚。浮かぶかぐやの顔。結果的に彼女が言った「使える」という言葉が、事実になってしまった。思わぬところに機会は落ちている。無駄に強運のかぐやである。

夏休み。花火大会以外に会う予定が無い二人を近づけるため。これは絶好のチャンスになる。頭を巡らせるが、暑さでそうはいかない。

(さて……これをどう使うか)

雲に隠れていた太陽が顔を出す。再び照りつける日差し。

貰ったスポーツドリンク。キャップを回して一口。喉越しが抜群に良かった。

そして久々に飲んだそれは、早坂が思っていた以上に甘かったのである。

白銀御行は仲良くしたい

早坂愛に手渡した無料券。それからさらに一週間が経った頃。

秀知院学園生徒会長の白銀御行は、ラーメン天龍に居た。一人で。休みなのに学ランを着たまま。

(いくら何でもここに四宮を……)

二度目の来店であるが、特に気にした様子もなく一人で考えていた。

彼がここに居る理由。それには早坂愛が関わっている。かぐやの命で白銀の行動パターンを把握していた彼女にとって、何の恥じらいもなく遭遇するのは容易いこと。そこで、藤井から貰った無料券を二枚受け取った。

二枚というのがポイントである。一枚なら。ケチな白銀は自分で処理していたに違いない。だが、二枚。一人で使うことも出来るが、夏休みなのだ。四宮かぐやと会う機会がない彼にとって、これは絶好のチャンスであった。

その偵察にと足を運んだ訳だが、いかんせん普通のラーメン屋である。貴族のかぐやには少し無理がある。無論、白銀はそんなことは百も承知。彼女に会えていないこともあり、不思議と少し無理してでもなんて思いが芽生えていた。

だが、誘うとは一言も言っていない。

あくまでも偶然に、平然に。その鍵となるのがこの無料券なのである。藤井が早坂に手渡した紙切れが、そんなことに巻き込まれることになるとは、当の本人は知る由もない。

「ご注文は何にしますか」

「あ、ああ。えっと……醤油豚骨・薄めで」

そのためなら、ラーメン一杯分ぐらいの出費ぐらいどうってことない。普段からバイトで同年代の人間よりは貯蓄はある。

そんな彼に、藤井は怪奇的な視線。何せこんな真夏に学ランを着ているのだ。見ている方が暑苦しさすら感じている。だが、それが秀知院学園の生徒会長というもの。白銀がどうこうという問題ではないのだ。

千花と接点のある藤井。となれば、白銀とは共通の友人がいる間柄になる。これまでとは違い、同性である白銀。男子校通いの藤井にとって、話しかけることは難しいことではない。

「……藤原書記はよくここに来るんですか？」

「え、まあ。二週間に一度ぐらいかな」

だが先に動いたのは白銀であった。

かぐやのこと以外なら、普段から積極的に行動ができる。そんなことを問いかけた彼の真意。視線はマンガ本が積まれた本棚にあった。

少年、青年マンガが大多数を占める中で、明らかに場違いな色をしたモノが六冊。少女マンガ。普段ラーメン屋に来ない白銀でも、その違和感は明らかだった。

例えば、白銀をここに連れてきたのも千花本人。最初こそラーメンが好きだからと思っていた彼も、このマンガを見れば話は変わってくる。

以前彼女は、世俗的なマンガは検閲が厳しく読めないと生徒会で口にしていた。ただでさえ恋愛脳の彼女。親の目が届かないこんな絶好の機会を見逃す訳がない。

そして何より、この男。藤原千花との接点を自ら認めた。

白銀は聞いた。「藤原書記はよく来るのか」と。知らなければ聞き返したり、頭の上にクエスチョンマークが浮かぶ。しかし、藤井は答えた。ハッキリと。

この男は知っている。藤原千花という人間を。関係性は置いておいて、生徒会で書記をしていることを知っているだけでも十分だ。それだけで彼にとって藤井は使えると判断するに値する。

突拍子もないことを言い出す彼女を、何かしら止めることができないか。それにより白銀とかぐやの関係が動くのも確かだが、いい方向に向くとは限らない。念には念を入れて。

「藤原書記にはいつも世話になってるんですよ」

「お友達なんですね」

「二年の白銀御行です。一応、生徒会長やっています」

「へえ。なら俺たち同い年だ」

藤井の顔から笑み。変な緊張感から解放された感覚だった。タイミングを見計らったかのように、注文したラーメンも置かれる。

白銀御行、思考を巡らせる。

今、彼の手元にあるのは早坂から貰った無料券二枚。これをどう使おうか。

ここに来るまでの道中、彼はかぐやとの接点に使えないかと考えた。現に今も考えている。しかし、この男らしいゴツゴツとした雰囲気。無料券があるとは言え、彼女をここに誘う^{いざな}のには、ハードルが高い。かぐやどころか、女子高生で立ち入るのはそれこそ千花ぐらいだろう。

彼もまた、自ら誘うことができない。あくまでも偶然を装って、遭遇する必要がある。だが彼の頭を持ってしても、彼女がこのラーメン屋に来る理由が思い付かなかった。かぐやと早坂の狙いは、この瞬間潰えるのである。

「藤原書記はいつもあのマンガを？」

「まあね。思いの外おっさん達にも人気なんだよ」

「そ、そうなのか」

「食べ終わったら読んでみたら？」

「考えておく」白銀は回答を濁した。

少女マンガを読もうとは思えないのが本音。しかし、それが大人にまで人気があるとは予想外だったようだ。

ラーメンの味は間違いない。あの日のかぐやも、満足した様子をしていたので。言い方はアレだが「庶民の味」とやたらに惹かれるものもあるはず。

しかしだ。やはり自ら誘うのは負け。それが出来たらこんなに苦労をしていない。

チラリと藤井太郎に視線を送る。背を向け皿洗いをしている彼は、

白銀がそんなことを考えているなんて知る由もない。ただ変わらな
い手荒れ。千花から貰ったハンドクリームを使わずにいた。使えな
かった。いつの日か返そう返そうと考えているうちに、もう夏休み。
千花は日本に居ない。

(夏休み、早く終わらねえかな)

そう考えていたのは、白銀だけではないのである。

「なあ、一つ聞いていいか」

「ん、何？」

「例えばの話、年頃の男女がこのラーメン屋に来るのは変か？」

二度目ではあるが、学校の違いや同級生であることが彼の心を動か
す。思い切って問いかける。その勇気をかぐやに向けるという話だ
が。

藤井は背を向けていたが、白銀からの問いかけに皿洗いを一旦ス
トップ。向かい合うと、動揺の見える彼に思わず笑いそうになった。

「つまり、デートでつてこと？」

「そんなじゃない。友人としてだ」

白銀は嘘をついた。悟られまいとする自身のプライド。加えて彼
の性格を知らない藤井。何の疑いもなく呑み込む。

「別に普通だよ。現に藤原さん来てるし。この間だつて、三人で来た
じゃん」

「まあそうなんだが……」

「というより、ラーメン屋じゃなくていいんじゃない？」

「いやダメなんだ。ここじゃないと」

「いつからデートスポットになったんですかね……」

藤井は理解できなかった。唐突な問いかけに、唐突なこだわり。二
回しかウチのラーメンを食べていないのに、なんでそんなことを言い
出すのか。

白銀は誰かを誘おうとしている。藤井はそう考えた。だが何故、そ
んな濁した聞き方をするのか。秀知院学園の生徒会長なのに。まる
で恥ずかしがっているようではないか。

藤井のような外部の人間から見て、秀知院学園の生徒は次元が違う

のだ。生まれた世界、生きる世界、死んだ後まで。全てが自分たちと一線を画している。そしてその生徒会長なのだ。将来の日本を背負っていく人間が目の前にいる。

ところが、藤井から見た白銀は普通の高校生だった。少し話してみると、千花とは違った親しみ易さ。同性ということもあるが、秀知院生の印象は確かに変わりつつあった。

「逆に聞いていい?」

「なんだ……えっと」

「藤井太郎。呼び方は適当でいいよ」

「そうか。なら藤井君、聞きたいことは」

「学校での藤原さんって、どんな感じなの?」

名字を呼び捨てにする白銀も、いきなりそうするのは気が引けた。君付けで彼の名を呼ぶが、いつも通り呼び捨てになるのもすぐ先の話である。

藤井からしても、目の前にいるのは、普段の藤原千花を知る人間。店に来る彼女しか知らない彼にとって、それはとても興味のある話題だった。

「まあ……一言で言えば騒がしい」

「分かる気がするな、それ」

「生徒会を引つ掻き回すこともしばしばだ」

「ふーん。元気そうでいいじゃん」

「巻き込まれる身になれば分かる」

白銀の声のトーン。低くて真面目な様子。藤井から見ても、嘘をついているようには見えなかった。白銀自身、冗談でもなんでもない。事実をそのまま告げただけ。それを聞いて笑う彼を見て、思わず白銀にも笑みがこぼれた。

この男は良くも悪くも普通だ。相手のことを考えて会話ができる優しい人間。曲者揃いの秀知院学園には居ないタイプ。だからこそ、彼は藤井に親近感が湧いた。自身も外部入学で、校内のカーズトに直面した経験がある。小・中学校の時に、隣の席にいたような男。普段から心の中が張り詰めている白銀は、不思議と懐かしさを覚えてい

た。

「でも、すごく良い子だなんて思う。落ち込んでても元気出そうな感じ」

「確かに悪い奴ではない。時々底無しの恐ろしさを感じるが」

「恐ろしきって……天使にしか見えないけど」

「まあ——」

白銀は出かかった言葉を呑み込んだ。

普段の藤原千花という人間。藤井の想像するように明るく、フワフワとした雰囲気。その分、男子の人気も高い。

だが、常にそういうわけではない。生徒会室でゲームしたり遊ぶことも多々ある。そこで見せる彼女の一面。平気で嘘をつき、勝ちを引き寄せる勝負師負けず嫌いの顔。白銀的には、こっちの方が彼女の印象だった。「——ああいうのが好きな男にはたまらないだろうな」

あえて、遠回りな言い方に逃れる。

藤井のキラキラとした瞳。彼の夢を壊すのは些か申し訳なかった。現に藤井にとつて、千花はアイドルのような存在。むさ苦しい男子校に通っている彼。それはそれで楽しいが、やはり女の子の存在は良い。自身とは生きる次元が違うと分かっているなりに、彼女との会話を楽しんでいた。

彼との会話に集中していた白銀も、残るラーメンを啜る。思考を巻き戻し、再び頭に浮かぶ四宮かぐや。どうしようかと。

男女二人で来ること自体は特に変ではない。だがそれをデートと言われてしまえば、狼狽るのが白銀御行という男。上手く誘導できる方法があれば別だが。

しかし、収穫が無かったといえれば嘘になる。

藤原千花とラーメン天龍に接点がある限り、今後も使える可能性がある。選択肢は多いに越したことがないのだから。

そして何より、藤井太郎。

白銀は彼女の交友関係を思い返す。少なくとも、校内では女子とつるんでいる光景しか思い浮かばない。男子で頻繁に話しているとなれば、それこそ白銀と石上。生徒会メンバーが上位に来る。

その中で、この目の前の男。藤原千花の周囲でも、かなり珍しい立ち位置だった。恐らく、唯一と言つていい一般人の友人。同級生。そして異性。藤井にその気があるのかは分からないが、彼の存在は生徒会にも十分な影響を及ぼす可能性もある。

あくまでも白銀の推測にすぎない。周りから見れば考えすぎだと思えるソレも、秀知院学園に通つていれば至つて普通のことなのだ。考えてもいないことが平気で起こる現実世界とはかけ離れた社会。一般入学の白銀に、その感覚は痛いほど分かるのだ。

「……藤原書記とは仲良くしてあげてくれ」
「もちろん」

「ごちそうさま。美味かった」

結局、四宮かぐやと遭遇する良い案は浮かばなかった。

この瞬間。早坂の苦労は水の泡になるが、白銀はそんなことは知るはずもない。

「お会計はこれで」

「あれ。もしかして無料券?」

「ああ、偶然貰つてな。せっかくだから使わせてもらおう」

藤井の記憶。無料券を配つたのは一週間前のギャル早坂愛しか居ない。となれば、彼も彼女と知り合いなのだろうか。頭の中で思考が巡る。ただ生徒会長にもなれば、色んな人間と接点があるのは普通だろうと、深く考えないようにした。

本来であれば、かぐやと使うはずだったのだが。やはりこの案は無理がありすぎた。彼は自身の知力不足を突きつけられたようで、後悔の念に駆られる。

「……最後にこっちも聞いて良いか?」

「ん。何?」

「藤原書記は、藤井君の目から見てどう見える?」

「どうって言われても」そう言いながら、彼は考えた。

その言葉の意味は、捉え方一つで変わってくる。人間として、友人として、女の子として。白銀の抽象的な質問に、言葉を選ぶ。下手なことを言うと、誤解を招く恐れがあった。

一方で、白銀はそれが狙いだった。漠然とした聞き方をしたのはワザと。ここで彼が何と言うか。それによって、これからの戦略が大きく変わってくる。

「さっきも言ったけど良い子だし、可愛いし。でもまあ……接し方には気を付けないといけないかもね」

「ほう。何故？」

「何となくだけど、あの子は無理してるように見える」

「本当になんとなくだけどね」笑う藤井を、白銀は少しだけ目を見開いて見ていた。

藤原千花という人間を見て、そんなことを言う人間が秀知院学園に居るのだろうか。白銀自身、そんな見方をしていなかった。千花は周りを掻き回すこともあるが、彼にとつては色々と教わった恩人でもある。とは言え、あまりにも彼女と無縁の言葉が飛び出したのだ。驚きもする。

「まあ……家の事情とか大変そうだし。少しは羽伸ばしてほしいから」

「……なるほどな」

ここで、最初の違和感に結び付く。

ラーメン屋に少女マンガ。藤井や店主が選ぶ訳がない。となればだ。こんな発言をするぐらいだ。千花のために藤井太郎が買ってあげたと考えても不思議ではない。それを読むために、通っていることも。

世間的に見れば、藤井という男は本当に普通だった。彼より魅力的な人間は多くいる。それ故に、秀知院学園から見れば「普通」が「特殊」なのである。何度も言うが、白銀は一般入学。入学してからはそれを馬鹿にされることもあった。そして失いかけていた一般的な感覚。

「また来る。何せ無料券はもう一枚あるからな」

「そ、そりやどうも……」

藤井太郎と白銀御行。

対照的な二人であるが、この瞬間。藤井は白銀の戦略において「対・

「藤原千花」の最重要人物になったのである。

藤原千花は笑いたい

「でね、萌葉ったら肝心なところで写真撮り忘れてて——」

帰国した藤原千花は、一人の男子高校生に旅行の思い出を話している。その相手こそ、藤井太郎。いつものようにラーメンを食べて店内で会話——するとところまではこれまで通り。

しかし二人は今、近くの喫茶店に居た。

これまでのように店で会話するとはかり思っていた彼にとって、これは思わぬ展開。自らが天使と崇める藤原千花と二人きりで向かい合っている。それだけで手汗がとんでもないことになっているのだ。先ほどから彼女の話が頭を經由せず通り抜けていく。

「ちよつとく聞いてますか〜?」

「う、うん。もちろん!」

喫茶店に来たと言ったが、正確には店主である藤井の父親の目を気にして仕方なくだ。客が少なく、迷惑になるわけでは無かったが、父親の隣で千花と話すのが恥ずかしく。年頃の男子高校生らしい悩みである。

彼は視線で帰りを促すも、日本に帰ってきたばかりの彼女はそうはいかない。旅行の話をしたくてしたくて仕方ないのだ。そこで白羽の矢が立ったのが藤井。何せ、店に行けば必ずと言っていいほど会える。言い方は悪いが、千花にとっては都合のいい相手だった。

「なら今、私は何と言いましたか?」

彼が慌てふためいているとは知らず、千花は問いかける。

意地悪な質問ではあったが、楽しく話していた彼女にとって「聞いていなかった」と言われることはとても辛いことなのだ。ジツと彼を見つめる。

藤井からすれば窮地である。絶体絶命。

聞いていなかったことに加え、彼女のジト目。回答を間違えること

は嘘の露呈になる。だが正解を導き出すだけの知力なんて今の彼が持ち合わせているはずもなかった。

「え、えっと……その……」

あからさまに狼狽えれば、流石の千花も気付く。

やっぱり聞いていなかったのだ。楽しかったのは自分だけ。自己満足だとは分かっていたいながら、藤井に話していた彼女。それでも、聞いてもらえなかったのは寂しさがある。

だが、それを咎める気にはなれなかった。彼女も自分勝手だということは理解している。だから優しく微笑んで見せる。

「あはは。そうですね。私ばかりごめんなさい」

「い、いやそんなんじゃないよ……!」

「……いいんです。私、昔からこうなんです」

実際のところ、話を聞かなかったわけではない。話を聞く余裕がなかったのだ。千花もそこには気付かなかったせいで、自分がつまらなからと結論付けたのである。

これまでの彼であれば、間違いなく「重い」と感じてしまうその言葉。しかし、今は違った。藤原千花という人間に久しぶりに会えたことが嬉しかった。心が躍る。すっかり、藤井太郎の日常に彼女は組み込まれていたのである。

そんな彼女が落ち込んでいる。それも自分のせい。ここで藤井に出来ることは二つ。一つは、励ますか。一つは、逃げるように帰るか。彼も一応男である。後者の選択肢は消え、方向性を絞る。

問題は、何という言葉を掛けるべきか。聞く余裕が無かった、とハッキリ言えればどれだけ楽だろう。もう一度言う。彼も一応男である。それはさすがに、とプライドが許さなかった。

「今日はありがとうございませう。また食べに来ますね」

「ちよ、ちよと待って!」

千花のダメージは彼の予想を上回っていた。

普段から地雷を踏み抜く彼女は、大好きな恋バナからも遠ざけられる存在になっていた。無論、それでも無理矢理入り込んでいくのが藤原千花という人間だが。

だが、輪から外される辛さは消えるわけではない。誰にでも絡みに
行ける積極性はあるが、その先で地雷を踏み抜く。そして誰かに悲し
い思いをさせてしまう。藤原千花とはそんな人間なのである。だか
ら、こういう時はいつも自ら離れて行く。席を立ち上がる。

——それなのに。

彼女の右手首に伸びる、藤井の左手。

「待って。まだ聞きたい」

手汗で濡れた手のひら。手荒れは相変わらずひどいまま。ぐちゃ
りとした感覚があつたが、思いの外、千花は気にならなかつた。それ
よりも、しどろもどろしていた彼が真っ直ぐと千花を見ている。思わ
ず視線を奪われそうになる。

「その……恥ずかしい話。俺こういう場面に慣れてなくて。緊張し
ちやつて……」

プライドが許さなかつた、とは言つても。彼にとってプライドとい
うのは敷居が低い。白銀やかぐやとは正反対である。目の前の人間
のためなら、平気で捨てることができる。白銀の予想通り、彼は優し
い人間なのだ。

藤原千花。硬直する。話を聞きたいと言われたのは、初めてだつ
た。いつもなら適当にあしらわれるのが常。この瞬間だつて、千花本
人すらそのつもりだつた。なのに、引き止められた。手首を握られ、
目を見つめられ。意識していなくても、年頃の女子高生。胸は高鳴
る。

「——つてごめんっ!! うわあ……汗付いちやつた……」

「あ、あはは。いいんですよ」

我に返つた藤井は、新品のお手拭きで自身の手汗に塗れた彼女の手
首を慌てて拭く。「臭いついてないかな、ベタついてないかな」と心配
する彼の様子に、千花は思わず笑みが溢れた。

(可愛いなあ)

そう思ったのは藤井ではなく、千花の方だつた。

母性をくすぐるような慌てた瞳、姿。ラーメン屋で大人びた彼しか
知らない彼女にとって、それは抱きしめたくなるような愛嬌があつ

た。

と同時に、藤井太郎という人間もまた、年相応の男子高校生なのである。決して大人びてなんかいない。ただ働いているからそう見えるだけなのだ。

「え、えつとだから……もつと聞かせてよ」

彼女の口元は緩んでいた。純粹に嬉しかった。彼なりの優しさであることには違いない。だが、千花はその事実から目を背けた。彼女なりの意地、とでも言えるだろうか。そこまで呼び止めたのだから、今度は彼に話してもらおうと。

「……藤井くんは何をしてたんですか？」

「え、俺？ 俺のことより藤原さんの話が聞きたいよ」

「私は藤井くんの話が聞きたくなりました」

「ええ……」

千花の心変わりに気付くはずもない彼。せつかく呼び止めたのに。藤井は愚痴りたくなる感情を抑えた。あまりにも急である。グラスに入った冷たい紅茶を飲むことなく、ストローで掻き回す彼女。カラカラと氷がぶつかる音。思春期男子には刺激が強い妙な色っぽさがあつた。

まるで揶揄われているようで、彼はあまりいい気はしない。それでも呼び止めてしまった手前、ここで突き放すのも話が変わってくる。加えて、大して面白くもない彼の夏休み。話す内容と言えば白銀に会ったことぐらいだった。

「そう言えば白銀君がウチの店に来たよ」

「へえ、会長も気に入ったんですね」

「みたいだね」

無料券の件は言わないようにした。秀知院学園の生徒会長がラーメン一杯の金も払わないのはイメージ的にどうかと考えた。

だが千花からすれば、尊い生徒会長のイメージはすっかり崩れ去っている。むしろ苦勞させられているのだ。そんなことはどうでも良いのが本音。

「他には？」

「それぐらいかな」

「……………え？」

「いやだから、それぐらい」

「何もしてないじゃないですか」

「ずっと手伝いしてたんだよ。それでなんだかんだ遊ぶ時間が無かっただけ」

「…………それは私に対する嫌味に聞こえます」

「なんでそうなるのさ」

遊ばずに家の手伝いをしていたと言われれば、呑気に海外旅行に行った自分が間抜けに思える。千花に限らず、誰しもそう思うだろう。でもそれを態度に出して、彼にぶつけてしまう。藤原千花も年相応の女子高生である一面だ。藤井太郎という人間は何も言わずに受け止めてくれる。また甘えているようで、そんな自分が嫌になる。

こういう時に限って、店内のBGMが止まる。静寂。他の客の話し声も自然と小さくなる。

ニコニコしながら抑揚のない声。機嫌が悪いわけではないが、胸の内につつかえがある感覚。藤井と話していると、自分がいかに子供なのか突きつけられているようで。

「でも……………こうして話し相手になってくれて嬉しいよ」

「私が勝手に連れ出しただけです」

「怒らないですよ。本当に嬉しいんだから」

「…………怒ってません」

それに、藤井と話していると調子が狂う。同じ高校生とは思えない落ち着き。緊張しているなんて言ってたクセに、こうして茶化してくる。彼としてはそんなつもりは一切無いのだが、帰国したばかりの彼女は疲れもあって、いつも以上に面倒な女になっている。

夏真つ盛り。長い髪をポニーテールにまとめて、彼女の細い首が強調される。それがやっぱり色っぽくて。少し下に視線をやれば、主張の強いバスト。そうなれば、藤井は彼女の目を見るしなくなる。恥ずかしさで顔から火が吹き出そうだった。

「そういえばさ、前に藤原さんと白銀君、あと一人居たけど、彼女はど

ういう関係なの？」

「ああかぐやさん。秀知院生徒会の副会長なんですよ」

「へえ。すごく上品な人だったよね」

黙ったらダメだ、恥ずかしさで死にそうになる。そんな彼は思い出したかのように声を掛ける。すると千花は声のトーンを抑え気味に答えた。藤井の中でも、かぐやのことは鮮明に覚えていた。

むしろ、彼女が居たから三人のことを覚えていたと言っても過言では無い。彼らの中で一番、品があつて纏っているオーラが平民のそれではなかったのだ。副会長と聞いて、半分納得する。

もう半分は、あの彼女を差し置いて生徒会長になった白銀御行という人間についてだ。一体何者なのだろうか。考えたところで、彼には関係の無い話でもある。ここで千花に聞くことも出来たが、そのままオレンジジュースを喉に流し込む。

「じゃあ次は藤原さん。海外旅行の話してよ」

「聞いてなかったじゃないですか」

「……ま、まあまあ。仕切り直しで」

「嫌です。もう話しませんっ」

ぷいっ、と顔を背ける彼女。藤井が思っていた以上に根に持っている様子。あざといと思われても仕方がない行動である。

これに困ったのは藤井だ。子供のように拗ねた彼女を、どうやって宥めればいいのか。元はと言えば自分のせいなのだが、こんなことになるとは思わなかったのも事実。

こんなことになるなら、呼び止めなければよかった。そんなことが頭をよぎる。普段の騒がしい藤原千花という人間に比べたら、今目の前にいる彼女はまるで別人。白銀をはじめ生徒会のメンバーが見たら思わず言葉を失うであろう。無論、これも藤井が話を聞いていなかったからであるが。

「面倒ですよね」

「えっ」

「友達からも面倒くさいタイプって言われるんです」

「……そんなこと」

「あるんです。ごめんなさい」

つい数分前まではニコニコと喋っていた彼女があからさまに落ち込んでいるのだ。二人の空気は最悪そのもの。

生徒会の際にはのんびりと過ごしている彼女は、無意識に周りの空気を読んでいる節がある。爛漫な彼女の性格は、白銀とかぐやの二人が繰り広げる「恋愛頭脳戦」に巻き込まれ、知らず知らずのうちに擦り減っている。成績と同じように。

最近では、特に白銀に対してハッキリと不満をぶつけることだつてある。二人がやり合っていることに気付かず、精神的にも疲労が溜まっているのも事実だった。

「いやそんなことないよ。藤原さん」

「……藤井くんは優しいですね」

「ううん」

千花が褒めると、まず彼は照れ臭そうに笑う。基本的に、彼は恥ずかしがり屋である。特に女子から褒められると、それだけでしばらく生きていけるような。ある意味、純粋な男。それは彼女にも十分伝わっていた。

「それと。ハンドクリーム使ってますか？ 相変わらず手荒れが酷いですよ」

「使えないよ。藤原さんのお母さんがくれたんでしょ？」

「……どうしてですか。良いと言ったじゃないですか」

「返すよ。持ってきてるから」

あれから一度も使っていないハンドクリーム。ポケットから取り出し、彼女に差し出す。あの時から姿形を変えていないソレは、千花にとっても見覚えがあるまま。元々は口封じで渡したつもりだったが、今となってはどうでもいい。ただ使って貰えなかったことが悲しかった。

だが、藤井として使いたくないわけじゃない。彼女のためにある物を、自分が使う気にはなれなかったのだ。そういった物に疎い彼でもわかるぐらい、このハンドクリームは質の良い高級品。使ってしまったのが本音だ。

「要らないです。受け取りません」

「ダメだよ。これは譲れない」

「どうしてですか」

「それは……」

彼女が問い詰めると、彼は顔を背けた。理由を言いたくないのか、躊躇っている。「藤井くん」と呼び掛けると、一息をついて。引きかけていた手汗が、また。彼女の手首の感触とともに。左手を置いたジーンズの上に染みていた。

「藤原さんの綺麗な手に使って欲しいから」

「……え」

「ご、ごめん！ 変な意味じゃなくて、その……」

藤原千花という人間は、異性からかなりモテる。

現に、生徒会メンバーの中で一番告白された経験があるぐらいだ。そして彼女に告白してくる男は、大体がキザついているタイプ。カーストの上位にいるような男子生徒。奪われたい願望の強い彼女でも、少女マンガのようなセリフで告白された経験があるが、全く心に響かなかった。

それだというのに、この藤井太郎という男。

恥ずかしがりながら、一生懸命言葉を紡ぐ。そんな彼が可愛らしくて、少しでも鼓動が高鳴る。これまでの男たちの告白よりも、不思議と嬉しくて。

「あはは。分かりました。そこまで言うのなら使ってあげましょう」

「笑わないですよ……」

「もう可愛いですねえ、藤井くんは」

彼女は面倒な人間なのだ。それは本人が一番理解している。

気分屋のくせに空気を読もうとして、心に負担をかけて。でもこうして、最終的には笑ってしまふ。相手を傷つけない優しさなんかじゃない。自分をそうやって守ろうとしているだけ。

でもこの時だけは。

この瞬間だけは、心の底から幸せな気持ちになったのだ。

生徒会は終わりたくない

秀知院学園の生徒会。曲者揃いの生徒を束ねる学園の心臓部。その活動は一年単位で進められ、活動終了と同時に「新生徒会長」の立候補を募る。投票日には全校生徒の前で演説も行われ、その一年、学校の顔となる人間を選出するのだ。

他校の生徒会とはまるで違う。生徒会の行動が学校の行動。学校の行動が、親の行動になるのだ。背負うものが違う。子息のふざけた行為で親の勤務地が変わることだ。したがって、好い加減に投票する生徒は誰一人居ない。

夏休みが終わり、二学期。

白銀御行を生徒会長とする「第67期生徒会」は、活動最終日を迎えていた。彼らもまた、学校の顔として堂々たる立ち振る舞いをしてきた。特に、白銀は一般入学での会長就任。風当たりは強かったが、それを見事に跳ね除けた。

繰り返す。生徒会の行動は学校の顔、とは言うが。

「会長く後片付け面倒になってきました」

「最後までしつかりしろ。生徒会室にこんなゲーム類置いて行けるか」

「いやもういいんじゃないですか。社会への叛逆の意味を込めて窓でも割っていきますか」

「ここは学校だ」

あくまでもそれは、校外向けの顔――。

生徒会室の中での彼らは、基本ふざけている。無論仕事のために集まるのだが、書記の藤原千花が持ってきたゲームで遊んだり、生徒の恋バナ相談に乗ったり、恋愛頭脳戦が繰り広げられたり。この一室でとてつもなく濃い日々を過ごしてきたのだ。

「会長はもう立候補しないんですか？」

「まあな。もうこんな激務は懲り懲りだ」

この学校の生徒会長になるということ。将来の日本を背負う人間になるための第一歩なのだ。それだけの仕事量が降りてくるし、適切なペースで捌いていく必要がある。となれば、仕事を進められる効率性、知識、人望。全てを兼ね備えた人物でないと務まらない。やる気だけでどうにか出来るレベルじゃないのだ。

白銀も生徒会の仕事をこなしながらバイトに勉強に。一日24時間しかない中で、全てを取り組むにはどうしても時間が足りない。そこで導き出した結論は、自らの睡眠時間を削ること。そうやって一年間過ごしてきたのだ。

だがこのまま生徒会長の座を降りれば、四宮かぐやとの関係を断つことにもなる。会長と副会長。その肩書きがあったからこそ、話しかけることも出来たのだ。それが無くなった瞬間、これまで積み上げてきた関係性は水の泡である。クラスの違う二人が何かしらの口実をつけて話しかけに行く……なんて光景は想像するに値しない。何せその可能性はゼロなのだから。

「(そうなると四宮に会えない)」

「(会長と話す機会も無くなる)」

無論、両人がそれを理解していないわけがない。

この二人、今は生徒会のことよりも互いのことで頭がいっぱいであつた。互いの接点が無くなることは、二人にとって死活問題。ただでさえ素直になれない両者の物理的な距離が離れば、その先に待っているのは自然消滅だけ。それだけは何としても避けなければならぬのだ。

「私が会長に立候補しようかなあ」

「無理だと思います。止めた方がいいですよ」

「石上くんっていつもそうですよね。つまんないです」

「僕は学校の平和を守ったつもりだったんですけど」

——非現実的である。

藤原千花が生徒会長。考えただけで思わず笑ってしまいそうになる白銀。そんな彼を横目に、会計・石上優はいつものように淡々と正

論をぶつける。毎度のことだが、千花からの小言にもだいたい慣れた。口に出さないだけで、白銀もかぐやもこれには同意であった。万が一にも千花が会長になれば、校内は色んな意味で荒れてしまうだろう。色んな意味で。

「石上くんが会長……は無理ですよー」

「先輩に言われたくありません。仮に僕が会長になれば、まずカップル全員を別れさせますね」

「最低。最悪。高校生の敵です」

「これぐらいしないとあいつらは分かりませんよ」

——非現実的である。

石上の青春ヘイトはかなり闇が深い。これは決して冗談なんかではない。彼は本気でやる。全力で青春を奪いに来る。万が一にも彼が生徒会長になれば、校内は色んな意味で荒れてしまうだろう。色んな意味で。

さりげない一言から始まった話。藤原千花と石上優が生徒会長。二人が就任しても、至る結論は同じ。

「ならかぐやさんが会長になったらどうですか？」

「私ですか？」

——現実的である。

この一年、副会長として白銀を支え続けた彼女。会長の仕事に一番理解のあるポジションにあった。加えて、彼に劣らない知力、カリスマ性。秀知院学園の看板を背負うだけの精神力を持ち合わせている。白銀を除いて、現・生徒会メンバーの中で一番会長職に向いているのは誰の目にも明らか。

「(四宮が会長になれば……俺が副会長。悪くはないが)」

「(そうなったとしても、私は会長を指名することはないでしょう。自分からは)」

毎度のことながら、二人は相手からの言葉を待ち続けている。

「副会長になってほしい」を待つ白銀、「副会長にしてくれ」を待つかぐや。いちごっこを続けて半年以上。その間、目に見える進展という意味では皆無である。

「告白させる」という概念によって動いてきた二人。少しずつではあるが関係が変わらないことに焦りの色を感じつつあった。

「この後打ち上げに行きましようよー!」

「いいですね。最終日ですから今日ぐらい」

打ち上げ。白銀の耳に届く。こうして生徒会メンバーで何処かに出かけるのは最後になる。夏休みの花火以来、二回目。一年間でそれは余りにも少ない。

かぐやもまた、仮定の思考を打ち消す。仮に白銀が副会長になったとしても、彼の性格上、必要以上に働くことが目に見えていた。生徒会長という激務をこなしてきた彼を一番近くで見えてきた彼女だからこそ、そんな感情が頭をよぎるのだ。

「美味しいラーメン屋を知ってる。そこはどうだ?」

「え、でも打ち上げですよ? 普通にファミレスでいいんじゃない」

「石上会計は居なかったからな。最後に全員で行きたいんだ」

半分、嘘。半分、本当。

四宮かぐや攻略に不可欠な藤原千花対策。藤井太郎とどんな会話を繰り広げるのか彼は興味があった。そして口実を付けて客観的に見ることが出来るのは今日限り。完全な私情である。

だが、石上優という人間も少しずつ変わりつつある。生徒会に顔を出しても長居することは無かった彼が、最後まで残ることも多くなつて。それは石上本人的にも、生徒会的にもいい傾向だった。

だから、彼を交えて四人で行きたかった。それは白銀の紛れもない本心。淀みのない言葉となったそれは、石上にも、千花にもしっかりと伝わっていた。

「藤井くんに連絡してみますか?」

「誰ですかそれ」

「ラーメン屋の息子だ。俺たちと同級生らしい」

「そう言えば会長も知り合いになったんですよねえ」

「まあな。夏休み一人で食べに行ったんだよ」

話の方向性が決まりかける。ただ一人を除いて。

四宮かぐや。白銀と藤井に接点が出来たことに驚きを隠せなかつ

た。自身が利用するつもりだった男。何を企んでいるのか分からなかったが、先に接触されてはこちらとしても動きづらいのは確か。

(あの時に動いていれば……)

彼女にとつてもまた、藤原千花はキーパーソンである。

その上で「対・白銀御行」において切り札的な存在になり得る男だったかもしれないのだ。大きな魚を逃した気分になる。

しかし、可能性が潰えたわけではない。上手くこちら側に誘導することができれば一気に立場は逆転する。

「あつ！ 藤井くん。今から生徒会の打ち上げに行きたいんだけど」

慣れた様子で電話をする千花。彼に電話を掛けたのはこれが初めてだった。しかし、メッセージのやり取りは定期的に行っている。藤井としても驚きはしたが、至って普通に会話を繰り返す。

「会長。その藤井って人、相当な変わり者ですよ」

「何故だ？」

「だってほら、藤原先輩が普通に会話してます」

「お前は藤原書記をなんだと思ってるんだ……」

少し離れた位置で会話する彼女。普段ふざけている姿しか知らない石上は素直に驚いていた。日常会話も出来るのかと。白銀とて一人の人間。話している内容は聞かないように距離をとっていたが、確かにそう言われると気になるのが性。

そんな彼とは対照的に、四宮かぐや。会話が聞こえるか聞こえないか絶妙な距離を見つけ出し、二人の会話に聞き耳を立てる。無論、周囲にはそんな素振りを見せない。片付けているフリをして。

「四人でもダメですか？」

「だつ——ウチの——狭い——」

全てを聞き取るには音量が足りない。所々聞こえる男の声。

だが要点は分かった。彼女はあの日のことを思い出す。席はカウンターしかなく、四人が横並びになる必要があった。そもそも打ち上げのように使われることを想定していないのだ。藤井の反応は至極当然である。

「いいじゃないですかあ〜藤井くんのケチ！」

「ケチってそんなこと——今度——」

「今日がいいんですよ〜！」

藤井の声が大きくなったせいで、先ほどよりよく聞こえる。

こういう場合、連絡せずに行つた方がいいのではないか。かぐやは考えた。しかし、白銀に気を取られてしまったせいで千花の行動を止めることが出来なかつたのである。店なのだから来た客を帰すわけにはいかない。無論、礼儀はしっかりと弁えるが。

「じゃあ今から行きますね〜！」

「ちよっ——」

思考を巡らせていたかぐやを尻目に、千花は電話を切る。

会話が終わるのを待っていた白銀たちは、歩み寄り結果を聞く。至つて自然な流れである。そして藤原千花は答えた。

「バッチリですよ〜！ 来て欲しくてウズウズしてました」

嘘である!! ここまで華麗な嘘もまあ珍しい!

埒があかないと判断した彼女は、強引にでも押し切ることを選択。藤井への迷惑がかかると思つていたが、自らの感情を優先させた。彼女からすればいつものことであつた。

目的地が決まつたことで、作業にも力が入る。てきぱきと後片付けを進める千花に、かぐやはこつそりと話しかけた。

「本当にいいのですか? ご迷惑なんじゃ」

「大丈夫ですよ。かぐやさんが来るって言つたら喜んでましたから」
「もう」

分かりきつた嘘。二度目。

聞き耳を立てていた彼女に、そんなことは通じない。しかし、嘘でもそう言われれば悪い気はしない。四宮かぐやという人間は良くも悪くも純粹。だが、それで言いくるめられるのは癪。

「本当に大丈夫ですよ」

「なぜ言い切れるのですか」

「だって、藤井くんは優しいですから」

真つ直ぐな言葉だつた。嘘偽りない、藤原千花の本心。

そんなことを言われてしまえば、かぐやとて反応に困る。そして、言い返すことが出来なくなる。裏を返せば、それは千花の本心だと分かってしまったから。彼女は心の底から、藤井太郎を「優しい人間」と認識している。それがかぐや的に少し意外だった。

優しいと言ったところで、素直にその優しさに甘えられないのが普通である。だが千花は性格的にもそんな遠慮が出来ない。彼のソレに心置きなく甘えられる彼女が、かぐやは少し羨ましくもあった。だからこそ、利用価値がある――。

それだというのに、今はそう考える自分が嫌になった。千花が優しい人間という男を、そういう風に扱っていいのだろうか。いかにも人間らしい考え方で、それはそれで嫌気が差していた。

「藤原さんは彼のことを信頼しているのですね」

「信頼……そう、ですね」

随分と歯切れが悪い。興味本位で聞いただけとは言え、想定していた答えではなく少し引つかかる。

何か言いたそうにしていた千花は考えた。そう言われれば、自分にとって彼は何なのだろうか。マンガのことをあまり言いたくない彼女は、そのことを伏せたまま。それだというのに、自身と藤井の会話を聞いた周りから見たらそう見えるのは明らか。

「そんなに考え込むことですか。彼が見たら悲しみますよ」

「あはは…大丈夫ですよ」

「優しいからですよね、彼が」

当面、その答えは出てこない。

かぐやの目から見ても、そう思えた。適当に話を切り上げても、千花は少し考えたまま。珍しいこともあるな、と簡単に頭の片隅に追いやった。

「もういいだろう。よし、出るか」

今日は違う。今日だけは違うのだ。

白銀の言葉。その意味は、この場にいる全員が理解している。生徒会室を出た瞬間、その瞬間から生徒会でなくなる。この一年背負ってきた看板を下ろすことになる。

白銀御行、石上優、四宮かぐや、藤原千花。中々出ようとしなない彼らを引っ張るように、先導して。最後まで、白銀は彼らの会長であり続けた。そのあまりにも大きな背中では、かぐやにもハッキリと映る。重厚感のある扉が閉まり、思い出に蓋がされる。涙が止まらない千花。抱きしめ、自身もつられて涙するかぐや。照れ臭そうに窓の外を眺める白銀と石上。それぞれの想いを抱いて、第67期生徒会は幕を下ろした。

「会長」

「どうした」

「私が泣いちゃったこと、言わないでくださいね」

「ああ。そんな野暮なことはいさ」

そして、それぞれの想いを抱いたまま、彼らは歩き出すのである。

生徒会は終わりにたくない②

ラーメン天龍のコアタイムは基本的に昼と夜。幸いなことに夕方はほとんど客足はない。千花からの無理難題を受けた藤井は、店主に相談。するとどうだ。今日は店を閉めると高らかに宣言。自らはパチンコに行くという暴挙に出た。彼らのことを考えて、気を遣ってくれている行動である。

彼らのための貸切状態。すぐ千花に連絡すると、電話越しでも分かるぐらいにテンションが上がっていた。藤井からすれば、貸切なんて当たり前の世界だと思っていただけに、その反応は少し意外だった。ラーメンが出せないことを伝えていたからか、白銀たちの手にはスナック菓子や飲み物。まるで打ち上げと題したホームパーティーをするかの如く。その場所が全然関係ない男子高校生の家というのも笑える話である。

白銀としても、ラーメンが食べられないことは誤算だった。しかし、結果的には藤井太郎と藤原千花の邂逅に成功。自らのラーメン欲を押し殺し、スナック菓子で我慢することにした。

そんな白銀の音頭で乾杯する元・生徒会メンバー。そして無関係の藤井。本来であれば二階で休むはずだった。しかし、家主が居ないと余計に気を使うと白銀の一声で止むを得ずだ。彼からすれば、気まずいだけである。千花と白銀以外はほぼ初対面。だが、かぐやはもちろん、石上にも見覚えがあった。

地味で根暗な彼のことを、一目見ただけで覚えている人間はまず少ない。しかし藤井にとつて、あの時のことは否が応でも記憶に刷り込まれていたのだ。こうして思い出すだけで頭が痛むような。少しだけ目尻が下がる。

「藤井くんどうしたんですか？ 何かありました？」

「えっ、あ、ああいや。彼を見てたらちよつと思ひ出しちゃって」

「……石上くん何したんですか？」

「普通にコーラ飲んでただけですけど」

石上からすれば完全なるとぼっちりである。

むしろ彼は藤井に優しい言葉を掛けてくれた男。千花に変な誤解をされたことに心の中で申し訳なさを覚えた。

気を取り直し、四人を眺める。こうして見ると、なんだかんだで全員顔は知っていた。

藤原千花と白銀御行。この二人に加え、上品な雰囲気纏っている四宮かぐや。そしてあの時の少年、石上優。自身とかけ離れた生活を送っている秀知院学園生と分かっている、今はただの同級生に見える。不思議な話。

四人が談笑する中、藤井は厨房の丸椅子に腰掛けてスマートフォンをいじっている。無理に会話に入り込むつもりもない。機を見て二階に戻るつもりだった。しかし、一人の男が彼に視線を送っている。

「……藤井先輩って藤原先輩とどういう関係なんです？」

石上優。無論、彼もまた藤井太郎という男に見覚えがあった。

あの日、風紀委員の伊井野^{宿敵}ミコからあんな言葉を言われた男。どうせ彼女の思い込みだと理解はしていたが、やはり気にならないと言えは嘘になる。

そして、彼の優しそうな雰囲気。かぐやとは正反対のソレに、思わず口が緩んだ故の問いかけであった。それは純粋に千花と彼の関係が知りたいという彼の本心でもある。

「おい石上。いきなり変なことを聞くな」
嘘である。

白銀、内心では「よくぞ聞いてくれた!!」とめちやくちや喜んでいいる。直接聞きたくても遠慮して聞けない彼にとつて、石上の堂々とした態度が今は頼もしく思えた。恥ずかしいから聞かないというわけではないことは補足しておこう。

だがこれも、白銀の想定内。石上優という人間は、案外物怖じしない性格なのだ。思ったことはハッキリと言える口。だからこそ、ここに連れてきたのである。

「そうですね。石上君。失礼ではありませんか」
嘘である。

かぐや、生まれて初めて石上優に賛辞の言葉を送る。虫ケラには勿体ないほどの賛辞を。彼女もまた藤井という男に興味があった。無論それは利用価値があるかどうか。藤原千花対策として可能性を見出す上で、二人の関係を改めて知っておくことが重要なのである。

「どういうって……友達？」

「なんで疑問形なんですか」

「いやまあ……そういや考えたことなかったなって」

「ひどいです。別に藤井くんがそう思っただけでもいいです」

「じよ、冗談だって。友達だよ」

面と向かって聞かれれば、戸惑ってしまうのが藤井太郎という人間。特に彼にとって藤原千花というのは高嶺の花。彼女のことを友達と言っているのかどうか。探り探りの発言だった。

一方の千花。彼がそんなことを考えているとは知るはずもない。最初の頃こそ落とす物の口封じで接していたが、マンガを読ませてくれる同級生、いつしか一人の友人として彼と接するようになっていった。

「へえ。藤原先輩に男友達って珍しいですよね」

「私にも居ますよお」

「そう言っただけ無言言ってるんじゃないか。あまり迷惑をかけるなよ」

「どの口が言ってるんですか塞ぎますよ」

圧をかける千花に分が悪くなった白銀。コーラを飲みその場を誤魔化す。バレーボール指導の件を未だに忘れていなかった。

そうは言うが、彼らはなんだかんだでウマが合っているのだ。それぞれの個性が上手く噛み合い、仕事の時はしっかりと役目をこなす。いつも一人の千花しか知らない藤井にとって、それはすごく新鮮に映った。

「藤井さんは何か部活を？」

「いや、帰宅部。基本夜は店の手伝いかな」

「そうなんですね。ご立派ですよ」

「いやいやそんな」

ここで、かぐやが動く。今まで彼の会話を見ていただけだったが、そこで彼の人柄をある程度把握。藤原千花という爆弾を上手く扱える可能性がある人物として、ここからは自らが確認する。

適度に冗談も言え、真面目に受け答えもできる。ある意味、かぐやにとつても理想的な人物。都合のいいしかし、心のどこかでもつと突飛な人物かと思っただけに、彼の印象はあまりにも地味だった。

「学校終わりにバイトする辛さは本当によく分かる。しんどいよな」

「大袈裟だつて。こんなの今時の高校生なら普通だよ」

「ウチの学校ならバイトしてる方が珍しいんだ」

白銀の言う通り、秀知院学園に通う生徒たちは、基本的に家が裕福。バイトなんてしなくても、お小遣いが舞い降りてくるのだ。それでもバイトしてる生徒もいることにはいるが、その数は圧倒的に少ないのが現状。そんなところで二年も学校生活を送れば、自然とそれに染まってしまうのが人間である。

「ところで、藤井さんはどちらの高校に？」

「桜川。暑苦しいところだよ」

「男子校か。それはそれで楽しいと聞くが」

確実に彼の情報を仕入れていくかぐや。当然、白銀の耳にも伝わるが、それも承知の上だ。ここで大事なものは、精神的に優位に立つこと。白銀と違い接点のないかぐやにとつて、藤井の中に「四宮かぐや」という人間を印象付ける必要があった。本来であれば空気と同化したような男と話す理由なんて無いのだが、これも白銀攻略の為。自らの心を鬼にする。

秀知院学園生に向かって自らの高校名を伝えるのは、案外恥ずかしいらしく。藤井は照れ笑いを浮かべながら再び丸椅子に腰掛けた。座つていれば四人の顔は見えない。白銀とかぐやも空気を読む力はある。藤井ばかりに話を振るのは可笑しな話。次期生徒会について自然とシフトさせる。

「藤井くんは次の会長誰がいいと思いますか？」

だが、藤原千花は違う。空気を読んだつもりで自然と話を振ってし

まう。いや、彼女に空気を読むという能力は備わっていないが。白銀とかぐやは少し呆れ顔。だが藤井は嫌な顔一つせず考える。

「そんな言われてもなあ。白銀君がやったらいんじゃない？」

「藤井さん。秀知院の生徒会長は激務なんです。それをもう一年となれば、白銀さんの体が持ちませんよ」

思わず出てしまったかぐやの本音。

白銀を心配してしまった言葉である。事情を知らない藤井に説明したつもりだったが、側から見たら中々に優しい言葉。だが言った言葉は取り消せない。今彼女に出来るのは、白銀の顔を見ないことだけだった。

「なら、どうして白銀君は生徒会長に？」

それを聞けば、自ずと出てくる疑問。藤井的にも、わざわざそんな激務に自ら足を突っ込んだ白銀御行という男が不思議だった。何か深い理由でもあるのかと考えた。そして、藤井の予想は的中していた。

だが白銀は、その理由を告げるわけにはいかないのだ。隣には四宮かぐや。生徒会長を目指そうと思っただ理由があるからである。したがって、ここは適当にあしらうことがベスト。

「将来色々と役立つからな。正直、経歴に箔が付くからだよ」

勿論、それは嘘である。

経歴に箔が付くのは事実。しかし、彼にとってそれは本当の理由では無かった。

白銀にとっても、この問題は大きなまま。もし選択を間違えると、後の高校生活が大きく変わってくる。四宮かぐや攻略のためには、まず藤原千花を抑え込める相手、藤井太郎の存在が必要になる。これまでも、ここぞという時に彼女の邪魔が入ったのだ。もうそんなミスは許されない。今この瞬間も。

「藤井くんは生徒会とか興味なかったんですか？」

「無かったなあ。大変そうだし」

「今の藤井くんも大変そうじゃないですか？」

「そんなことないって」

千花は物怖じすることなく、藤井に話しかける。細かいことを考えるタイプではない彼女らしい。その様子を、かぐやは黙って眺める。心なしか、生徒会室に居る時よりも笑っているように見えた。

それもそうだ。あの場では白銀とかぐやの恋愛頭脳戦に巻き込まれるだけ。ニンマリと笑う機会は以前より減っている。その分、彼と話すことで無意識のうちにバランスをとっていたのである。

かぐやはそんな千花が羨ましくもあった。素直になれたらどれだけ楽だろうか。自らに嘘をつきながら白銀と接する。進展が無いというのは、必然的に焦りにつながる。だから藤井と接触したのだ。それなのに、今更になって申し訳なきが湧き出てくる。

話し込んでいるうちに、時間は夜の六時を過ぎていた。

「そろそろ帰るか」白銀が言うと、自然とそれに呼応する。生徒会長としての彼は、尊敬されていたんだろうと藤井は察した。

せっかくだから、と藤井はメンバー全員と連絡先を交換することに。戦略のためである白銀御行と四宮かぐや。ここから第二ラウンドが始まると、心の中でゴングが鳴る。石上はついでである。

「私、もう少し残ります」

三人が店を出ようとした時。相変わらず座ったままの藤原千花は、彼らの後ろ姿を眺めながら言葉を漏らした。

これに驚いたのは、藤井である。てつきり全員で帰ると思っていただけに、想定外の発言。だが「帰れ」と言い切れないのも彼の性格であった。

白銀たちは、三人で顔を見合わせる。そして思う。これは何かがある。あの藤原千花が一人で残るなんて言うことはまず無い。しかも、ここには年頃の男女。二人きりになるのだ。思わず白銀と石上は固唾を呑む。

「あ、ああ分かった。それじゃまたな」

「はいー！」

だがここで理由を聞く勇氣は無かった。流石の石上も空気を読み、真っ先に店を出た。内心では藤井の顔をバンバン殴りながら。白銀とかぐやもそれに続き、あつという間に二人きりになる。

先ほどまでは意識してなかったが、この狭い空間に二人きりというのは、思春期男子にとって中々に厳しいものがある。

「二人きりですね」

「……からかつてる？」

「バレました？」

「バレバレだよ。全く」

嘘をつけない千花。からかつてても、こうしてすぐにバレるのが常。藤井からすれば、それが嘘なのが少しだけ寂しかった。彼も男である。本音を言えば、女子にモテたい。でもそれは、自分が男として見られていない気がして。

しかし、藤井はそれで良かった。

生きてる世界が違う彼女のことを、もし好きになってしまったら。それはただ苦しいだけなのだ。積み上げてきた知識も違う、価値観だって違う。いい方向に転がるはずなんてないのだから。それが分かっているから、彼は開き直って千花と仲良くすることが出来たのである。

「——寂しかったんです」

「一緒に帰るのが？」

「はい」

千花からすれば、一年間過ごした生徒会が解散になった。先ほど白銀たちの後ろ姿を見て、生徒会室を出た時のような感覚に襲われた。ああいう思いは、一日に二回も抱くものではない。だから咄嗟に残ると言ってしまったのだ。

こうして二人きりになって、藤井の顔を見ると、不思議と心が落ちていた。生徒会が終わった喪失感を、少しだけ埋めてくれるような存在。それが藤井太郎という人間なのか、このラーメン天龍なのか。それは千花本人も理解していなかった。

「会えないわけじゃないんだし。そんなに落ち込むことないよ」

「……そうですね」

学校に行けば会える存在。それは分かっていた。分かっていたけど、飲み込めなかった。クラスメイトだって居る、部活の仲間だって

居る。それなのに、生徒会が終わった事実が寂しくて。

その悲しみを埋めたいが為に、彼を利用してはいる。そもそもベクトルが違うのだから、埋まるはず無いと分かっているのに。それなのに、彼はいつも優しく接してくれる。今日なんて無理を言ったのに、貸切状態にしてくれた。

千花の生徒会に対する思い入れは、誰よりも強かった。それは自身が一番よく分かっている。彼女の予想通り、あのままみんな帰っていたら、悲しくなって泣いてしまうかもしれない。ここで藤井と話したのは正解だった。

「藤井くんは優しいです」

「急にどうしたの」

「照れないでくださいよぉ」

「照れてないんだけどね」

嬉しかった。ここに来れば、いつもそうだ。

いつも彼は笑って出迎えてくれる。それが自然と安堵につながる。藤井太郎という心の海。そこに浸かってしまって、中々陸に上がりがくなくなる感覚。

「少し落ち着きました。私も帰りますね」

「またおいで。外も暗いから大通りまで送るよ」

そんな彼の優しさに、今日も彼女は溺^甘れて^{えて}いる。

石上優は同情したい

石上優は、久しぶりに高揚感を感じていた。

学校でも悪い意味で浮いている彼が、こんな気分になるのは新作ゲームが出た時以来。だがその時とはまるつきり別の意味でテンションが上がる。

新作ゲームを買ったところで、それは心の中で喜びを表現するだけ。定期的に仕入れるため、最近は若干マンネリ気味である。

ここで言う高揚感。彼の場合、普段感情を押し殺している分、その反動は大きい。人前で思い切り腕を突き上げてしまいたいぐらい。それに該当するレベルで、心が躍った。

同情、とでも言うのだろうか。

心の底から首を縦に振りたくなるのは、いつぶりだろうか。

石上は自身に問う。しかしあまりにも懐かしい感情は、彼から言葉を奪う。ただ目には久方ぶりに光が宿った気がして。

珍しく一人。ファミレスでポータブルゲーム機を巧みに操作する。彼は一人でそんなところに行く人間では無い。これもまた珍しく、人を待っているのだ。そしてその待ち人は、すぐに顔を見せた。

石上を見つけるとトコトコと駆け寄り「今日はありがとう」とだけ告げ、向かい合うように座る。その表情は、どこか上の空。まるで現実から目を背けているような。年頃の男女であれば、甘酸っぱいファミレスデート。

だが。二人にとって今この瞬間は、とても青春とは呼べない大事な、大事な相談をする時間であると言っておこう。

そしてその相談の主。藤井太郎は、覚悟を決めたように口を開いた。

「俺、四宮さんに殺されるかもしれない」

仲間意識——。

石上優。四宮かぐやという人間に対して、初めて自身と同じ印象を抱いた人間に出会う。秀知院学園の中に、今の彼女のことを悪く言う人間は少ない。勿論、派閥争いなど家の関係で仲の良くない生徒は居るが、その次元を飛び出して「殺される」とまで言い切る人間は石上以外に居なかった。

彼は以前から彼女に対して恐怖心を抱いていた。最近では少しずつ薄まってきているようだが、根本的に彼女のことを恐れている。こくなつたのも、石上もまた、白銀とかぐやの「恋愛頭脳戦」に巻き込まれたからに他ならないのだが。

そんな時に、自分以外の口から共感できる言葉が出てきたのだ。それはもう、不謹慎だがテンション爆上げである。

「気持ち、よく分かります。実際僕は何度か殺されかけたので」

「え、嘘、経験者」

「仕方ないですよ。藤井先輩にも心の準備は必要でしょう」

「そうならないために相談したいんだけどな」

石上の言葉は嘘じゃないことが、ここでは一番のポイント。心臓を抉られるぐらいに睨みつけられ、椅子の角で首を絞められたり。物理的に、意図せず本当にやってしまうのが、四宮かぐやの恐ろしいところである。

一方の藤井。何故相談相手が石上になったかと言えば、一言で彼しか相手にしてくれなかったからである。藤井にも連絡の優先順位はある。とは言え、秀知院学園生かつ、四宮かぐやと繋がりがあるのは元・生徒会の三人だけ。その中での話になる。

まず連絡したのは、彼らの中で一番付き合いの長い千花。「四宮さんに殺される」と、絵文字やスタンプを一切使わないガチ感を出したメッセージを送った。

しかし、返信は愛犬ペスの写真。そして「これ見て元気出してください！」とだけ。相手にされず。

次に白銀。千花と同じ内容のメッセージを送ると、すぐに返信。

「疲れているのだろう。しっかり休め」とだけ。マジレス。送ったことが恥ずかしくなるほどの真面目な回答だった。

最後に藁にもすがる思いで、石上。二人の反応の件もある。真面目に送るのは躊躇ったが、結局彼は本気で相談したかった。ここで変なおふぎけを出すと、それこそ冗談だと思われる。するとどうだ。彼からの返信は二人と大きく違っていた。

『聞きました。明日、ファミレス集合でいいですか?』

藤井にとつて、石上は神様のように思えた。彼から突き放されれば、いよいよ頼るのは日本の警察。彼としても大事にしたいわけではない。出来ることなら、原因を知って解決に導きたいのが本音なのだ。ただ、四宮家の人間。警察が藤井の思い通りに動いてくれるかどうかなんて、分からない話であった。

「そもそも、何でそう思うんです? 藤井先輩はそんなに接点ないはずですが」

「こつちが聞きたいよ。でも打ち上げの翌日から明らかにおかしいんだって」

「何がどうおかしいんですか。落ち着いて話してください」

少し早口になる藤井を、石上は宥めた。本当に恐ろしさを感じた時は、早口で事の顛末を伝えようとする。自身にも覚えがあるせいか、石上は藤井の気持ち痛いほど分かった。

深呼吸。一回、二回、三回。早くなつた鼓動を落ち着かせ、これまでの経緯を頭の中で整理する。

「……これ見て」

「なんですこれ。『今日の天気は晴れ。気温は上がる見込みです——

——』天気予報ですか?」

「送り主を見てみて」

「四宮先輩になつてますね」

「あれから毎日、決まって朝七時に送ってくるんだ」

言葉で伝えるより、まず形を見てもらうことが早いと考えた。

割れたスマートフォン画面に、天気予報のような相手を思いやる文章が並ぶ。送り主は四宮かぐや。ぱつと見、親切なメールだと誰もが思うだろう。

しかし、石上は違った。その文面を見た瞬間、寒気のような鳥肌が

全身を包む。彼女は親切心でそんなことをする人間では無い。一周回って親切が恐ろしく感じてしまう。しかも、毎日決まった時間に送ってくるのだ。メールマガジンのように。何か意図があると考えるのが自然だった。

「でもこれだけで殺されるってのは大袈裟では」

「違うんだよ……最近、ちよつと毛色を変えてきててさ……」

藤井は再び画面を見せる。日付は今日の朝。時間もきっかり七時。天気予報から入るところは先ほどと変わらない。だが読み進めていくと、明らかに石上の顔が引きつる。

『昨日は例年より冷えると伝えましたよね？ 夏服登校は仕方ないですが、私服での買い出しは長袖を着た方がよろしいかと思いましたが。今日も夕方から肌寒くなりそうですので、お気をつけください』

親切なメール。そう見えてもおかしくはない。

しかし、石上は震え上がるような恐怖を覚える。思わず「うわっ……」と言葉が漏れる。

「藤井先輩って四宮先輩と接点ありませんでしたよね……?」

再確認するように問いかける。頭では理解していたが、こんな事実を突きつけられれば嘘だと信じたくなるのが人間の性。しかし、うなずく藤井。最悪の展開だ。これはもう手遅れだ。

その文言から読み取れることは一つ。四宮かぐやは藤井太郎の行動を完全に把握している。いわばストーカーと同じだ。何故彼にそんなことをするのかは分からない。藤井本人から聞き出す必要があるが、いかんせん石上もかぐやに恐怖心を抱いている。喉が閉まつて言葉を胸の辺りに閉じ込める。

「何で買い出しに行ったこと知ってたのかな……偶然、だよね……?」「いえ。おそらく監視しているのでしょう。タイミングを見計らっているのかもしれない」

「何で? 俺何か悪いことした?」

「僕に聞かないでください。それにその……正直僕もそこまでイッた経験がないので」

言い方は悪いが、石上はかぐやとある程度の距離を保っている。無

論、それは保身のため。命の危険を感じたのだからある意味当然の話。そうしていれば、自らに危害は及ばないのだから。

しかし、藤井の場合は違った。かぐやの方から距離を縮めてきている。それも急加速で。

「そ、そもそも四宮先輩に何したんすか」

ここでようやく、根本的な問いかけ。これが分からないと話が進まないのだが、質問が遅れたのは純粹に恐怖心で。仲間である藤井のため、少し身を削る覚悟が出来たようだ。

で、あるというのに。それに困ったのは藤井だった。

彼自身、こんなメールが来る心当たりが一切無い。あの日以来、四宮かぐやと話したこともない。もちろん怒らせたこともない。

「いや……本当に分からなくて…」

だが、実際問題。藤井はそもそもの入り口を間違えているのだ。「かぐやに何か悪いことをした」という先入観で原因を探っている。それが間違いなのだ。

では何なのか。彼女からのメールにどんな真意があるのか。

かぐやの白銀攻略において、藤原千花への対策は必須。それに対する駒として、藤井太郎を利用する。そのためには、彼に何かしらの接点を作る必要があった。

そこで、かぐやは独断で考えた。藤井の内面から自分色に染めていくと。その第一弾としてメールマガジン。四宮家の人間を配置し、彼の行動を把握。体調に気を付けるように優しさを持ってメールを送っているのだ。

だが!!

それは一般人からすれば優しさどころか恐怖を覚える内容なのである。普段なら早坂愛に相談して決めることが多いが、今回は完全なるかぐやの独断。優しさのつもりが裏目に出ているとは当の本人は気付いていない。それどころか、藤井に避けられているようでメールの内容が過激になってきている。彼が「殺される」と言うのも至って自然な話だった。

「何もないのなら尚更ヤバイですよ。あの人、理由なく動くことは無

いと思うので」

「さつきから怖いことしか言っていないけど」

「その……すみません。僕の力では止められません」

行くところまで行ってしまった藤井に対する殺意。石上優の力ではもうどうしようもない。非情かもしれないが、彼にとつてもこれ以上足をつまめば何をされるか分からない。自らの命も考えて、ここで一線引いておくのがベストだと考えた。

「俺が何したって言うんだよ……まだ死にたくないよ……」

「何と言うか……」愁傷様です」

まるでお通夜のムード。店内のポップなBGMがお経にすら聞こえてくる。石上は本気で落ち込む彼に、何と声を掛けるべきか考えた。

何せかぐやに対して初めて同じ印象を持った人間。ここで突き放すのは違う。それに石上は藤井と話してみても、なんとなく波長の合うタイプだと察する。白銀とは違った意味で頼りがいがありそうで。

「……実は藤原先輩にも時々ヤバい視線送ってるんですよ。あの人」

「え、藤原さん何かしたの？」

「分かりませんが、人として見てない時もありますよ」

「ますます分かんなくなってきたよあの人のこと……」

だとすれば、その事実には千花は全く気付いていないことになる。そうでなければ、あんな呑気な返事はしないはず。一番近くにいる彼女が受け流すということは、自身の考えすぎという可能性もあり得る。

にしてもだ、流石に監視されているのは気分が悪い。本来なら警察に相談してもいいレベルではあるが、まだ監視されている確証もない。下手に動くのは得策ではなかった。

ならどうするか。藤井は今まで使った頭を回転させる。こんなことで悩む日が来るとは、彼自身思ってもいない。

(……思い切って聞いてみるか?)

藤井、一つの結論に至る。

ここで悩んでいても、答えなんて出るはずがない。そもそも行動の真意が読めないのだから。それなら、直接彼女に聞いただけせばいい

話。単純明快な結論ではあるが、今の彼にとって最高難易度のミツシヨンである。

だが、目の前には石上。ここは一人ではない。何かあってもすぐ相談出来る相手が居る安心感が、彼を突き動かすことになる。

「決めた。電話してみるわ」

「えっ、四宮先輩にですか」

「もうヤケクソ。当たって砕けるだよ。考えていても分かんないし」

石上のにも、彼の決断は正しいと思えた。

確かに一番理想的で効率的な結論。ただ石上にはその勇氣は無い。それだけに、今の藤井は無駄に頼もしく思えたのである。

スマートフォンで四宮かぐやの名前を探し、通話ボタンを押す。呼び出し音が二人の緊張感を引き摺り出す。電話の相手はすぐに出た。

「はい、四宮です」

「あ、えっと、藤井です。ラーメン屋の」

「ああ藤井さん。急にどうされましたか？」

とても人を殺すように思えない穏やかな声。それが逆に彼の恐怖心を煽る。ゴクリ、と固唾を飲んだ音が相手にも伝わってそうで、体が強張った。

「あの、毎朝のメールなんだけど」

「ええ。それが何か」

「何でいきなりあんなことするの？」

「あんなこと、ですか」

「いやだって怖いよ。何か監視されているようで」

正直にぶつける。石上が同席していることで若干ではあるが正気を保っている。

さりげなく監視という言葉を使うことで彼女の核心に迫った。秀知院学園でもトップクラスの頭脳を持つかぐや。彼の意図が伝わらないはずもない。

しかし、四宮かぐや。

相手の意図が読めるが故に、素直に乗るはずもない。そんな問いかけをしてくる時点で、こちら側の動きに勘付していると察知してしま

う。

「そう……ですね。ですが、私も一つ気になることがあるんです」

「気になること?」

藤井は聞き返す。すると、石上の顔から生気が消えていく。向かい合っている彼はその不審な様子に首を傾げた。そんな不味い会話をしているわけではない。

「交換条件といきましょう」

「はあ」

「——今、お二人で何を話されていたのですか」

瞬間。全身を襲う怖気。鳥肌。一瞬で口の中が渴いていく。

右耳に当てた電話越しに聞こえるはずの音が、自らの左耳から聞こえるのだ。

おかしい、そんなはずはない。ただ、右耳から聞こえるのは電話が切れた音だけ。一定のリズムを刻むそれは、体の筋肉を切り刻むように。

石上優。自ずと立ち上がり、藤井に一言。

「死にたくないので帰ります」

渾身の見捨て!! 他人のふり!!

仲間意識は宇宙の果てに消え去った。逃げるようにその場を走り去る。一方の藤井。石上には目もくれず、硬直。意を決して左側を見る。するとそこには、これまでで一番の笑顔を見せる彼女。

二人、目が合う。ファミレスに似合わない上品な雰囲気彼女は、石上を完全に無視し、彼が座っていた場所に座る。

「二人きりになりましたね。藤井さん」

「あ、あは、あはは……」

口が渴いて言葉が出ない。監視されているのだから、彼女がこの場に来ても何ら不思議ではないのだ。石上優に相談したこともバレている。そこまで頭が回らなかった。後悔したところで、もう遅い。笑う四宮かぐや。藤井太郎は窮地に追いやられたのである。

かぐや様は守りたい

その場の空気を一言で言えば、最悪である。

陰口を言っていた相手が、突如として目の前に現れる。しかも二人きり。それを最悪と言わずして何と言うか。藤井、背中は冷や汗でびっちよりと濡れていた。彼は彼女の顔を真っ直ぐ見ることが出来なかった。

夕方のファミレス。辺りは藤井たちと同じように、学校帰りの高校生であふれていた。その中でも、明らかに二人を包む雰囲気は異様だった。

「——それで。二人で何を話されていたのですか？」

改めて口を開いたのは、四宮かぐや。初めて来たファミレスの雰囲気。俗物だと感じながらも、辺りには高校生ばかり。学校の延長線上に感じられた。

貴女に殺されるかもしれないのでその相談に乗ってもらってました——。なんて馬鹿正直に答えれば、それこそ命の危険に晒されるだろう。藤井は俯いたまま考える。

目の前の悪魔は何と答えれば許してくれるだろう。前回、店に来た時とは全く違う印象を抱かざるを得ない。あの上品な雰囲気纏っている四宮さんではないのだ。考えろ、考えろ、と言い聞かせる。

「そ、そ、そんないいじゃん。男同士のゲスな話だよ」

ある意味、嘘ではない。天才・四宮かぐやを誤魔化そうと試みる。とは言っても、藤井はかぐやに「メールの件」を連絡している。その場に石上優が居る時点でその誤魔化しには無理があった。

「いいえ。珍しい組み合わせだと思いましたので」

追撃。組み合わせのことを突っ込まれれば、藤井としても何かしら理由を考えなければならぬ。かぐやの絶妙な問いである。頭脳戦で藤井がかぐやに勝てるはずもない。下手に仕掛けてしまったこと

を後悔する。

だが、正直に答えたところで待つてゐるのは死。嘘をついても死。どちらに転んでも彼の人生は決まっている。

「ぐ、偶然会ったんだよ」

「偶然……ですか」

「それを言ったら四宮さんだつて。何でこんなところに？」

反撃。藤井の疑問は当然である。誘つてもいないのに彼女自らファミレスに足を運ぶことは考えにくい。監視しているからこそ、この場に偶然を装つて現れたと考えるのが自然。

藤井の予想は的中していた。四宮かぐや。駒として使うのだ。内面から侵食していくのが効率的だと考えた。毎朝のメールで潜在意識の中に自身の存在を植え付ける。それが恐怖でも何でもいい。とにかく四宮かぐやを認識させることが重要なのだ。

「私の方こそ偶然ですよ。下校中に偶然お二人を見かけて、そしたらタイミング良く藤井さんから着信があつたんです。それは会いに行くでしょう？」

嘘である。大嘘である。

そもそも下校は送迎の車。このファミレスは通学路に無い場所。どう考えても、彼女がここに足を運ぶことは無い。早坂愛から連絡を受けここに来たとは口が裂けても言えなかつた。

しかし。かぐやの家の事情を知らない藤井ですら、その発言に淀みがあることに気付いた。このままでは先に進まないのも確か。正直に告げてもいいのではないか、なんて考えが頭をよぎる。

彼はここで初めて顔を上げる。かぐやは笑っている。怖い。幼稚園児なら今ここで泣き喚いていても不思議ではない。

「……何が狙い？」

ストレートに、思い切つて。相手の思惑を引き摺り出す。

それを聞いて正直に答えるとは限らない。だが、純粹な疑問。下手に変化球ではなく、真つ直ぐで勝負した方が確実だと藤井は判断した。

「そんなに警戒しなくて大丈夫ですよ。私は何もいませんから」

「もうしてるんですけどね」

「何か？」

「いえ何も」

ほんの少しだけ、かぐやの言葉からトゲが取れる。

思えば、二人が面と向かつてじつくりと話すのはこれが初めて。藤井的には最悪な流れではあったが、若干雰囲気慣れつつある。石上とは違い、まだ直接的に手を下されていないからか。

その先に待っているのは、決していい結論ではない。藤井は直感的にそう感じざるを得なかった。ただでさえ、彼女の行動が読めないのだ。今この瞬間だって、笑っているその表情が網膜に張り付いている。

「そうですね。何が狙いかと言われれば、それは至って単純ですよ」

側から見ても、藤井の体は強張っていた。

存在を彼の中に植えつけるため。恐怖でもいいなんて考えていたが、彼女も一応血の通った人間である。自身の行動が行き過ぎていたとようやく気付く。若干の申し訳なさ。

「藤原さんと仲良くしていただければ、それでいいんです」

「……は？」

吐息に近い言の葉。藤井の反応は必然である。

何故ここで藤原千花の名前が出てくるのだろうか。だが、彼は石上の言葉を思い出す。

——藤原先輩も時々ヤバイ目で見られてますよ

打ち上げの時は何とも思わなかったが、千花の白銀に対する奔放な態度に苛つくこともしばしば。その都度、彼女を視線で殺しにかかる。石上の言うのはそのことである。

だが、四宮かぐやが白銀に想いを寄せているなど、藤井が知るはずもない。石上優の言葉が、ありのままの事実として脳内に溶け込んでいく。

藤原千花と仲良くする。それが出来なければ、彼女もしくは自身に何かしらの危害が及ぶ。そう考えれば色々と合点がいく。

「……なんで？」

「何がですか」

「いや、何で俺が藤原さんと仲良くする必要あるのかなって」

疑問。思ったことを、そのまま言霊に乗せる。

藤井からして、かぐやの発言は決して心地の良いものではない。完全に下に見られている気分。この女は、自身を踏み台にして何かをするつもり。決して勘の鋭い方ではない藤井でも、簡単に察することができた。

「苦手なんですか？ 彼女のこと」

「いやそうじゃなくて。それは四宮さんに言われることじゃないと思っただけだよ」

「……それはどういう意味ですか」

「そんなの、藤原さんが悲しむから」

唯一と言つていい女友達、藤原千花。そんな彼女のことを馬鹿にされた気がして、彼は真っ直ぐとかぐやを見た。自然と怯えは無くなる。

一方、かぐやはと言うと。白銀攻略に必要な駒である藤井太郎。千花との関係性を探るため、多少踏み込んだ質問をぶつけた。彼のリアクションは、彼女が考えていたものと正反対だった。

この男は、藤原千花の言うように優しい男。むしろそれだけしか取り柄がない地味な男。それは間違いのない事実。目を細めて、彼の目を見つめ返す。

「だってそうだよ。俺は……純粋に友達だと思ってるのに」

「友人、ですか」

「大切な友達だよ。そもそも、四宮さんに何の関係があるの？」

「……ええ。大アリですよ」

「何故？」

「貴方と同じく、大切な友人だからです」

綺麗な言葉だった。少なくとも、今日一日話した中では一番。

「彼女は中等部からの知り合いなんです」

「……それで？」

「あの子だけなんです。私の側を離れようとしなかったのは」

かぐやは続ける。嘘偽りのない言の葉は、しっかりと藤井の耳にも届く。二人の関係性を完全に理解したわけではないが、四宮かぐやの言葉には十分な説得力があった。理屈ではない、彼女の本心。

氷のかぐや姫と呼ばれていた、かつての彼女。人を信じず、常に警戒心を抱いて生活していた。その人物が「裏切り」をする人間かどうか試すことだとしてきた。名門校に通っているとは言え、相手は中学生や高校生。目の前に居る藤井と変わらない。自然と、かぐやの周りからは人が居なくなつた。

藤原千花を除いて、である。

彼女だけは、常にかぐやの隣に居た。居てくれた。一人の友人として、千花はかぐやのことが大好きなのだ。周りに流されず、自らの思いに素直に生きる。かぐやにとつて、藤原千花という人間は疎ましく、羨ましくもあつた。それは今でもそう。それでも、彼女にとつて大切な存在に変わっていた。

目の前の男は、そんな彼女に似ている。

姿形はまるで違うのに、かつての藤原千花を見ているようで。

真つ直ぐ、自分が信じた道を進む。自らの力で人間関係を築こうとする姿勢が、四宮かぐやには眩しすぎるほどに。

「ですので、悪い虫が近づいたのではないか、と思つてしまいました」「悪い虫つて……」

「ごめんなさい。貴方を監視するようなことはもうしません」

結論から言えば、藤井太郎を駒として使うことは出来ない。彼は、目の前の損得で動くタイプではない。例え脅したところで、この男は千花との関係を切るだろう。彼女のことを思つて。その時点で、この勝負は最初からかぐやの負けが決まっていたのである。この場で彼を墮とすつもりだった彼女にとつて、それは大きな誤算である。

だが「悪い虫が近づいたと思つた」と言うのも嘘ではなかつた。白銀攻略のためになんて思つていても、心の何処かでは千花のことを心配する自分がいたことも事実。藤井太郎という人間を少し知ることができた今、彼はかぐやが思っているほど悪い人間ではないのだから。

「俺はそんな……むしろ楽しいって言うか」

「藤原さんのお話がですか？」

「うん。こっちまで笑ってしまいそうになるから」

「……まあ否定はしません」

藤井は水を一口。渴き切った口の中が心地よく。ようやく、体の強張りも落ち着いた。周りくどく話してきたが、とりあえずは一件落着くということになる。

話は終わったのだから、もう長居する必要はない。しかし、藤井もかぐやも、席を立とうとしなかった。互いに変な疲労感が体を襲っていたからである。特に藤井。慣れない口喧嘩はするものではないと痛感していた。

「……でも正直。俺なんか相手してもいいのかなって思う」

「はあ。さつきまでの自信はどこへ？」

「藤原さんとか、四宮さんだって。そもそも秀知院に通う生徒はみんな、雲の上の存在だと思ってたから」

「大袈裟ですよ。そんなことありません」

藤井がそう思うのも無理はない。一般入学で秀知院学園に入学する生徒は圧倒的に少ない。藤井の同級生には一人も居なかったぐらいだ。それぐらい、彼らにとっては手の届かない存在。

そこに通っている彼らが店に顔を出してくれること。連絡先を交換してくれること。いずれも彼からすれば、非現実なのだ。

そんな彼に、かぐやは楔くわを打つ。

「藤原さんなら、きつとこう言いますよ」

「……？」

「そんなの関係ないです、って」

「確かに。それもそうだ」

藤井の顔に、ようやく笑みが溢れた。ずっと引きつっていただけに、彼の笑顔はとても輝いて見える。

「それに、一般入学の人でも凄い人は居ますから」

「へえ。そうなんだ」

「誰よりも勉強熱心で、生徒からの人望も厚くて、実は恥ずかしがり屋

で、目つきが悪くても凄く優しく、でも時々抜けてるところもあって、可愛くて——」

四宮かぐやという人間は、普段白銀に対する感情を押し殺している分、一度スイツチが入ると堤防が壊れたように想いが止まらない。相手が誰であろうとそれは関係が無いのだから、最初から素直になれよと早坂愛は常々思っているのだが。

藤井としても、凄い人という一括りで話を聞いていたが、彼女の言葉聞けば誰か一人のことを言っているのだろうと察する。そしてそれは、異性であること。彼女が想いを寄せる人なのだろうと。

「その彼、いい人そうだね」

「良い人どころじゃ無いのっ！」

「キャラ変わりすぎ」

まるで別人になった彼女を眺めながら、再び水を喉に流し込む。先ほどよりも甘い味がした気がした。目の前の彼女は、誰かに恋をしているのだろう。人を殺すような人間ではない。

やがて、かぐやは我に返る。「あくまでも例ですから！」と謎の念押しをされるが、彼は適当に受け流した。四宮かぐやに対する恐怖心は、すっかり消え失せていた。

「ごほん、とかぐやは咳払い。やってしまったと後悔したところでもう遅い。だが彼の様子を見ても、白銀の名前が出てくることはない。ボロを出さずに済んだと前向きに捉えることとした。

「貴方だって、藤原さんを好きになる可能性だってあるのでは？」

「いやあ……恋愛となると色々大変そう。家のこととか……」

「まだ言いますか」

「友達と恋愛は違うって。やっぱり身分差あるし……」

藤原千花の家柄もかなり裕福である。父親は政治家で、母親は元外交官。エリート中のエリートなのだ。そんな彼女と恋愛関係に落ちれば、まず間違いなく家柄の問題が出てくる。同じ秀知院生なら話は変わってくるが、一般庶民の彼と千花は、どう考えても釣り合う訳がなかった。だからか、彼は開き直ったように答えている。

四宮かぐやと白銀御行も、それに該当する。まるで自分たちの行く

末を言われている気がして、かぐやはあまり良い気はしない。無論、彼女にとって家の都合なんて知ったことではないが。

「では、もし彼女のことを好きになったら」

「と言われても」

「一人の友人として聞いているのです」

「……まあ」

友人、と言われれば答えないわけにはいかない。短く刈り上げられた髪を掻きながら、彼は口を開いた。

「全力で奪いに行きますかね」

「……ふふ。思いの外、貴方とは気が合いそうですね」

「（それはそれで嫌だ）」

かぐやの戦略。想定していた流れとは違えど、藤井太郎はしっかりと組み込まれることになる。駒としてではなく、一人の人間として。

そして彼女と藤井が仲良くなってしまったのだ。石上優は再び一人で戦線に立つこととなったのは、また別の話。

かぐや様は信じたくない

秀知院学園では二学期が始まってすぐに、次期生徒会長を決める選挙が開かれる。一年の任期を終え、白銀御行をはじめとする生徒会メンバーは、新たな一年を迎えることになる。

しかし。白銀は覚悟を決めた。四宮かぐやとの関係を切るぐらいならと、意を決して立候補。風紀委員の伊井野ミコとの接戦の末、見事、二期目の生徒会長を務めることとなったのだ。

当然、白銀会長には生徒会メンバーを決める権限が与えられる。副会長には四宮かぐや。書記に藤原千花。会計に石上優。そして会計監査には、会長の座を争った伊井野ミコを指名。新体制となった白銀政権が幕を開けたのである。

だが新体制になったからと言って、これまでとあまり変わりはない。強いて言えば伊井野が入ったことで、少し空気が堅苦しくなったことぐらい。しかし、彼女が生徒会に染まっていくのも時間の問題だった。それぐらい強烈なメンバーが揃っているのである。

それとは一切関係のない藤井太郎。これまで通り店の手伝いをしながらも、定期的に彼らと連絡を取るようになっていた。そしてこの日もまた、藤原千花から呼び出しを受けた。場所は秀知院学園近くの喫茶店。行きたくない感情を隠しながら、少し遅れて来店した彼は、思わぬ彼女と二人きりとなる。そしてその少女は、とんでもない日本語を口にするのである。

「ボクサーパンツを履いている男の人は、本当にヤリチンなのですか？」

人は呆気にとられると、本当に言葉が出てこないのだ。

四宮かぐや。真剣な表情で問いかける。今から絶対に落とさない試験に臨むが如く、本気の顔で。

普段から凜と佇む彼女の口から出ていい言葉でない。それは藤井

にも分かる。だからこそ、返答に困った。聞き返すべきか、素直に答えらるべきか。

「……えっと。急に何故?」

藤井、その中間を選択。彼女の問いかけを肯定しつつ、理由を問う良い言葉を見つけて成功した。これで反応を伺うことも出来る。

「石上君が言ってたんです。『ボクサーを履いてる奴は全員ヤリチンだ』って」

「何そのゴミみたいな理論」

性の知識が壊滅的なぐやにとつて、生徒会での情報はどれも事実に思えるのだ。客観的にそれがふざけている理論でも、彼女からすれば目からウロコ。こうして周りの人間を巻き込んでいく。まさに今がその状況だった。

青春を見事なまでに拗らせている石上らしい考え方、というか思い込み。決して青春を謳歌しているとは言えない藤井からしても、それは極論の極論。最早、嘘の領域である。

「いやいやそんなことないよ。本当にそうなら、日本の少子高齢化社会は何なのさ」

「そ、それはそうですが……」

「色々つぶつ飛んでる考え方だから気にしないでいいんじゃないかな」

何を気にするといふのか。藤井は自分で言っておきながら、その発言に責任が持てなかった。思わず笑ってしまいそうになる。

「ですが、本当にそうでしょうか」

「本当にそうだよ」

「根拠はあるのですか」

「俺、ボクサーパンツだし」

「……ごめんなさい」

「うわぁー一番傷つく反応だなあ」

この日の生徒会室での出来事が、彼女の脳裏をよぎる。

元々男の下着に関心など無かった彼女だが、石上優のおかげで違う

意味で興味が湧いた。白銀御行が何を穿いているのか。ボクサーパンツであれば、彼女にとつてそれは大きなマイナス点。誰にでも手を出すヤリチンパンツマンなのである。

しかし当然の如く、藤井はその理論を真つ向から否定する。そんなことで決めつけられれば、彼のような童貞ボクサーパンツマンの立場が無くなる。身を切つて証拠を提示するも、彼女のリアクションは今年一番死にたくなるものだった。

「その理論を振りかざすのは石上君ぐらいだよ。白銀君に聞いても俺と同じことを言うと思う」

「……そもそも会長はヤリチンなのでしょいか」

「うーん、それは分かんないけど、そろそろヤリチンって言うのやめようか。周りに聞かれたら勘違いされるから」

「秀知院学園の生徒会長たる者が、ヤリチンだなんて許せません！」

「あーあーヤリチンの渋滞だ」

店内に客は少ないとは言え、年頃の男女が下品な言葉を言い合つていれば、それはまあ目立つ。藤井の背中に少しの視線が突き刺さるが、それをため息で誤魔化す。こういう場合、大抵男が悪くなる風潮を、藤井は初めて痛感する。

千花の話によると、白銀もこの場にやってくるとのこと。普段ケチな彼がこんなところに来ることは全く無い。かぐやの存在はもちろん、藤井に助けを求めたかったのだ。

白銀は白銀で、自らの好みのパンツを素直に答えただけ。それなのにヤリチン認定を受けたのだから、彼としてもやり場のない感情に苛まれていた。そこで千花の誘い。藤井にも声を掛けていると知り、彼の可能性に賭けた。生徒会の活動は終えていたが、野暮用に時間がかかったせいで、合流が遅れているのである。

「なら聞いてみようか。俺が白銀君に」

「よ、よろしいのですか」

「別に聞くぐらいどうってことないよ。同じ男だし」

かぐやからすれば、今の彼は神様である。自らが聞き出せなかったことをいとも簡単に聞こうとする。無論、藤井からすれば至って造作

もないこと。男子校の彼が気にするはずもなかった。

それからすぐ、千花と白銀が姿を見せた。二人を見つけると、千花は藤井の横に腰掛ける。となると、白銀は必然的にかぐやの隣に座ることとなる。こんなところにも藤井効果が出ているなんて、当の本人は知る由もないが。

「藤井くん、何の話をしてたんですか？」

「いやまあ……下世話な話」

「えっ!? もしかして恋バナですか？」

「違います。会長がヤリチンかどうかという話です」

「だから俺はそんなんじゃないって！」

先ほどとは違い妙に強気のかぐやに、藤井は思わず考える。

あれ、何かおかしなことに巻き込まれてしまったのではないか——。正解。大正解。百点満点の思考である。だがそれは今の話ではない。藤原千花と出会ってしまったあの日から、彼はすでに巻き込まれていたのだから。

隣に座っている千花からは甘い香り。隣り合うのは、タクシーで一緒に帰ったあの日以来二回目。その時とは違った匂いに、頭の奥からジンジンと痺れていく。

パチパチと頭の奥が鳴る。かぐやのアイコンタクトだった。白銀の方を見ると、彼女と目を合わせようとしないう。こんなことになったのだ。きつと生徒会活動で何かあったのだろうと察する。

しかし、先に口を開いたのは彼ではなく。

「会長つて黒のエツチなパンティが好きなんですよ〜」

「お、おい藤原書記！ 今言うことじゃないだろ……！」

「下世話な話してたみたいですし、いいじゃないですかあ。私だけに教えてくれたんですから」

「藤原さん、だけに……？」

言い方に含みを持たせるのが、藤原千花という女。その場の空気が面白いことになる狙っているのだから、大層性悪である。すぐさま白銀は否定するが、隣に座っている彼女はどうか。

藤井は身震いした。目の前には悪魔が座っている。この世のもの

とは思えない目で、藤原千花のことを睨んでいる。かつて石上優から言われた言葉。藤井の頭をよぎった。

「藤原さん。何故会長がそうだと知っているのですか」

「さつき教えてもらったんですよお」

「別にいいだろ……なあ藤井」

「まあ。誰しも好みはあるからね」

冷静な藤井に、白銀は安堵する。ここ最近の石上であれば、悪ノリしてきた可能性が高いだけに、マジレスしてくれる彼の存在は素直にありがたかった。

藤井としても、普段学校で話しているような内容なのだ。これぐらいなら毎日聞いているし、話している。三人が思っている以上に抵抗感はない。喫茶店の空気が痛いことを除いて。

「藤井くんはどんな下着が好きなんですか？」

「藤原さんもよく平気な顔で聞けるね……」

「いいじゃないですかあ。減るものじゃありませんよ」

藤原千花にとって、性の話をするのは普通のことである。生徒会にいと、どうしても四宮かぐやの無知さが目立ってしまうが、千花は決して無知というわけではない。人並みの知識は持っている。それ故に、下系の会話にもあまり抵抗感がないのだ。ただ経験が無いだけだが。

「それで、どんなのが好きなんですか？」

「んーシンプルなのかな。あまりゴテゴテしてるのは」

「そうなんですネ。それなら、今日私着けてますよ」

「……もうーからかうなよー」

「あはは。流石に引っかけりませんね」

「そうだよ。中学生じゃないんだからさ。そんなんで何とも思わないよ」

嘘大で興あ奮る。

この男、心の底から透視したいと神に願っていた。

藤原千花のようなタイプの人間が言う冗談。それが余計にエロスを醸し出すのである。突っ込んで怒られないような。

だが、それは地雷である。「え、じゃあ見せてよ」なんて言えば、その瞬間大爆発。四肢は爆散し、残るのは言葉のナイフにより傷だらけになった精神だけ。藤井の判断は正解誤魔化しなのである。

そんな二人の様子は、白銀とかぐやの目にも当然映るわけで。仲睦まじく話していることが、少し羨ましくもあつた。素直になれない二人は、そんなことで悩んでいることがどれだけ馬鹿馬鹿しいことか。

いや、二人にとってはそれが青春なのである。片方に告白させるという名目で進んできた恋愛頭脳戦。本気で相手を墮とすつもりではあるが、心のどこかでは、このやり取りを楽しんでいる自分もいるのだ。だから、中々やめられない。麻薬のような中毒性のあるもの。それが二人の青春。

「でも意外ですね。藤井くんはもつとゴテつとしたモノが好きなイメージです」

「どんなイメージだよそれ」

「確かに。ムツツリそうだな」

「うるさいぞ黒パンティ」

なんだかんだで、白銀と藤井の距離もかなり縮まっていた。千花を通じてメッセージのやり取りをすることも増え、こうして直接会う機会もかなり増えた。最近は彼の店に行けてない分、残りの無料券を使う時を心待ちにしているぐらいだ。

かぐやは、最初こそ二人が仲良くなるのは気が引けた。白銀が自らの陣営に彼を引っ張り込むのを嫌がって。しかし今のところ、かぐやと藤井の関係に陰りは無い。むしろ、今この瞬間のように白銀の情報聞き出してもらうことだって可能なのだ。下手なことをしない限りは黙認する構えだ。

「それはそうと、藤井くんが会長に聞きたいことがあるみたいですよ」
痺れを切らしたかぐやが、渾身のパス。キラーパスである。

男同士、どんなパンツを穿いているのか聞くことぐらい造作もない。しかし、これまでの話の流れから見れば、変な前置きをされたことで白銀も身構える。そこまでして聞く内容ではないというのに。

「白銀君ってどんなパンツ穿いてるの？」

だが、そこは男・藤井太郎。気にする素振りを見せずに問いかける。肝心の白銀は鳩が豆鉄砲喰らったような顔をしている。それもそうだ。そんなどうでもいいことを聞かれると思っていなかったからだ。しかし、白銀は考える。話を振ってきたのは四宮かぐや。藤井ではない。つまり、彼は彼女に誘導されているのではないか、という可能性に行き着いた。天才・白銀御行。伊達にかぐやと頭脳戦を繰り広げていない。

としたら、この問いかけにはどういった意味があるのか。もしかしたら、ヤリチンという言葉に関係があるのではないか。思考を巡らす。脳みその中で血液が凄まじい勢いで循環していく。だがあまりにも情報が少なすぎる。ここで下手なことを言えば取り返しのないことになりかねない。

「……トランクスだが」

白銀は自信なさげに答えた。ここまで自信のない彼も珍しい。それだけ質問の意図が読めなかった。

そんな神妙な面持ちで答える話題でもない。藤井からすれば笑いが出てしまいそうになる。しかし、目の前の彼女を見るとその気も無くなる。

心の底からの安堵。白銀御行という人間は、そんな奴じゃない。それが証明されたようで、自然と頬が緩んでいた。

あれだけ理論を否定した彼でも、彼女を納得させることが出来なかった。結局は、白銀御行自身の言葉。それだけでも、彼女が彼に何かしら特別な想いを寄せていることが分かる。

「おめでとう。君はヤリチンじゃないよ」

「だからなんでだよー」

「ね、四宮さん」

彼女はうなずき、冷たくなったであろう紅茶を口につけた。何のことだか分からない白銀だったが、かぐやの口から忌々しい言葉が出てこなくなったところを見て、胸を撫で下ろした。

話についていけなかった千花だったが、藤井からボクサーパンツの件を聞くと、呆れたように苦笑いを浮かべていた。

「別にボクサーパンツでもヤリチンじゃないんですけどね」
「藤原さんそれは今言っちゃいけないよ」
二人は笑いながら、青春を謳歌する二人を見つめていた。

藤原千花は行ってみよう

「体育倉庫って雰囲気ありますよねえ」

朝晩の風が少しだけ冷たくなってきた頃。藤井太郎は自室で藤原千花からそんなことを言われた。電話越しに。

学校の課題を片付けていた彼女にとって、彼女からの突然の電話は決して都合の良いモノではない。ただ、課題に嫌気が差していたのも事実。休憩にいいだろうと、目の前の現実から目を背けたのである。

藤井的にも、何かしらの用があつて電話を掛けてきたと考えていた。だというのに、挨拶もそこそこ。いきなりそんなことを言われたのだから、彼としても何とリアクションするのが正解かは分からなかった。

「いきなりどうした」

「だっていいじゃないですかあ。薄暗い体育倉庫で男女二人きり……憧れます」

「まあ……否定はしないけど」

右手でペンを回しながら、左耳から聞こえる彼女の言葉を聞き流す。中々本題に入ろうとしない。しかし、少し考えると分かる。きっとこれが彼女にとっての本題であるということ。この電話に深い意味なんて無い。

それを分かってしまった藤井は悩んだ。このまま電話に付き合えば結構な時間になってしまう危険性。決して楽しくないわけではないが、今は課題の方が重要。適当に受け流して話を切り上げるのがベターだ。

ところが、そう言ったことには妙に鋭いのが千花。電話越しではあるが、彼があまり興味を持っていないことを察してしまう。この興奮を誰かに伝えたいと思いついたのはいいが、それを気軽に言える相手は限られている。特に、今回は白銀やかぐやに話せる内容ではないの

だ。

何故なら、彼女は聞いたのだ。同じ生徒会の伊井野ミコから。体育倉庫で白銀御行が四宮かぐやを押し倒していた、と。漫画のような出来事が現実で起こるのだから、元々恋愛脳の千花にとって、それはとてもとても甘い蜜のように感じられた。

「もし藤井くんがそうになったら、女の子を押し倒しますか？」

「そんなことしないよ。無理矢理っていうのはちよつと」

「では、女の子の方が誘ってきたらどうしますか？」

「……まあ押し倒すかもね」

「それが本音ですね。一言目は建前です」

「……………」

となると、話し相手は必然的に限られてくる。交友関係は広い千花であったが、電話を掛けることに抵抗感のない相手となれば話は変わってくる。普段は普通に話せても、電話になるととどろしくなる友人も少なくない。その点、藤井太郎は気軽に話せる人種であったのだ。

そして、その彼が油断したところに針を刺す。

こうすることで話を聞く姿勢になってもらうのが狙い。藤井としては、男の本音を言い当てられて何とも複雑な感情。千花の声色は怒っているわけではないが、話を聞かないと後々面倒なことになりかねない。止むを得ずテキストを閉じ、ベッドに横になった。千花の狙いに乗ることになってしまったが、仕方がないと自分に言い聞かせて。

白銀とかぐやの件については、後々誤解は解かれることになる。しかし満更でもなさそうな二人の顔が、千花は印象的だった。

特に、かぐや。中等部からの付き合いであるが、あんな色っぽい顔をした彼女は見たことがなかった。押し倒される、いわゆる床ドン。あの彼女を変えてしまうほどの力がある、魔法のような。一度でいいから味わってみたいというのが千花の本音である。

「——で、本題は？」

「本題ですか？ 特にありませんけど」

「え、体育倉庫の話だけ？」

「……何も無かったら電話しちゃダメなんですか？」

「いや……その言い方はズルいよ」

千花は自室の広すぎるベッドの上で横になって話していた。

彼の言い方。ついつい意地悪を言ってしまう。苦笑いする藤井に、彼女は若干の申し訳なさを覚えた。

足をパタパタを動かす度に、ベッドの衣擦れの音が部屋に響く。それはもちろん、藤井にもしつかり届いている。それが妙な色っぽさを醸し出す。まさにプライベートの彼女を覗いているような気がして。

「そう言えば、もうそろそろ体育祭の季節ですね」

「俺らは再来週。毎日毎日練習だよ」

「男子校の体育祭ってどういう感じですか？」

「共学には無い馬鹿らしさと盛り上がりがあるかな」

男子校の祭典、体育祭。

共学では出しきれない迫力ある演目、競技。地元では根強い人気のあるイベント。

だが、当の本人たちにはその自覚は無い。あるのは邪な考え^{よこしま}だけ。もちろんそこには、他校の生徒たちが観戦に来る。普段、男だけしかない校舎が黄色い歓声に染まる一年でも数少ない日。それはそれは男たち、テンション爆上げ。ナンパする勢いで女子高生を眺めている。……なんてことは千花に言えるはずもない。

「ねえねえ、行ってもいいですか？」

「体育祭に？」

「楽しそうじゃないですか。私、他校の体育祭に行ったことないんです」

藤井は返答に困った。

彼的に来てもらうことは全然問題が無い。しかし、いかんせん男子校。秀知院学園しか知らない彼女には少々刺激が強い可能性があるあった。

いや、それより。彼女がグラウンドに来た瞬間から、男子どもの視線を集めるに違いない。制服ではなく、私服姿の彼女。その破壊力は

藤井はよく知っていた。大袈裟ではなく、学校が混乱する危険性が高いのだ。それぐらい、男子校というのは馬鹿で真っ直ぐなのである。

「あまりオススメは出来ないかなあ」

「どうしてですか？」

「だってほら、藤原さんみたいな可愛い人が来ると変な意味で盛り上がるから」

したがって、ふんわりと断ることにした。ただ彼の言うことは紛れもない事実。嘘をついているわけではないため、藤井としても罪悪感が無かった。彼女のことを考えて、である。

しかし、これに納得しないのは藤原千花。誰でも気軽に足を運べる体育祭というイベント。「来ても良いよ」を期待していただけに、彼の言葉は彼女の耳に届かない。それがどれだけ彼女のことを思った言葉でも。

「そんな理由は聞き入れられません！ 私は一人でも行きます！」

「止めた方がいいよ。マジでナンパされると思うし」

「ばつちこいですよ！」

「女の子がそんなこと言わないの」

藤原千花という人間は、周りが思っている以上に頑固者である。自分が好きなこと、気になったことはトコトン突きつめる。長続きするかどうかは置いておいて、今の彼女はそんなゾーンに入っていた。

加えて彼女は、かなりモテる。現に秀知院学園に通う多くの男子生徒から告白された経験がある。だが、彼女に告白してくる男子も中々の変わり者が多い。千花が適当にあしらえば、それを真に受けて踵を返すことがほとんど。

しかし、秀知院学園の外に出れば話は変わる。藤井が止めたように、中々ゲスなことをする男も多いのだ。それを知っているからこそ、彼の口は素直に受け入れることが出来なかった。

「じゃあ、こうしましょう」

「なに？」

「藤井くんが私のボディガードになってください」

そうして、こんな言葉を恥ずかし気もなく言ってくる。

男からすれば「あざとい」と感じる言葉。しかし藤原千花という人間は、このフレーズを自然に扱うことが出来る希少な人種である。グツと来ない男はこの世の中に居ない。

藤井は頭がグラつくのが分かった。電話越しでも分かるその威力。電話越しで良かったと心の底から安堵した。対面していれば、二つ返事でうなずいていたに違いない。

電話の分だけ冷静な彼。ボディガードと言われても、藤井もいくつか競技に出場することが決まっている。そもそも、自らのチームで固まっておく必要があるのだから、一日中彼女に付きつきりになるのは不可能だった。

「それは無理だよ。俺だって競技出るし」

「だったら普通に観に行きます！」

「……本当に？」

「ほんとにホントです」

「そっかあ。ならいいんじゃない」藤井は背伸びをしながら答える。諦めが混じったような間抜けな声になってしまった。しかし、千花は特に何も言わない。彼女は彼女で、違う思考を巡らせていた。

あれだけ止めてきたのに、投げやりになった彼。まるでもうどうでも良くなったような印象を受けたのである。藤原千花。それはそれでごく不満なようで。

「藤井くんは私が連れ去られてもいいんですか？」

「だから来ない方が良いつて言ったじゃん」

「そもそも、どうして藤井くんは止めたんですか。別にいいじゃないですか」

面倒なタイプの女であるが、千花の問いかけも、実はかなり核心に迫ったモノ。それは藤井が一番よく分かっている。

何故？ 止める必要なんてないじゃないか。その通りだった。一友人の彼女が何処に行こうが何しようが、藤井太郎には一切関係の無いこと。

でも、純粹に千花のことが心配だった。彼女が変な男に引つかからないか。ただそれだけ。深い意味は一切無い。マセたことを言うく

せに、ピュアな心を持った藤原千花という女の子が、とにかく心配で心配で。

「心配したら駄目なの？」

「……駄目ではないです」

「俺は心配なんだよ。純粹に」

「何が、ですか」

「藤原さんが変わってしまうのが」

上手い言葉が見つからなかった藤井。やんわりとした発言に留めた。しかし、千花にはしっかりと届く。

変わってしまうのが心配。言い換えると、変わって欲しくない。今のままで良い。そう言われている気がして、胸が暖かくなる感情。そのままでもいいなんて、ここ最近両親にも言われてなかった言葉。ずっとずっと昔に言われたような気もする。だけど、今はそんなことどうでも良かった。

嬉しかった。素直に、彼の心遣いが。本当に心配してくれているんだと心に染みる優しさ。自然と口が緩んでしまう。

「藤原さんは変わらない方がいいから」

「……どうしてですか」

「だって、君は、その——」

本来なら交わることなかった二人。生きる世界が違った二人。

日に日に関係が近くなっているのが、本人たちも分かっていた。無意識のうちに。だからこそ、藤井は思った。「彼女が庶民に染まってしまうのはいけない」と。千花の家柄は、彼が思っている以上に名家。それはこれからも変わらないであろう。

だから、怖かったのだ。藤原千花とこれ以上仲良くなってしまうのが。一線を引いていないと、彼女はドンドンこちら側に染まってくる。現に今だってそうだ。縁もゆかりもない男子校の体育祭に来ようとしている。

それも全て、藤井太郎と出会ってしまったから。彼がいなければ知らなかった世界。親の引いたレールの上を歩いて来た千花にとって、それは眩しくて眩しくて。もつともつと、沢山知りたい感情が止めら

れない。だから、藤井に甘えてしまう。それを、彼は受け入れてくれる。

「俺とは生きる世界が違うから」

事実。事実なのだ。だからここで突き離すのが、自分にとっても、彼女にとっても幸せなこと。

店に来る分には良い。何処かで話す分には良い。だけど、こちら側の生活に染まってしまつては駄目だ。高校生なりの彼の優しさ。しかし、藤原千花と藤井太郎。ラーメン屋で出会った時点で、それはもう遅いのである。

「——そんな風に思っていたんですか」

「……いや」

「…生きる世界は一緒です。私は藤井くんと同じ時を生きてます」

「………うん」

「友達、ではないんですか」

藤井は、何も言えなかつた。あからさまに彼女の声は落ちる。

一方の千花は、フワツと浮いたような感覚。まるでジェットコースターに乗っているような気分だつた。あんな優しい言葉の本音がこういうことだつたなんて、信じたく無かつた。

だが、藤井の優しさであることには変わりはない。決して突き離したくてこうしているわけではないのだ。だから、だから、心には千花が付け入る隙だらけなのである。

「……友達に決まつてる」

「分かつてます」

「……」

「何か言うことありませんか」

「……ごめんなさい」

「普段の優しさに免じて、許してあげます」

だからこうして、すぐ彼女に気を遣つてしまう。

いや、当の本人は気を遣つているつもりなんて無い。純粹に、笑っている藤原千花が好きだつた。魅力的だつた。男として、落ち込んでいる彼女よりも元気を振りまく藤原千花で居て欲しいという願望が

強かった。

彼の思い通り、千花は笑って許してくれる。心から安心したような声をしている。彼女もまた、彼から突き離されることが怖かった。彼の言う「生きる世界が違う」という発言も理解できる。そうやって、周りのことを考える人間ばかりだから、秀知院学園に通う生徒は。

藤井太郎も、立場は違えど彼らと同じ悩みを抱えていた。それでも、自分に素直になってくれた。それだけで、彼は千花にとって友達と呼べるにふさわしい人物なのである。

「……体育祭、おいでよ」

「変わって欲しくないんじゃないですか？」

「変わらせないために、良い案を思いついたから」

「何ですかそれ〜？」

気が付けば中々の長電話になっていた。電話越しの彼女は若干眠気が襲って来ていたこともあり返答が雑になっていた。それを察した彼は電話を終わらせるように言うのと、彼女は素直に従った。

電話を終え時間を見ると、夜の十一時過ぎ。彼は迷ったが、再びスマートフォンを右耳に当てた。期待半分に待っていたが、電話の相手は普通に応答する。

「いきなり悪い。ボディガードを依頼したいんだ」

電話の相手はあまりにも唐突な発言に驚く。藤井が事情を説明するとため息をつきながら彼の提案を受け入れた。「四宮かぐやを誘う」という交換条件で。

やがて短い電話を終えた藤井。閉じたままのテキストを見て課題のことを思い出す。時間も時間も明日の朝やるかと諦めて、そのまま目を閉じた。

藤原千花は眺めたい

藤井太郎の通う桜川高校。その体育祭の日がやって来た。

例年のように、保護者や観客で大きな賑わいを見せている。勿論、女子高生も多く足を運び、イケメンを見つけようと躍起になっていた。

彼女持ちの男子生徒は、手作り弁当をニヤケながら頬張り、非リア充の羨望の眼差しを受けながら昼休みを過ごす。日常でありながら、どこか非日常を過ごしているようで、全員が浮き足立っていた。

その中で、藤原千花。初めて他校の体育祭を目の当たりにし、世の中が広いことを痛感していた。比較的地味な服装の彼女。それでも隠しきれないその美貌に、すれ違う生徒たちの視線を集めていた。

そんなことはお構いなしに、藤井の姿を探す。午後の部が始まるまでまだ時間はある。その前に彼と話したかった。

「確かに、秀知院とは全く違いますね」

「良い視察になりそうだな」

「ええ、本当に」

白銀御行と四宮かぐや。

二人も千花に並んでグラウンドを歩いていた。白銀に関しては、千花のボディガードという名目であるが、こうしてかぐやとイベントを回れる楽しみもあった。

無論、かぐやを誘ったのは白銀ではない。交換条件として、藤井から彼女に声を掛けてもらったのだ。他校の体育祭視察という名目で。最初は難色を示していた彼女も、白銀が来ると聞けば一転。早坂愛に事情を説明し、この日まで漕ぎ着けた。それは千花も同じ。幸いなことに両親には「かぐやと出かける」と伝えれば自然と納得してくれる。他校の体育祭を観に行くだけなのだが。

となると、千花にとって白銀の存在は有り難かったのだ。一般家庭

で育った彼がいるだけで、自分がこの場の雰囲気にも馴染んでいくように思えた。浮くことなく、自然と藤井に会える。

「あつー！ 藤井くーん！」

昼食を終えた生徒たちは、クラスのテントで各々駄弁っている。男しか居ないそこは、見ているだけでむさ苦しい。制汗剤の臭いが混ざっていて、案外暑苦しさはない。

名前を呼ばれた彼は、頬を赤く染めていた。照れているわけではない。単純に日焼けをしているだけ。この日はかんかん照りなのだから仕方がない。ただ、周りはそうはいかない。

自分たちと歳の近い可愛い女の子が名前を呼んだのだ。騒つく。「おいおい」「マジかよ」「裏切り者」なんて言葉があちらこちらから聞こえてくる。微笑ましくもあり、悲しくもあった。

「太郎、お前彼女居たのかよ」
「違う違う。友達」

変な誤解を招くのは互いにとって不幸。そう言いながら彼は千花の元に駆け寄る。ここじやなんだからと白銀たちと一緒に少し離れた場所まで歩くことになった。

「本当に来るとは思わなかったけどね」

「いいじゃないですか。会長とかぐやさんが居るんだし」

「ああ。思っていた以上に楽しんでるぞ」

「他校の体育祭を見るのは新鮮ですから」

しっかりと日焼け止めを塗っているとは言え、かぐやの白くて美しい肌は男子校には似合わない。白銀も今日は私服。学ランは暑苦しいから止めてくれと藤井から頼んだのだ。

グラウンド全体で見ると、かなり活気がある。トラックの周りは生徒のテントで埋まり、視線は自然とトラックの中心に向けられる。

だがそれ以外の場所には、あまり人気のないポイントも幾つか存在する。あまり目立つのもアレだ。自然と藤井の足はそちら側へ向かう。

「どう？ ウチの体育祭」

「すごく楽しいですつ。まさに男子校ですね」

「石上君は来れなかつたんだ」

「ええ。伊井野さんも都合が悪かつたらしくて」

石上とは、あの日以来面と向かつて話していなかった。藤井としては別に気まずさは無かつたものの、石上はやはり申し訳なきがあつたらしく。メッセージでたまにやり取りをするぐらいで、微妙な距離感が生まれていた。

伊井野に関しては、藤井はあの日以来会っていない。そもそも白銀たちは、二人に接点があることを知らない。藤井も、風化委員の彼女が伊井野ミコだという事実には気付いてすら居ない。いずれにしても、今日は彼女が居なくて正解なのである。

藤井からは体育祭に相応しくない石鹸の匂い。ついさつき使った制汗剤の香りだった。彼もまた年頃の男子高校生。ラーメン屋では見せない一面を見た気がして、千花はフワツとした感覚に陥った。

「藤井は午後の部で何か出るのか？」

「いや、生憎何も。後は観戦するだけ」

「午前中は沢山出てましたもんね」

「お、見てくれた？」

「バッチリですよ」

大した活躍はしていなかつたとは言え、こうして見てもらうことは気分的に悪くない。笑う彼女を見て、なんだかんだで楽しんでくれたのだろうと察する。

藤井としても、後は競技を見て応援するだけ。午後の部から始まるまでにテントに戻ればいい話。

だが、白銀は一つの案を思い付く。

「なら藤原書記のことを任せてもいいか？」

「えっ？ 白銀君は」

「まあ少しづらついで帰るよ。なあ四宮」

「え、ええ……そうですね」

こうすれば、至って自然に、四宮かぐやと二人きりになることが出来る。藤井が午後の部に出ないと聞いた彼の咄嗟の判断。かぐやとしても、白銀から誘われることに嫌な気はしない。今の段階で帰る気

は無かったが、ここは話を合わせておいて損は無いと判断した。

これに困ったのは藤井だ。彼としても、もうすぐテントに戻る必要がある。千花と一緒に連れて行くわけにもいかない。かと言って、一人放り出すのも気が引けた。

「なら藤原さんも——」

「私はもう少し見てから帰りますっ」

「だつてさ。藤井、頼んだぞ」

「……参ったな」

非情にも見えるが、白銀としても藤井太郎という男を理解しているつもりだった。ああ言いながら、しっかりと彼女のことを考えている。そして最善の選択が出来るタイプの人間だと。

それはそうと、白銀。四宮かぐやと二人きりになったことで心臓の鼓動が早まって早まって仕方がない。隣に居るかぐやもそう。そんな二人の後ろ姿を眺めながら、二人は立ち尽くす。

「……藤井くんはもうそろそろ戻らないとじゃないですか？」

「ま、まあ……」

「さつき言いかけた言葉、分かります」

「……」

「……」

二人きり。正確には周りに人がいるため二人だけではない。それでも、彼らからすれば周りの人間なんてどうでもいい。今は目の前にいる相手のことだけを見ていた。

だからこそ、藤井は言いかけた言葉を悔やんだ。「なら藤原さんも一緒に帰ったら？」なんて、来てくれた彼女の厚意を踏みにじるだけ。先日の電話だつてそうだ。彼女をイラつかせてばかり。

「……ごめん」

「別に怒っていません」

嘘、である。

藤原千花は、自分でもよく分かっていた。このイラつきの正体がなんなのか。

自分のことを放って帰ってしまった二人に対してか。違う。

目の前の彼に対してか。違う。

自分自身の面倒さに対してか。それも違う。

二人の距離感が近くなっている。それは本人たちも理解している。友達だからこそ、電話の件も、さっきの発言も、千花は良い気分はしなかった。だけど、彼の発言の真意もよく分かった。

ただ単に突き放しているわけではない。自分のことを考えてくれている。だから、余計にイラついた。

そんな目の前の彼女を見て、彼は戸惑う。見慣れた笑顔の藤原千花ではない彼女。時折見せる寂し気な彼女。引っ張り出さないと深い沼に嵌まり込んでしまいそうな。

彼の視界には、男子生徒が千花を見て何かを話している。ここで自分が離れれば、声を掛ける気なのだろう。藤井は察した。だから、彼は手を伸ばした。

「藤原さん。こっちで話そう」

「えっ……！」

藤原千花の細い手首を、彼は優しく掴んだ。そして、少しだけ強めに彼女を引っ張る。その足は校舎を向いている。もう昼休みも終わる頃。校舎の中には生徒もそんなに居ない。二人で話すのなら最適な場所であった。

静かな校舎の中。階段を一つずつ登っていく。その間も、彼は彼女の手首から手を離さなかった。校舎の中を靴下で歩くなんて、秀知院学園では下品な行為に当たる。しかし、藤井と一緒に居るとそれすらも気にならない。

引っ張って引っ張って、自分の知らないところに連れて行ってくれる。千花にとって、彼のその行為は心にグツとくるものがあったらしく。足元だけを見て素直に彼の後に続いた。やがて、屋上。靴を履き、続く扉を開いた。

校舎の屋上には、意外と誰も居なかった。

体育祭などイベントごとでは抜け駆けする生徒が多いとの噂だった。かと言って屋上を締め切ることもしない。適当と言えば適当な学校である。

だが、誰も居ないのならそれはそれで都合が良い。ベンチも何も無い一面コンクリートの地面。太陽の熱を浴びて地上よりも暑く感じられた。

藤井は彼女から手を離し、唯一影になっっている場所に誘う。どうせ長居するわけでも無い。ここまで来たのだから、と。千花も素直にそれに従った。

「いいんですか？ 私部外者ですけど……」

「バレなきやいい。バレても俺がなんとかするから」

「……ふくん」

「な、なにその目は」

「藤井くんって意外と強引なんですね」

「……強引なのはお嫌いですか？」

「いいえ。そんなことはありませんよっ」

ルンツとステップを踏みながら笑う彼女を、彼もまた笑って見つめ返す。

千花はグラウンドを見下ろす。先ほどよりもハッキリと中心が見える。ここはある意味特等席だった。しかし、長い時間陽に当たるのも辛いものがある。すぐに影のある場所に戻る。

「秀知院の校舎とは全然違いますね」

「そりやそうだよ。金持ち高校なんかじゃないし」

「そういう意味ではありません。雰囲気が全然違っってことです」

「男子校だからね」

「でも、新鮮ですよ」

女子が男子校に足を踏み入れる機会なんて、相当限られてくる。千花の発言も確かにその通りであった。それは藤井も同じ。今年で二回目の体育祭であったが、まさか女の子と過ごすことになるなんて思ってもいなかった。

本当の意味で二人きり。屋上は風が強く吹いている。その都度、彼女の髪の毛の香りが鼻を刺激する。甘くて切ないその香り。藤井は心臓の鼓動が高鳴るのが分かった。

違う高校の友達が、自分の学校に居る。この不思議な感覚は生まれ

て初めて感じたモノ。加えて、本来は交わることなかった彼女。複雑で繊細な思いが胸の奥に絡まっていた。

「……藤原さんと同じ学校だったら楽しかっただろうな」

「どうしたんですか、急に」

「……いや忘れて。なんでもないよ」

「忘れません。そういうことはずっと覚えておく主義ですのー!」

「なんだよそれ」

藤原千花という人間は単純である。素直に褒められたと思えば、そのことをずっと覚えていて。裏を返せば、悲しいこともしばらく引きずってしまいうタイプでもある。その都度、笑って自分を誤魔化してきた。

今この瞬間。素直に嬉しかった。満面の笑顔で、彼のことを見る。釣られて笑ってしまう藤井。千花にとっても、彼の笑顔はまた特別なものになりかけていたのである。

藤井としても、決して冗談なんかじゃない。男子校が楽しくないわけではないが、藤原千花と同じ学校に通うことを考えて、少しでも羨ましく思っただけ。ただ、それだけ。

「綺麗な青空ですね」

「そうかな?」

「もうっ。ここは素直に頷いておけばいいんです」

「あはは。それは失礼しました」

グラウンドでは午後の部が始まっている。歓声が少しだけ。

空を見上げる藤原千花に、藤井は見惚れていた。本当に綺麗な顔をしている彼女。こうして見ても、本当に自分とは釣り合わない存在なんだと痛感することになる。

だが、彼はもう少しだけ彼女を見つめていたかった。こうして独り占め出来ている時間も、もう終わるのだから。もう少しだけ、もう少しだけ、と。自分に言い聞かせて。

「……藤井くん」

「なに?」

「……どうしてここに連れて来てくれたんですか?」

千花は、空を見上げながら問いかける。
どうして、と言われれば。彼は考える。

一つは、彼女を一人に出来なかった。

一つは、彼女を守りたかった。

一つは、彼女と一緒に居たかった。

心の中で、藤井は苦笑いする。どれも理由としては重くて言いづらい内容であることには間違いない。

だが、ここで嘘をつく理由なんてあるのだろうか。彼は自問した。どれも自分の真意であることには変わらない。

「二人で話したかったから」

「……そう、なんですね」

「ご不満ですか？」

「いいえ。とんでもないです」

あれほどイラついていた心が、スーッと鎮つていく。

適当に誤魔化していない、彼の本心。それが聞けたから。彼女はまた空を見る。所々に白い雲。絵具で描いたような分かりやすい形をしている雲が沢山。

彼には、嘘を吐かれなくなかったのだ。素直に悲しくなるから、本心で話してほしい。そんなワガママな感情が湧いた。でも、きつと藤井太郎という男は、これからも優しい嘘を吐く。藤原千花のために。

「そろそろ降りようか。暑くなってきたでしょ？」

「もう少しだけ、駄目ですか」

「……そんな目で見ないですよ。反則」

「えへへ。いいじゃないですかあ」

「分かった。あと少しだけね」

一人になると考えてしまうから。

自分の力じゃどうにも出来ないことを考えてしまうから。

体育祭のことなんて、実はどうでも良かった。藤原千花は自分に嘘を吐くように、もう少しだけ藤井太郎の隣に居座りたかったのである。

藤原千花は誘いたい

桜川高校の体育祭が終わり、藤井太郎にも日常が戻ってきた。彼の両腕はまだ日焼けの跡が新しい。ポロポロと皮が剥けていくのは少し先になりそうだった。

学校を終え今日もまた、ラーメン天龍での手伝い。皿洗いをする彼の後ろ姿を眺めながら、学校帰りの藤原千花は頬杖をついていた。ご機嫌ナナメの彼女。手元には何周目か分からない「壁ドン・ロマンス」の六巻が置かれていた。最新刊が待ち遠しかった。

「会長って本当に酷いです。すぐかぐやさんに乗り換えて」

「だから乗り換えたわけじゃないでしょ。元はと言えば藤原さんが突き放したんだから」

「石上くんみたいな正論やめてください」

「そう言われてもね……」

千花がおかんむりな理由。それはなんともまあくだらないこと。

彼女は時折、白銀御行専任の鬼コーチと化する。勉強に関しては右に出る者がいない白銀だが、基本的なセンスは壊滅的。運動や音楽といった芸術系を苦手としていた。

だがそれは、常に完璧を求める彼女にとって死活問題。特に生徒会長としての立場を意識しすぎるが故、練習もトコトン突き詰める。その都度、千花は付き合わされてきた。そしてそのたびに思う。これっきりだと。

そう言いながら、彼女は弱っている男に弱い。白銀が子犬のような目をすれば、すぐに前言撤回するレベル。そうやってこれまで練習に付き合ってきた。

そんな彼が体育祭の演目、ソーラン節を練習したいと言ってきた。これまで通りまあ酷い出来だったのだが、千花は面倒事に巻き込まれたくないと白銀を突き放した。

すると彼は、四宮かぐやに教えを乞うようになった。千花からすれば、見事な乗り換えである。それだけで激怒する理由に値する。そう思っているのは彼女だけだが。

「まあ結果的に上手くなったならいいじゃん」

「よくありません！ 私としてはすごく複雑なんです！」

「（めんどくさ……）」

皿洗いを終えた藤井は、水道の蛇口を締め、濡れた手をパツパツと払う。向かい合う彼女は、中々に拗ねている。

藤原千花は中々に独占欲が強い。一度、白銀御行を育てた経験があるからか、彼に対してある種独特な感情を抱いていた。決して恋心ではないが、別の人から教えを乞う様子を見るだけでイラついてしまう都合の良い独占欲が。

そんな話を聞いたところで、藤井にはどうすることも出来ない。出来るのはただ愚痴を聞くことだけ。ラーメン屋に来ておきながら、最早ラーメンを食べなくなった彼女は、客でも何でもない。側から見れば冷やかしである。だがそれは、千花がここに来る理由が大きく変わったことを意味していた。

「今『めんどくさい』って顔しましたね」

「してないしてない。そうやって八つ当たりしないの。ラーメンでも食べて元気だしなよ」

「太っちゃうので要りません」

「それラーメン屋で言う？」

彼女の神経の凶太さが垣間見えた発言。藤井は苦笑いするしかなかった。そんなことが気にならないほど、千花は落ち込んでいた。

だが千花が会いに来てくれること自体、彼は嫌ではなかった。むしろ嬉しい。夕方の暇な時間帯。静かな店内が賑やかになるのだ。店主も悪い気はしない。ラーメンを食べてくれれば完璧なのだが、彼女の発言。注文されることはないだろうと、店主は店の奥へと消えて行った。

「そう言えば、秀知院の体育祭って今週だったっけ」

「そうです」

「はあ。まだ拗ねてるの?」

「拗ねてません」

「可愛いお顔が台無しだよ」

「……思つてないくせに」

「割と思つてるよ」

「何ですか割りとつて。素直に思つてるでいいじゃないですか」

「冗談だつて」

言つたところで、彼女の気が晴れるわけではない。だが、言われな
いよりは幾らかマシなのも事実。男子に人気のある彼女だったが、男
から面と向かつて「可愛い」と言われたことはあまり無かったりする。
そう考えると、損した気分にはならなかった。

「秀知院の体育祭つてどんな感じ?」

「桜川高校とはまた違った雰囲気ですよ。賑やかで」

「そうだよね。女の子も多いし」

藤井は納得したように笑う。賑やかと言つた彼女の言葉がしつこ
りと来たらしい。確かに、男子校は賑やかというより「うるさい」の
方が当てはまる。

高校に入ってから一度も他校に行つていない彼にとつて、秀知院学
園の体育祭は純粹に興味のあるイベントであつた。かと言つて、行く
ことには若干の抵抗。校門前で名も知らぬ風紀委員にぶつけられた
言葉が蘇る。またあんなことになる可能性は無きにしもあらず。知
り合いがいると言つても、先日の藤原千花と同じ状況になりかねない
のだ。

「だったら来てくださいよ! 楽しいですよ」

話の流れから言えば、彼女の提案は至つて普通である。

「どう?」との問いかけに対して、悪い反応を示さなかつた藤井。
きつと興味があるのだろうと察するのは彼女に限つた話ではない。

「どうしようかなあ……」

話の流れから言えば、彼の反応は可笑しいのである。

「興味がある」風を装つただだのリアクションであると自ら言つて
いるようなもの。少なくとも、千花は良い気はしない。ジトつと湿つ

たような視線で藤井を見る。

「来たくないんですか。私がお誘いしてるのに」

「いやそういうわけじゃないんだけど……」

「女の子の誘いを断る藤井くんには天罰が下りますよ」

「怖いこと言わないで。割とマジで起こりそうだから」

藤原千花と出会ってから、冗談が冗談に聞こえなくなってしまう。特に四宮かぐやの存在が、彼の心にしっかりと爪痕を刻み込んでいる。白銀とは違い、精神的に降伏させようとした彼女の行動はある意味正解だったのだ。悲しいことに。

「そもそも他校生って来るのかなって。ほら、敷居高そうだし」

彼の発言に千花は「あーっ」と謎の納得を見せる。

「確かにあんまり見ないですね。でも来たら駄目とかじゃないですよ」

「そうなんだ。けどなあ」

「可愛い女の子も多いですし」

「ふーん。行こうかな」

「……」

「……あ、いや。そういう意味じゃなくて」

「何も言ってますけど」

何事にもタイミミングというものは重要である。

この場合、千花の目にはただの「女好き」にしか見えない。無論、彼がそんな人間でないことは彼女も理解している。しているが、思い切り藤井の頬をつねってやりたい気分だった。

彼には千花の痛い視線が突き刺さる。ナイフよりも強烈な視線。これまでなら軽口で済ませることが出来た言葉も、不思議と今はそれを許さなかった。

「女の子目当てで来るなら来ないで下さい」

「言い出したのは藤原さんだけだね」

「何ですか」

「いえ何も」

「……藤井くんは意地悪です」

「なんでさ」

「なんでもです」千花は誤魔化すように言う。

妙な気まずさが二人を包む。千花はともかく、藤井はそれをヒシヒシと感じている。何か不味いことを言ったわけではない、いつものように彼女が勝手に拗ねているだけだ、と。言い聞かせる。

「でもせっかくだから行ってみたいいな」

「好きにしたらどうですか」

「冷たいなあ。藤原さんの応援に行きたかったのに」

「……やっぱり藤井くんは意地悪です」

自身の応援に行きたい、そんなことを言ってくれる人間はどれだけいるだろう。千花は考える。

両親は毎年顔を出してくれている。でも、学年を重ねていく毎にそれは応援とは呼べなくなっていた。カメラにその様子を収めてはいるが、応援と言われたら少し違うモノ。他の子と同じように少しはだけた服装をしていれば父親に注意され、納得いかないながらもその都度本心を噛み殺してきた。

ただ仲が悪いわけではない。彼女は父親と母親のことを尊敬している。二人のおかげでここまでやって来たという事実をしつかりと理解していた。だから、素直に反抗出来ない自分が情けなくもあつた。

この藤井太郎という男は、自分が知らないことを沢山知っている人間。千花の認識は初めて出会ったあの日から大きく変わっていた。だから、こうして店に通うようになったのだ。

「藤原さんはソーラン節と何に出るの？」

「あとは……障害物競走ですね」

「へえ。意外だね」

「そうですか？」

「俺たちとほとんど変わらないっていうか。もっと上品なイメージ」

「あはは。そんなんじゃないですよ」

彼の秀知院学園に対する偏見。白銀たちと触れ合うようになって少しずつ変わりつつあるが、それはあくまでも彼らに対しての話。学

校に關してはまだ根強い偏見が心の中に残っている。

ただイベント事に關しては、一般の高校とさほど変わりはない。生徒の立ち振る舞いが変わるだけで、やることはほぼ同じなのである。

「来てくれるなら差し入れ待ってますね」

「ええ〜……」

「……………」

「だからその目は何」

目を細めて、彼を見る。色々な想いが詰め込まれた。

藤井はそれを受け入れないように、視線を逸らす。水道の蛇口の締まりが緩かったらしく、水滴が垂れる。彼はそこで初めて彼女との会話に夢中になっていたことに気付いた。慌てて蛇口を締め直す。しつかりと。

「藤原さんは持つてきてくれなかった」喉まで出かかった言葉。彼はそれを抑え込んだ。今の彼女に、これを言うのは野暮な気がして。

それに、彼女は何も持つて来なかったわけではない。藤原千花という存在が来てくれただけで、藤井太郎の心は満たされたのだから。無論、彼は恥ずかしくてそんなことを口にするはずもないが。

「何が良い？ 暑いだろうから、冷たいモノでも買っていくよ」

「……………」
「……だったらアイスが食べたいです」

アイス。アイスクリーム。

体育祭。炎天下の下で舌の上に広がる冷たさと甘み。想像するだけで、彼女は頬が緩む。アイスにとっては炎天下は相性が悪い。だがそれを食べる人間にとっては、それはそれは最高のマッチングなのである。

藤井は少し拍子抜けだった。藤原千花のこと。何かとんでもないモノをねだられるのではないかと、密かに不安だった。しかし、そんなこともない。なんなら「コンビニに売ってるアイスでも良い」ぐらいの軽いノリだ。

「了解。校門を普通に通っていいの？」

「はい。体育祭の日は解放してるので、自由に出入り出来ますよ」

「そっか。楽しみだ」

藤井は笑う。週末が待ち遠しいのは久しぶりだった。

とは言っても、最初から最後まで居るわけではない。先日の千花のように、昼休み頃に顔を出して少し覗いて帰るぐらいが丁度良い。実際、彼女もそんな疲労感は無く、楽しさだけが心の中に刻み込まれていた。

会話が終わり、二人の間に静寂。しかし、千花は帰る素振りを見せない。外は夕焼けが地面を照らしている。他に客が来る様子もないため、藤井は何も言わずスマートフォンに手を伸ばした。

「藤原さんは休みの日とか何してるの？」

「ペスのお散歩行ったり、お買い物だったり。色々ですね」

「買い物ね。しばらく食材の買い出しにしか行ってないな」

「……そだ。藤井くんっていつもその格好ですよね」

「まあ……Tシャツにジーパンが楽だし」

別に誰かに見せるわけではない。彼の言う通り、楽な格好でいいのだ。むしろ厨房にいるのにお洒落をする必要なんて無い。

だから、千花は気になったのだ。彼の本当の私服が。藤井太郎という人間はどんなタイプの服が好みなのか。人の私服にはさほど興味を示さない彼女だったが、彼のことだけはかなり気になっていた。

「だったら、体育祭終わったらみんなでお買い物行きましょうよ」

「買い物って……何の？」

「お洋服とか、色々です！」

ここで言うみんな、というのは生徒会メンバーを交えてのこと。白銀御行と四宮かぐやからすれば、それはまあ絶好のチャンス。二人で買い物に行ける最高のチャンスなのだ。正確には二人ではないが。

二人が断るわけもない。かなり現実的な彼女の提案。藤井も少し考えたが、断る理由は無い。素直に頷いて見せた。白銀たちには千花の方から提案することになった。

少し前なら「部外者だから」なんて言って断っていただろう。藤井は考える。藤原千花を通じて、本当に交友関係が広がったとしみじみと感じていた。

店内の明かりが先ほどよりも明るくなる。それだけ、外が暗くなっ

たということだ。頃合いだろうと千花を促すと、彼女は名残惜しそうに席を立った。気が付けば、白銀に対するイラつきも治っていて、不満を発散することが出来た満足感に包まれる。

同時に、藤井への感謝も。店を出る度、大通りまで見送ってくれる彼の優しさが荒んだ心を覆ってくれる。今日もまた、彼は彼女の隣を歩いていた。

わずかに残る制汗剤の匂い。その中にも、藤井太郎の存在がある。生理的に、彼女は彼の匂いが好きだった。心から安堵できる匂い。恥ずかしくて顔を見ることが出来ない。面と向かうとは平気なのに、隣に並ぶと変な緊張感が千花の心に居座っている。

「体育祭、待ってますね」

「うん。着いたら探すよ」

「人沢山ですよ？ 見つけられますか？」

大通りに出て、彼女は茶化すように言う。

人の流れがあつて、安心したからか。二人きりじゃなくなったからか、どこか俯瞰している自分になっていた。

「見つけるよ。藤原さんならすぐ分かる」

「……いじわる」

そんな時に限って、彼は真面目な顔で言葉を紡ぐ。

藤原千花は、この日三度目の感情。どう返していいか分からないから、結局同じ言葉になってしまう。彼のことだ。自身と同じで、ただ茶化しているだけに違いない。

それなのに、心が躍る。頬が緩んだ彼女は、隠すように背を向け人混みに消える。タクシーを呼ぶことなく、駅まで歩く。週末が待ち遠しいのは、藤井太郎だけではなかった。

伊井野ミコはザコじゃない

秀知院学園体育祭の日がやってきた。

青空が広がり、グラウンドを駆け抜ける生徒たちの高鳴る息。注目を浴びる生徒の活躍に、女子たちは一喜一憂する。彼らはまさに、青春のど真ん中に居座っている。その興奮は収まるどころを知らない。

昼休み。各々昼食を摂って、グラウンドのあちこちに散らばっている。友人と駄弁る者、家族と駄弁る者、恋人と駄弁る者。三者三様。そんな中、藤原千花は白銀御行に絡む父親に呆れながら、藤井太郎のことを待っていた。見つけてくれると言ってくれたのだ。彼女から連絡するつもりは無い。が、中々遅いと話す時間も無くなる。連絡するかしらないか。揺れる女心である。

だが、彼はすでに秀知院学園の目の前に居た。目の前だ。決して校内に入っているわけではない。彼の目の前は、風紀委員・伊井野ミコが陣取っている。

「……どうして貴方がここに居るのです？」

「応援ですけど。貴女に関係あるんですか」

「お、大アリです！」

藤井は彼女が校門前に居る時点で、こうなることは察していた。ラーメン屋でよぎった予想が見事に的中した形になる。

一方で。千花を好き勝手した男。その認識が残ったままの彼女は、以前のように強い口調で問い質す。しかし、藤井にはあの時のような緊張感はない。毅然とした態度で問い返す。それだからか、彼女のリアクションは少したどたどしい。

伊井野ミコという人間は、基本的にザコである。

理不尽さを許さない、真っ直ぐな人間。故に、融通が利かない堅苦しい人間。相手の斜め上の回答で、その脳内の思考は簡単に乱れる。

風紀委員としてのプライドは高いが、周りの生徒たちからは扱われるような存在である。

「ふ、不純異性交際は認められませんから！」

「……」

「な、何ですか」

「いや……そもそも交際してないんだけども」

彼の口はそう言うが、伊井野は以前の彼の行動を思い返す。

藤原千花を連れ込んだ女たらし。交際しているならまだしも、平気で付き合っていないと断言するあたり、この男は性根から腐っている。彼女の誤解は止まらない。

そんな彼女の考えに、ようやく気付く藤井太郎。彼女は何か重大な誤解をしている。と言っても、伊井野が何故ここまで厳しく当たるのか理解出来なかったが。手にはコンビニの袋。中にはアイスクリームが幾らか。このままここで足止めを食らってれば、無残な姿になってしまう。

「藤原さんが待つてるから」

「……ま、またそんな嘘を」

「嘘じゃないですって。約束したから来たんですよ」

「証拠はあるんですか証拠は！」

「それは……無いけど……」

ただの口約束にすぎない。証拠を提示するのなら、その会話を録音したボイスレコーダーぐらい必要だろう。が、伊井野ミコは提示したらしいで捏造やら何やらと文句を言う。

要は、認めたくないだけなのである。藤原千花に彼のような人種がくつつくこと自体を。ここでいう人種というのは、彼女が思う女たらしの藤井のこと。彼の生い立ちなどはどうでもよかった。

「藤原先輩に何かあつては困ります。お帰りいただけませんか」

「……本気？」

「本気です」

「なら俺も本気になる。藤原さんに会わせてくれ」

「どういうことですか！」

藤井としても、いつまでもここで足止めを食らうわけにはいかない。対策を考えるが、いい案を思い付くこともない。

千花に電話を掛けることも考えたが、それはそれで何か違う。見つけると言ってしまった手前、電話を掛けるという行為は敗北した気分になる。彼なりのプライドと言えばプライド。わがままと言えはわがままである。

「第一、俺と藤原さんは本当に友達なんだって」

「嘘付かないでください！ 家で酷いことをしておいて」

「だから何もしてませんって！」

「でしたら証拠を見せてください」

今の伊井野ミコは「ああ言えばこう言う」状態。これも尊敬する藤原千花を守ろうとするが故の行動なのだが、藤井からすれば厄介そのものである。いたちごっこで逃げ道を見出せない。故に、苛立ちだけが募っていく。近くのコンビニで買ったアイスクリームも溶けかけている。

不器用で真っ直ぐすぎる彼女の想い。自分のことを好いてくれる伊井野の存在は、千花にとって嬉しいモノ。しかし、今だけは違う。今だけは、彼女の行く末の邪魔になっているのだから。

「あ、藤井先輩。どうしたんすか」

「石上くん！ いいところに来た」

校門前で伊井野ミコが揉めている。校門前に限らず、彼女は生徒と口論になることも多い。今回もそのパターンだと思っていた石上優だったが、相手はあの藤井太郎。声を掛けないわけにはいかなかった。

「……何？ あんたには関係ないでしょ」

「別にお前に声掛けてないだろ。それで、何かありました？」

「いや藤原さんの応援に来ただけど、この人が」

「ああいいっすよ。入ってください」

「ちよっ、石上！ 勝手な真似しないで！」

「うるさいな。お前の方こそ何で先輩を入れないんだよ」

「そ、それはこの人が」

伊井野はこれまでの経緯を説明する。石上の脳裏に蘇るかつての光景。「ああ何かあったな」と言葉を漏らすも、藤井に厳しい視線を向けるはずもない。

彼は藤井と千花の仲を知っている。少なくとも伊井野ミコが考えるような男ではない。第一、本当に女たらしであれば石上にとって目の敵になる。彼が気軽に話しかけることもないのだ。その時点で、伊井野のソレはただの思い込みだと言い切れるに値するのだが。

二人の会話を聞いていた藤井も、少しだけ落ち着きを取り戻す。石上と伊井野。二人に面識があつて良かったと考えながらも、彼らはまた睨み合う。どうやら一筋縄ではいかないらしい、と藤井は察してしまふ。

「藤井先輩と藤原先輩は普通の友達だ。別に伊井野が考えているようなふしだらな関係じゃない」

「石上が言うと言得力が無いわね」

「いや本当なんですって」

ここでようやく、藤井は校内に足を踏み入れた。たった一步、されど一步。いちごっこを繰り返して来た彼にとって、それはそれな大きな一步になる。

しかし、石上と伊井野を無視するのも気が引けた。特に石上。自分のことを庇って彼女の相手をしている。ここで立ち去ってしまったら、いつの日かの彼と同じになってしまう。踏み止まった藤井は、口論する二人の仲裁に入る。

「大体、お前はいつもそうだな。どうせ先輩の話も聞かないで勝手に決めつけてるんだろ」

「ち、違う！ 私は藤原先輩のために！」

「まあ話を聞いてくれなかったのは事実だけどね」

石上がタメ口で話しているという事は、彼女は彼の同級生なのだろう。となると、藤井から見れば年下の後輩になる。先ほどまでは敬語で話していたが、そうと分かれば多少大きく出ても問題ない。

伊井野は分かりやすく慌てふためいている。千花のことを考えすぎて、まさに盲目状態。周りのことがよく見えていなかった。冷静に

なつて考えても、ここでは石上優の正論の方がまかり通るのは明らか。伊井野の発言は、それこそ理不尽なのだ。そしてその理不尽というを、石上優は嫌う。だから、らしくもない。発言に熱が籠もっていた。

「ふ、二人とももう良いから……ね？」

「第一、石上だつてこの人とどういう関係なの？ 友達つてわけでも無さそうだし」

「藤原先輩と仲良いからその繋がり。それこそ、藤井先輩がお前が思うような人間だつたら、俺がでしゃばることもない」

この二人は、普通に仲が悪い。互いに嫌い合っている。本来ならこうして話すことも嫌になるほど。だが、同じ生徒会になってしまった以上、仲違いしたままでは先輩たちに迷惑がかかる。特に話し合うわけでもなく、互いに距離を置いているのだ。

嫌っている。なのに、相手を傷つけないために距離を置く。それは相手のことを思いやる優しさであることを、二人は理解していなかった。

その前提があるとは言え、石上の発言には説得力があつた。それは伊井野にもしっかりと伝わる。

「そ、それは……そうかもしれないけど」

だから、言葉の威力が落ちる。もはや反撃とも呼べない。石上優の言葉は同意してしまうような発言である。

石上は成績こそ悪いが、頭は比較的切れる。自分が思ったことを論理的に並べることが容易いのだ。藤原千花に「言葉のナイフ」とまで言わせた石上の言葉。無論、その発言が世間的に常識かどうかは置いておいて。

そんな二人に取り残された藤井。伊井野は相変わらず納得する素振りを見せない。かなりの厄介者に絡まれたことを、彼は心の奥底で後悔する。石上は今の藤井の気持ち痛みほどよく分かった。

「なら藤原先輩から直接聞けば？」

「まあ……それで納得してもらえないならそれが一番か」

「……………」

藤井としても、千花を見つけて驚かせただけに、石上の提案は百点満点かと言われれば違う。だがアイスのこともある。早く彼女に渡さなければ大変なことになってしまう。渋々、石上の提案を受け入れた。

伊井野は何も言わなかった。それに勝る言葉が思いつかなかった。入学以来、定期試験は常に学年一位の彼女。自身を肯定する唯一の武器が学力。派生して知性。それで石上に負けたような気分になって、俯いてしまう。

「あれ、藤原先輩」

「石上くん。あつ！ 藤井くん！」

「藤原さん」

石上が呼びに戻ろうとしたところで、ひよこつと顔を出したのは千花本人。石上への挨拶もそこそこに、彼女は藤井の元へ駆け寄る。体操着だからこそ、藤原千花のボディラインがはつきりくつきり浮かび上がる。思春期男子、藤井太郎には刺激が強い。目を逸らす。

「ふ、藤原先輩！ この人とどういう関係なんですか!？」

伊井野は思い切って問いかける。早めの勝負に出た。

あまりにも鬼気迫る表情の彼女に、千花は思わず後ろに下がる。一歩、二歩。何故伊井野が怒っているのか理解できない彼女。深く考えず、素直に答えることにした。

「お友達だよ？」

「……本当ですか？」

「う、うん。本当に」

淀みのない瞳で、伊井野に語りかける。その時点で、伊井野の負けは決定。千花を尊敬するが故、守ろうとする気持ちが働く。千花を尊敬するが故、彼女の言うことを疑わない。

千花は千花で、藤井に対して何かしら不都合があつたのだろうと察する。勘の鋭い方ではない彼女ですら、この状況は分かりやすい。

「……ごめんなさい。勘違いしてました」

「あ、いやいいんだよ。気にしてないから」

気にしてないと言えば嘘になる。かなり面倒な相手だった伊井野

ミコ。勘弁してくれ、と思う気持ちとは裏腹に、素直にペコリと謝る彼女に申し訳なきが生まれる。背が低い伊井野であるが、今の彼女はいつも以上に小さく見えた。

藤井としても、結果的に藤原千花に会えたのだから、それ以上言うことはない。石上はどこかしてやったりの表情。

「ミコちゃん、藤井くんはそんな人じゃないよ」

「この子が新しい生徒会の？」

「そうです。伊井野ミコちゃん。真面目でいい子ですよ」

ここでようやく、藤井は彼女の名前を知ることになる。

だが彼女が、噂に聞く生徒会の新たなメンバーだとは思っていなかったらしく。苦笑いを浮かべるしかなかった。

「そうだ。これ、差し入れ」

「わ！ 本当にアイス買ってくれたんですね」

「まあ約束したし。コンビニのアイスだけど」

「えへへ。良いんです」

伊井野ミコは談笑する二人を眺めていた。

不思議な感覚だった。先ほども憎たらしくて仕方が無かった男。藤井太郎と、憧れの藤原千花が笑顔で話している。

千花のあんなに綺麗な笑った顔。伊井野は見たことが無かった。笑う時も全力で笑う藤原千花。なのに、今の彼女は違う。どこかおしとやかで、品があつて、でも、本当に楽しそうで。

そうそれは、まるで恋人のように。

「仲、良いつて言つたらろ」

「い、石上」

後ろから話しかけられたことに、体がビクツと震える。

「なんだまだ居たの」言葉を漏らすも、石上の耳には届かない。それならそれで良かった。

今、このタイミング。声を掛けられたことで、思考の沼にハマリそうだったところを寸前で食い止めた。石上優の存在。彼女にとって、初めて都合の良いものだと感じられた。

「藤原先輩って案外女子だなんて思う」

「は？ 当たり前なこと言わないでよ」

「……そうだな。悪い」

「……気持ち悪い」

そんなことを言ってしまうほど。石上にとっても、今の二人はどこか違う。周りには沢山の人が居るのに、二人の周りだけ切り離されていけるような、不思議な光景。

元々、藤原千花という人間は不思議なタイプ。不思議ちゃんと呼ばれることも少なくない。その印象があったから、石上は彼女とまともに会話出来る藤井のことが尚更不思議だった。

「藤原先輩」

声を掛けても、届かない。

自身の声が小さいから？ 違う。

純粋に、今の彼女は藤井太郎のことしか見ていない。同じ生徒会なのに、自分が見たことのない顔を引き出すこの男。嫉妬に近い感情。尊敬するが故に、そんな歪んだ感情。

会話を終えた藤井は、伊井野と石上に近づく。そして、コンビニ袋からアイスクリームを二つ、差し出して見せた。石上は驚きながらも受け取る。これまでの関係性がそうさせた。

一方で伊井野。あまりにも突然の行動に戸惑う。呆気にとられていると、見かねた藤井が声を掛けた。

「あげるよ。何か変な誤解させたみたいだし」

「えっ、い、いえそんな……」

「いいからいいから。熱中症にならないようにね」
彼なりの謝罪と優しさ、である。

自分で食べようと思っていた分を彼女に渡すと、伊井野は戸惑いながらも受け取る。太陽が彼女の顔を照りつける。日焼けするほど暑いのに、心は冷えていく。いい意味で。

(あれっ、もしかして本当に良い人……?)
繰り返す。

伊井野ミコという人間は、ザコである。

藤原千花のアイスはあまい

「藤井くん。グラウンドにはお父様が居るので、こっちでお話しましょう」

「えっ、別に気にしないのに」

「駄目なんです。こっちです」

石上優、伊井野ミコと別れた藤井は、藤原千花に手を引かれていた。先日の桜川高校体育祭の時とは正反対。周りの生徒の視線を気にすることもなく、彼女は彼の手首を優しく掴んでいた。

行き先は、秀知院学園の校舎。藤井が生きていく上で間違いなく足を踏み入れることが無かった場所。流石に畏多くなったのか。腰が引けている。しかし、千花はお構いなし。グイグイと手を引く。

「だ、大丈夫？ 通報されたりしない？」

「しません！ 多分」

「すっごい不安なんだけど」

「あはは。大丈夫ですよ」

根拠のない自信。頼りなくも、何かあったら彼女を頼るしかない。学校内での立場を知らない藤井にとつて、それはまさに綱渡り。誰にも見つからないことだけを願って校舎内を歩く。手を引かれたまま。階段を上がっていき、やがて最上階。目の前には屋上に繋がる扉。そこでようやくやく、彼女は藤井の手を離れた。

「この間のお礼です。屋上でお話しましょう」

「別に屋上じゃなくても」

「せっかく案内してくれたんです。秀知院学園を知ってもらうためにはこれが一番ですよ」

「特に知る必要は無いんですけども」

千花の言い分も分からないことはない。桜川高校では自身を屋上

に連れて来てくれた。そのお返しに、今度は秀知院学園で。人によっては納得する理由になり得る。藤井にはピンと来なかったが。

彼女はそのままドアノブを回す。が、開かない。もう一度回す。やっぱり開かない。

見かねた藤井がドアノブに手を掛ける。どうしても開かない。

「ねえ、鍵閉まつてるよ」

「そうでした。あはは……」

秀知院学園では、基本的に許可が必要。何をしてもだ。

当然、屋上を使用する場合も届け出を出して承認されなければ、そこに繋がる鍵をもらうことは出来ないのだ。千花はそのことを完全に失念していた。

生徒会の人間でありながら、である。

確かに普段から抜けているところが多い彼女。しかし、こういったことは割としっかりするタイプでもある。しっかりと根回しは出来る女。流石は政治家の娘。そんな彼女がだ。

「どうしよう……」

「ここでもいいんじゃない？ 涼しいし」

藤井としても、何がなんでも屋上に行きたいわけでもない。幸い、ここはひんやりとしていて屋上よりも過ごしやすいのは確か。階段に腰掛けて話すことだって出来る。景色は無いに等しいが。

体操着の千花。制服だったら抵抗感もあるが、汚れてもいい体操着のおかげで、素直に階段に腰掛けた。ひんやりと伝わる冷気。暑く熱を持った肌を冷ましてくれる。

体育祭を観に来たはずの藤井だったが、思わぬ形だ。彼のイメージではグラウンドを駆け回る彼女を応援し、白銀やかぐやの活躍を見る。そのつもりで来ていただけに、この展開は明らかに想定外。

それに、昼休みもそろそろ終わりを迎える。こんなところで油を売っている暇はないはずなのだ。

隣に腰掛けた千花をチラリと見る。髪を後ろに纏めてポニーテール。普段は見えない彼女のうなじが綺麗に見えて、彼の心を刺激した。

「アイス、いただきますね」

「あ、ああ。どうぞ」

思いの外、千花は冷静だった。

二人きりになるのは、約束をしたあの日以来。もう抵抗感はない。あるのは安堵する気持ちだけ。胸の奥が暖かくなる感情。

彼がくれたのは、安いソフトクリーム。正確には、ソフトクリーム風のアイスクリーム。程よく溶けて柔らかくなっている。舌先に広がる甘味。火照った体には十分すぎるほど染み渡っていく。

ああ、甘い。美味しい。少し疲労感の見える千花。糖分を摂取したことで、頭が少しだけ冴えていく感覚を覚えた。

「もうすぐ午後の部、始まるんじゃない?」

「はい。ですけど、大丈夫ですよ」

「大丈夫じゃない気がするんだけど」

「すぐ出る競技はありませんから」

思いの外、藤井も冷静だった。

彼女の発言が本当かどうかは分からない。だが、今はそれを疑うだけの材料は無い。その言葉を信じるしかなかった。

ただ、一つだけの疑問。彼女がわざわざここに連れて来たこと。それだけではどう考えても納得出来なかった。千花は「お返しに」なんて言うが、話すだけならそれこそグラウンドで良い。こうして二人きりになる理由なんかは無いのだから。

程なくして、思考が引つかかる。

二人きりになる理由があつたとしたら。人気の無い場所で。

体温が上がっていくのが藤井自身にも分かった。これは何か深い意味があるのではないかと。彼も決して鈍くはない。そう考えた方が色々都合がいった。

(や、やばい……意識して……)

体が熱を帯びて、顔から火が吹き出しそうな。藤井太郎。生まれて初めての感情に苛まれた。先ほどよりも千花の存在感を感じるようになり、彼女の甘い香りが頭に突き刺さる。

これまでは何となく接してきた藤原千花という女。アイスを丁寧

に舐める彼女のその仕草すら、今の彼には刺激的に映る。

この静けさが駄目なんだ。何か話せばいい——。思考はそう言えど、行動に移すとなれば話は別。喉の奥が閉まって、声を発することを許さない。

かと言つて、彼女のことを見ることも出来ない。となれば、藤井はただ、下に広がる階段を眺めるしかないのだ。

「藤井くんはアイス食べないんですか？」

静寂を切り裂く言の葉。深い意味のないそれは、今の藤井にとっては心から安心できるモノだった。閉まった喉をこじ開けるように、一度咳払いして口を開いた。

「さっきあの子にあげちゃったから」

「あ、それで」

「まあいいんだよ。そもそもみんなにあげようと思つてたし」

伊井野ミコに出会わなければ一つ余るはずだった。だが、あの場を切り抜けるための咄嗟の判断。代償は大きくもないが、今こうして考えると小さくもない。複雑な感情。

それでも、藤井は自分の判断は間違つていなかったと自負する。渡したあの時の彼女は、ほんのわずかに口元が緩んだ。誤解が解けたかどうかは今の彼は知る由もないが、決して無駄じゃないことだけは理解できた。

とは言うものの、手持ち無沙汰感は否めない。校内でスマートフォンをいじるのは気が引けたし、かと言って千花に振るような良い話題も無いのが現実。

藤原千花は、一人考えていた。

彼の言う通り、グラウンドでも十分なのは彼女自身も理解している。だが、あの場所だと駄目なのだ。二人きりで話さないと駄目なのだ。

何故。桜川高校の屋上に連れて行つてくれたから、そのお返し。頭の中に居座る理由。

だが、本当にそれだけ？ 頭の中でもう一人の彼女が問いただしてくる。脳内の藤原千花はうろたえた。それ以外に理由は無いのだから。

ら、反論の仕様が無いのだ。

アイスクリームを一口。バニラ味。牛乳感の全くない味だ。普段から良いものを口にしてている彼女にとって、それは俗物。普段なら絶対に食べないようなモノ。

それでも、藤井太郎が買ってきてくれたというだけで、どんな甘味よりも甘く蕩けてしまいそうな。冷たいアイスだというのに、冷えかけていた体が熱を帯びていく。不思議な感覚だった。

「何か喋ってくださいよ」

「えっ、い、いきなりそんな」

「いいじゃないですかあ」

誰もが口を閉ざす場面で、口を開くのが藤原千花という人間。そうやって白銀やかぐやのことを振り回してきた。

それなのに、この瞬間だけ。この時だけは、彼に話して欲しかった。藤井の声が聞きたかった。静かな空間と彼の低い声。それが妙にマッチしていて、鼓動が高鳴る。

——意識してるんじゃない？

千花の脳内に響く。深層心理の声が顔を出す。

たった一言。それ以外何も聞こえない。

それなのに。

それなのに、声を聞くだけで胸が高鳴るといふのは、そういうことだ。そう言われているようで、彼女は咄嗟に彼から目を背けた。

藤井のことは、そんな目で見ていない。それは紛れもない事実。第

一、ルックスが彼女の好みではなかった。だから——。

（——あれ、あれ）

だから、違う。と、言い切れなかった。

彼女の中で、それは大きな誤算。アイスクリームのコーンを掴む手に、わずかに熱が込められる。それだとすぐに溶けてしまうのにお構いなしで、熱い。熱くて溶けてしまう。

ここで言い切ってしまうえば、彼は何と思うだろう。

何も思わないだろうか。そんなことを考えてもいないだろうか。聞いたら教えてくれるだろうか。深く考えすぎ、だろうか。

止め処なく溢れる疑問。千花は、どうすればいいのか分からなかった。このまま時が過ぎるのを待つだけ。彼が何か言い出すのを待つだけ。それだけで、今は良かった。

「……藤井、くん」

「な、なに？」

「アイス、一口いかがですか」

俯いたまま、彼女は食べかけのソレを差し出した。

あまりにも突然の行動。藤井は、当たり前のようにうろたえた。藤原千花の食べかけに口を付ける。それがどういふことか、恋愛経験の無い彼でも分かること。

「私、そういうことは気にしないので……」

「そ、そっか。ありがと……」

事実だった。

彼女は白銀の使った箸で弁当を食べた経験もある。異性だろうが同性だろうが、間接キスというものに特別な意識は無かった。

ところが、彼がそれを受け取ると感じたことのない気持ち彼女を襲う。鼓動が高鳴って高鳴って止まらない。

自分の行動に緊張していた。そして激しい後悔。男にも簡単に気を許してしまう、ただの軽い女に見えなくもない行為。千花は深くうなだれる。

藤井は、彼女の様子がおかしいことに気付かないはずもなかった。先ほどから俯いているだけで、いきなりアイスを差し出す。彼からすれば不可解な行動。だが、これまでの千花のことを思い返せば、あり得なくもない行為である。

だが「じゃあ食べます」となるかと言われれば違う。彼の中で抵抗感が拭えなかった。無論、嫌というわけではない。彼女に気を遣って。当の本人が「気にしない」と言っているのだから、そこまで深く考える必要も無い。それが出来ないのが、藤井太郎である。

「……食べた。牛乳の味がしてオイシイネ」

そこで彼は、嘘をついた。

千花が俯いているのをいい事に、優しい嘘。ところが、そういうと

ころには勘の鋭いのが藤原千花。彼の抑揚のない発言を聞くと、ひよこつと顔を上げて藤井の目を見つめる。

「そのアイス、牛乳の味しませんでしたよ」

「えっ」

「本当に食べましたか」

「……」

「どうなんですか」

「……食べてません」

藤井なりの厚意なのだが、それは千花の厚意を踏みにじった。噛み合っているようで噛み合っていない二人の優しさ。互いに歯痒さを感じていた。

千花の視線が藤井の目に刺さる。「食べる」という無言の圧力。女子と同じモノを口にしたことがない彼女にとって、それはあまりにもハードルが高い。

「ほ、本当にいいの？」

「藤井くんが食べないのはかわいそうですから」

嘘と本心が混ざりならない言葉。どちらかといえば嘘の味が濃く滲む。買ってきてくれた張本人が食べないことに、申し訳なさを感じたのは事実である。しかし、それだけじゃない何か。彼女の脳内にまたあの存在感。振り払うように、千花は藤井を促した。

見つめられれば、彼としても逃れようがない。意を決して、アイスクリームに口をつけた。

「間接キス、ですね」

気にしないと云った人間がだ。見事なまでの掌返し。

それを信じた藤井が勇気を振り絞ったというのに、藤原千花は意地悪をするように笑う。

反対に、藤井太郎。それはもう分かりやすく混乱していて。吐き出す勢いで、すぐに口を離してしまう。名残惜しさなんてものは全く無かった。

「慌てすぎですよ」

「だ、だって気にしないって……」

「私は気にしてませんよ？ あはは。藤井くんは気にしちやっただすね」

自分を誤魔化すように、彼女はそうやってマウントを取る。藤井のことをからかっているわけではない。ただ自分が自分で無くなりそうだったから、そのために彼を利用したのだ。その原因が藤井にあると分かっておきながら。

「——るよ」

「はい？」

「気にするに決まってるよ。俺だって、男なんだよ」
慣れないことをするから、こうなるのだ。

千花は、それを痛感してしまった。正直に、真っ直ぐな言葉。今日、初めて彼と目が合ったような気がした。

そして、自分の行動を後悔する。こんなことをしなければ、彼の男っぽさに気付かずに済んだのに。

一人の男友達として認識していた彼もまた、思春期の男なんだと。考えれば考えるほど、胸の高鳴りが止まらない。

——やっぱり意識してるんじゃない。

二度目。脳内に響く声。今度は断言する声。

「してないよ」と言い切れる材料が無い。むしろ、それを肯定する材料ばかりで。頭に血が上っていく。

藤井から目を背け、再び俯く。もうアイスを食べる気力が無くなってしまったようで。

「残りも食べてください……」

「う、うん……」

本来の目的から随分かけ離れてしまったが、それを問い詰める元気は藤井に残っていないかった。

一山越えたような疲労感が二人を襲った。

この戦闘、およそ五分。にしては、長すぎる戦いであった。結果としては、引き分け。昼休みの終わりを告げるチャイムが校内に鳴り響いた。それは二人の時間の終わりを意味する。

「美味しいですか」

「……うん。ムカつくほど甘いよ」

「……やつと食べてくれましたね。嬉しいです」

ムカつくほど甘い。彼の感想は、まるで自分と同じ。

千花は頬が緩んだ。俯いているせいで、藤井から顔は見えない。でも、今は見えないで良かった。こんなみつともない顔は、彼に見せられない。

青春の針は、少しずつ、着実に、動いている。

早坂愛は恋を知りたい

秀知院学園の体育祭が終わり、季節は本格的な秋に入った。

木枯らし。夏、栄養を行き渡らせた木の葉たちは力尽きたように塵となる。街中に緑が戻るのは、また春が来るまで。しばしのお別れ。移りゆく景色とは対照的に、白銀御行と四宮かぐや。二人の関係性もまた、これまでとあまり変わらず。少しずつ、互いの想いが見え隠れする機会が増えたぐらい。それでも、なんだかんだで生徒会の活動を楽しんでいた。

そして、この日もまた。夜の九時前。

四宮かぐやは、侍女の早坂愛に無理難題を押し付けるのである。

「……またですか」

「何よ。またって」

「いえ、ですから彼の身辺調査のことでしょう」

分かりやすく呆れる早坂。ここ最近のかぐやは、以前にも増して面倒になっていった。原因は一つ。白銀御行だ。彼のことを思うがあまり、救急車で運ばれるという失態を犯す。それを決して認めようとならないのもまた、面倒だと思ふ所以。

ところが、かぐやは彼女の言葉を真つ向から否定した。

「身辺じゃなくて、進展調査よ。し・ん・て・ん」

「進展？ 何のことですか」

早坂は首を傾げる。身に覚えのない話だ。

かぐやからそんな話は聞いていない。仮に聞いていたとしたら、それは自身の不手際になる。一瞬だけ体が強張った。

「藤井さんと藤原さんのことよ」

「ああ……それですか」

安堵と呆れが混じったため息。

早坂愛にとって、それはもうどうでもいいことなのだ。

何故、二人の行く末を調べないといけないのか。放っておけばいいじゃないか。やるなら自分でやればいいじゃないか。黙っているとかぐやへの文句が止まらなくなりそうだった彼女。慌てて口を開いた。

「自分でやれば？」

「……言い方にトゲがあるわよ」

「あ、すみません」

主人に対しての口の利き方では無かった。だが、今は別にいいだろうと開き直る。かぐやも普段から無理難題を飛ばしているからか、特に何も言わなかった。

早坂は記憶を呼び起こしていた。過去にも同じようなやり取りをしたではないか、と。あの時は藤井とかぐやに接点が無かったが、今は違う。必要最低限、メールでのやり取りをするぐらいの仲にはなっている。状況は変わっている。早坂の言うことはごもつともなのだ。

大抵、かぐやがそんなことを言う理由は二つ。

一つは、藤井太郎と藤原千花を使って白銀に告らせるため。

一つは、藤井太郎と藤原千花の行く末が気になるため。

そのどちらか、あるいは両方。早坂は疲れた頭を回転させ、導き出した。正解かどうかは分からないが、ほぼソレだと断言できた。

「別にこれまで通りじゃないんですか。書記ちゃんも見たところ変わらないですし」

「私もそう思ったわ。でもおかしいのよ」

「何がですか」

「最近の藤原さんよ」

言っていることが矛盾していることに、かぐやは気づいていない。

これまで通りなのに、おかしい。日常生活を送る中で、滅多に感じることはない違和感。早坂はそうでもなかったが、かぐやは毎日生徒会室で顔を合わせている。そのわずかな違いを見逃すことは無かった。

「何がどうおかしいんですか」

「生徒会室で突飛な発言をしなくなったの」

「一大事じゃないですか」

藤原千花を知る人間なら、それがとんでもない事態だということに気付く。早坂も例外では無かった。

これまで、かぐやから聞かれる愚痴には、必ずと言っていいほど千花の発言が含まれていた。それによつて、大きく計画が崩されることも少なくなかった。かぐやの感情はある意味必然である。

そんな彼女が、突飛な発言をしない。いわば、大人しくなったと言うではないか。大して興味を示さなかった早坂にも、心情の変化は顕著に表れた。

「それにボーツとしてることも増えたわね」

「……それも全て、藤井太郎が絡んでいると」

「ええ。私はそう睨んでる」

かぐやの推測に、早坂は同意する。

藤井太郎という男。すでに早坂の想定を大きく超える存在になっていた。あの藤原千花を手懐けている。それだけで四宮家の僕しもべとして雇つてしまいたいぐらい。

そして何より、二人の存在が四宮かぐやと白銀御行の関係にいい影響を及ぼしていた。動かなかった時計の針が、この半年で一気に動きかけている。その瞬間に、早坂愛は立ち会っている。もどかしかったあの時を思い返し、不思議な高揚感が包み込んだ。

かぐやがその話をするということは、結局のところ彼女はまた彼らを利用するつもりなのだろう。早坂は察する。本音を言えば、早く仕事を終わらせて部屋で休みたい。しかし、どこか興味のある自分を否定出来なかった。

純粹に興味があつた。二人の行く末に。侍女の早坂愛ではなく、高校二年生の早坂愛として。特に何も言わず、黙つてかぐやの言葉を待つ。

「これはチャンスかもしれないわ」

「何がですか」

「あの二人が交際するとなれば、会長が慌てふためくのは目に見えて

います。分かる?」

「ソウデスネ」

最早テンプレ化しているかぐやの発言。毎回毎回聞いている早坂にとつて、耳にタコが出来るほど。すでに飽きた流れである。そのせいで、早坂の返事もかなり雑なものに。

そして、四宮かぐやという人間はその先を考えていない。二人を利用するにしても、どうすれば良いのか。肝心な部分を早坂に投げつけるのである。彼女からすればただただ迷惑な話。

「試験も近いですし、図書館で勉強会とかいかがでしょう」

それを見越して、早坂は先手を打つ。進展調査とは呼べないような咄嗟の思いつきではあったが、中々に的を得た提案だと考えた。

秀知院学園では、二学期期末試験が再来週から始まる。試験のことになると目の色が変わる白銀御行。彼のことを誘うのなら、勝負は早い方が良い。一週間前になって彼がうつつを抜かすとは思えなかった。

かぐやも、少し考えて早坂の提案を受け入れた。引つかかるところはあったにしろ、一番現実的だと判断。その表情は納得そのものだ。

「でしたら、まずは藤井さんを誘うべきかしら」

「まあ、かぐや様の誘いなら断ることないでしょうし」

「それもそうね」

以前より関係は柔らかくなったとは言え、藤井にとつて四宮かぐやという人間は恐怖。何をされるか分からない底無しの恐ろしさを感じていた。そのため、ある程度の誘いは断らないだろうと早坂は踏んだ。

善は急げの精神で、かぐやにメールをするよう促す。ようやくスマートフォンに代えた彼女の手つきは、機械音痴全開だった頃に比べるとこなれたモノに変わっている。

『今週末、会長と藤原さんを誘って勉強会をやりませんか?』

当たり障りのない文章。早坂の校閲を通し、メッセージを送信した。

ひと段落つける、そんな早坂の考えは甘く。二人が思っていた以上

に、彼からの返信は早かった。

『勉強は一人でした方がいいから遠慮しておくよ』

「ねえ早坂」

「なんでしよう」

「断ってきたわよ？」

「そうですね」

想定外の出来事に巻き込まれた人間は、間拔けな顔で顔を合わせ
る。それを体現しているようで。早坂愛は若干の申し訳なきを抱く。

だが1番タチの悪いのは、彼の言うことが正論そのものだというこ
と。基本的に、かぐやは一人で勉強をしたい人間。藤井の発言を否定
したいのに、それが出来ない自分に苛立つ。となれば、その矛先は自
然と藤井に向けられる。

「頭に来ました。電話して問いただします」

「それを白銀会長にやればいいのに」

「何か？」

「いえ何も」

かぐやのやっていることは、実に回りくどい。

良く言えば、外堀を埋めていると表現出来るが、そんなことをせず
ともどちらかが告白すれば成功率は百パーセント。怯える必要なん
てどこにもないのに、と早坂は心の中で毒づいた。

しかし、早坂愛。

藤井太郎と藤原千花の関係を見守るのと同じぐらい、いやそれ以上
に二人のことを気にかけているのも事実なのだ。毎日かぐやの話に
付き合っていれば、何かしら情が湧くのは自然な話。ただそれは、目
の前でイラついて電話をかける一人の少女の、侍女として。そう自分
に言い聞かせた。

「ご機嫌よう。藤井さん」

「あ、めっちゃキレイてる」

早坂は電話越しの藤井に同情した。

口調こそ優しいが、その優しさはイラつきの裏返し。長年彼女を見
てきた早坂にとって、気付かないはずもなかった。

「どうして断るのです？ いい機会ではありませんか」

「いや〜……。一人の方が集中できるし」

「分からないところは人に聞くことが出来ますよ」

「で、でもなあ」

彼女の圧に、藤井はたじろいだ。そして蘇る記憶。

どうして素直に頷かなかつたのだろうと、自身の言動を悔いた。が、もう遅い。電話越しの彼女はかつて恐怖を覚えたあの彼女だ。

藤井は、誰かと集まってしまうほど勉強には関心が無かつた。特に行きたい大学も無く、ただ卒業を待っているだけ。そんな彼が、かぐやの提案を受け入れようとしなのは、ある意味当然の行動。

何より。

藤井は、千花に会いたくなかつたのだ。

秀知院学園の体育祭以来、一度も顔を合わせていない。もちろん、連絡も取っていない。一人の女友達と頻繁に会う方が珍しい光景でもあるため、それは至って普通なことである。

思い返せば、以前までの彼は結構な頻度で千花に会っていた。特に何も考えず。それが藤井太郎にとって普通だつた。

でも、それは彼にとって普通じゃなかつた。

会わないのが普通なのだ。特に、藤原千花という人間は。

彼女との時間を重ねていくにつれ、生きる世界が違うことを痛感させられる。その都度、彼は考え、現実から目を背けるようにした。

だから、今彼女に会わないこの時間が、彼にとっては都合が良い。

——はずだつたのに。

体育祭の時。二人きりになつたあの瞬間。藤原千花という人間が、一人の女性として彼の目に映ってしまったのだ。色っぽい香りと顔。思い出すだけで、心臓が跳ねる。

そして、彼女に会えるかもしれないと分かつた途端、心の中が蠢いた。四宮かぐやの提案を、すんなり受け入れようとした。

ここで一線を引いておかないと、手遅れになる。彼なりの優しさ。いや、自分自身への嘘。

「藤原さんに、会いたくないのですか」

「……っ」

電話越しでも、考えていることが分かるのか。藤井は喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

その発言は、早坂のキャンペによるもの。彼の思うように、かぐやが心理掌握をしたわけではない。早坂自身、かぐやのような回りくどい作戦は好みではない。加えて、藤井太郎の性格を考慮。思い切って問いかけても問題無いと踏んだ。そして、彼は分かりやすく言葉を失った。

「喧嘩でもしましたか？ 藤原さんは怒っているように見えませんでしたか」

「いやそういうわけじゃなくて……」

「じゃあ何なのです。ハッキリ言ったらどうですか」

かぐやは冷静に言う。それが自身を棚に上げている発言だと知らず。藤井にも、彼女の言わんとすることは理解出来た。

だがここでハッキリと言えるかと言われれば、話は大きく変わる。それを口にすることは、自分への嘘を暴くのと同じ。

「まあいいです。藤原さんには私の方から声を掛けておきますので、藤井さんは会長に連絡お願いしますね」

「ちよ、俺は行かないって——」

「来てくれますよね？」

二度目の圧。蘇る忌まわしき記憶。

千花のことはすっかり消え失せ、かぐやの言葉をそのまま受け入れた。そのまま電話を終え、かぐやは一つ息をついた。

黙って眺めていた早坂も、ここでようやく口を開ける。かと言つて、特に言うこともない。黙り続けていたが、かぐやは何かを言つて欲しそうな顔をしている。その何かが分からないのだから、四宮かぐやという人間は面倒なのである。

「書記ちゃんと何かあったみたいですね」

「ええ。まあ別に二人がどうなろうと私は構いませんが」

かぐやのその言葉に嘘は無い。だが本心も無い。

彼女もまた、一人の女子高生であることに変わりはない。友人の交

友関係、特に異性関係の。それが気にならない筈もない。だが、侍女の早坂愛を前にすると、強がる。

早坂は、彼女の言葉に眠る意味を探ろうとしなかった。そんなことをしなくても、よく分かるから。

「……本当に、彼は藤原さんのことを」

「だとしても、別にいいんじゃない」

「そう、ですね」

早坂は、かつて千花から言われた言葉を思い返していた。

——顔も全然タイプじゃないですし。

あの言葉が真実なら、彼の歩く道は困難を極める。同情に近い不思議な感情が湧き出てきた。

絶対に叶うことのない恋。それは儂く美しい。

小説にありがちなフレーズが頭に浮かぶ。

そんなのは、ただの理不尽だ。叶わないことが美しいだなんて、そんなの、負け惜しみじゃないか。心の中で、早坂は毒を吐く。

早坂にとつて、藤井太郎の印象は薄い。千花と同じように、顔もタイプではない。万が一、彼から告白されても、数秒で断る自信がある。

でも彼女から見て、藤井は悪者じゃない。むしろ、優しい好青年である。そこに、藤原千花が惹かれる可能性は否定出来なかった。

恋とは、どんな気持ちになるのだろう。

早坂愛、高校二年生。純粋な疑問が浮かぶ。

目の前の主に聞けば、答えてくれるだろうか。いや無理だ。恋のことを認めていない彼女に聞いたところで、ロクな答えは返ってこない。

「何よその顔は」

「いえ、なんでもありません」

少なくとも、今は四宮かぐやの行く末を見てから。

そうやって、いつもいつも自分を押し殺してきた。それが彼女の仕事だから。開き直りとも受け取れる境地。

でも、もう高校生活は半分を過ぎた。このままだと、卒業まであつという間。

だから、早く。早く。かぐやと白銀には、次のステップに進んでもらいたい。本音を言えば、無理矢理にでも、彼女の背中を押したいのだ。でもそれは、かぐやが嫌がるから。主が嫌がることはしない。早坂のポリシーでもあるそれは、しっかりと心の中に植え付けられている。

「私も恋を試してみたいです」

「……そう」

恋は、悪いものではない。

かぐやは、そんなことを口走りそうになった。

藤原千花を笑わせたい

勉強会、約束の日。

四宮かぐや、藤原千花、白銀御行、藤井太郎の四人は、都内の図書館に集まっていた。彼ら以外の人の入りは多くもないが少なくもない。大声で話していると注意が飛んでくるぐらいには。

四人がけの机。かぐやと千花、白銀と藤井が隣り合っていた。

黙って自分の世界に入り込んでいる白銀とかぐや。二人に関して、常に学年一位の座を争ってきた。そんな彼らが一緒に勉強すると自体、ある意味奇跡と言える。

白銀に至っては、かぐやが居るから。

かぐやに至っては、白銀に会えるから。

かぐやの懸念。白銀御行という男は、勉強のことになると目の色が変わる。こうして集まって勉強することに、否定的な立場だと考えていた。

ところがだ。

藤井から話を聞けば、割とすんなり受け入れてくれたという。彼がどういう誘い方をしたのかは分からなかったが、自己肯定の柱でもある勉強を差し出してでも会いに来てくれた。かぐやの脳内はお花畑そう解釈してしまうのである。

向かい合う二人。互いの視線はノートとテキスト。それなのに、意識は互いのことを考えていた。この静かな図書館で、相手の鼓動が聞こえそう。

一方で。藤井太郎と藤原千花。

かぐやたちと同じように、視線をノートに落としている。が、二人とはまた理由が違う。

顔を上げたら、目の前に居る。それだけで、二人は駄目だった。顔

を合わせるだけで、鼓動が高鳴ってしまう。藤井はこれが嫌だった。こうなるから、一度は断つたというのに。

千花にしてもそうだ。彼女に関しては、藤井が来ることすら知らされてなかった。「言わない方が色々盛り上がる」千花を誘う際に、かぐやが受けた言葉。早坂愛の入れ知恵である。

体育祭のあの瞬間以来、彼女は藤井の顔を見るのが辛かった。これではまるで、自分が意識しているみたいで。

そうやって時間が経つのを待っただけ。かぐやと白銀は、さすがの集中力。二人には目もくれず、ただひたすら知識を頭に叩き込んでいく。

「ちよつとトイレ……」

藤井は、返事を期待しない声で、そつとその場を離れる。

千花のことは見ることが出来ないこともあったが、何より二人の集中力に驚いていた。秀知院学園の生徒会長と副会長。彼らは、自分とは次元の違う場所に居る。それを痛感する。

席を立ったものの、別にトイレに行くつもりは無かった。ただあの場を離れられれば、それで良かったのだ。図書館の中は静寂。外の空気を吸いたくなかったが、それはそれで面倒。仕方なく、人の少ない場所を探す。

それはすぐに見つかる。横長で、4、5人は軽く座れるであろうソファ席。休憩にちょうど良い。加えて、周りに人は居ない。藤井は、ここで時間を潰すことにした。

腰掛けると、先ほどまで強張っていた体が伸びていく。相当緊張していたのだ。一つため息。それで疲れが取れるわけではないが、気休めにはなる。彼の本心。早く帰って休みたかった。ただそれだけ。

背もたれに寄り掛かって、天井を見上げる。

電灯を付けなくても、十分明るい館内。本の匂いに包まれて、ついうたた寝をしてしまいそうになる。目をこすって、眠気を誤魔化する。

それからすぐだった。嗅ぎ慣れた、甘い香り。

藤井の左側からだ。恐る恐る、首を動かす。藤原千花だった。

(な、なんで……)

彼女から離れるために、彼はここにやって来た。それなのに、千花はわざわざ自分の座っているソファ席に腰掛けた。

「藤井くんも疲れたみたいですね」

「えっ!? ま、まあ……」

「そんなに驚くことないじゃないですか」

藤井から見て、千花は自然だった。これまでと変わりなく、普通に話しかけてくる。図書館ということもあり、声は小さめだが、今日初めて彼女の声を聞いた気になる。

「藤原さんも休憩?」

「そうです。藤井くんがここに来るのが見えたから」

「そっか」

自然だ。普通に会話が出来ている。

彼は少し後悔する。あれだけ気にしていた自分がアホらしく。肩から大きな荷物が降りた気分。楽になったはずなのに、あまりいい気分ではなかった。

だが、それでいいのだ。彼女との距離感は、これが程よくて。何も考えずにただ話に付き合うぐらいの関係が。

藤井太郎と藤原千花。言い方は悪いが、やはり家の格差が大きい。こうして友人関係で居られること自体、彼にとっては奇跡に等しい。だから、駄目なのだ。これ以上のわがままは。

「何で……ここなの?」

「……駄目なんですか」

「いや……そういうわけじゃないけど」

自然な会話を、藤井の質問で不自然に変えてしまう。

どうしてここに来たのか。そもそも、そんなことを聞く必要があったのだろうか。先ほど彼女が言った「ここに来るのが見えたから」という理由じゃ、満足出来ないのか。彼は責めた。口が滑ってしまった自分自身を。

でも、彼女は藤井の方を見ない。ずっと俯いたまま、話している。

それは、自然じゃない。不自然でしかない。

あの藤原千花が、笑わない。見ている側がつつい笑顔になる彼女

の笑顔。彼もまた、千花の笑った顔が好き。それに、彼女と過ごしている大半が、笑っている気がするのだ。今この時間。藤井は物足りない気分になる。

「そんな俯かないでよ」

「俯いてなんかいません」

「いやいや……どう見ても俯いてるし」

分かりやすい嘘だ。

千花の強がりとも受け取れる発言。何か言いたいこと、隠していることがあるのではないか。藤井は察する。

優しい言葉を掛けたい。その先行する想いとは裏腹に、彼の喉は閉まっている。なぜなら、隣にいる彼女は、これまでの藤原千花じゃない。これまで通りに接することが、出来ない。下手な優しさが、彼女を傷つけるかもしれない。そんな、らしくないことを考えていた。

一方の千花。両手を膝の上に置いて、弱い握り拳を作る。二つの小さいそれを、黙って見つめるしかなかった。

藤井の言う通りだった。俯いている。でも、口では彼の発言を否定した。してしまった。どうしてだろう。彼女は自問する。答えは簡単に出了た。

これから先。彼の言うことを受け入れてしまえば、きっと彼のことを苦しめてしまう。彼女はこれまでの彼を思い返す。気を抜いた時に、心に深く突き刺さるような言葉を貰った。そしてそれは、刺さったまま、日に日に熱を帯びていく。その熱は、全身に広がって。

その極め付けが、秀知院学園の体育祭だった。あの時の時間が、心に刺さった言葉を陽動するかの如く、鼓動が止まらない。

やがて、彼のことを見ることが出来なくなった。連絡することも出来なくなった。

でも彼女は、彼の隣に居る。

藤井が席を立った瞬間。目の前から姿を消した瞬間。咄嗟に体が動いた。スマートフォンも何も持たず、ただ、彼の後ろ姿を追った。

冷静になったのは、その後だった。同じソファ席に座って、初めて自分の行動が不可解なことに気づく。それを、藤井は突っ込んだ。

当たり前前だ。彼にとっても、彼女と話すのは気まずい。それなのに、あまりにも突飛な行動。千花に出来ることは、ただ、理由は無いことを告げることだけだった。

「その……悩みがあるなら相談乗るから」

「……いじわる」

「いやそんなつもりはないんだけどな……」

藤井太郎は優しい男だった。

藤原千花。そんな彼に、素直に感謝を言えない自分が嫌だった。

悩み。何だろう。私は、何に悩んでいるのだろう――。

彼女は再び自問する。この、胸が締め付けられる痛み。藤井太郎にキツく当たってしまうこと。どっちも、彼女にとって大きな悩み。

「でも、本当に大丈夫ですよ」

それを藤井に言うのは違う気がした。これを言えば、何かが大きく変わる気がして。それを分かっていたから、千花は誤魔化した。

それに対して、困ったのは藤井だ。

彼女は、自分のことを避けている。口ではそんなことを言うくせに、顔は相変わらず俯いたまま。説得力が無い言葉を浴びせられた彼は、少しだけ、彼女に近づいた。

「そういえば、秀知院学園の文化祭っていつやるの？」

「クリスマス前です」

「行ってもいい？」

「えっ!？」

自然な流れである。だが決して、美しくはない。

驚いた彼女は、この日初めて顔を上げた。そして、藤井の方を見る。彼は笑って、黙って千花の方を見つめている。咄嗟に、彼女は視線を逸らした。笑っているのに、その言葉は決して冗談なんかじゃない。真面目に聞いているのだろうと彼女は察する。

「べ、別に入場制限はありませんから」

「そっか。なら遊びに行くよ」

体育祭の時とは正反対。彼から動いた。そこで彼女に会うかどうかは分からない。でも、その発言で千花は動揺を見せた。俯くのを、

やめてくれた。それだけで、この突飛な提案をして良かったと安堵する。

遊びに行くよ——。たったそれだけの言葉。藤原千花の心に、深く突き刺さる。剣と化した言葉が、また一つ増えてしまった。

「お一人で？」

「まあ。誘うような相手は居ないし」

一人で文化祭を巡っても、楽しいことは楽しい。

だがやっぱり、誰かと一緒に出店を巡るのが一番だと彼女は考えている。だから——。

「俺と一緒に回ってくれないかな」

口にしたのは、藤井だった。彼もまた、誰かと一緒に回りたいタイプの人間。だから、彼女を誘う。千花は、素直に驚いた。

細かいことを気にして、今日まで彼女と満足に会話すら出来なかった。だけど、それは彼女も同じ。自身のことを避けていると感じた彼なりの、強引なやり方だった。

——私と一緒に回りませんか。

藤原千花。これまでなら、まず口走っていたであろう言葉。それをグツと堪えて喉を締めていた。今それを言ってしまうえば、もう、戻って来れない気がして。

それなのに、彼の少し強引な誘い方。さつき刺さった言葉が、胸の奥で熱く燃えている。このままじゃ、体から火が吹き出してしまう。理性の堤防が決壊寸前。何か言わないと、素直に頷いてしまう。そんなことになれば、もう自分が何をしてしまうか分からない。

「……か、考えておきます」

「そ、そっか」

今の彼女には、これが限界だった。

答えを先延ばしにすることで、自分に嘘をついた。でもいずれ、また悩む時が来るのだから、結果的には意味が無い。それでも良いのだ。

藤井は悩んだ。ここは強引にでも引つ張るべきかどうか。

だが、彼女にも予定があるかもしれない。千花の都合を考えると、

無理やり誘うのは得策ではないと判断。しかし、そのまま食い下がるつもりも無かった。

「だ、だったらさ……」

「何ですか？」

「藤原さんの気が向くように……またメールしてもいいかな」

メール。特に用もないが、適当に会話するだけのソレ。藤井は、恥ずかしさを堪えて思い切って問いかけた。体育祭以来、それすらも無くなってしまうのだ。彼の中でも、欲というものが出てくる。

ただこれだと「どうしても藤原千花と文化祭を回りたい」と言っているようなもの。言ってみて後悔するものの、今になって引くわけにもいかなかった。

彼女は、ポカンとした表情。藤井の発言の意味が分からなかった。

口ではそう言ったが、千花の本心はもう決まっている。きつと彼に同情して、一緒に回ることになるだろうと。その言い訳を考えるために、こうして嘘をついたのだから。

でも、彼は違う。純粹に、千花と文化祭を回りたいたいのだ。だとすれば、自身の発言は彼の気持ちや踏みにじったのではないか。彼女の鼓動が早くなる。痛いほどに、脈を打つ。

「ずるいです。いじわるです」

「……駄目かな」

「そんな目で見ないでください……」

今、彼と目を合わせたら終わる。

だから、千花は必死に顔を背ける。

真つ直ぐな想いを向けられることが、こんなにも恥ずかしいだなんて。これまで多くの男に告白されてきた彼女ですら、初めての感情だった。

「どうして私なんですか」

「えっ」

「会長や石上くんでもいいじゃないですか。なのに、どうして」

仕返しに、と言わんばかりに。核心に迫る問いかけ。藤井は分かりやすくたじろいだ。

確かに、千花の言う通りだ。男同士で回った方が気も遣わないし盛り上がる可能性だってある。特に男子校通いの藤井太郎にとって、その選択肢が確実なのだ。

じゃあ、何故。藤原千花と回りたい理由は。まるで面接のように脳内再生される彼女の声。隣に居たい、そんなことを言えば、変に誤解される可能性が高い。頭を巡らせ、良い答えを探し出す。

「藤原さんには笑ってほしいから」

「そんなの理由に——」

「笑ってる藤原さんを見たいから」

「——理由に……」

これ以上無い理由だった。藤井にとっても、千花にとっても。

真つ直ぐすぎる。他を寄せつけない威力のあるストレート。彼女の心の中に突き刺さる。今日何本目だろうか。最早考える余裕は無い。

千花は、また俯いてしまった。振り出し。藤井は彼女に聞こえないよう、小さくため息。

「もう少し、一緒にサボろうか」

「……はい」

今のまま、かぐやと白銀の元に戻れない。

それは、あくまでも表の理由。二人とも、恥ずかしいのに、胸が苦しいのに、心地が良い。

もう少しで、前のように自然な会話が出来るようになる。そのために、今は互い、隣に居てもらおう必要があった。

少しでも冷静さを取り戻した千花は、ゆつくりと顔を上げる。真つ赤に染まった頬を彼に見せると、藤井は揶揄うように笑って見せた。

「顔真つ赤。どうしたのさ」

「誰のせいですか」

彼につられて、この日初めて、千花は笑った。

藤原千花に会いたい

勉強会から二週間が経った。桜川高校でも期末試験は終わり、良いとも悪いとも言えない点数を取った藤井太郎。例年なら、後は年末を待つだけなのだが、今年は違った。

十二月の末。秀知院学園の文化祭、通称・奉心祭に行くことになっている。彼のスマートフォンのカレンダーには、しっかりと予定が組まれている。

だが、彼にとって重要なのはそこではない。誰と行くか、だ。

藤井は、藤原千花を誘ったまま返答を待っていた。勉強会で二人の関係はある程度戻ったものの、まだどこか浮ついている。彼女が店に来ることはなく、メッセージの送り合いもない。そういう意味では、かえって距離感が生まれたとも受け取れる。

あれから藤井は、スマートフォンを見る回数が増えた。

勉強している時でも、ベッドに横になっている時でも、いつでも。気になる。千花から連絡が来ないか、気になって気になって仕方がない。そのモヤモヤを抱いたまま、二週間。心には感じたことのない疲労感が滲んでいた。そしてこの日、彼は彼女に連絡を入れると決意したのだ。

(……でも、何と言えればいいんだ?)

連絡には口実が必要だと考えていた。自室のベッドで横になっている彼。特に用もなく連絡すると、彼女に変な誤解をされかねない。ただ藤井の場合、勉強会の時点で誤解されまくりなのだが、当の本人は一切気付いていなかった。

ただただ、藤井は千花とのトーク履歴を遡る。意味のない会話。意味のない写真。こうして見返してみると、ほぼ毎日連絡を取り合っていたことに彼は驚いた。と同時に、この意味のない会話が、今はとて

つもなく羨ましく思えた。

文化祭まで一ヶ月を切っている。そろそろ聞いてもいいだろうか。だが誘ってからまだ二週間。相手の予定は決まっていなくてもいいかもしれない。そうなる、ただがつついていいる男と思われるかもしれない――。ありとあらゆる可能性が、彼の頭を巡る。その思考が激しく邪魔をする。

パツパツとフリック入力できるのに、一文字打つのにとんでもなく時間がかかるよう。まるで指に重りでも付けているようだった。

――文化祭、一緒に回れそう？

何とか入力した当たり障りのない文章。自然だ。いきなり連絡しても至って普通。裏を返せば、相手の記憶に残らない可能性もある。

どうしても彼女と回りたい彼にとつて、OKを貰えるなら少しでも可能性は高い方がいい。入力した文章を消し、再度考える。そこで、以前彼女が言った言葉が頭をよぎった。

『強引なのはお嫌いですか？』

『いいえ。そんなことはありませんよ』

桜川高校の体育祭。屋上で二人、会話した時の言葉。

彼は考えた。あの発言が本当なら、言い切ってしまう方がいいのではないかと。――

誰かを引つ張るような性格ではない彼にとつて、強引に誘うのは気が引けた。しかし、彼女がそれを好んでいるとすれば、話は大きく変わってくる。

――文化祭、俺と回ろう

修正された文章。前提で話を進める言い方だが、これでもだいぶ柔らかい。ただ、人によつては苛つきを覚える言い方である。藤井は後者。自分が嫌だから、これまでもこんな言い回しはしてこなかった。

だが、藤原千花が望むのなら。彼は自分に言い聞かせ、考える。これを送ってしまう、もう後には引けない。例え既読にならずとも、メッセージを消した形跡は残る。それは意味深な行為に他ならない。

一つ、二つ、三つ。ゆつくりと深呼吸し、意を決して送信ボタンを押した。特徴的な効果音とともに、入力した文章が彼女とのトーク画

面に映し出される。瞬間、既読マークが付いた。

「…やっちゃまった。やっちゃまったよ俺…!!」

ここが大草原なら、大声を上げてのたうちまわっていた。それぐらい、彼は恥ずかしかつた。背伸びした文章を千花に見られたことが。現実には近所迷惑になるため、そういうわけにはいかない。枕に顔を埋め、大声を出す。まるで防音室に居るかのような吸収率。咄嗟の判断ではあったが、藤井は自分を褒めたくなる。たったそれだけのことで。

そんな藤井であったが、問題はすでにその先に向けられていた。

返事が来ないのだ。既読になってから二分が経つが、トーク画面に変化はない。

既読無視——。彼の頭をよぎる最悪の展開。その場の会話が終わるだけでなく、次回、彼が連絡する気力を奪うダブルパンチ。本当に無視されれば、彼女に連絡するハードルが一気に上がる。藤井は頭を抱えた。

だがそれは、彼に限った話ではないのである。

「どうしたら……」

藤原千花。広すぎるベッドに横になり、枕に顔を埋める。すぐ既読をつけてしまったことを、心の底から後悔した。

年相応の彼女らしい部屋の装飾。部屋着すら一般人から見たら高級そうな雰囲気醸し出していた。

返答をしないといけないのに、指が動かない。代わりに、彼から送られてきたメッセージを眺める。これまでとは毛色の違うソレは、彼女の意識を向けるのに十分だった。

『藤原さんの気が向くように……またメールしてもいいかな』

図書館で、藤井から言われた言葉が頭をよぎった。

大袈裟だ。その時はそう思っていたのに。千花は、今初めて彼の言葉の真意を理解する。

この人は、本気で一緒に奉心祭を回りたい。そうなんだ。

藤井の真っ直ぐな気持ちは、彼女にしっかりと伝わっていた。恥ずかじさを堪えた甲斐がある。しかし、千花からのリアクションがない

ため、ひたすら祈るしかない。

彼女としても、彼と一緒に回るのは嫌じゃない。むしろ、本心はそうしたかった。だが、千花もクラスの出し物に参加するため、彼につきつきりになることが出来ない。それが唯一のネックだった。

——— クラスの出し物で抜けないといけませんけど、それでもよければ大丈夫ですよ。

事実を並べる。これであれば、どう転んでも対応できる。

それなのに、千花は入力した文章を眺める。考える。そして、全て消す。これじゃない、違う。自己完結。

藤井太郎が誘ってくれたのだ。なのに、何から逃げているのだろう。何に怯えているのだろう。考える。悩む。結論は出てこない。

藤原千花にとって、彼は特別だった。白銀御行や四宮かぐやから同じような連絡を受ければ、二つ返事で了承する。それは目に見えていた。理由は一つ。自分も行きたいから。それだけ。

なのに、彼の場合は違う。まず考えるのは、藤井太郎がどう思ったか。自分第一だった彼女にとって、それは異常とも言える感情なのである。

——— いいですよ。私も藤井くんと回りたいです。

指が意図せず、動く。組み上げられた文章は、それはそれは甘い。白銀御行か四宮かぐやなら「告白された！」と喚き散らすような言葉である。

自分で見て恥ずかしくなった彼女は、慌てて消そうと試みる。だが、指が動かない。そのまま文章を見つめて考える。

本心だった。嘘偽りのない彼女の本音。それをただ、紡いだけじゃないか。何が悪いのだ。頭の中で、もう一人の藤原千花が問いかけた。

別にこれぐらい普通。何も気負うことではない。彼女は言い聞かせた。特に、深い意味なんて無いのだから。開き直り、送信する。既読はすぐについた。もう逃げられない。

「——— つつっつっ!!」

既読を付けてから五分ほど。悩みに悩んで送ったソレを、千花は後

悔した。恥ずかしくて恥ずかしくて、枕に力一杯顔を埋め、声にならない声を漏らす。パタパタと足を動かし、現実から逃げようとベッドの上の泳ぐ。

握っているスマートフォンが熱い。まるで千花の心を投影しているよう。それすらも恥ずかしく、彼女はソレを手放した。

だが、それは彼女に限った話ではないのである。

「——っしやあああ!!」

藤井太郎、勝利の雄叫びである。

力無く横になっていた体は、彼女からの返信を見た途端、急にエネルギッシュになる。起き上がり、右手の拳を天に突き上げ、思わず握っていたスマートフォンを手放してしまったのである。

それが足に直撃しても、痛みもない。感覚がない。今は何をされても死なない気分だった。五分ほど返信のない地獄を味わったせいか、千花からの答えはまさに、天使の回答。

冷めやらぬ興奮を抑えるように、ベッドに腰掛ける。鼓動が高鳴り、息も切れている。そんなことはどうでもよく、ただただ千花とのトーク画面を見つめていた。

何度見ても、幸せな気持ちになるスクリーン。画面にヒビが入っている藤井のスマートフォン。彼は初めて、過去の自分を憎んだ。これさえ無ければ、もっと綺麗だったのに、と。

無意識のうちに、記念のスクリーンショットを撮り、返答を考える。別に告白されたわけでもなんでもない。ただ文化祭と一緒に回るだけ。それでも、今の藤井にとってそれは、この上ない幸せなのであった。

ここで、返答を考えていた彼に予期せぬ出来事が起こる。

画面が暗転し、映し出されるのは藤原千花の名。電話である。

(えっ、えっ、ちよ、えっ?)

理解が追いつかない。あまりにも唐突の電話。彼にとっても、これはまさかの展開だ。

だが、悩んでいても仕方がない。意を決して、その電話を取る。電話越しの千花は、彼が想像していたより縮こまっていた。

「……………ずるいです」

彼女の第一声は、藤井がこれまで聞いたことのない声色だった。恥ずかしさと悔しさ、そして嬉しさ。その全てが混じっていて。それでも、彼にとっては甘い。耳が幸せになる声だった。

「な、何がさ」

「全部。もう全部です」

「何か声籠ってるけど……………」

それもそのはず。千花は枕に顔を埋めたまま話していた。

顔を上げられない。包まれている感覚が無いと、彼とまともに会話すら出来ないと考えた。

なら、何故電話を掛けてきたのか——。藤井は喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。今、それを言うのは違う。千花が電話を掛けてきてくれたことで、声を聞くことが出来るのだ。むしろ、彼女に感謝したいぐらいだった。

千花としても、やられっぱなしは性に合わない。今この瞬間、藤井太郎に負けた気がして、何か言い返さないといけない。その結論が電話であった。

「藤井くんの方こそ声が掠れてますよ」

「……………そんなことないよ」

「嘘ですね。どうしたんですか？」

雄叫びの代償がこんなところに——。はしやぎすぎたと後悔するも、時すでに遅し。電話越しの彼女は、食いついて離さないピラニアのように突っ込んできた。

藤井は困った。ここで正直に言ったらどうなるか。脳内でシミュレーションする。

『藤原さんと回れるのが嬉しすぎて叫んでた』

『へえ〜可愛いですなえ〜』

それはそれで悪くない——。思いがけぬ結論に至る。

だが、いざ直接言葉にするととなると恥ずかしさの方が勝った。

「ちよつと乾燥気味なだけだよ」

「ふーん……………」

思っていた言葉と違うモノ。千花は少しガツカリした声を漏らした。だが、それを細かく問いただす気にはなれず、そこでようやく枕から顔を離す。見上げた天井。見慣れた部屋なのに、いつもより明るく見えた。

そのまま眠ってしまった。まぶたを閉じれば、すぐ深い眠りに落ちることが出来そう。それぐらいの疲労感が彼女を襲っていた。

「……」

互いに何も話さない。声すらも発さない。

電話において、それは致命的な問題である。しかし、今の二人はそれでも良かった。むしろ、その方が良かった。

話さなくても、時折聞こえる互いの息音。電話越しに、相手が居る。それが分かるだけで、雲の上に浮かんでいるような幸福感が包み込んだ。

「……急に電話ごめんささい。そろそろ寝なきゃ」

「いや……掛けてきてくれてありがとう」

まだ眠れそうにないのに。千花は嘘をついた。

このままだと、夜が明けるまで。彼と電話を繋いでいたくなる。そうなる前に、恥ずかしさが残っている時に、切らないと迷惑になる。彼女なりの、優しい嘘だった。

それでも、聞きたいことは一杯あった。何故誘ってくれたのか、何故自分なのか、何故誘い方を変えてきたのか——。頭の奥から湧き出てくるそれを、彼女は必死に押し込んだ。

「藤原さん」

「なんですか」

「おやすみ」

「……はい。おやすみなさい」

電話を終えると、藤井は脱力感に襲われた。倒れるようにベッドに横になった。視線だけで壁時計を確認すると、夜の十時前。世の中の高校生が眠る時間ではない。もう少し話したかったと後悔するも、あのまま話していたら、きつと。

見上げたら天井。視線の先には、部屋の明かりの中心がある。

眩しさを薄めるように、彼は右手を伸ばし、電気を隠す。顔に影が生まれ、気持ち楽になる。伸ばした手を握る。

（ああ、駄目だ。俺は――）

藤井太郎が掴もうとしているのは、高嶺の花である。

掴みたいのに掴めない。手が届かない綺麗なソレに、彼は既に目を奪われていた。叶わないモノだと分かっているのに、藤原千花と話すだけで、心が跳ねる。

それでも、彼は一人の男。止まらないのだ。この想いは。

小さな、小さな独り言となつて。言霊と化す。

「藤原さんに、会いたい」

白銀御行は伝えたい

秀知院学園の二学期期末試験では、今回もまた、白銀御行が一位の座を死守。試験後の安堵感というのは、一年を通して数少ない心地良さ。思い切り羽を伸ばしたくなるような。代わりに思い切り背を伸ばす。

試験から解放され、季節は十二月。冬に入り、世間は年末の慌ただしさに包まれていた。それは秀知院学園も例外でなく。一年に一度の祭典である文化祭。通称・奉心祭の準備に追われていた。

奉心祭。例年は一日で終わるが、今年に限っては、二日間開催されることが決まっていた。最後は、グラウンドでキャンプファイヤー。近隣への迷惑やマナーの問題からしばらく実施されていなかったが、生徒たちからの強い要望で復活することに。荘厳な校舎をバックに、燃えたぎる炎は冬の空気によく似合う。

そんな時、学校帰りに白銀御行はラーメン天龍に顔を出していた。なんだかんだで久々の店内。醤油豚骨を旨そうに啜る彼を、藤井は横目でチラリと確認する。

不思議と、彼らが来る時は客が少ない。この日もまた、白銀以外の客は居なかった。そのため店主である藤井の父親も、ラーメンを提供するとすぐに裏に消えていく。息子と、その友人に気を遣っての行動である。

「やっぱり美味しいな。ここのラーメンは」
「それはどうも」

彼が来店した理由。純粹にラーメンが食べたくなったと言えば事実だが、それだけではなかった。

白銀御行には、もう時間がない。

もう、なり振り構ってられない。四宮かぐやと過ごせる高校生活

は、一瞬で過ぎ去ってしまう。

アメリカにある世界でも有数の名門大学。そこへ、一年飛び級での進学が決まったのだ。つまり、来年の三月にはこの秀知院学園を旅立つことになる。それがどういう意味か。彼の高校生活の終わりだということ。

彼もここまで引つ張ってはきたが、やはり一人の男子高校生。四宮かぐやと恋人になり、高校生らしいデートをしたり、恋人らしいことをしたいのが本音。となれば、プライドの塊である彼の心は大きく揺れ動く。

「藤井はウチの奉心祭に来るのか？」

「うん。行こうかなと」

「一人でか？」

「……まあ、藤原さんと」

藤井は、やんわりとした言い方をする。

二人で回ることは決まっていたが、まだ細かい予定は立てていない。それでも、二人はしっかりと連絡を取り合っている。そろそろ声を掛けてみようと思っていた時に、白銀が現れたのだ。適当に誤魔化すのも気が引け、正直に答えたのである。

一方の白銀。彼の返答を聞くと、少しだけ目を細めた。藤井の回答は想定内であったが、想定外でもあった。

藤原千花の相手をして欲しい——。自身の計画のために、彼を利用しようとした。それなのに、藤井は既にその先に進んでいる。その事実が個人的には喜ばしいのに、どこか胸に引っかかりを覚えた。ウルトラロマンティック作戦。

白銀は決めていた。文化祭までに四宮かぐやから告白されなかったら、自分から想いを伝えると。誰にも伝えていない自分だけの秘密。奉心祭の完全私物化を図っていた。

それはアメリカ行きが決まる前、願書を提出した段階から練られた計画である。緻密に計算され、彼の知性と感性をフル動員で考え出した。

無論、そこには生徒会メンバーに対する対策も含まれていた。

石上優。彼が想いを寄せる三年生の子安つばめを利用。彼女の出演する演劇の時間を遅らせ、エンカウントを阻止。

伊井野ミコ。食い意地の強い彼女のため、食系の出店を一定の場所に集中させる。そこまで誘導させれば白銀の勝ち。エンカウントを阻止。

そして——藤原千花。白銀にとって、ここが一番の難関だった。何せ、付き合いも長くなるが、未だに彼女の心の中は読めなかった。

だが、素直で色物には目がないこと。子供騙しでも健気に楽しむことができないこと。などから、白銀は「怪盗作戦」を練っていた。予告状をばら撒き、謎解きに見せかけたデマを流せば、彼女は間違いなく釣れる。確信に近い自信があった。

しかし、藤井太郎の存在。そして彼の発言。この瞬間、怪盗作戦の実行率は限りなくゼロに近づいたのである。

「なら、しっかりと隣に居てやってくれ」

藤井は照れ臭そうに彼から視線を逸らした。

一つの疑問。彼は千花とどういう関係なのだろうか。白銀の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。友人であることは彼も理解している。だが、そうだとしてみてもだ。文化祭を二人で回るような仲を、普通の友人だと言えるのだろうか。交際経験のない白銀から見ても、二人の関係は異質だった。

「その……変なことを聞くが」

「なに？」

「藤原と付き合っていたりするの？」

単刀直入。ズバツと切り込む。藤井の反応次第では、白銀の対応も変わってくる。

白銀御行。このままいけば、人生初の告白をすることになる。どれだけ勉強が出来ても、どれだけ権威があろうとも。好きな人に想いを伝えることが怖い。万が一、振られたりしたら。もう、四宮かぐやと話すことすら出来なくなるのではないか。

それが怖くて、怖くて、怖くてたまらないのだ。だから、この日ま

でズルズルと引つ張つてきたわけで。もし、藤井が藤原千花に告白したとするのなら。恥を捨てて、問いかけるつもりだった。

「いや。そんなんじゃないよ」

白銀の期待した回答ではなかった。藤井は苦笑いし、頭を掻きながらそう言う。白銀の心うちには気付くはずもない。

「そうか。悪かったな」口ではそう言う白銀だったが、少しだけ肩を落とした。不思議と、今なら藤井に対して何でも聞ける。そんな気がしていたから。

ラーメンを啜る。チラリと店の本棚を眺めると、店の雰囲気には合わない少女マンガが目に入る。目視で数えると、六冊。以前見た時と変わっていないように思えた。

蘇る記憶。そして推測。藤原千花がここに通っていたのは、あのマンガを読むためではないのか。少女マンガというクツションを挟んでいた二人の関係は、いつの間にか進展している。自身とかぐやの関係と比較しても、それはあまりにも早く、深い。

「ならなんなんだ?」

「何が?」

「藤井にとって、藤原は」

少なくとも、白銀には普通の友人には見えなかった。

自由奔放な藤原千花。彼女と接すると気疲れする人間も少なくな。白銀もその部類だったが、生徒会活動のおかげもあり、それはすっかり解消されていた。

誰にでも、波長が合う人間と合わない人間は居る。その割合も人それぞれ。藤原千花は、「どちらかと言えば波長の合わない人種」と捉えられている。しかしそんな彼女を、藤井太郎は受け止めた。戸惑いながらも、少しずつ関係を作っていた。

秀知院学園でも、そこまで出来る男子生徒は居ないのだ。男子人気の高い千花。告白されることも多いが、彼女の心には響かない。どんなに相手が心を込めて言ったとしても、自身の本当の感情には嘘をつけない人間だから。

「普通に友達だよ。それだけ」

なら、この男はどのようなだろうか。

藤井なら、彼女の心を動かすことが出来るのではないか。白銀御行の心の中に芽生える興味。

「聞き方が悪かったな」

「え？」

「藤原のこと、異性としてどう思う？」

それはただの興味にすぎない。二人が付き合おうが付き合わないだろうが、白銀には何の関係もない。だから、こんなことを聞くのは野暮だと普段の彼なら考える。

しかし、今の白銀は変なスイッチが入っていた。ガールズトークならぬ、ボーイズトーク。ラブ探偵を自称する千花がこの場に居れば、それはそれは盛り上がっただろうに。白銀は心の中で笑った。

藤井は戸惑っていた。あまりにも唐突な質問だった。

彼にそのことを伝えたところで、どうにもならないというのに。

特に何も無い——。そう告げられれば、この会話はこれで終わり。それでも良かった。でも、藤井はもう、戻れないところまで来ていたのである。

「……すごく魅力的だと思う」

「そう、か」

彼の言葉は、真つ直ぐだった。恥ずかしそうに、でも芯が強い。白銀はまるで自分の話のように興味をそそられた。

残ったラーメンを急いで食べきり、次の発言を考える。だがここまで来たら、問いかけるべき言葉は一つしかなかった。

「藤原のこと、好きなのか」

藤井の心の奥に眠る感情。そこに直接話しかけるような言葉。彼は視線を泳がせ、何も言わない。

「……悪い。変なこと聞いた。忘れてくれ」

かつて、生徒会室に相談に来た生徒とは違う対応だった。

あの時は、生徒会長として。今は、白銀御行として。

生徒会長としての白銀は、みつともないところを見せるわけにはいかない。そのため、何がなんでも答えを導き出す。それが正しいかど

うかは置いておいて。

一方で、素の白銀御行は少し違った。彼の言葉の先を聞くのが怖くなり、答えを遮った。学園内でなら絶対にしない行動である。

そんな彼を見て、藤井は考えた。頭の良い白銀が、どうしてそんなことを聞いてくるのかを。頭が良いからこそ、何かしらの意味が隠されているのではないかと。

「……俺には」

「ん？」

「俺には、無理だよ。彼女は、あまりにも遠すぎるから」

それは、彼女に想いを寄せている。

そう言っていることに変わりない言葉だった。しかし、藤井はそれを口に出るなかつた。出てくるのは、否定的な言葉だけ。それも、まるで自分の立ち位置を蔑んでいるかのようで。

現に、これまで藤井はそうだった。彼女のことを考える度に、心が跳ねる。その都度、心に影が生まれる。その影というのが、千花との家柄の違いだ。いつの日か、四宮かぐやと話した言葉。「奪いに行く」と言った自分が恥ずかしくて仕方がなかつた。

高校生の彼でも、この想いは無謀なことだと理解していた。藤原千花の隣を歩くのは、それ相応の人間じゃないと許されることじゃない。その辺にあるラーメン屋の一人息子が、それに当てはまるかと言われたら、彼は首を横に振るだろう。

半ば諦めすら感じられる藤井の表情。千花と二人で奉心祭を回れるというのに、その事実がある限り。彼は心の底から楽しむ自信が無かつた。あの時、あれほど喜んだというのに。

「……お前」

白銀は、懐かしかつた。

目の前の男は、まるで少し前の自身を投影しているようで。呟いた言葉に続くモノを探す。ここで、藤井に何と言えば良いのだろうか。

白銀御行もまた、一般家庭の人間。秀知院学園に通ってはいるが、生徒会長に登り詰めるまで、『生粹の秀知院生』から偏見の目は消えることは無かつた。

努力は裏切らない。外部生でありながらも、必死に勉強し、学年トップを奪い取り、生徒会に入り、全生徒をまとめ上げる生徒会長に選挙で勝利した——。そのドラマのような過程を見ている生徒たちは、いつしか彼に羨望の眼差しを向けるようになった。

だから、努力は裏切らない。でもそれは、彼にとつて些細なことに過ぎなかった。

全ては、四宮かぐやの為なのだ。彼女の為に、彼女の隣に居るにふさわしい男になる為、対等になる為。そのために、様々な時間を犠牲にして、知識を頭に詰め込んだ。

そして、初めて彼女の上に立った。これまで口すら聞いてもらえなかったかぐやが、その瞬間。初めて、白銀御行という男を認識するようになった。彼もまた、立場の違いに悩んだ人間でもある。だから、今の藤井の気持ちは痛いほど分かるのだ。

「それなら、答えは簡単だ」

「……」

「隣にふさわしい男になれば良い」

自身がそうだったように。一言だけ告げる。

そんなこと分かっている——そう言いかけた藤井だったが、喉がそれを許さなかった。誰かからそうやって言われたことは無い。千花に対しての想いを人に話したこともないのだから、それは当然。そのせいか、白銀の台詞が素直に心に入ってきた。茶化すような言い方じゃない。至って真面目な言の葉。思わず固唾を呑むような。

「……出来ないよ。だって藤原さんの家柄は——」

「出来る。やる前から引いてどうする」

「でも」

「藤原はモテる。そんなことを言う奴に勝ち目は無い」

厳しい言い方になってしまったが、白銀の言うことは正しい。そしてそれは、藤井自身もよく分かっていた。

こうしている間にも、彼女は別の男と恋に落ちる可能性がある。特に千花はモテる人種。ライバルは藤井が思っている以上に多いのだ。白銀と同様、時間が無いのは、彼も同じだった。

「白銀君は、そういう経験あるの？」

「……さあな。別に良いだろ」

「それは「ある」って言ってるようなモノだよ」

藤井の表情が少し柔らかくなる。白銀は立ち上がる。用件も終わり、財布から取り出したのは一枚の紙だった。

「会計はこれで」

「ああ無料券。でもそれ、期限切れてるよ」

「嘘!? これあるから来たんだが！」

「冗談だよ。また来てよ」

この店の無料券に有効期限もへったくれも無い。全ては店側のさじ加減である。ケチな白銀にとって、無料か無料じゃないか。死活問題だった。

「奉心祭、健闘を祈ってるよ」

「案外、白銀君もでしょ」

「……さあな」

白銀御行は、心を捧げる用意を整える。

藤井太郎は、心を纏めあげる。

四宮かぐやは、心を受け取る用意を整える。

藤原千花は、心を落ち着かせる。

四人にとって、忘れられない奉心祭が始まろうとしていた。

紅茶が冷めるまで見つめていたい

秀知院学園の文化祭。通称・奉心祭の日がやってきた。

十二月二十、二十一日の両日で開催されるそれには、多くの来場者が見込まれていた。一般家庭の人間が、校内に足を踏み入れることが許される唯一の時間。それだけ近隣住民の関心は高い一大イベントだった。

さらに、今年は例年と違って二日間にわたって開催される。これまで一日開催が続いていただけに、生徒たちの浮かれ具合は例年とは比べ物にならないかった。

季節は冬。行き交う人々のタイプは様々だ。

学生、社会人、お爺ちゃんお婆ちゃん。本当に多くの人間がこの学校に集まっている。そして、藤井太郎も例に漏れず。

「そのパーカー、すごく似合ってる」

「そ、そうですか……？ あはは……」

正午。彼は約束の相手、藤原千花と合流していた。

正門から校舎にかけても、多くの出店が並んでいる。その光景はまさにお祭り。

藤井としては朝から回りたかったのが本心。だが彼女にも都合というものがある。千花と白銀のクラスは「ブルーノート」。客からの注文を受け、目の前で風船を膨らませて色々なモノを作り上げる。そんなシンプルなお店である。

当然、クラス全員に役割が与えられる。大半が接客になるが、呼び込みだったり、道具の整頓だったり、なんだかんだで忙しい一日である。千花も例外でなく、この時間までひたすら風船を膨らませていた。抜け出して遊び回りたい気持ちを必死に堪えて。

その代わり、これからは藤井と二人の時間。千花は心が躍った。普段、学校の違う彼と、堂々と秀知院学園を巡ることができる。かつて、藤井の言った言葉。

——藤原さんと同じ学校だったら、楽しかっただろうな

その意味が、少し分かった気がした。

自身の日常に、藤井太郎という存在が割り込んでくる。それはとても幸せな感情。

人混みの中、立ち止まっている二人。千花は藤井のことを見上げ、私服姿の彼を見たのはかなり久々だったような気がした。

「どこ行こうか」

「かぐやさんのクラスに行きましようよ」

「何やってるの？」

「コスプレ喫茶です」

藤井は少し驚いてみせた。

これはきつと、男子校にはない喜びがそこにはある。そう思うと、自然と口元が緩む。想い人が目の前に居るというのに、まさに最低の感情である。

幸い、千花は歩き出している。みつともない顔を見られずに済んだが、彼の心は落ち着かない。

白銀に店で言われたことが、未だに引つかかっていた。

確かに、藤井は千花に想いを寄せている。それは否定しようのない事実。だが、それを伝えるかどうかは、あくまでも藤井太郎の自由。伝えないことで幸せを得ることだってあり得るのだ。

そう自分に言い聞かせて、藤井は現実から目を背ける。いつか、いつか、彼女の隣にふさわしい男になってから。優しさじゃない。ただの言い訳だった。

「藤井くん？」

「え、あ、ああ。どうしたの？」

「どうして後ろを歩いているんですか？」

「ごめんごめん。少し考え事」

「………そうですか」

藤井は慌てて彼女の隣に並ぶ。怪奇そうな千花の表情。彼は見なかつたことにして、ただ前だけを見て歩く。校舎の中も装飾がなされていて、普段の学校にはない華やかさを醸し出していた。

やがて目的の場所。二年A組の教室の前にやってきた。分かりやすく「コスプレ喫茶」と看板。ただ昼時ということもあり、教室中は中々混んでいた。

千花の顔を見た生徒は、驚いていた。それもそのはず。あの彼女が男を連れている。それも秀知院生じゃない人間を。あからさまにニヤける彼女に、千花は苦笑いを浮かべるしか出来なかつた。

待つことも頭に入れていたが、幸い席が空いていた。二人は案内されるがまま、教室に足を踏み入れた。

廊下同様、明るい飾り付け。だが、ここは紛れもなく秀知院学園の教室である。椅子に座りながら、藤井は考えた。他校に來たこの違和感。独特の雰囲気呑まれないように。

「……もうっ！ さつきからどうしたんですかー？」
「ご、ごめん！ その、つまらないとかじゃなくて」
「本当ですかー？ 怪しいですよ？」

二度目となれば、さすがの千花も問いただす。
辺りをキョロキョロと見て、落ち着きのない彼。意識が散漫していることに、彼女は少しイラついたのである。

藤井は誤魔化すようにメニューを手に取る。もちろん、このメニューも手作り。ポップな丸文字が文化祭感を出していて、どこか微笑ましい。加えて、思っていたより内容も充実していた。紅茶にコーヒー。軽食も出してくれるとくれば、自然と彼のテンションも上がる。

強いて問題を挙げるとすれば。その金額設定にあつた。紅茶もコーヒーも、一杯で800円。少しどころかかなり高額である。強いて例えるなら、キャバクラの薄い焼酎と同等レベル。

「さすが秀知院。分かっていただけど高いね……」

「ま、まあ高校の文化祭ですし……」

「でも四宮さんならやりかねないね」

紅茶にしても、コーヒーにしても、高級であることには変わりない。だがそんなところまで興味のない彼からすれば、自販機の缶コーヒーで十分。それが八本近く買える金額なのだから、普通の男子高校生である藤井が狼狽するのは自然なことなのだ。

そこでどういうわけか、四宮かぐやの名前が出てくる。彼の中で、かぐやは学校のドン。つまりは、このクラスを牛耳っているカースト最上位の人間。間違いではないのだが、何でもかんでも彼女が決めているわけではない。

「——何をやりかねないと?」

そして、かぐやはそう言った陰口には慣れている。

氷のかぐや姫と呼ばれていた、かつての彼女。人は疑うモノという教えを忠実に守っていたあの時。人当たりが悪いなんてレベルでは無かったかぐやは、陰口を言われるのが普通になっていた。

だから、彼女は笑いながら藤井に問いかけた。陰口になる前に。これでも一応、かぐやなりの優しさである。彼女を本気で怒らせたならこれこそラーメン屋の一軒ぐらい平気で潰すだけの力があるのだから。「し、し、四宮さん。大和撫子で似合ってるね!」

「何をやりかねないと?」

「このクラスで一番輝いてるよ!」

「何をやりかねないと?」

「……見逃してくれませんか?」

まさかの本人登場に狼狽ながら、彼は言葉を紡ぐ。咄嗟に出たご機嫌とりだったが、あながち嘘でもなかった。着物を着た彼女は、まさに大和撫子。行き交う男の視線を集めるだけにふさわしい雰囲気。黒髪でデコだしスタイルも、普段と違う彼女を上手く表現していた。

「紅茶を二杯注文していただければ」

「頼みますとも。ねえ、藤原さん」

「藤井くん本当かぐやさんに弱いですね」

かぐやも事を荒立てるつもりは無い。注文で手を打つ。

千花は苦笑いを浮かべる。弱いも何も無いのだが、今の藤井は少しみつともなく見えてしまった。注文を受けたかぐやはその場を離れ

る。彼女の淹れる紅茶は一級品。顔見知りでもある千花と藤井のため、心のどこかで少し気合を入れていた。

「なに?」

「別に。何でもないです」

「気になるよ。そんな顔されたら」

「さつきからブーツとして藤井くんに言われたくないです」

「そ、それはまあ……」

拗ねた子どものように、彼女は視線を逸らす。

思えば、二人がこうして向かい合うのは夏休み以来だった。ラーメン天龍近くの喫茶店で。その時も、千花はどこかイラつきを隠さずにいた。だからか、二人とも妙に落ち着いていた。

「さつきからキョロキョロしてますし。女の子ばかり見てますし」

「そんなことないよ」

「そんなことあります。藤井くんは女たらしです」

「なんでそうなる」

女たらしは言い過ぎであるが、藤井に落ち着きがないのは事実。それがまるで品定めをしているように映ったようだ。彼は否定するも、彼女は話を聞こうともしない。

せっかく二人で回るというのに、雰囲気はあまり良いモノではなかった。楽しみが空回りしているような違和感が彼女を襲う。

夏休みもこんな感じだった。彼が話を聞いてくれなかったことにイラついて、当たって。これでは、同じことを繰り返しているだけ。まるで進展のない自分に、千花はイラついた。

「俺は——」

そんな彼女の意識は、一気に藤井に向く。藤井は少しだけ声を張る。低い声がよく響き、首を傾げた千花の心臓を握っている。高鳴りが伝わってきそう。思わず彼は視線を逸らす。

「俺は……その……藤原さんしか見てないから」

実際に発言である!

つまり「藤原千花以外は見えていない」と同義。彼女の発言を真つ向から否定する言葉である。そしてそれは、千花への好意を表す言葉で

もある。

加えてあまりにも唐突。茶化している雰囲気もない。その言葉の意味が頭に染み渡っていく彼女は、視線を逸らしたままの藤井を見つめた。

「え、え、えつと。も、もうー！　いつからそんな冗談言うようになったんですか？」

「冗談なんかじゃ——」

「盛り上がってますね。お待ちせしました」

タイミングが良いのか悪いのか。かぐやがコップとティーポットを慎重に運んでくる。注文を受けたのだから、それは至って普通の行為。

藤原千花は、少しだけ安堵した。彼の言いかけた言葉は、きつと。確証なんてなかったが、そんな気がしてならなかった。決して冗談なんかじゃないと。

彼女は考えた。もし、彼から言われたなら、何と返事をするべきか。いや、何と返事をするだろうか。

千花にとって、藤井太郎の存在は大きい。知らない世界を見せてくれる男だ。

万が一、彼から告白されたら。巡る思考。自身と目を合わせていない彼の顔をジッと見つめる。不思議と目が離せなかった。

隣では、かぐやが紅茶を注いでいく。上品な注ぎ音。上質な香りが二人の鼻腔を抜ける。普段はあまり紅茶を飲まない藤井でも、漠然とその質の高さが理解出来た。彼の逸れた視線は、紅茶を注ぐ店員かぐやに向けていて。

「藤井くん」

彼の名を呼ぶ。驚いて、彼はようやく彼女を見る。互いに言葉は続かない。

千花は心から、ここに連れてきたことを後悔した。こうしてうまく話せないのも、彼のせいではない。面倒な自分のせいなのだ。

ならどうして、先程の言葉を受け取らなかったのだろうか。冗談だと笑い飛ばしたのだろうか。

ああ、やっぱり私は面倒な女だ——。千花は自分でも、何を考
えているのか分からなかった。かぐやに対する嫉妬に近い感情。こ
れは恋と呼ぶべき感情なのか。それを理解するには、まだ時間が必要
だった。

紅茶を淹れ終えたかぐやは、一言告げてその場を離れた。再び二人
だけの時間。かと言って、交わす言葉はない。沈黙を嫌った藤井は紅
茶を啜る。熱い。舌に広がる熱と苦味。美味しい品種であることに
は間違いないのだが、彼にはあまり理解できない味だった。

千花にとっては、毎日生徒会室で口にする紅茶。飲み慣れた味。し
かし、今この瞬間は味覚がおかしい。いつもとは違う苦味があった。
「さっきの言葉は、本当だから」

今は真面目に彼女と向き合う必要がある。藤井は勇気を振り絞つ
て、千花に言葉を投げた。そしてそれは、先程の彼女の発言を否定す
るモノ。

藤原千花。彼女の心の中には、彼から貰った言葉の剣が刺さったま
まだ。会う度、声を聞く度、その剣は赤く燃えたぎる。心臓が灼かれ
ていくと錯覚するほど、胸が熱くなる。

彼女はふと、夏休みの喫茶店での彼を思い出した。緊張していて、
あたふたしている彼を、可愛いと思えた自分を。

ところが、今はどうだ。まるで逆ではないか。緊張しているのは藤
原千花。そして、そんな彼女を「可愛い」と思っているのは藤井太郎。
正反対の構図。

こつちを見つめて欲しかったのに、恥ずかしくて恥ずかしくて。千
花は視線を逸らした。彼の名前を呼んでおきながら、彼女はみつも
ない自分にイラついた。せつかくの文化祭であるというのに。千花
はイラついてばかりだった。申し訳なかった。目の前の彼に。

それなのに、藤井は千花のことを優しく見つめている。全てを包み
込むような優しいオーラ。

藤井にとって、藤原千花は可愛くて綺麗で、大切な友人なのだ。そ
れは、これからも変わらない。白銀に言われたセリフが頭にこびりつ
いているとは言え、こうしている自分が一番幸せだった。それは自分

自身から逃げている答えだとしても、それで良いと言い聞かせて。

「どうしてそんなことを言ってくれるんですか」

「……それは」

「藤井くんにとって、私は何なんですか」

意地悪なことしか聞けない自分が嫌になる——。千花は心の中で頭を抱えた。ハッキリ言ってしまった方が楽なのに。こんなまどろっこしい聞き方しかできない自分が、心の底から嫌だった。

「大切な人」

本心。真つ直ぐ、嘘偽りのない言葉だった。

揺れ動く心。少し聞くタイミングがズレていたら、こうは答えていなかったかもしれない。高校生の心模様というのは、それぐらい軽くてフワフワしたもの。なのに、そこから放たれる言葉というのは、人の心を打つ。

「もう〜!! もうもうっ!」

「聞いてきたから答えたのに」

「そんな目でこつち見ないでください……」

二人はカップルでもなんでもない。それなのに、誰よりもカップルらしい会話をしていることに気付いていなかった。少なくとも周囲は、微笑ましい視線を二人に送っていた。

「そんなこと言われてもなあ……」

「さっきまでキョロキョロしてたのに〜!」

「いいじゃん。この紅茶飲んだら出ようか」

「もう……早く飲んでください……」

「あと少しかかるかなあ。猫舌で」

「ラーメン屋の息子のくせに!」

「あはは。だから——」

藤井にとつて、藤原千花は大切な友人。偽りない事実だ。

だが、やはり。心に眠る想いは、人の本心である。彼の知らないところで、湧き上がる。心の海から、必死に陸に上がろうと動き出す。「紅茶が冷めるまで、もう少し見つめていたい」

止まらない言葉。止まらない想い。これ以上、彼女の傍に居ると、

必ずボロが出てしまう。藤井の頭の中は、もうパンク寸前だった。

大切だからこそ、距離を置くことだつて重要なのだ。そうしたいのに、藤原千花に会いたい想いが溢れ出る。

「こ、この後何か食べましょう」

彼の言葉を無視するように、千花は言う。少しだけ震えている声。彼女たちの奉心祭は始まったばかりだというのに、すでに疲労感が襲う。でもそれは、決して不快なものではない。むしろ、幸福感に包まれた不思議な味だった。

「紅茶、中々冷めないね」

嘘であることに、彼女は気付いていない。

それはただ、藤井太郎が彼女を見ていたがための口実。嘘に塗れた彼の心の中は、自身が思っている以上のスピードで、藤原千花に飲み込まれているのである。

意気地なしの隣に居たい

藤井太郎と藤原千花の奉心祭は、二人の想像以上に疲労が溜まるものになっていった。コスプレ喫茶で紅茶を飲み、出店で食べ歩き。たつたそれだけだと言うのに、それに見合わない疲労感が二人を襲う。

楽しい時間だというのに、藤井は危機感を覚えていた。千花と過ごす時間が幸せすぎて、心の奥に沈めたはずの感情がチラチラと姿を見せる。そしてそれは言霊となって彼女に届く。コスプレ喫茶での自身の発言を思い返しても、恥ずかしさで背中に汗が浮かんでいた。

時刻は午後二時を回っている。これまでブラブラと回っていた二人の足には乳酸が溜まっている。藤井はどこかに座りたかったが、千花はそういうわけではなかった。

「藤井くんは怖いのが平気ですか？」

唐突な質問だったせいも、彼は何も考えずに素直に答える。

「ん。まあ嫌いじゃないけど」

「でしたらミコちゃんのクラスが面白いですよ。アトラクション的なところ行つてないので、せっかくですから」

彼女のいうことも一理あった。藤井は頷いて見せる。

高校の文化祭において、ホラー系の出し物はもはや定番となっている。男女の関係を深める場所としても使われるソレには、怖さを求めているなかったりするのが参加者の本音でもあるが。

加えて、今日の二人は飲んで食べているだけ。妙に物足りなさを感じているのも事実。二人の足が一年生の教室を向くのは自然の流れであった。

「そこってどんなお化け屋敷？」

「お化け屋敷というか、音響系ホラーですよ」

「音響か。なるほどね」

近年ではバイノーラル音響、いわゆる立体音響を活用したお化け屋敷もあるぐらいだ。そういうのに疎い藤井でも、理解できるほどメジャーなものだった。

さらに、準備の時間を大幅に短縮できたにも関わらず、完成度は一般のお化け屋敷に引けを取らない。今年の奉心祭の中でも人気スポットになっていた。

「どんな感じなんだろう」

「二人でロッカーに入って楽しむんです」

「あー二人でロッカーにね……え？」

千花の説明はかなりぎつくりしたものだった。

間違いではないのだが、それだけだとどうしても誤解を招く。現に、藤井は立ち止まり、思考を巡らせている。

（ロッカーに二人きり……ああ死んだな）

どう想像しても、ロッカーという密室に二人で入るのは不味い。特に、藤原千花というダイナマイトを抱えた状態なら、理性が木っ端微塵に吹き飛ぶ自信があった。

立ち止まった藤井に、千花は懐疑的な視線を送った。

「どうしたんですか？」

「あ、ああいや。なんでもないよ」

「……もしかして」

「な、なに」

「緊張してるんですかー？」

顔を覗き込んでくる千花に対して、彼は頭を掻きながら考えた。緊張と言えば緊張だし、そうでないと言えばそうでない。藤井は複雑な感情に苛まれた。

「その……藤原さんはいいの？」

「何がですか？」

「俺と二人でロッカーに入るの」

「全然いいですよ。男女で入るのは普通みたいですし」

「そうなの……？ かなりハードル高い気がするけど」

男子校で女子に耐性が無い藤井からすれば、ハードルの高さだけで

世界記録を取れるレベル。しかし、共学だと少し訳が違う。特に世間とかけ離れた秀知院学園。感覚がズレていたところで、さほど驚きは無かった。

藤井は、再び歩き出す千花の隣に並んだ。自身の胸元ぐらいまでしかない身長 of 彼女。これが密着するのだ。今の段階から心臓の音がうるさい。聖者でもなんでもない並の男である藤井。それ相応の反応を示す危険もあった。もしそれがバレれば、完全に彼女に合わせる顔が無いのだ。

だが嫌いじゃないと言った手前、今から断るのも気が引けた。それに、話の流れ的にここで断れば「千花と一緒に入るのが嫌」と受け止められる可能性もゼロでは無い。完全に詰んだ展開だった。

「ここですよ」

「あれ、藤原先輩！……と」

「ど、どうも」

教室の前。二人を出迎えたのは、占い師が着るようなマントを羽織った伊井野ミコ。どこか神妙な面持ちで二人を眺めていた。

体育祭のあの日。藤井への誤解は解けた気でいた伊井野であったが、いざここに連れてくる彼の気持ちを考えて、グツグツと湧き出る怒りと嫌悪。自然と彼を見る目が変わる。

「すみませんが、男女は別々になりますので！」

事実、このアトラクションは純粋にホラーを楽しむことが目的である。ロッカーに二人きりだからと言ってやましいことをしたり、イチヤイチャすることを推奨しているわけではないのだ。

ところが、あろうことかそれを破った性欲神榎本 渚は存在した。これに伊井野は激怒。その瞬間から男女で一緒になることは禁止されたのである。

そのせいか、それ以降の客足は激減。暇を持て余していた彼女たちの元に、藤井が現れた。それも伊井野が尊敬してやまない藤原千花と一緒に。

「そっか。だって藤原さん」

「えーっ！ つまんないです」

「あれ？」

伊井野の予想を裏切る会話が繰り広げられた。

こう告げると、大抵の場合は男の方があからさまに落ち込むもの。実際そういうシーンを見てきたのだから、否定しようのない既成事実のようなモノ。

しかし、二人の場合は逆だった。少し安堵した表情の藤井に対して、分かりやすく不満を漏らす千花。伊井野の思考は乱される。

「ミコちゃん。そんなのつままないよ」

「で、ですが……不純異性交際は禁止ですから……」

「そうだよ藤原さん。ルールなんだから」

「あ、あれ？」

伊井野は話を聞きながら首を傾げる。これではまるで、誘っているのは千花の方ではないかと。

ここに来る客のほとんどはしつかりホラーを楽しむ人間。この二人もその部類に入るのだが、何せ性欲神柏木渚のインパクトが強すぎて、伊井野は正確な判断が出来なくなっていたのも事実だった。

藤井にとつて、伊井野の存在はありがたいようでそうでない。彼女が居ることで、千花との密着を逃れることができる。しかし、そんな機会はこの先一生ないかもしれないのだ。彼は心の中で頭を抱えた。

「藤井くんは一緒に入りたくないんですか？」

そんな心情を読んだように、千花は藤井の顔を覗き込んだ。

ただでさえ顔が整っている藤原千花。その上目遣いというのは、男を落とすのに必要な破壊力をこれでもかと有していた。

(ああ不味い)

揺らぐ藤井の心。視線を逸らす。

ここで頷いてしまえば、きつと千花は押し通すに違いない。彼の直感が訴えかけた。

それは彼の心の中もそうだ。デフォルメされた藤原千花に押されて押されて、友人として振る舞おうとする藤井太郎は崖に追いやられる。

「……入りたいです」

そして荒れた海に突き落とされる。代わりに、もう一人の自分。藤井太郎の本心が姿を見せる。それに気付いたところで、何も変わりはない。強いて言えば、千花の手を引くことも出来ない奥手な彼になっただけで。

「ほら〜！ 藤井くんも言ってるじゃないですか」

「だ、駄目ですっ！ そんなこと言って——」

「ミコちゃん。細かいことは気にしちや駄目だよ？ 平気だから」
「……うう」

藤井の直感通り、千花は、伊井野ミコに対して強気に出る。

そして案の定、そう言われてしまうと何も言い返せないのが伊井野ミコである。特に、尊敬する藤原千花のこと。彼女から直接言われてしまえば、簡単に折れてしまうのもまた、伊井野ミコという人間であつた。

これに困つたのは藤井だつた。伊井野ミコがこんなにも簡単に折れると思つていなかったようで、分かりやすく戸惑う。

「絶対に何もしないでください!!」と藤井は念を押され、教室に足を踏み入れる。室内は外の光を一切遮断している別世界だつた。やけに余裕な千花。藤井はどこか感心しながらも、説明を聞かずただ彼女に見惚れていた。

「チヨキ子さんです！ 早くこのロッカーに隠れて！」

「え、あ、はい」

「中に入ったらヘッドホンとアイマスクを付けてください」

「はい、どうも」

ストーリーをガン無視する必然性ゼロの説明。しかし、今の藤井はその話すら聞いていない。言われるがままそれを受け取り、ロッカーに体を預ける。続けて、千花が彼の右隣にぴったりと付いた。

扉を閉めると、藤井が想像していた以上の密閉空間が生まれる。彼は焦つた。

(ち、近すぎる……)

体の凹凸が人よりも激しい藤原千花。藤井の右腕にはその凸の部分が柔らかく当たっている。それはそれはもう生まれて初めての感

触であった。「もにゅ」と目に見えない効果音が聞こえてきそうなの。

藤井は逃げるようにヘッドホンとアイマスクを装着しようとする。本来はそれが目的なのだから、彼の行為は至って普通。当たり前前行動なのである。しかし、千花はそれを許さなかった。

「藤井くんの意気地なし」

「えっ」

ポツリ、と溢れる声。千花は顔を背けたまま、小さな声。

辺りが静かだからか、藤井の耳にもしつかり届いた。加えて、想像もしていなかった言葉。彼は素つ頓狂な声で反応するしかなかった。

千花の顔を見ようとしても、かなりの至近距離。伊井野の目もあり、下手に動くことは避けたかった。そのせいで、今の彼女の表情を見ることが出来ない。

伝わるのは、互いの呼吸音だけ。他に客が居ないせいで、辺りは静かなまま。

「えっと……なんで拗ねてるの?」

「知りません」

「藤原さんってば」

「分かりません」

千花はイラついていた。心が痛む。

何に対してのイラつきなのか。それは彼女自身も理解している。元々奪われない願望のある千花は、どちらかと言えば引つ張ってもらいたいタイプ。あの時だって、本当であれば藤井に言っただけ欲しかったのだ。

ところが、彼氏でもない藤井に対してそのイラつきは可笑しい。彼に当たるのは筋が通らないと分かっていたのに、あからさまな態度として表に出てしまっただけ。本気で藤井に怒っているわけではないのだ。

藤井は後悔していた。手に汗が滲む。

先ほどの千花の態度。彼女は純粋に楽しみたかっただけなのだ。男女問わず、二人でロッカーに入って、ワイワイするのが醍醐味でもある。藤原千花という人間は、そういうモノを心から楽しむことがで

きる純粹さを持っているのだ。先ほどの藤井の発言は、それを否定したことになる。

「ごめん」

「何がですか」

「その……恥ずかしいだけ。こんなに、藤原さんの近くに居れるのが」

「可愛いですね」

「悪かったね……」

「それは藤井くんの良いところですよ」

藤原千花の甘い香り。二人の空間を包み込む。

今この瞬間、藤井は彼女の世界に溺れていく感覚を覚えた。二人だけの世界。他の誰からも、何も言われない二人きりの空間。存在するのは、藤原千花に対する特別な感情だけ。

「今日はこれから生徒会室に行くので、これでおしまいですね」

「……そか」

でも、そんな都合の良い時間は長くは続かない。ずっと昔から決まっている。藤井は薄い返事をしただけで、それ以上は何も言わない。

千花は口を結んで、チラリと藤井のことを見上げた。暗がりで見えないが、彼の視線は自身と違う方を向いていた。それだけで、心が締め付けられる。

(……そつか。そうだよ)

おしまいななんて回りくどい言い方をしたのは、藤原千花のわがままである。

解散、お別れ、バイバイ。後ろ向きな言葉たち。たった一言それ言うだけで、相手に意図が伝わる言葉。彼女は、ただそれを言いたくなかっただけなのだ。

きつとまた会える。すぐ会える。決まってラーメン屋に居てくれる。それなのに、彼女は不安になる。これまでの日常が崩れてしまうのではないか。今日一日。自身の悪いところが彼に露呈した気がして。

だから、今日を終わりたい。早く忘れたい。今日のことを。そうす

れば、また彼は笑ってくれるのだから。

なのに。

——大切な人

なのに。視線が泳ぐ。

——もう少し見つめていたい

なのに。唇が震える。

藤井太郎から言われた言葉が、頭から離れない。意気地なしが背伸びしたようなセリフなのに、頭と心にこびりついて剥がれない。油污れよりも頑固なソレは、細胞を侵食するように広がっていく。

こんな嬉しい日を、忘れない——。そんなのは、嘘だ。彼女の心の中で微かに見えた変化。その僅かな隙に、偶然にも入り込んだのは藤井太郎だった。

「明日また来るから」

「え……」

「キャンプファイヤー、一緒に見たい」

会いに来てくれる。藤井太郎が。これまで通り。その事実が千花の心を潤していく。忘れたいだなんて、もう言わずに済む。この先もずっと、今日のことは覚えていていいのだ。

藤井は、千花にとって都合の良い人物だった。漫画を読ませてくれる友人。その事実が消えることは無い。加えて、どこか彼のことを下に見ていたのも事実だった。

でも、実際は違った。藤井は千花から見ても、誰よりもはっきりしている。大人びている。今みたいに照れ隠ししたりする。何も変わらない。千花と同じ高校生なのだ。

「……待ってます」

「ありがとう」

「いいえそんな」

「だから、おしまいじゃないよ」

「えっ……？」

「また、明日」

千花はこれまでの記憶を呼び起こす。

学校では毎日言われている言葉。友達から、それこそ生徒会メンバーから。でも、彼からそう言われたことはない。初めてだ。

明日も藤井太郎に会える。隣に居る彼に会える。高鳴る心臓。血液が沸騰するような高揚感。

「また明日、ですね」

「うん。今日は楽しかった」

瞬間、伊井野ミコが扉を開ける。アトラクションのことはすっかり頭から抜けていた二人。

伊井野から見た彼らは、恐怖からかけ離れて。とても優しく、笑っていた。

かぐや様は告らせたい

奉心祭二日目。最終日。

例年なら訪れることなかった一日だ。初日に負けず多くの人で賑わう秀知院学園。日が傾き始めた時間帯。冬空に夕陽が顔を覗かせる。その中で藤井太郎は、一人出店をぶらついていた。

キャンプファイヤーは午後五時から始まる。千花との約束の時間まで一時間ちよつと。藤井は待ちきれず学園内に足を踏み入れたのだ。

秀知院学園の雰囲気は、昨日より浮かれていた。桃色の空気感。日常から切り離されたような柔らかくて気持ちの良い。

だがそれも、出店や校舎内に限った話。人気のないところに行けば至って普通の学校の空気感が漂っている。校舎裏の寂れたところでは、告白にもつてこいのシチュエーションが完成しているのだ。

「少し、いいですか？」

そんな場所に、藤井は連れ出されたのである。

桃色の世界に浸っていた彼にとって、ここは別世界に来たかのような雰囲気。思わず固唾を飲んでしまうように。

彼の様子を気にかけることもなく。目の前の彼女、四宮かぐやは向かい合う。

「ごめんなさいね。こんなところに」

「いや……何か用？」

「そんなに警戒なさらないでいいのに」

「(警戒するに決まってる)」

「……はあ。まあいいです」

身構え、顔を歪める藤井に対して、かぐやはため息をついた。

高校生にとって、校舎裏というのは特別な場所とも言える。そし

て、まず頭に浮かぶのは「告白」である。ここに呼び出されるという意味。「放課後、校舎裏に来て」なんて言われた日には、双方が浮き足立ってその日の授業を棒に振るほどに。

無論、藤井の頭にもそんな光景が映った。しかし、四宮かぐやから告白されることはまずあり得ない。これまでの関係を思い返し、そんな甘い考えを捨てた。

「今日は藤原さんと一緒ではないのですか？」

「キャンプファイヤーを一緒に見る予定だけど」

「まだしばらく時間ありますけど」

「まあ……ちよつと早く来ちゃっただけ」

ちよつとにしては随分と待ち時間が長い。かぐやは口元に手を当て上品に笑って見せた。

今の彼はとても分かりやすかった。藤原千花に対する特別な感情。それが体からダダ漏れている。

藤井太郎を利用して、白銀御行に告らせる。かぐやはそんな一時の感情で彼と連絡を取り合っていた。ところが、なんだかんだで半年ほどの付き合いになる。利用できるものは徹底的に利用してきた彼女の中にも、僅かながら情が芽生える。特に、親友である藤原千花と特別な関係になるかもしれない彼に対しては。

「藤原さんなら今頃学校内を駆け回ってるでしょうね」

「どうして？」

「怪盗が出たとか出てないとか」

「なんだそれ」

白銀御行による作戦の一つ。学校に飾られていたハートの風船を全て集め、予告状をばら撒く。対藤原千花用の作戦であった。

が、藤井太郎の存在により予告状をばら撒くことに意味は無くなった。ただそこは白銀。藤井がしくじった時のために敢えて実行したのである。リスク管理もしっかりしていた。

当然、その事実を知っているのは白銀御行本人だけ。ここに居るかぐやの耳にすら入ってない。彼女もまた、今日この日。白銀御行に想いを伝えることを決意した人間なのである。

「その様子だと知らないみたいですね」

「今初めて聞いたよ」

かぐやの頭に浮かぶ一つの可能性。

それは——この怪盗騒ぎが白銀御行によるものということ。

今回の騒ぎ。かぐやから見て、悪戯にしては手が込すぎていた。まず、校内に飾られたハートのバルーンを集めるにもかなりの数。一人でどうにか出来るレベルではない。

となれば、誰かの協力を得る必要がある。だが奉心祭の真つ只中である秀知院生にそんなことをする人間が居るだろうか。居るとしても数は少ないはず。目的の見えない悪戯に付き合うような馬鹿はこの学校には居ないのだから。

だが、目の前の男は違う。かぐやが藤井を利用するように、白銀もまた藤井を利用しようと試みた人間。何か知っているようであれば、かぐやは彼を問い詰める気でいた。

(間抜けな顔……本当に知らないみたいね)

判断材料は彼の言葉と顔。9：1で顔、というか表情。かぐやの言葉に動揺する素振りすら見せない彼を見て、彼女は体の力を抜いた。

振り出しに戻ったせいかわ、不思議な脱力感がかぐやを襲う。別に怪盗を探しているわけではない。だが、バルーンアートを終えてから白銀の姿を見ていないのも事実だった。

(会長……どこにいるのかしら)

昼間、白銀と一緒に奉心祭を回った幸福感。彼に会いたい気持ちが胸の中に広がっていく。

「なんでニヤけてるの?」

「べ、別にニヤけてなんかいません!」

分かりやすいのは藤井だけではなかった。口元が緩むかぐや。慌てて手で隠すが、ニヤけた事実は消えない。藤井は苦笑いするしかなかった。

かぐやの用件はそれだけ。問い詰めた時のことを考えて人気のない場所を選んだが、完全に無駄であった。藤井は頭を掻きながら校舎の壁に寄りかかる。

「……四宮さんはさ」

「なんです？」

「好きな人とか居るの？」

唐突であった。かぐやは視線だけで彼の方を見る。

先ほどまでの間抜けな顔ではなく、目に力が込められている。真剣な表情。それはまるで、この校舎裏の雰囲気飲み込まれているみたいで。

「……なんですか急に」

「急に呼び出したのは四宮さんの方じゃん」

「そういうことではありません」

揚げ足を取るような彼の発言に、かぐやは目を細めた。

どういう意図があるのか。その真意が読めなかつたのだ。一番高いのは、白銀の差し金である可能性。かぐやは二人が友人関係であることを知っている。

私は白銀御行が好き——。奉心祭の直前、四宮かぐやは、ついに彼への好意を認めていた。ようやく。ここまで来るのにどれだけの時間と人が動いたか。それを初めて聞いた早坂愛は崩れ落ちたくなるほどの喜びに近い感情に吞まれたという。

そのことを知っているのは、早坂愛だけ。ここで下手にバラしてしまえば、余計な火種になりかねない。

「そういう藤井さんはどうなのですか？」

結果、はぐらかすことにした。

これでいい。今は来るべき時まで、白銀のことを誰かに言うべきではないと判断。もし彼が告白してくるのなら、この奉心祭は絶好のタイミングなのだから。

加えて、藤井の性格。こういった込み入った話になると慌てふためく可能性が高いと判断。この切り返しをした時点で、かぐやの勝利は決まったも同然だった。

彼女の言葉。藤井の頭に入って数秒。

彼は、すう、と息を吸う。

「居るよ」

風で木々が揺れる。枝たちが擦れる高い音。彼の言葉の邪魔をする。それでも確かに藤井は言った。聞き取ることができた。

「……そう、なんですね」

かぐやは思わず視線を逸らした。ここまでハッキリと言い切られてしまえば、たじろいでしまうのが四宮かぐやという人間。自身に向けられた好意でないというのに、不思議と心はフワついた。

藤井太郎の好きな人。それはきつと——。思い返しても、心当たりのある人物は一人だけ。彼が、これから会う人間だ。

前日のコスプレ喫茶でのやりとりを見ても、明らかに友人関係には見えない。もうこれ付き合ってるだろと言わんばかりの主張。イチヤイチヤを見せつけられ、かぐやは内心イラついていたことを思い出した。

「脈はありそうですか？」

「……分からない」

恋をするのは楽しいです——。よくそんなことを言われている。かぐやもその一人であるが、藤井太郎の顔を見ると、とてもそんな言葉が似合うようには見えなかった。

「どうして……そんな顔をするのですか」

「えっ」

「もつと、幸福感のあるものではないのですか」

笑いきれていない彼の表情。それをかぐやは見抜いた。

誰かを好きになるということは、単純なように入り組んでいる。好意を寄せる相手のことを眺めることは簡単だ。しかし、その時間は長く続かない。

相手に好かれたい、そんな感情が湧き出てくる。アピールを繰り返すうちに、どんどん沼にはまっていく。それに気付いた頃にはもう、後戻りできないところまで。

「俺には手が届かない人だから」

だから、落ちる前に距離を置く。藤井太郎の判断は間違っただけではない。彼の言うように、身分に格差のある二人。仮に交際を始めたとしても、待ち受けるのは困難。一つ乗り越えても、また一つ、また

一つと絶え間なくやってくる。

それは保身以外の何者でもないのだ。そう言って、恋心から背を向ける。このまま友人関係でいることが互いにとっての幸せだと言いついて聞かせて。

「……呆れた」

盛大なため息。何を言い出すかと思えば、そんなことを。かぐやは女々しい藤井にイラつきを隠せなかった。

「そんな薄っぺらい優しさもどきは捨てなさい」

藤井は何も言い返せなかった。優しさもどき。その通りなのだ。

それは全然優しくもない。自己肯定するための逃げ言葉。四宮かぐやの前ではそんな言い訳は通用しない。彼は正直に告げたことを心の底から後悔した。

「振られるのが怖いのですか?」

「それも……あるけど。告白したら、もう今の関係には戻れない。だから友達のままの方が良いんだよ」

「どうして。好きな人なのに」

「好きだから。彼女と疎遠になるのが嫌なだけ」

好意を寄せているからこそその感情。

藤井太郎の心の中は、昨日からずっと揺れていた。藤原千花と二人で過ごした時間が増えるたびに胸が締め付けられる。

それなのに、この想いは隠しようのないところまで来ている。その想いを抱いたまま、これから先も千花と友人であり続けるのか。自問する。答えは出ない。

「なら、彼女が他の男と交際しても良いと。そういうことですね」

「……」

「あの子、男子から人気あるんですよ」

「知ってる」

「告白されることだって珍しくないのです」

「知ってる」

「ついさっきだって、告白されてるのですから」

「……それは知らない」

彼を取り囲む空気が揺らいだ。動揺だ。

口ではそんなことを言う藤井であるが、藤原千花を好きだという想いは変わらない。当然、彼女が他に男を作る可能性は高い。その気が無くとも、男の方からホイホイと寄ってくる。

かぐやはそんな彼を見つめる。藤井の発言も理解できなくもなかった。白銀に告白したとして、もし振られてしまったら。藤井と同様に、もう元の関係には戻れない自信があった。心の底から白銀御行が好きだから。好き故の感情。藤井の言葉がよく分かる。

「……ま、あとは貴方で考えなさい。どうしようが、貴方の自由なのですから」

本当はもつと言いたいことがあった。以前、藤井がかぐやに対して言っていたセリフをぶつけようとした。

だが、かぐやは寸前でブレーキを踏む。このまま突っ込めば、自身への墓穴を掘ることに繋がりがかねない。冷静な判断だった。

壁にもたれていた藤井は、その場を離れようと体を起こした。かぐやもため息をついて藤井の隣にぴたりと付く。約束の時間まであと少し。気が付けば陽もすっかり沈みかけていた。辺りは一気に暗くなる。

すると、かぐやが思い出したかのように口を開いた。

「そうそう。奉心祭には伝説があるんですよ」

「伝説？」

「ハートの贈り物をした人は結ばれる、というものです」

「へえ」

「……随分と興味なさげですね」

「まあなんとというか……うん。あんまりそういうの信じないタチですよ」

ツレナイ反応に、かぐやは何度目か分からないため息をついた。

これから彼女は、キャンプファイヤーの重大な役目を課せられていた。一言告げて、二人はそこで別れる。一人になった藤井は、約束の場所である中庭でスマートフォンを眺めながら時間を潰すことにした。

「藤井くん」

甘い声が藤井の耳を抜ける。同時に、高鳴る鼓動。彼が顔を上げると、目の前には意中の彼女が立っていた。

「藤原さん」

「えへへ。昨日ぶりですね」

千花は笑う。暗がりでもよくわかる満面の笑みだった。

眩しすぎる笑顔に、藤井は視線を逸らす。高鳴る鼓動。脈打つ血液が痛い。そんな彼の顔を、千花は平気で覗き込んでくる。

「こつち見てくださいよ」

「見てるよ」

「見てません！ 明らかに顔背けました！」

「そんなことないってば……」

かぐやとの一件があるせいか、昨日以上に千花のことを意識してしまっていた。藤井は分かりやすく焦った。構わず顔を覗き込んでくる彼女に対して、出来ることは顔を合わせないことだけ。

「グラウンドに行きましようか。もう少ししたら始まりますし」

昼間に比べて、人数は少し減っている。しかし、秀知院生を始め多くの高校生が校内には残っている。メインイベントのキャンプファイヤー。そこはまさに、リア充の巣窟なのだ。

「キャンプファイヤーって、かぐやさんの弓矢で点火するんですよ」

「へえ。ああそれで」

「それでは？」

「さっきまで四宮さんと話してて。準備があるって言ってたから」

「そうだったんですね」

グラウンドにはすでに、多くの生徒たちで一杯だった。

藤井は校舎を見上げる。荘厳な雰囲気醸し出しており、屋上には龍のオブジェと大きな風船玉が存在感を放っていた。

「そう言えば、怪盗見つかった？」

「生憎ですよ。手掛かりも少ないですし」

「あはは。そりゃ残念」

「また動き出すかもしれません。その時は藤井くんも手伝ってください」

いね」

「はいはい」

適当に返事をする藤井の声を掻き消すように。グラウンドが少しざわめく。やがて、落ち着く。藤井と千花も、それに合わせて視線を泳がせた。

その先には、弓道着を見に纏った四宮かぐや。先ほどとは違う空気感の彼女に、藤井は目を奪われる。一つ一つの動作に品があり、弓道のことを知らない彼でも見惚れてしまうような。

「イテっ」

「鼻の下伸ばさないでください」

「伸ばしてないよ」

「……もうっ」

藤井の脇腹に指差す千花。適当にはぐらかされた印象を受けたせいか、呆れたようにため息をついた。

でもそれは、互いにとって心地の良い時間でもあった。二人だけの時間が流れているような感覚。寒さをかき消すような甘い感触。

そんな二人を横目に、かぐやの矢が放たれ着火する。

影になった空と乾いた空気を切り裂く炎。

冬。この空気感に見事なまでにマッチングしている。グラウンドの真ん中ということもあり、その光はしっかりと全員の目に届いていた。

そんな時だった。

空から、紙切れが降る。大量に。グラウンドに居る全ての人間に届くように。

文化祭は頂く――。

炎のすぐそばを舞っているというのに、その紙は燃え切ることなく空中を泳いでいる。不思議な光景であった。予告状に浮かれていたせいか、生徒たちはそこに気づくことはない。そして藤原千花もまた、その一人であった。

「怪盗さんですっ……！！ 藤井くん！」

この瞬間。藤原千花の意識は、藤井太郎ではなく怪盗に向けられた

のである。屋上に飾られた風船玉が消え、それに気づいた彼女は屋上に向かおうと藤井を急かす。

繰り返す。今、彼女が見ているのは藤井ではない。怪盗である白銀御行である。二人きりの時間が終わろうとしている。

コスプレ喫茶。

ホラーハウス。

キャンプファイヤー。

二人で回った奉心祭。まるで走馬灯のように頭の中を駆け巡る。それだけじゃない。タガが外れたように、千花と過ごした日々が蘇る。そして残るのは、藤原千花の笑った顔だけ。彼女の笑顔が、彼は好きだったから。

だから、それが見られれば良い——。かぐやに言ったように、それは友達でも十分見られるモノ。だから、この想いは胸にしまったままでもいい。

そう、思っていたのに。

今のこの感情は、違う。藤原千花を奪われたような敗北感が藤井の胸を覆い尽くした。友達の一人なのに、特別な関係でもないのに。

——男子に人気あるんですよ

違う。

——ついさつきも告白されたのですから

違う。

四宮かぐやに言われた言葉を必死に否定する。こんなことをしても、もう無駄だと分かっているのに。それなのに、まだ素直になれない自分が嫌で嫌で仕方がなかった。

彼女への想いに嘘をついたまま、これからも。

そう決めたのに。それなのに。藤井太郎の中に芽生えている恋心は、彼の判断を許さない。心が吞まれていく。自分自身の本当の感情に。だから、藤原千花に手を伸ばしてしまうのだ。

「藤井、くん……?」

「今は……俺の隣に居てほしい」

月は笑い 太陽は涙する

「え、えつと……ど、どうしたんですか……?」

「……言葉の通りだよ。今は、二人で居たい」

藤原千花は素直に驚いた。目の前の男、藤井太郎の行動。自身の手首を掴んで、その場から立ち去ることを許さない行為。彼と一緒に屋上へ向かうつもりだった千花にとって、それはまさに予想外の行動であつた。

藤井の手は冷たかつた。それなのに、手首から彼の体温が千花の体に伝わる。まるで彼の体を共有しているようで、千花の体は自然と熱を帯びた。

「だ、だから一緒に屋上へ……」

「怪盗のことは、見ないで」

「藤井くん……?」

千花は彼の横顔を見つめる。真っ直ぐ、キャンプファイヤーを眺めているだけ。藤井が今、何を考えているのか。彼女は読めなかつた。せつかく名前を呼んだのに、藤井は何も言わない。

(藤井くん)

心の中で、再び彼の名を呼ぶ。当然、反応は無い。

自身の手首を掴んでいる彼の考えていることは分からない。それでも、一つだけ確かなことがある。

二人で居たい。彼のその真っ直ぐな言葉は紛れもない真実。千花はこれまでの彼との日常を思い返す。そんなわがままを言ったのは割と珍しい。怪盗のことは相変わらず気になっていたが、ここは素直に折れることを選択した。

「分かりました。ここに居ますから」

「ありがとう」

「いいえ」

「優しいね。藤原さんは」

「……本当にどうしたんですか？」

前日に続いて、藤井太郎の様子が気になった。千花が問いかけても、「特に何も無い」と誤魔化す藤井。そんなはずはない。勘の鋭い方ではない彼女から見ても、今の彼はおかしかった。

誰よりも優しく、頼りになる友人。藤井太郎。そんな彼が今、何かに怯えているように見えた。一人になりたくない理由があるはず。千花はそう解釈する。

「どうして、手を離さないんですか？」

燃える炎を眺めながら彼女は問いかける。さつきから質問してばかりだと気付いたが、特に気にする素振りは見せなかった。

ここに居ると伝えたにも関わらず。藤井の少し大きな手は、千花の手首を掴んでいたままだった。千花は「案外暗がりか苦手なのかもしれない」なんて、一人で想像する。口元が緩むが、彼の回答は自身の想像の斜め上をいくものだった。

「実は暗いのが怖かったり？」

「そんなんじゃないよ」

「じゃあ何ですか？」

「今は藤原さんのことを離したくない」

「へっ」

「何処にも行かないでほしいから」

だから何処にも行かないと。そう言っているのに、今の藤井には話を通じていなかった。だが、千花はそれを問い詰める気になれない。

相変わらず、藤井は炎を見つめるだけ。千花の方を見ようともしない。だから、彼女の頭には「揶揄われている」なんて可能性が浮かぶ。でも、藤井の真剣な横顔を見つめると、その可能性は潰える。

「そんなこと……軽く言わないでください」

「ごめん」

「別に怒ってません」

二人、先ほどよりも体温が上がっていた。

キャンプファイヤーで周囲の気温が上がったから。なんて思い込もうとしている千花に対して、藤井は握る手に少し力を込めた。

冷たかった彼の手は、いつの間にか暖かくなっている。まるでカイロに包まれているようで、不思議と心地良かった。

「怪盗って何だったんでしょね」

「俺にも分かんないな」

「ハートの風船だけ盗むなんて。告白でもするんでしょか」

「案外そうだったりしてね」

案外そうなのである。ラブ探偵・藤原千花。ここに来て推理が冴えている。ところが、彼女の意識はすでに藤井に向けられている。怪盗のことは間も無く、頭から抜け落ちようとしていた。

「……藤原さんさ」

「なんですか?」

「今日も告白されたんだって?」

藤井からそのことを言われると思わなかったのか、千花は苦笑いする。

「あはは……そうですね」

「断ったの?」

「はい。お断りしました。お父様が許してくれないでしょうし」

「そっか」

漫画を読むのも検閲が必要な藤原家。それが彼氏となれば、父親である藤原大地の検閲は最大級に厳しいものになる。接点のない藤井ですら、そのことは容易く想像できた。

千花はそれを理由に断ったと言う。なら。藤井の頭に浮かぶ疑問。

「お父さんが許してくれたら付き合ってた?」

「あはは。いえ。考えたこともなかったです。基本的に、まずお父様の顔が浮かんじやうので」

「そう、なんだ」

それはつまり。藤井太郎も同様だと言われているようなものだった。彼は軽いノリで聞いてしまったことをことを後悔する。

藤原千花にとって、それは至って普通の話。これまでもずっとそう

やって生きてきた。高校生になって少しずつ緩くなっているとは言え、まだまだ親の力が必要な年頃であることには変わりない。

秀知院生でもそうやって断られたと言うのなら。藤井太郎はどうなるのか。話を聞く限りでは、土俵にすら立てていないのではないのか。

「藤井くん？」

「ご、ごめん。少し寒くて……」

自分には脈が無い。全く無い。現実を突きつけられた気がして、涙が出てきそうになって。藤井は必死に堪えてみせる。代償として、体が震えて止まらない。みつともない姿を見せてしまったと後悔しても遅い。千花は心配そうに彼のことを見つめていた。

どうして、そんな悲しそうな顔をするのだろう。

藤原千花は考える。何か気に障るようなことでも言ってしまったのだろうか。悪口なんて言ったつもりはないのに、申し訳ない気持ちになっていった。

思い返せば、昨日からそうだった。藤井太郎のことを困らせてばかりで、その度に彼は優しい言葉をかけてくれる。それに甘えて甘えて、今もまた甘えて。出会った時からずっとそうだった。

「私は藤井くんの味方ですよ」

「えっ……」

「大丈夫ですから」

だから、その恩返しを。

千花もまた、彼に対して優しいのだ。彼だけに特別な優しさ。本人はそれに気づいていないだけで、藤井だけへの想いなのだ。

「あはは……ありがとう」

「お安い御用ですよ」

彼女は笑う。キャンプファイヤーにも負けない輝いた笑顔。涙が出そうであまらなかつた藤井も、それにつられて頬が緩んだ。

——隣にふさわしい男になればいい。

こんな時に、白銀御行に言われた言葉が藤井の頭をよぎる。

彼は簡単に言ったが、それには相当な努力が必要。だが、藤原家を

納得させるのに一番効率的で確実な方法であることは間違いない。

藤原千花の隣にふさわしい男。それはどんな男なのだろうか。藤井はもちろん、助言した白銀にもそれは分からなかった。

「ねえ、藤井くん」

「なに？」

「好きな人とか居ないんですか？」

「えっ」

唐突である。素っ頓狂な声を出したのは藤井太郎。これまでの低い声とは正反対の声だった。千花は笑う。あまりの慌てように、彼女は察してしまう。彼は今、恋をしているのだろうと。

恋バナは藤原千花にとって、何よりも甘い蜜。学校の中でも人の話に入り込んでいく積極性があるほど。

先ほどかぐやに問いかけた時とは、まさに逆の構図。藤井はあからさまに千花から顔を背ける。

「分かりやすいですねえ」

「な、何も言っていないよ」

その態度。千花は赤くなる彼の顔を見ながら、口元を緩ませた。相変わらず手を離そうとしない藤井。そんな彼が可愛らしく、つい手を握り返そうとする自分が居た。

「彼女居ないならいいじゃないですか。告白してみても」

「そんな簡単に言わないですよ……」

「私は応援しますよ？ 藤井くんには彼女が——」

言いかけて、千花は言葉を飲み込んだ。

心の中に、引つかかりを覚えたのだ。言葉が針に突き刺さって取れない感覚。不思議な感情だった。

藤井太郎に彼女が出来ることは良い事。そうだと頭の中で理解していた。これまで触れてこなかっただけで。ところが、そこに引つかかる。彼に恋人、隣を歩く女性。自身が否定する要素はないというのに。

（あれ……あれっ……）

千花の心の奥深く。突き刺さった言葉の剣が燃える。図書館で勉

強した時のように熱く。いや、その時より熱を帯びて、それはまるで太陽のように彼女の心の中を照らし出す。

隠れていた感情にも、スポットライトが当たる。彼女が無意識に逃げていた想いたち。藤井太郎の言葉が照らされるのと同時に、直接千花の脳内を刺激する。

——笑ってる藤原さんが見たい。

藤井くん。

——大切な人。

藤井くん。

——また、明日。

藤井……くん。

まるでこの時を待っていたかのように。藤井があげた言葉たちは、千花の体の中で燃え盛っている。そしてそれは、しっかりと彼女の体に広がっていく。体温の上昇とともに。

なら、今千花が言おうとしている言葉はどうなるのか。宙に浮いたままの発言。藤井太郎に彼女が出来ることを応援する旨の。まるで、彼に恋人が出来ることを推奨するかの発言。

心が痛い。胸が痛い。頭が痛い。藤原千花は今まで感じたことのない痛みを覚えた。冬風に当たっているからなんて思い込もうとしても、それは無駄だった。藤井太郎に彼女が出来ること。その事実を突きつけられたから。

「藤原……さん？」

「あれっ……どうして………」

熱と痛みを逃すように、溢れる涙。その意味を分かっていない千花は、慌てて目元を拭う。ポツリポツリと零れる滴。さっきまで笑っていたのが嘘のように。

情緒不安定さすら覚える急展開。しかし、藤井は冷静だった。

今、自身の想い人が涙を流しているのだ。理由はどうであれ、なんとかしたいと思うのが男である。

彼は、勇気を振り絞る。千花の手首を掴んでいた手は、落ちて行く。やがて、彼女の小さな掌に重なった。先ほどよりも、彼女の熱を感じ

る。藤井の鼓動はこれでもかど高鳴った。

「ふ、藤井……くん」

「俺は藤原さんの味方だから。大丈夫」

「……ま、真似しないでください」

「本心だから」

そう、紛れもない本心。それなのに、千花は彼を茶化す。少しだけ笑顔が戻る。

手首を掴むことと、掌を握ることは、大きく意味合いが変わってくる。藤井は三割の力で彼女の手を握っている。それも長続きしない。その僅かな時間で彼は考えた。

藤井太郎は藤原千花のことが好きなのだ。恋をしているのだ。悲しんでいる彼女のことを、守りたいと思ったのだ。たったそれだけ。それだけの想いで、ここまですることが出来る。

—— そんな優しさもどきは捨てなさい。

家柄のこと、千花の父親のこと。それを気にして自分に嘘をつく。四宮かぐやの言う通り、それは優しさなんかじゃない。ただの逃げである。藤井が一番よく理解していたとはいえ、今になってかぐやの言葉が胸に響いた。

「ねえ藤原さん」

「何ですか……？」

「さっきの話だけど」

千花の手を握る力が、少し強くなる。小さい手が、確かに藤井の掌に収まっている。それだけで愛おしくて愛おしくて。

彼女の顔は赤く染まっている。目元も涙を流したせいかな、少しだけ腫れている。だからこそ、彼は決意する。藤原千花を、守りたいと。嫌いな人にこんなこと、すると思う？」

「……えっ」

千花の手を握る力が、また少し強くなる。

藤原千花は、藤井太郎の顔を見上げる。さっきまでキャンプリファイヤーにしか視線がいかなかったのに、今は彼女のことを真っ直ぐ見つめていた。

今日初めて、目が合った。藤井の真つ直ぐな目が、千花の心臓を直撃する。痛い。痛い。今日一番の痛みだ。それなのに、視線を逸らすことが出来ない。彼の目から、目を離さない。彼の中に吸い込まれそうになる。ここまで来たのだ。もう、藤井太郎は止まらない。後先のことを考える余裕なんてない。今はそれで良いのだ。彼女が他の誰かのモノになるぐらいなら、それで。

千花の掌にうつすらと汗が滲む。今、目の前にいる彼は。考える余裕なんて無い。ただ、彼の言葉が気になって気になって仕方がない。これから何を言われるのか。察してしまった。

瞬間。ざわめきが起こる。

生徒たちの視線は、夜空に向けられる。屋上付近で、巨大な風船玉が割れ、中から盗まれたはずのハートバルーンが姿を見せたのだ。

月夜に映えるハートたち。グラウンドにいる生徒たちの殆どの視線を釘付けにする。歓声に近い賑やかさ。それなのに、藤井太郎と藤原千花は違った。二人の世界に入り込んで、もう溺れてしまっている。

「俺の好きな人は、藤原さんだよ」

「……………え」

藤原千花は、戸惑った。

多くの男から言われ慣れた言葉。それなのに、今までとは明らかに違う。同じ言葉なのに、響き方が全く別物。冗談で切り返すことなんて出来ない。そんな余裕がない。

藤井太郎は、口が渴いた。

生まれて初めての告白。言うまで何度も何度も足踏みしたのに、言ってしまったことで肩の荷が降りたような感覚に陥る。もう友達には戻れない。なのに、後悔はない。

藤井は藤原千花の手を離さない。今日一番、強く優しく握る。

痛い。痛い。痛い。千花は藤井の目を見つめたまま、考える。掌じゃなく、胸が痛いのだ。締め付けられる痛み。

考えようとしても、答えがまとまらない。こんなことは初めてだった。千花の脳内は今まで無かったほどフル回転。オーバーヒートを起こす寸前まで来ていた。

「……答えを聞かせて欲しい」

「あ……え……えつと……」

「まだ、お父さんの顔が浮かぶ？」

浮かんでいない。それが千花の答えである。何せ、オーバーヒート寸前の脳内。それを言う余裕すら無いのだ。

真つ直ぐな彼の目は、藤原千花の心に深く刻まれる。それは紛れもない事実だった。

月。

奉心伝説になぞれば、ハートを捧げた者は結ばれる。そして、この月夜に浮かぶのは、一人の男の愛の形である。

太陽。

秀知院学園のグラウンドの中心で燃え盛る。そして、この陽光に照らされるのは、一人の男の愛の形である。

月に一番近い二人は、互いの想いを通わせる。

太陽に一番近い二人は、互いの想いが入れ違う。

四宮かぐやは、白銀御行の唇を奪い。

藤原千花は、藤井太郎の手を振り払ったのである。

白銀御行は奪わせたい

二日間に及んだ奉心祭も終了し、二学期の終わりも目前に迫っていた。非日常だったあの時間から解放された秀知院学園の生徒たち。これまでの日常を無視するように。二学期も残り少ないせいかな、大分気が緩んでいる。

そして何より、二日後はクリスマス。生徒たちが浮き足立つのもある意味仕方のない事実であった。

生徒会室。陽が傾きかける時間帯。二人の影が伸びる。

白銀御行は、これまでに無い気怠さを感じていた。普段から目つきの悪い彼。この日は一段と切れ味の鋭さが増している。

そんな彼ですら気にかけてしまう人間が一人。この場には居た。

「……おい、大丈夫か？」

白銀が問いかけてしまうほどの理由が、そこにはあった。

二人、向かい合ってソファに腰掛けている。白銀は落としていた視線を彼女に向ける。彼女は、虚な目で窓の向こうに映る空を眺めていた。

普段から何かとお騒がせな女、藤原千花。常に嵐のご真ん中にいるような慌ただしい彼女の様子がどうもおかしい。この日、ほぼ言葉を発していない。かと言って仕事もせず、ただただブーツと代わり映えのしない窓の外に目をやった。

二人きりになっても、それは変わらない。白銀からすれば「帰れ」と言いたいのが本音である。ところが、そう言うことを許さない雰囲気。千花を纏っていた。

「……え？」

遅れること五秒。海外からの中継を彷彿とさせる時間差である。

「おい本当に大丈夫か？ 具合でも悪いんじゃない」

「平気ですよお……」

「説得力がまるで無いな」

普段から切り詰めた生活を送っている白銀であれば、多少の睡眠不足でも平然と振る舞うことができる。無理に気付かれにくいタイプの人間。

それと正反対なのが藤原千花。しつかり食べてしつかり寝て。普段から疲れを知らない彼女が、睡眠不足に陥った時。思考は止まるのである。白銀は、彼女の目の下にうつすらとクマが出来ていることに気付いた。

ある意味、今の二人には「寝不足」という共通点がある。その理由も、異性のことで。奉心祭の終わり。何が起きてても不思議では無い。白銀はいつもより回転数の少ない頭を必死に回した。

頭の中は、四宮かぐやのことで一杯だった。屋上での出来事。人生初の口づけ。それも深い。思考を阻害するには十分な破壊力がある。だが、今の白銀には別の悩みがあった。

一言で言えば、かぐやが変わってしまったのだ。白銀御行から見ても、これまでとは明らかに違う雰囲気。かつて「氷のかぐや姫」と呼ばれていたあの頃のように。人を寄せ付けない空気感が、白銀にも直撃していた。

「……何があつたんだ？」

そのせいで、ありきたりな言葉しか出てこない。いつもならすぐに核心に迫る問いかけが出来るというのに。白銀は内心イラつく。

「何もありませんよ……」

力無く答える千花。それはもう「何かあった」ことの露呈でもある。だが白銀にとつてそれは分かり切っていたこと。ここでどうこう言うモノでもなかった。

藤原千花の脳内には、藤井太郎が居座っていた。

自身の掌には、藤井の手の感触が残ったまま。握り返しても返ってこない切なさだけが残る。

あの夜。藤井太郎の告白。千花に対する好意が爆発した瞬間。今までの告白とは全く違うものとなって、彼女を飲み込んだ。

人から好かれて嫌な人間はほとんどいない。現に、千花は嬉しかった。藤井から告白されて胸が高鳴った。痛みを覚えるほどに。思い出すだけで、また心臓が締め付けられる。

でも、彼女は藤井の手を振り払った。

その事實は消えない。

だがそれが、千花の答えであるとも限らない。

ならなんなのか。

真剣な顔の藤井から、逃げた事実だけが残る。

男友達じゃない、一人の男の手から。

返事すら出来ず、一方的に振り払った。

藤井は何も言わなかった。追いかけることもなかった。

ただ彼は、藤原千花の後ろ姿を見つめるしかなかった。

「おい藤原」

矢継ぎ早に紡がれる彼に対する感情。白銀御行の呼ぶ声により、シャツトアウトされる。そんな白銀の表情は、少し驚きの混じったものだった。

「どうしてそんな顔をする」

「……何でもありませんから」

「だったらどうして……涙を流すんだ」

体内で処理できない感情を放出するように。

溢れ出る滴は、藤原千花の両頬を伝う。慌ててハンカチで拭う姿を見ても、言われるまで気付かなかったように見受けられた。

白銀は戸惑った。こんな彼女を見たことがなかった。彼の前で涙を流したのは二度目。そこではなく、その時とは明らかに違う点。

理由が読めなかったのだ。一度目は、生徒会の活動が終了した時。色々とかみ上げるモノがあったのは白銀も同じ。だから特に何も感じなかった。

ところが、今は違う。あの時より、明らかに憔悴しきっていた。まるで何か、とんでもない悩みを抱えているように。

(……こう言う時、藤井なら何て言うだろうな)

白銀の脳裏に浮かんだのは、カウンター越しに話す藤井の姿。白銀

にとって、藤井の存在は貴重なモノ。藤原千花に対抗できる唯一の間だと感じていた。

そして同時に、奉心祭前の会話を思い出す。彼が恋心を寄せている彼女が今、白銀の目の前に居る。回らない頭ではあったが、点と点が線で結ばれていく。

「藤井と、何かあったか？」

白銀は恐る恐る問いかける。千花の体がビクツと動く。これでもかと言わんばかりの分かりやすい反応だった。

「……な、なにも」

「おい……最早嘘にもならないぞ。そんな分かりやすいのに」「うう……」

涙が止まった千花であったが、白銀から視線を逸らす。

ため息とため息。二人は肩を揺らすも、互いの感情は正反対である。

白銀とすれば、その何かを聞き出せば済む話。

千花とすれば、上手く誤魔化せば良い話。

だがこの状況。自頭の良さの差が明暗を分けることになる。

「藤井から何か気に障ることも言われたか？」

「……そんなじゃないです」

「そうか？ 藤井なら言いかねないじゃないか」

「違う！ 藤井くんはっ！」

両手で力無くテーブルを叩く千花。掌と木材がぶつかる音。乾き切った鼓膜を刺激する音色だった。

「藤井くんは……そんな酷い人じゃありません」

「知ってる。冗談だよ」

「冗談でも藤井くんのことを悪く言わないでください……」

白銀の狙い通りに千花は動いた。

彼女の行動から見て、藤井のことを嫌っているわけではないと察する。だとすれば、そこに落ち込む要素は無いはずだ。彼は思考を巡らせても、いまいちピンと来る答えに辿り着けない。

(何かあるはずだ。思い出せ)

彼は、再び奉心祭前の記憶を手繰り寄せた。そこまで過去の話では無いが、何せ白銀もウルトラロマンティック作戦を執行した人間。準備に相当な時間を掛けたせいも、普段より記憶の容量が減ったように感じていた。

だが、そこは秀知院学園生徒会長・白銀御行。ラーメン天龍での会話。自身がそこに足を運んだ理由。藤原千花の足止めの依頼。そこから話題は——藤井自身のことになった。

『藤原のこと、好きなのか』

ああそうだ。思い出した——。そう、藤井太郎に問いかけた。そして、彼はしばらく黙って答えた。

『俺には遠すぎるから』

自らを卑下するような発言。それはつまり、藤原千花のことを好きだと言っているような言葉。そんな藤井に、白銀は背中を押すような言葉を投げかけた。「隣に見合う男になればいい」と。

となれば。白銀の頭の中に浮かぶ一つの可能性。自身がウルトラロマンティック作戦を執行したように、藤井もまた、覚悟を決めたのではないかと。

「藤井に告白されたのか」

「……………」

「藤原。俺は真剣に聞いているんだ」

逃げきれないと判断したのか、それともその事実を白銀に聞いて欲しかったのか。自分でも分からないまま、千花は小さく頷いた。

白銀は素直に驚いていた。あれだけ奥手だった藤井が、まさかそんなことをするとは思ってもいなかった。同時に、四宮かぐやに好きだと言えない自分の情けなさを突きつけられているようで。

「その様子だと……振ったのか」

「いえ……」

「違うのか？」

「分かんないです……」

「分かんないってお前。どういうことだ」

「逃げ出したんです。何も言えなくなつて」

不思議と、すらすらと言葉が出てきた。千花は複雑な気分になる。

一方の白銀。普段から男子に人気のある彼女らしからぬ反応に驚く。もしくは普段からそんな態度を取っている可能性も捨てきれない。だとしても、ここまで落ち込んだ姿を見たことはないのだ。藤井太郎が特別だということとはすぐに察しがついた。

「逃げ出すって……何も言わずにか」

「はい」

「どうして」

「分かりません……」

「そりやお前。藤井の方が辛いだろ」

「私だって分かんないんですっ……!」

白銀の言うことはごもつともである。

告白したというのに、何も言われず逃げられたのだ。追いかけることが藤井に非があったとしてもだ。男であれば返答が欲しいのが一般的である。

「何が分かんないんだ」

「それは……」

「また逃げるのか?」

「……」

「藤井を傷つけたことが悲しいんじゃないのか?」

「……」

「藤井のことが好きなんじゃ——」

言いかけて、白銀は言葉を飲み込んだ。

藤原千花が口を結んで、必死に涙を堪えていた。それが視界に入ってしまったのだ。彼の言ったことは間違いじゃない。ただ、少しだけ後悔してしまう。

「……すまん。無神経だった」

藤井にも同じようなことを言った。藤井太郎と藤原千花の関係は、不思議と放っておけない何かがあったのだ。気にかけてしまうような。だから、こうして足を突っ込んでしまう。無神経という白銀とは裏腹に、千花は少しだけ心地が良かった。

「私の家、そういうのには厳しいんです」

「……ああ。知ってる」

「きつと彼氏なんて、許してくれないです」

「まあ……そうだな」

白銀は返答を濁した。彼は一度、体育祭で千花の父親に会ったことがある。政治家ではあるが、一般人を見下すようなことはしない人に見えた。ただ、過保護気味ではあるが。そんな親を持つ藤原千花に彼氏が出来たなら。それも庶民の。どうなるか想像するだけで恐ろしさで震えそうになる。

だから、白銀も何も言えないのだ。簡単に「そんなのは関係ない」なんて言葉をかけるのは間違っている。それは優しさでもなんでもないのである。

「きつと……藤井くんを傷つけてしまいます」

「お前……」

「だからこれでいいんです。これで……」

それは側から見ても、自分への言い聞かせにしか聞こえなかった。本心でもなんでもない。本当はきつと、その瞬間。彼に抱きつきたかったかもしれないというのに。

藤原千花は、自分に嘘をつくことを選択した。藤井太郎のことを想った、優しくて脆い嘘を。今にも壊れてしまいそうな彼女の心。ガラス細工よりも割れやすい。

「藤井は、諦めたのか」

「……あはは。諦めてくれるといいんですけど」

「……そんなことを思っている顔に見えないぞ」

何度も言うように、千花のその嘘は脆い。白銀に揺さぶられるだけで、すぐに本心が顔を覗かせる。一度剥がれ掛けた嘘は、中々元に戻らない。千花の口が自然と開いていく。

「これまで、自分の家柄を特に考えたことなかったんです」

「……それで？」

「でも昨日考えたんです。もし、普通の家に生まれていたらどうだったかなって」

「……」

「普通に遊んで、普通に恋をして、普通に恋人ができて」

「ああ」

「今、私がしてみたいこと。全部が出来るんです。自分の意思で、自由に」

言葉が進んでいくにつれ、千花の音が震える。これまで胸の奥にしまっていた想いが、止め処なく溢れ出る。白銀は相槌を打ちながら、黙ってそれを聞くしかなかった。

「お父様やお母様のことは大好きです。姉も妹も大好きです。なのに、なのに、私……は」

震える声。震える肩。怯える声。怯える背中。

それなのに、力強い意思が込められた声。

「普通の家に生まれてたら……だったら、藤井くんの隣に……隣に――」

藤原千花にとって普通は、どんな大金を払っても手に入れたいものになっていた。同時に、自分の家が普通じゃないと理解したことになる。

家柄に囚われて、感情に素直になることが出来ない苦しきを知ってしまったから。そのせいで、彼の隣に居ることを許されない。友人という壁を乗り越えることが許されない。千花の胸が締め付けられる。その証拠に、最後まで言い切ることが出来ず、千花は顔を覆った。溢れる涙。白銀の前で泣くことに抵抗がないせい、止まらない。嗚咽に近い声を出しても、白銀は何も言わずに泣き止むのを待っていた。

そんな白銀は、彼女の抱えていた悩みを直面して。先ほどの言葉がどれだけ無神経だったか後悔することになる。

藤原千花もまた、貴族側の人間である。庶民が手の届かない人間であるのは周知の事実。それは、逆になってもそうなのだ。

貴族だからこそ、庶民と簡単に仲良くすることは許されない。その葛藤は、心優しい藤原千花だからこそ生まれる。家柄を守ろうとする自分と、本心。その狭間で揺れている状態なのである。

「悪い藤原。前言撤回だ。お前は悪くない」

「え……？」

「それと、一つ言っておく」

「……」

「藤井も相当悩んでいた。お前との家柄の差に」

「そう、なんですか？」

「そんなアイツが告白したんだ。並大抵の覚悟じゃない」

千花の顔が少しだけ明るくなる。

藤井も同様だと知った喜びなのか安心感なのか。白銀は構わず言葉をついでいく。

「覚悟を決めた男は、お前が思っているより無茶をするものだ」

「そんなこと……」

「そんなことある。だから、待つてるといい」

「……もう来ませんよ。たぶん嫌われましたし」

「どう捉えようがお前の自由だ。だが奴は、家柄のことも承知の上だろう」

「それは……」

「素直に、自分が言っただけの言葉でいい」

白銀がそう言うと、藤原千花の涙が止まる。

言っただけの言葉。そんなもの、一度聞いたというのに。でも、千花はそんなことを言う気にはなれなかった。

荒れていた波が収まるように、彼女の心の中に落ち着きが戻った。

「……会長に励まされるとは思いませんでした」

「特訓のお礼だ。気にするな」

「全然足りませんけどね」

「ふっ、そうか」

藤井太郎への想い。たださつきまでとは違う。

溢れ出るのは後悔でもなく、悲しみでもない。

「藤井くん、会いたいです」

「きつと会えるさ」

かぐや様は奪わせたい

人気の無い裏路地。冬の風が吹き付けて、コンクリートに反射する。明日はクリスマススイブ、明後日はクリスマス。だというのに、そんな雰囲気からかけ離れている。

どんよりして、乾いた風。それを一身に受ける藤井太郎は、時折両腕をさすりながら、ラーメン天龍の前で安物の箒を使って地面をならしていた。

そんなに汚れていない。むしろもう綺麗な方だ。なのに、彼はその場を離れる気にはなれなかった。理由はひとつ。藤原千花だった。

何かをしていないと、彼女のことを考えてしまう。体を動かして必死に頭にこびりついたソレを振り払おうとする。

振り払う——。そんな単語が今は心に滲みる。擦り傷どころじゃない抉れた痕に。

昨日の告白。勇気を振り絞って伝えた想い。藤井なりに、気張ったというのに。意中の相手は、何も言わず。逃げるように。

(情けないな……本当に……)

藤井太郎。盛大なため息。

あの場面で、千花を追いかけなかった自分を憎んでいた。答えを聞き出したいのなら、あの時の対応は不味い。追いかけて、言葉を引き摺り出すことだって出来たはずだ。

なのに、藤井には出来なかった。逃げ出す彼女の後ろ姿を眺めたまま、一人で考えて考えて。無理矢理、彼女の手を掴むことに抵抗があったのだ。それは、自分だけのエゴのような気がして。

「——情けないわね。呆れる」

心の中に蠢いていた言葉が現れたよう。藤井はハツとして、俯いていた顔を上げる。声のする方を見ると、見覚えのある顔と制服。なの

に、まるで初対面のような雰囲気醸し出した一人の少女。左手に上質な皮靴。学校帰り。

彼は少し考えて、自信なさげに問いかけた。

「四宮………さん？」

「何故疑問形なのかしら。何度も会ってるでしょ」

「いやそうだけど……何か雰囲気変わったね」

四宮かぐやは呆れたようにため息をついた。妖艶さすら感じる黒髪が風に吹かれる。髪を結ったかぐやでは見られない光景が、藤井の前に広がっている。

普段、髪を結った彼女しか見たことがない藤井にとって、違和感しかなかった。変わったのは髪型だけじゃない。彼女を包み込むオーラ。これまで薄い赤色だったのが、いきなり真っ青になったような。藤井太郎は目を擦ってかぐやを見る。やはり、これまでの彼女とは違っただけ見えた。

「何よ。腫れ物を見るような目で」

「いや別に……」

「……」

「な、なに？」

「寒いわ」

「うん。寒いね」

「……愚図」

「なんで!？」

世間話をしただけで言われる言葉ではない。藤井は今日一番の大きな声を出した。

「ここでようやく、彼はかぐやが来た理由を考える。ラーメン屋の前。素直に考えればラーメンを食べに来る以外用の無い場所である。

「悪いけど今日休みなんだ。親父も今居ないし」

「別に構いません。ソレに用はありませんから」

淡々と言葉を紡ぐかぐや。となれば、ここに彼女が居る理由は一つ。藤井太郎に会いに来たのである。何の為にか。だが今の彼にとって、その理由を予想するのは容易かった。

「そつか。なら悪いけど、今は一人になりたいんだ」

「そう。そうやって逃げるのね」

「別に逃げてなんかないよ」

きつと、藤原千花のことだ。彼の頭の中に浮かぶ結論。そしてそれは自分の中での自己完結に留めた。今ここで、四宮かぐやに言うことでもない。そうやって、今日もまた逃げるのだ。

だが、四宮かぐやという人間はそういったことを嫌う。親友である藤原千花の悩み。口では興味のない素振りを見せていても、やはり放っておけないのがかぐやの本音であった。

箒と塵取りを持ったまま。藤井は天龍の入り口横にある階段を登ろうとする。自宅スペースに逃げこもうと試みた。

「——あの子、泣いてましたよ」

ピタツ、と藤井の足が止まる。頭をよぎる昨日の夜のこと。

その時のことを言っているのか、それとも——。

いずれにしても、嫌われたとばかり考えていた藤井にとってある意味予想外の言葉であった。振り返り、かぐやと目が合う。氷のように冷たい視線が藤井の心に刺さる。

「……寒いわね」

二度目の言葉。本心であるが、その発言の意味は違っている。かぐやは横目でチラリと藤井を見上げる。明らかに表情が曇る。彼女の予想は的中。間違いなく、奉心祭で何かがあった。自身と白銀のように。

「……ちよつと待って。店開けるから」

考える前に、自然と足が動いた。踵を返し、店のシャッターを上げる。

電気の付いていない店内に彼女を招く。暖房を入れると、かぐやは少しだけ口元が緩んだように見えた。当然、定休日なのだから他の客は来ない。四宮かぐやと二人きりである。

「何か飲む？」

「……いえ。結構です」

「そう」

これまで以上に微妙な空気感だった。藤井はいつもの癖で厨房の方に足を踏み入れる。

「何故そちらに行くの？」

「まあ、いつもの癖」

「こつちで話せばいいじゃない。誰も来ないのでしょ？ それに、見下された感じがするから」

「君を見下すなんて愚業はしないから」

だが、かぐやの言い分にも一理ある。普段はあくまでも手伝いとしての立場。厨房に居るのが普通。ところが、今は違う。完全なプライベート。カウンターに腰掛けて話しても別に何も無い。

かぐやの座る椅子と藤井が座った椅子。間には二つ分の距離感があつたが、今はこれぐらいが互いにとつて丁度良かった。

「——藤原さんに告白した」

本人的には、悪いことをしたとは思っていない。それなのに、今のかぐやの雰囲気は相手に白状させる何かがあつた。正直に言わないと、それより恐ろしいことに巻き込まれそうで。藤井は素直に告げる。

「そう。一応、私の助言が効いたのかしら」

「まあ……」

煮え切らない返事。だが、かぐやは何も言わなかつた。

彼女は彼女で、二人の関係性が気がかりであつた。だから、目の前にいる男を焚きつけるような言葉を投げかけたのだ。そしてその結果、藤井太郎と藤原千花に距離感が生まれてしまった。

正直な話、かぐやは白銀御行と口づけし、浮かれていた。その浮かれ気分が彼女の心の中で入り乱れる。そして、もう一つの顔が水面に浮かび上がった。それが今の四宮かぐやという人間。

今日。かぐやは生徒会室に入ることを躊躇った。白銀と千花の二人の会話を覗き見していたからである。何を話しているかは分からなかつた。でも一つだけ分かつたことは、藤原千花が涙を流したことだけ。

性格が変わっても、根本にある感情は変わらない。純粹に二人のこ

とを気にかける自分が、このラーメン天龍まで足を運ばせたのである。

「結果は？」

「……分からない」

「どういうことですか」

「答え聞く前に、逃げられちゃって」

苦笑いを浮かべる藤井に、かぐやは目をやる。

彼がそうやって笑える理由が分からなかった。口づけをした四宮かぐやであるが、白銀に想いを伝えたわけではない。世間的に見ると順序が色々可笑しいこともあって、まだ「告白」に対する耐性が無いに等しい。

そんな彼女が、答えを得られない告白を受け入れられるわけもない。すなわち「目の前にいる男の頭がおかしい」と判断するのは容易いこと。

「逃げられる？ それで何もしなかったのですか」

「うん」

「何故」

「動かなかった」

「呆れた。本当に愚図ね。貴方」

「そんなこと……俺が一番分かってる……！」

藤井は握り拳を作り、悔しさを噛み殺す。自分の判断が正しいかなんて今の彼に分かるはずもない。やり場のないイラつきを抑えるには、こうしてただ耐えることしか出来ないのだ。

これまでなら飲み込んでいたであろう言葉。だが、今の四宮かぐやにはそんな優しさは通用しない。思ったことを言わないように心がける理性というのは、白銀と口づけを交わした瞬間から死んでいるのである。

「全力で奪いに行く——」。貴方の言葉ですよ」

「……………」

「あの言葉は嘘だったのですね」

その言葉。彼は忘れるはずもなかった。

好きになるはずがない。恋に落ちるわけがない。だから言えたこと。藤井太郎の判断は甘かった。

だが本当に人を好きになつてしまうと、人間は臆病になる。白銀にしても、かぐやにしてもそうだったように。藤井太郎という男も、至つて普通の男子高校生なのだ。特段、頭が切れるわけでもないどこにでもいる男。家柄の差がある彼にとつて、かぐやに言った言葉はかなりハードルが高いものであつた。

「……分かんないよ、もう」

「……」

「藤原さんが嫌がることはしたくない」

真つ直ぐだつた。言い訳でもなんでもない。藤井の本心。

告白というのは、常に一方的である。一人の想いを、もう一人に伝える。伝えられる側のことを一切考えない行動でもある。それによつて、悩む人間も少なからず居るわけで。

なら、告白に対して返事をするのもしないのも。受け手の勝手ではないか。藤井はそんな結論に至る。千花との関係を切りたくないが故の逃げ道。

(なら何故、藤原さんは泣いていたの?)

四宮かぐや。ここで一つの疑問に行き着く。人間、そんな頻繁に泣くことはない。特に藤原千花。かぐやでさえ、泣いてるところを見たのは生徒会活動を終えた時ぐらいで。

そんな彼女が、白銀を前にしてあんなに泣いていたのだ。気にならないという方が嘘になる。

思考を巡らす。目の前の男と涙する藤原千花。点と点を結んでみると、告白から逃げ出してしまったことへの後悔。そう考えるのがしつくりくる。現に、それ以外の理由は見つからなかった。

裏を返せば、強引に手を掴んで欲しかったという意味表示にも聞かせるのだ。

「……奪えばいいじゃない」

「簡単に言わないでよ……」

「女であれば、一度は考えるものよ」

それは紛れもなく、かぐやの本音である。

今の性格が表に出てきているのも、白銀御行から口づけしてもらった為。かぐやからではなく、白銀から。つまり、それはかぐやの奪われたい願望でもあった。

「そもそもあの子、奪われたい願望が強いですし」

「でも……それとこれとは話が違う」

「ならどうしたいのですか。本当に意気地なしね」

「……藤原さんにも言われたよ」

ああ言えばこう言う状態に陥っている藤井。そんな彼にイラつきを覚えたかぐやが、少し強めの口調で問いかけた。

「俺だって、こんなことになるなんて思わなかった」

「……藤井さん」

「でも。本当に好きになった人には、嫌われたくない。そんな感情が真っ先に出てきて、体が動かなかったんだよ」

彼は震えながら笑う。痛々しいほどに。

藤井だって、彼女と交際したいから告白した。どう足掻いても、この先その事実が消えることはない。

答えの返ってきていない今の関係性であれば、いずれまたここに足を運んでくれるかもしれない。

そもそも、彼女がここに足を運んだ理由は別にある。本棚に視線、最新刊を買いそびれている少女マンガ。それを読むために、ここに來ていた。それなのに、ここ最近の彼女を思い返す。マンガのことを言われた試しが無い。

藤原千花の心の中に、藤井からの言葉が刺さっているのと同じように。藤井太郎の心の中にもまた、同じような現象が起きている。

——藤井くん

思い返される。

——また明日ですな

思い返される。

——私は藤井くんの味方ですよ

思い返される、彼女の笑顔。

藤井太郎が見たいのは、ただの藤原千花じゃない。笑っている彼女が見たいのだ。誰にも見せない、柔らかくて優しい。その笑顔を、独占したい。彼女の隣にふさわしい男になりたい。

「傷心のあの子に寄ってくる男は多いでしょうね」

かぐやの追い討ち。藤井の左耳を抜け、脳天に直撃する。その通りだった。弱っているところにつけ込まれば、あの藤原千花であってもコロっと落ちてしまう可能性は否定出来ない。

藤原千花のことが好き。誰よりも好き。そうやって言葉にして伝える難しさを乗り越えた男は、強いのだ。かぐやのような強引さはなくとも、藤井には愚直なほど真っ直ぐな恋心がある。藤原千花と向き合うのに、それ以上のものなんて必要ないのだから。

ああ駄目だ。

もう戻れないほど、彼女の魅力に溺れている。

「でも俺は」

「……」

「答えが聞きたい」

「……」

「藤原さん自身の答えを聞きたい」

「…そう」

ほんの少しだけ、吹っ切れた表情。藤井の横顔に光が戻ってきたように見えて、彼女は口元が緩みそうになった。

このまま、二人の関係が終わってしまうのはあまりにも残酷なのだ。かぐやとしても、藤原千花のらしくない表情は見たくない。そのためには、藤井太郎の力が不可欠なのである。

「だから、無理矢理奪うようなことはしない」

「ならどうするのですか」

「もう一度、言葉で想いを伝える」

「言葉で……」

「うん。言葉だからこそ、伝わることだってあるはずだから」

その発言は、かぐやの心に深く刻まれることになる。

これまで、彼女が避けてきた「好き」という単語。目の前の男は、そ

れを相手に伝える力がある。少しだけ、藤井太郎のことが羨ましかった。同時に、藤原千花も。

好きな人から「好き」と言ってもらえるのは、どんな気分なのだろう。それこそ、白銀とかぐやはその言葉を引き摺り出すことを目的に過ごしてきたわけで。憧れというのは人よりも強い。

なのに、藤井は違った。根本的な考え方が違うのだ。それなのに、全く嫌悪感がない。むしろ、羨望すら感じてしまう。かぐやの中で不思議な感情がめぐりめぐる。

「同じことの繰り返しになるのでは？」

「まあ、可能性はある。でもきつと、藤原さんだって考えてくれるはず」

「……」

「もし何かに悩んでいるのなら、今度こそ手を伸ばしたい」

本当に真っ直ぐだった。言葉というのは、こんなにも不思議な力があるのかと、かぐやは感心すらしてしまう。

ここから先は、二人のこと。これ以上足を突っ込むと、かえって二人の邪魔になる。用件が済んだかぐやは、立ち上がる。

「四宮さん」

帰ることを察したのか、藤井は彼女を呼び止めた。

「ありがとう」

「……何のことかしら」

四宮かぐや。人から感謝されることは意外と少なかったりする。たったそれだけの言葉なのに、不思議と心が暖かく包まれる。彼女が思っている以上に、言葉の力は大きいのだから。

「あの子も幸せね」

「どうして？」

「さあ」

ここで彼を持ち上げる理由はない。あえてその一言に留める。

藤原千花に恋をして、藤井の日常は変わった。彼女に会える楽しみが、明日を待つ理由になる。そしてこれからは、藤原千花のことを守りたい。一人の男として、恋人として。その想いが、独り言として言

霊と化する。

「藤原さんに、会いたい」

「きつと、あの子も待ってる」

ねえ、私を見つけて

冬の中でも、特段世間の盛り上がり強い日が存在する。

十二月二十四日、クリスマス・イブ。世のカップルたちは愛の形を確認し合う恋愛スケジュールにおいて不可欠なイベントである。

そして、その階段を登ろうとする人間にとっても、クリスマス・イブというのはまるで魔法。不思議な力で、いつもなら出ない勇気が溢れ出る。

「うう……」

それとは対照的に。桃色のPコートとニット帽姿の藤原千花は、一人。行き交う人々を眺めながら、スマートフォン画面を眺めていた。場所は、学校から程近いショッピングモール。大人だけでなく、高校生カップルが多いのはクリスマス効果だろう。

彼女がここに居る理由。一言で言えば、無い。意味なんて無いのだ。あるのはただ、ここに来れば藤井太郎に会えるのではないか。そんな願望だけ。

世間は広い。クリスマス・イブに、この場所に。約束も何もない人間とバツタリ遭遇すること自体、奇跡なのだ。でも、今の彼女はその奇跡にすら縋り付きたいのである。

(……会えるわけじゃないですよね)

千花自身、彼に会えるなんて思っていない。

会いたいのには、藤井に声を掛ける勇気がない。先ほどから見つめているスマートフォン画面は、彼とのチャット履歴。送ろうか、送るまいか。立ちっぱなしで考えること三十分。答えは否。その勇気が出なかった。

たった一言。「会いたい」と文字を送るだけ。それだけなのだ。なのに、右手が岩のように固まって動かない。こんなにも会いたい気持ち

ちが強いのに、頭でも理解しているのに。ここまで来ても、素直になれない。そんな自分が、千花は許せなかった。

足にも疲労が溜まる。座りたい気分であったが、座ってしまうと余計な思考に頭が追いつかなくなりそう。彼女はモール内をぶらつくことを選んだ。

時刻は十六時。もうすぐ暗くなる時間帯であるせいか、行き交う人の数も増えつつある。これから訪れる聖夜に備えて、下準備をしているような雰囲気醸し出していった。

彼女は、彼の行動パターンを把握していない。普段どこに遊びに行くのか、どこで買い物するのか。分からないから、一度だけ藤井に遭遇したこのショッピングモールに足を運んだ。たったそれだけの根拠。奇跡を信じることすら、おこがましいほどに。

彼と出会った日のことを思い返す。

テーブルゲーム部で遊ぶモノを選んでいた時、藤井に声をかけられた。そしてそのまま、彼を本屋に誘った。

思えば、それが無かったら。ここまで藤井太郎と関係を築くことはなかったのではないか。

(本屋さん……懐かしい)

自然と足が向く。クリスマス・イブの煽りをあまり受けられないせい。久しぶりに見た本屋はえらく空いているように見えた。そして、その足で少女マンガコーナーを目指す。

この本屋独特の匂い。マンガの匂い。単行本を読むことができる喜びを教えてくれた藤井太郎。そんな昔のことじゃないのに、千花は懐かしくて懐かしくて。切なさを逃すように、一息をついた。

「あ……最新刊……」

自身のわがままで、彼が買ってくれた少女マンガ「壁ドン・ロマンス」。あれだけ最新刊を心待ちにしていたのに、すっかり頭から抜け落ちていたのである。当然、自分では買うことが許されない。手に取るだけ取って、そっと本棚に戻す。

藤井に向かってプレゼンしたこともあった。あまり興味無さそうだったのに、いつの間にか買ってくれていた。それはきつと、彼なり

の優しさなのだろう。今になって、千花はそれを痛感することになる。

本当に、彼は優しい人だった。いつもいつも、千花のことを励まして、支えてくれる。誰にもそういうわけではない。藤原千花だからこそ、彼は優しく声をかけるのだ。

切なくなるから、彼女はそのまま本屋を出た。彼女の両側にはズラリと店が並ぶ。お洒落なコスメ店やアパレル。カップルたちで賑わいを見せていた。

人酔いに近い感覚を覚えた千花は、人気の無い場所を探す。ふと、トイレ近くにある長椅子のことを思い出す。そこを目掛けて早歩きすると、彼女の予想通り、人は少なめだった。腰掛けると、誤魔化してきた疲労感が溢れ出る。ため息を一つ。疲れが取れるわけでも無いのに。

(私、何してるんだろう……)

白銀御行に話を聞いてもらったことで、心が軽くなったのは事実。しかし、あと一步踏み出す勇氣は足りないままだった。その勇氣さえ有れば、藤井に声を掛けることができたというのに。

自身がこんなにも臆病だなんて、千花は思いもしなかった。これまで告白されても、相手を傷つけることなく断り続けてきた彼女。初めて抱いた感情に、未だ戸惑っているようにも見えた。そういつたところは、白銀やかぐやと同じで、案外奥手な一面がある。

(藤井くん……)

スマートフォンをチェックしても、誰からも連絡は無い。

世間はこんなにも賑やかだというのに。自身の世界には誰も居ない気がして。楽しい楽しいクリスマス・イブに独りぼっち。例年は姉妹や白銀の妹、白銀圭を誘ってパーティーをすることが定番。それなのに、今年は企画することすら頭から抜けていた。萌葉たちは集まって遊ぶ予定を立てていたが、それに混じる気分でも無い。結果、独りぼっちなのだ。

時刻は十六時三十分。特に音沙汰も無い現状を見ても、このままここに居ることは、本当に無意味。

(……………帰ろう)

あと一步、本当にあと一步なのに。その足を踏み出せないまま、彼女のクリスマス・イブは終えようとしている。藤井太郎に会いたい。その気持ちだけで、何も行動に起こさない自分が、彼女は本当に情けなかった。

だが、藤井太郎は違う。震える藤原千花のスマートフォン。彼女は恐る恐る、画面を見る。

『藤原さん』

力が抜けそうになるのを、必死に堪えた。

来た、来た、来た……………!

誰かからのメッセージが、こんなにも嬉しいものだとは知らなかったよ。千花は思わず、スマートフォンを握る手に力が籠る。すぐに既読を付けてしまったが、今はそんなことどうでも良かった。

藤井は、言葉が続ける。

『会いたい』

『今、秀知院近くのショッピングモールに居るから』

『しばらくロータリーで待ってる。もう一度話してくれるなら、来て欲しい』

彼女に考える時間を与えないようにも見えた。初期設定の着信音が続く。普段意識したことのないその音色。今は千花の脳内を優しく刺激する。

千花にとって、この展開は奇跡だった。

特に約束もしていない藤井太郎。今一番会いたい人が自身と同じタイミングで同じ場所に居る。絶対に有り得ないと思っていたことが現実になる。彼女は浮き足立った。

どちらかといえば冷静さを欠いている今の千花。既読を付けてしまったことで、彼女には考える時間が少ない。返事をするかどうかは置いておいて、とりあえずロータリー近くへ向かうことに。先ほどよりも、足取りは軽い。まるで雲の上を歩いているような違和感があった。

ロータリーには、大勢の人が集まっている。

行き交う人よりも、待ち合わせに使っている人がほとんど。そのおかげで、藤井を探すのには丁度良かった。

とは言っても、人が多いことには変わりない。本当に彼がこの場所にいるのかすら分からない。

（藤井くん……）

足が勝手に進む。人波をかき分けて、右側、左側、視線を揺らしながら。必死になって、藤井太郎の存在を探す。

少女マンガではこういう時。その彼だけ輝いて見えるなんてことがあるがち。でも、現実はそのことない。淀んだ人混みの中に溺れている感覚に気持ち悪さを覚える。藤原千花は俯きたくなる欲を必死に堪えて彼の姿を探す。

（……藤井、くん）

ピタツと足は止まる。視線の先。およそ五メートル。藤井太郎はスマートフォンを眺めながら、時折行き交う人々に目をやっていた。

ロータリーという限られた空間だからこそ、見つけられた。それは間違いない。それなのに、千花は広い砂浜からたった一人の男を見つけ出したような感覚。ようやく、ようやく。見つけた。奇跡だ。

幸か不幸か。藤井の立っている場所から、千花の姿は確認できない。人波に上手く紛れ込んでいて。彼はこの場に彼女が居ることを知らない。ただひたすら待つしかないのだ。

だから、動くなら藤原千花しかいない。

彼女の小さな手に力が込められる。きゅつ、と握り拳。

それなのに。足が地面に張り付いたように、動かなかつた。

どんな顔をして会えばいいのだろう。一度逃げたというのに、ノコノコと彼の前に現れてもいいのだろうか。白銀から背中を押されたとは言え、いざその場面に直面すると体が硬直してしまう。

「ふ……ふ……ふ……くん」

震える声。独り言にもならない声。誰の耳にも届かない。

喉が枯れた感覚。気持ちが悪い。口が渴いて、上手く言葉を紡げない。

ねえ、気付いて。

ねえ、声を掛けて。

ねえ、優しく微笑んで。

言いたいことは沢山あるのに、素直に言えない。

藤原千花は苦しきあまり、胸が張り裂けそうだった。一度逃げおきながら、また彼の行動を待っている自分。それが嫌で嫌で、可愛くなくて。面倒な女だと。

——覚悟を決めた男は、無茶をするものだ。

白銀から言われた言葉が、彼女の脳内をよぎる。

無茶、なんて言われても分からない。でも、今はそんな言葉に賭けてしまいたい気持ちもあった。

白銀の言葉が真実なら、きつと藤井は藤原千花の全てを受け入れる覚悟が出来たということ。だから、この「気付いてほしい」気持ちも汲み取ってくれるはず。彼女は、脱いでいたニット帽を深く被る。髪の毛も結って、なるべく分かりにくく。

(藤井くん。わがままでごめんなさい)

ここまで来て、藤井のことを試そうとする自身の性格。恥ずかしさを取り越えられない弱さ。千花は自分自身で全てに嫌気が差している。でも、彼の隣に居るためには、彼の力が必要なのだ。

藤原という大海原から出たことがない彼女。深く、暗い場所に沈んでいた千花の本心。それが今、自らの意思で顔を出そうとしている。最後の最後。手を伸ばすのは、藤井太郎の役目だから。

(気付かれなかったら……)

もう今後、こんなチャンスは無いかもしれない。千花にとって、これが最初で最後だ。気付かれなかったら、きつとまた自分の心に蓋をしてしまう。そうなるのが目に見えていたから。

だから、お願い。神様が居るのなら、今だけは。千花は祈る。声を掛けられない代わりに、精一杯、祈る。それだけしか出来ない。

意を決して、固まった足を動かす。ゆっくりと。パキッと骨が鳴る。

その距離、四メートル。

思い返される、藤井太郎の困り顔。

その距離、三メートル。

思い返される、藤井太郎の笑顔。

その距離、二メートル。

思い返される、藤井太郎との時間。

（藤井、くんっ……）

こんなことで、彼との時間が終わるかもしれない。

自身の決断は間違っていることは、彼女も承知の上だ。それが分かっていたても、自分から声を掛けるということは藤原千花として出来なかった。そのジレンマにずっと苦しめられてきたのだ。

その距離、一メートル。

思い返される、藤井太郎の告白。

これまでの千花の人生。その中で、あんなにもドキドキした時間は初めてだった。告白というシチュエーションは何度も経験したというのに、比べ物にならないほどの甘酸っぱい時間。

その距離、ゼロメートル。

願う藤原千花。俯いて、存在感を消して、藤井太郎の正面を通る。やがて、通り過ぎる。

彼は——スマートフォンに視線を送っていた。

「うう……ううっ、うう……」

奇跡なんて、二度も起きない。そんなこと、分かっている。この場に彼が居ること自体が奇跡なのだ。二度目なんて、千花から声を掛けることができれば必要のない願いなのだから。

千花の目から、涙が溢れる。白銀と話した時よりも沢山、行き交う人の視線を集めるぐらい。人目を気にしたいのに、止まらない。抑えが効かない。苦しい。俯くしか無い。

藤原の看板なんて要らないから、普通に彼に会いたい。声を掛けたい。紛れもない千花の本心だ。それなのに、彼のことを想う度、父親の顔。母親の顔が頭に浮かぶ。だから、引っぱり出して欲しい。そんな願いも虚しく、終える。

——藤井太郎は、藤原千花に惚れている。

人は恋をすると、その相手のことを知ろうとする。掴み取ろうとす

る。そして気付かないうちに、相手のことには敏感になるものだ。例えば——匂い。

人が通った後に残る香り。それが好みであれば、ついつい目で追っ
てしまうのが人間である。加えてそれが——覚えのある匂いな
らどうか。スマートフォンに意識があっても、一瞬で顔を上げる。目
だけでなく、顔でその香りを追おうとする。

そして今この瞬間も、一人の少年は顔を上げて香りの跡を追う。
彼の大好きな香り。甘くて包み込まれるような匂い。

その匂いが仮に、好きな人の匂いだとしたら。ついつい、相手のこ
とを見つめてしまう。

その相手が仮に、好きな人の背丈に似ていたら。人は、動く。僅か
な可能性に賭けて、その後を追う。後ろ姿で分からない時は、どうす
るか。

「藤原さん……？」

絶妙なポリウムで問い掛ける。相手に聞こえる程度で、でも、決
めつけないような言い方で。相手の反応を伺う。

その声に、後ろ姿は一瞬。足を止める。

——藤井太郎は藤原千花に惚れている。

目の前にいる彼女が、自身の好きな人なら。その確証が得られた
ら。人間、多少無茶をすることだってある。今の藤井太郎に、怯えな
んで感情は存在しない。彼女——藤原千花の右手首を、優しく掴
んだ。

「藤原さん」

二度目の問いかけ。千花にとっては、二度目の奇跡だった。

恐る恐る振り返る。今日初めて会う彼は、彼女の知っている優しい
雰囲気、全てを包み込んでくれそうな表情をしていた。こんなに泣
いているのに、何も言わず、ただ黙って見つめてくれる。

少女マンガなら、この場面。胸が高鳴って高鳴って周りのことが視
界に入らない。なんて台詞が出てくるはず。

現実には直面すると、分かる。そんなのは、嘘だ。そんな余裕なんて
ない。今にも心臓が爆発してしまいそうなほどに。

「ふ、ふじ……藤井くん……」

今の千花は、彼の名前すらまともに言えない。あれだけ「気付いてほしい」なんて言いながら、いざ本当に気付かれると恥ずかしさで死んでしまいそうになる。それだというのに、藤井は優しく笑って見せる。

「見つけた」

かくれんぼをしていたような言い草。優しく微笑ましい言葉。藤原千花の心に染み込んでいく。

同時に、藤井太郎の手が、彼女の心の中に伸びていく。深く深く、沈みかけた藤原千花を見つけ出し、そして、手を優しく掴んで。これから知らない世界に連れて行ってくれる。そんな期待感と共に、湧き出る感情。本心。ようやく、広がる海から顔を出したのである。

私、この人が好きだ。

一緒に帰ろう、喜んで

奇跡というのは、思いもしないことが起きるから奇跡なのだ。

願ってもなかなか起きないから、人は願うことをやめない。一生をかけて、一つのことを願い続けることだってある。

たった一度の奇跡。甘い蜜よりも舌に残る快感。その一度が、次を願う引き金となる。人はいつまでたっても、奇跡を祈り続ける生き物なのだ。

この日の藤原千花と藤井太郎には、それが当てはまった。

二人の行動が重なったのは奇跡である。クリスマス・イブの忙しい時期に同じ時間に同じ場所。片方が少しでもズレていたら、起き得ない状況。

加えて、千花のわがまま。普通なら気づかないであろう行動に、藤井は応えた。優しく手を握った。彼女にとって、その行動は百点満点。

二度も続けて、奇跡が起こる。そのこと自体が奇跡なのである。

だが二人の場合。これまで想いを積み重ねてきた。藤井太郎と藤原千花。互いのことを想い、惹かれて、そして動く。タイミングが重なることは必然で、それは奇跡なんかじゃない。二人はこうなる運命だったのだ。

「ふ、藤井くん……」

「なに？」

「手が……」

シヨツピングモールを出た二人。歩みを進める。

まだ残る人混みの中で、藤井は千花の手をしっかりと握っていた。告白した時よりも、優しく。暖かく。

「嫌なら離していいから」

「……ずるい」

「知ってる」

告白してきた時と同じ行為。それなのに、その時よりも数倍、千花の鼓動が高鳴っていた。驚いたことよりも先に、心の中を占めていくのは喜びだった。

目の前の大切な人。誰よりも心の中を包み込む人。藤井太郎。ようやく想いが通じ合ったような気がして。千花の掌から想いが溢れ出るのを防ぐように、彼女は初めて、彼の手を握り返した。

きゅっ、と音が鳴る。皮膚と皮膚が擦れる音。その感触はとても苦しいのに、心が満たされる。藤井は少し驚いた表情を見せた。

「藤原さん……」

「嫌なわけ、ないじゃないですか」

吹っ切れたように、千花は笑う。一度逃げ出したことを棚に上げる発言。それでも、藤井の心に直接響いた。

もうそんなことはどうでもいい。藤井は、逃げ出したことを問い詰める気になんてなれなかった。どうであれ、彼女はここに居る。そして手を握り返してくれた。たったそれだけで、充分なのだ。

「だったら、俺の恋人になって欲しい」

人混みを抜けて、彼の声がよく響いた。

周りの騒音が全く気にならない。藤井太郎の二度目の告白。真っ直ぐ歩いている方向だけを見る視線。一度目は顔を見てくれたのに、二度目はそっけない。

だから、一度目と同じ言葉を使わず恋心を伝えた。勇気を振り絞った感覚は無い。純粹に、自分の気持ちを素直に投げかけた。それが出来るようになったのも、藤原千花が手を握り返してくれたから。藤井が千花の本音を引っ張り上げたように、千花もまた、藤井の本音を引っ張り上げたのだ。

ものの五秒。間が空く。藤原千花は隣に居る彼のことを、ひたすらに考えていた。家柄の差なんて、どうでもいい。ただ好きな人の隣に居ることの何が悪いのだ。開き直りの域に入ったのは藤井だけではない。

それに、彼女は予感がしたのだ。家柄の問題に直面したとしても、藤井太郎という人間は自身の手を離さないと。根拠も何もない直感。だけど、今はそれを素直に信じたい。だから、藤原千花も覚悟を決めるのだ。

「はい」

たった一言。藤井のように、あっけなくて、そっけない。

だから彼女は、彼の手を強く握り返す。もっと伝えたいことがあるのに、それなのに。藤井の掌が暖かくて、雲に包まれているような浮かれ気分。本当にふわふわと、空をも飛べそうな気がして。

「……本当は少し怖いんです」

「なにが？」

「きつとこの先、藤井くんを傷つけてしまいます」

僅かな不安でも、膨らんでいけば心を支配する。吹っ切れたとは言え、藤井のことを考えたら自然と言葉が出てきた。

付き合ったところで、家にバレたら。両親から何と言われるかわからない。すぐに「別れる」なんて言われた日には、家を飛び出す覚悟。だがそれは、藤原千花のエゴに過ぎない。そうなれば、藤井に迷惑が掛かることは間違いない。それが根本にあるから、この不安は消えることがない。

「なのに、逃げ出して分かったんです」

「うん」

「藤井くんに会えなくなる方がもっと嫌だって」

エゴ。個人的な感情。千花自身、そんなことを思う。だがそれはあくまでも、投げかける側の思い込みでもあるのだ。

藤井太郎にとって、それはエゴでも何でもなし。藤原千花の紛れもない本心を、受け取らないわけがない。彼女のためなら、何でも出来るような気になっていたから。

「もう一人で抱え込まないでいいんだよ」

「え……………」

「俺も頑張る。藤原さんの隣にふさわしい男になれるように」

横断歩道。信号待ち。立ち止まった二人。彼は彼女のことを見て、

彼女も彼のことを見上げる。視線が合う。互いに頬が赤い。

藤井からそう言われたことに、千花はさほど驚かなかった。

分かっていたから。彼は本当に優しく、言って欲しい言葉を掛けてくれる。それだけで、これから先の困難を乗り越えることができ。そんな錯覚に陥る。今はその錯覚に溺れていい。だけど、千花は陸に上がるように感情を誤魔化した。

「藤井くんはそのまままで居てください」
「でも」

「変わらないでください。私はずっと、隣に居ますから」

誰しも変化を恐れる。人間とはそういう生き物だ。

隣に居る男は、彼女が好きになった藤井太郎。彼が変わってしまえば、いずれ自分のところを離れていくのではないか。そんなことを考えるだけで、胸が締め付けられる。

(ああ、本当に好きなんだ)

今の幸せを手放したくないが故の言葉だった。

ずっと、藤井太郎の隣に居たい。生まれて初めての感情。彼に対する恋心。これから少しずつ大きくなって、いずれは愛に変わる。

信号が青に変わって、待っていた数人が動き出す。遅れて二人も、前を向いて歩き出す。

世の中というのは、常に変化で動いている。

日頃から新しいビジネス、新製品が世間の波に流され、消費者の手に渡る。そうやって人々の生活は豊かになってきた。今、信号が赤から青に変わることだって、変化の一つでもある。

そんな世界で生きている限り、人間変わらない方が難しいのだ。藤井太郎にしても、藤原千花にしても、これからどんどん大人になって、やがて価値観も変わるであろう。二人がずっと一緒に居れる保証なんてどこにもないのだから。

「こうして藤原さんの隣に居れること自体、幸せなんだと思う」
「……はい」

「大人になっても、好きで居てくれるように頑張るから」

純粹で、健気で、真っ直ぐで。

好きな人のことの言葉を、信じることしかできない。今の彼女に出来ることはたったそれだけ。人を信じるということは簡単で、でも難しくくて。不安に陥ることだって沢山あるはず。

そんな時に、声を掛けてくれるのが藤井太郎なのだ。それが、藤原千花を守る男の役目なのである。

「藤井くんは本当に優しいです」

「藤原さんだけにだよ」

「……嬉しいです」

藤井の手を握る力が、今日一番強くなる。ゴツゴツしていて、手荒れが酷かった彼の手は、あの頃よりも少しだけ綺麗になっていた。

何度も甘い言葉を掛けてくれて、それを素直に受け入れられる。そんな関係になれたこと自体、千花は嬉しかったのだ。

「藤井くんに言っただけじゃなかったことがあります」

突然足を止める彼女に、藤井は少しだけ驚いた。だが何も言わずに彼女の言葉を待つ。

藤原千花。息をすつと吸って、吐く。手を繋いだまま、藤井太郎の目を見つめる。

「好きです」

恋人同士になったのだから、それは至って普通の言葉。

それなのに、藤井太郎の心に染み込んでいく。心臓が高鳴って高鳴って痛みすら覚える。

順番が違えど、自身の告白に対する返事でもある。嬉しくないはずもない。視線を逸らしたいのに、逸らせない。藤原千花の瞳の中に吸い込まれそうになる。

「俺も、藤原さんが好きだ」

「はいっ、知ってますよ」

茶化しているつもりなのに、頬が緩んでしまう。これでは揶揄うことも出来ない。藤井も何も言わず、ただ笑う。見慣れた互いの笑顔。それだけで満たされていく。

誰かから愛されるということは、本当に幸せなことなのだ。自分のことを一番に考えてくれる人。家族以外の人間が。赤の他人だった

一人の少年が今、大切な人間に変わる。あの日、生徒手帳を落とさなかったら今頃何をしていただろうかと、千花は自問した。

きつと、これまで通り。学校に行つて、生徒会で過ごして、家に帰る。これまでの、彼の居ない日常。それを日常と受け入れることが出来ない。

愛される喜びと愛する喜び。それは常に隣り合わせだ。

藤井太郎が愛してくれる分だけ、藤原千花も彼のことを愛す。この二人は、そうやって心を育てることが出来る。先のことなんて分からない。すぐに別れる可能性だってある。

「ご飯でも食べて帰る？」

「……だったら、ラーメンがいいです」

「クリスマス・イブに？」

「藤井くんの家でラーメン食べましょうよ」

聖夜の空気感にマッチしていない彼女の提案。藤井は苦笑いを浮かべながら、その提案を受け入れることにした。

二人の原点でもあるラーメン天龍。藤井は記憶を思い返す。少女マンガを置かなかつたら、藤原千花はあんなに足繁く通ってくれなかつたかもしれない。そうなると、彼女の魅力に気付くことなく終わっていた。

いや、少女マンガを店に置くことを決めた時から。心の奥底では、彼女に惹かれていたのかもしれない。そんなことを考えて、藤井は笑う。

「何がおかしいんですかー？」

「思い出し笑い。藤原さんが可愛いから」

「ならいいです」

藤井自身、千花は自分には勿体ないほど美人だった。そんな子が好きだと言ってくれて、告白を受け入れてくれた。人生で初めて出来た恋人。愛し方なんてわからない。これから手探りで深めていく。

「電車で行こうか」

「……はい」

元々駅をめがけて歩いていた二人。彼の提案は至って普通。だが、

千花は言葉を飲み込んで、藤井の言葉に同意した。

——タクシーで行きましょう。

きつとこれまでだったら、そう言っていたに違いない。

でも、こうして藤井の提案に乗ることで、知らないことを知ることにもなる。滅多に電車を使わない彼女にとって、その決断は案外大きいモノなのだ。

藤井太郎の考え方に歩み寄ろうとする。藤井太郎の価値観を知ろうとする。藤井太郎のことをもつと理解しようとする。彼の恋人として、藤井に染まろうと心が動く。自身にそんな一面があるとは、千花自身思ってもいなかった。

改札をくぐって、駅のホーム。電車を待つ間も、藤井は千花の手を離そうとはしなかった。電車に乗るイメージの無い彼女を守ろうと、彼なりの優しき。恋人らしき。すっかり陽も落ちて、聖夜が幕を開けた。

「人、少ないですね」

「そうだね。まあまだ時間も早いし」

十八時前。千花の言う通り、クリスマス・イブとは思えないほど人は少なかった。大人たちにとって、聖夜はこれからののだ。高校生の二人にはあまり理解できることではないが、夜遅くまで騒ぐイメージはすぐに湧いた。

「寒くない?」

「大丈夫です」

生憎、ホワイトクリスマスにはならなかった。二人はそれが心残りだったらしく、つまらなさそうにビル群を眺めている。電車が来るまであと少し。

少女マンガにありがちな、クサイ台詞に憧れていた藤原千花。なのに、今はそれを全く魅力的に思えない。藤井太郎のなんでもない言葉が、心の中で燃える。一言心配するだけの言の葉でも、破壊力が抜群で。

「……あ。あと一つだけ、言い忘れてました」

「ん? なに?」

同時に、駅のアナウンスとともに、電車が近づく警告音が響く。

これでは、何を言い出すのか聞こえない。だから藤井は、彼女の声が聞こえるように、膝を曲げて千花の顔に耳を近づける。二人の距離が近づいて、相手の体温がよく伝わる。

彼の匂い。直感的に好きな匂い。不快になることなんてない。ずっと彼の首元に顔を埋めていたくなるような。

これから先。二人を待ち受けるのは困難。大きな壁。でも、それを超えるだけの愛に包まれた日常が待っている。

大人たちに負けないように、藤井太郎。

大人たちに負けないように、藤原千花。

「メリークリスマスっ」

藤井は笑う。同時にやってくる電車。冷たい風が吹き付けて、自然と二人の距離が近くなる。結ばれて、片方だけの想いでは無くなった今。二人で愛を育てていく。

それが、家柄の差を覆す切り札になる——。彼らがそれを知るのには、まだ少し先の話である。

雪の降らないクリスマス・イブ。

藤井太郎は、誰よりも藤原千花を愛したい。

「帰ろう。俺の家に」

「はい」

二人の恋は終わる。愛に変わっても、これまで通り。明るい未来を信じて、ただひたすら互いを信じるしかない。

高校生には、かなり酷な恋愛である。それでも、二人は乗り越えるための一步を踏み出した。

そこに、憂鬱な気持ちなんて無い。

大きな壁に挑むことになるというのに。二人は、笑っていた。

きつと未来は来る。明るくて、光り輝く未来が。

そのために。

そのために。

藤原千花は、誰よりも藤井太郎を愛したい。

後日談

くちびるバレンタイン

藤井太郎と藤原千花の交際が始まって、二ヶ月が経とうとしていた。

季節は二月。冬真っ只中の街並み。人々は両手をポケットに突っ込んで、体を縮こまらせている。

そしてこの日は、一年に一度のバレンタイン。放課後の街並みには高校生のカップルも多い。男が待ちわびたイベント。男子校通いの藤井にとつては関係の無いイベントだと自覚していたのに。

今年は違う。生まれて初めて、この盛大なイベントを堪能できる。その興奮だけで、藤井は浮き足立つ。すれ違うカップルたちの甘い香りが体を包み、まるで異世界に飛ばされるような軽さを感じる。

この日、学校を終えた藤井は普段足を運ぶことのない場所にやってきた。

デートスポットとしても有名な海が見える公園。家から少し離れていることもあり、来る機会は無かった。

夕焼けに染まるソレを眺めながら、白い息を吐き出す。一人でベンチに座り、寒風を浴びる。なのに体は熱い。紺色の手袋に息を吹きかけて、自らの体温を感じる。

「——太郎くんっ」

甘い声が藤井の耳を刺激する。藤原千花は優しく彼の名を呼んだ。

藤井の体が痺れる。甘い毒が体に回ったようで、今日は一段と彼女が美しく見えていた。少しホツとしたような表情を見せる彼に、千花は微笑んで問いかける。

「待ちましたか？」

「大丈夫。さつき来たばかり」

「そうですか。良かった」

こんな真冬に海が近い公園。タイミング的には決して良いとは言えない。だが二人とも、不思議とこの場から離れたいとも思わなかったのだ。

バレンタインデーだからこそ、普段とは違う場所でデートをした。そんな千花のわがままを、彼はすんなりと受け入れた。

「千花ちゃんも意外と早かったね」

「あはは。それはもう。チャチャっとお仕事終わらせましたから」

好きな人に会える喜びは、千花の心をくすぐる。一週間前からソワソワとした心を落ち着かせながら、この日の生徒会作業をこなした。

彼女から見ても、自身の意外な一面だった。普段から真面目には言い難い生徒会室での態度。ところが、藤井と付き合い始めてから妙におしとやかな雰囲気纏うようになっていた。

白銀やかぐやから見ても、それは分かりやすい変化である。頭のネジが外れた発言が多かった千花の変わり様は背中が痒くなるようなもどかしさを与えている。

制服姿の千花を見ることにも慣れて、藤井もようやく彼女の顔をゆっくり眺める余裕が出来ていた。自身には不釣り合いなほど整った顔立ち。勿体ないなんて思いながら、藤原千花を独り占め出来る優越感ほまきに格別だった。

「千花ちゃん寒くない？ 大丈夫？」

「しつかり着込んできたので大丈夫です。太郎くんは寒くないですか？」

「うん。大丈夫」

「えへへ。良かったです」

何より、藤原千花はよく笑うようになった。

これまで笑っていなかったわけではない。これまで以上に、と言った方がしっくりくる。

穏やかで、優しく、心が緩むような。本当に心の底から幸せそう

な笑みを見せる。

彼と心から繋がっている幸福感。自分だけを見つめてくれる愛し人。藤井太郎のことが愛おしくて愛おしくて、千花の生活は彼と出会って一変した。

通う学校は違うが、一週間に三回ほど会う時間を作っている。外でデートしたり、ラーメン天龍で駄弁ったり。毎日会いたい気持ちはあるものの、千花の家の事情を考えるとそういうわけにはいかなかった。

しかし。少しずつ変わりつつある彼女の姿に、藤原家の人間が気づかないはずもないのだが。今の千花はそれを悟ることが出来ないほど藤井に夢中になっていた。

そんな二人が普段にも増して気合を入れているこの日こそ。恋人たちの一大イベント、バレンタインデーなのである。

「はい、太郎くん」

「チョコ？」

「そうです。一応手作りなんですよ？」

「千花ちゃんができるなら何でも嬉しいよ」

自身の恋人からバレンタインチョコを貰う機会なんて無かった藤井。そんな彼にとつて、手作りかそうでないかなんてのは問題でも何でもない。

彼女が自身のために用意してくれた、というだけで心が浮つくのである。誰かから想いを寄せられる幸福感。藤井は分かりやすく頬を緩ませ、綺麗な包装紙に包まれたソレを見つめる。

「お家に帰ってから食べてください」

「うん。ありがとう」

一個ぐらい食べたい、なんて言葉を藤井は飲み込んだ。食べたい気持ちは嘘偽りない。しかし、このままにしておきたい気持ちも少なからずあった。記念にずっと残しておきたいなんて感情。

「(家に帰って、心の準備をしてから……)」

藤井はそう言い聞かせて、チョコを可愛らしい紙袋にしまった。

定期的に吹き付ける海風が、二人の身体に直撃する。数分前に比べ

て、ようやく冷気を体感できるようになっていた。

二人。ベンチに座ったまま暗くなりかけている海を見つめる。寒さを感じるようになった恋人同士。何も言わずとも、互いに右手と左手を交わらせる。

手袋越しではあるが、確かにある想い人の体温。付き合つて二ヶ月。何処へ行くにも手を握り合つた二人にとって、その行為から恥じらいは消え去っていた。

それでも、ドキドキしないわけじゃない。千花の細い指。藤井のゴツゴツした指。正反対なのがかえつて互いの存在を確かめるには最適なのだ。混じり合い、想いが溶け合うその瞬間。二人は相手への好意を再認識することになる。

だが、交際を初めてもう二ヶ月。それだけだと、互いにもどかしさを感じるようになっていたのだ。

「千花ちゃん」と

「太郎くん」と

そう。本音を言えば、この二人。

バレンタインデーというのは、あくまでもイベントの一つ。今日の最終目的はチョコをあげる、受け取ることではない。

ただ。ただただ純粹に。口づけを交わりたいだけなのである。

いやらしい意味にも聞こえるソレだが、思春期の二人にとってそれは至極真つ当な思考なのだ。この二人に限った話ではない。それだというのに、恋愛経験ゼロの彼ら。そうするためには何をすれば良いのか分かるはずもなかった。

互いに無言のまま、海を眺める。二人は心の中で戦略を練っていた。この状況から、いかに相手からその言葉を引き出すか。いや、言葉じゃなくてもいい。そんな雰囲気になってしまえば、後は流されるだけでいいのだ。

「……もう二ヶ月だね。あつという間だ」

先に動いたのは藤井。

自然に、付き合つた期間を千花に意識させる。彼の言葉でクリスマスから今日までの二ヶ月が、彼女の頭の中でぐるぐると巡る。

まだ二ヶ月。でも、二人にとつてのたった二ヶ月は、これまで生きてきた中で初めて経験する時間だった。

「そう、ですな」

藤井の手を握っていた千花の手。少しだけ力が込められる。藤井にも分かりやすく。何を思つてそうしたのでらう。藤井は考えるだけ考えて、やがて何も言わずに固唾を呑んだ。

今の自分は、彼女への好意に背を向けていた時の自分。嘘をついていた頃の自分と何も変わっていない。心の中を覆つていくマイナスの感情。つい、彼の手にも力が込められた。

「太郎くん？」

少しだけ心配する彼女の声。ハツとして意識を目の前に戻す。

千花は藤井の顔を覗き込んでいる。思わず目が合い、苦笑いするしかない彼を見て、彼女もまた苦笑いをした。

藤原千花は、少し強引なのが大好き。

チューして欲しい彼女は顎に手をやられて、そのまま瞼を閉じてしまいたい。でも、それがただの妄想に過ぎないことは、千花自身よくわかつていた。

藤井太郎はそういった事をするタイプではない。常に千花のことを最優先に考えるがあまり、強引に、無理やりに、なんてことはしない。

これまでの彼女なら、彼のそんな性格に物足りなさを感じていたはずだ。ただ、今は不思議な感情に覆われた。

それも彼の優しさだと、受け入れることが出来たから。海に視線を逃す藤井。強引さの欠片も無いその行動。でも、それでも。藤原千花は嬉しいとすら感じてしまう。

藤原千花は、少し強引なのが大好き。藤井太郎はそのことを知っている。

だからこそ、頭をよぎる。自然な流れを装つて、彼女にチューすることを。藤井にとって、それはあまりにもハードルが高い。でも、藤原千花は自身の恋人なのだ。多少のオイタは許してくれる……と自身に言い聞かせる。

冷たい風が吹く。海がうつすらと波を立てる。真冬。バレンタインとは言え、この公園に長居するカップルは藤井たちぐらいだった。このまま黙っているのと千花が風邪を引く。でも、ここで動いてしまえばまた機会を失ってしまうかもしれない。

「暖かいです」

「えっ?」

「太郎くんが隣に居るだけで、あつたかいです」

藤井は、思わず千花の顔を見た。自身の抱いていた感情と正反対の言葉が彼女の口から出てきたからだ。千花も、彼の顔を見上げていた。

目が合った。少しだけ驚いた彼の顔が可愛くて、彼女は思わず口元が緩む。一方の藤井。みつともない表情をしていたことを後悔する。

「千花……ちゃん」

大きくて綺麗な瞳に、吸い込まれそうになる。

こんなに可愛くて、美しい子が自身の恋人だなんて。藤井は今でも信じられないのが本音だった。

「……………」

「……………」

それ以上の言葉は出てこない。したがって、自然と見つめ合う形になる。

息が詰まる感覚。千花の髪から香る甘くて刺激的な匂い。藤井は今日二度目の固唾を呑んだ。喉仏が分かりやすく動く。千花の視界にもそれはしっかりと映り込んだ。

「(太郎……くん)」

ああ、このまま。このまま。あと数十センチ顔を近づけてしまえば、唇が重なり合う。それなのに、まるで時間が止まっているかのよう二人は動かなかった。動けなかつた。

好きな人と口づけを交わすことは幸せなこと。千花の頭の中にあるその考え方は間違っていない。なのに、いざ自分がその立場に置かれると、少しだけ恐怖の感情が生まれる。

怖くなんかない。怖くなんかない。言い聞かせても、胸に残る違

和感。それは嘘の味。目を背けたくなるそれと、千花は向き合わざるを得なかった。

「ふえっ」

優しい圧力のせいで、彼女は少し間抜けな声を漏らした。

何が起きたのか分からなかった千花だったが、その理由はすぐに分かる。藤井が自身の頭に右手を乗せていたのである。

「た、太郎くん……」

「ごめん。でも、なんかこうしたくて」

やがて、優しく優しく千花の頭を撫でる。綺麗な髪の毛。藤井にとっても、女の子の頭を撫でたのはこれが初めて。自身の毛質とは正反対の綺麗で滑りの良い感触。壊れないように丁寧に、藤井は手を滑らせる。

藤原千花の僅かな揺らぎ。恐怖心。その根底にある原因が何なのか藤井には分からなかった。でも、何かに怯えているような雰囲気は分かる。咄嗟の行動ではあったが、この場では最善の行動であった。

こうやって頭を撫でられたのはいつぶりだろう。千花は考える。記憶の糸を手繰り寄せても、途切れ途切れになっていて、正確な日時は思い出せそうにもない。

それ以上に、藤井の右手から彼の優しさが自身の中に流れ込んでくる。その幸福感に浸っていた。

何も怯えることなんてない。好きな人と口づけを交わすことで、自身は一つ、オトナの階段を登ることになる。未知の世界に飛び込んでいくことになるのだ。

それは怯えることは、何も不思議なことではない。二人の関係が大きく動くことになる。いよいよ、恋人として、これまで以上に愛を育むその一歩を踏み出す。

藤井太郎は、自身を見放したりしない。優しく、真っ直ぐ見つめてくれる彼なのだ。そんな一面に彼女は惹かれたのだから。

「千花ちゃん」

撫でるのを止め、再び顔を合わせる。

見上げる千花の表情からは、僅かな怯えは消えていた。先ほどより

も、少しだけ互いの顔の距離は縮まっている。

藤原千花に惚れ、彼女を守ると決めた青年の想い。高校生に出来ることは限られるが、高校生の彼だから出来ることだってある。

それは、至極単純なことだ。

誰も見ていないから。だから。そんなことを言っただけで、誤魔化そうか。藤井は考えて、やっぱり駄目だと心の中で苦笑いする。

藤原千花のことが、大好きだから。それだけでいいじゃないか。それ以上に何がある。彼女とキッスがしたい理由に。

繋いでいた手を離して、藤井は千花としっかりと向き合った。ゆっくりと、ゆっくりと。顔を近づけて。

「あ……………」

心臓が高鳴って、痛い。告白された時よりも、激しく脈打っていて。まるで殴られているような感覚に陥った。

でも、これは恐怖なんかじゃない。藤井太郎のことが好きだから。トキメキとドキドキ。千花もまた、ゆっくりと、ゆっくりと。瞼を閉じた。

やがて、影が重なり、この日一番の寒風が吹く。

空はすっかり闇に覆われていて、近くの電灯が灯りを灯す。二人だけの世界で、藤井太郎と藤原千花はただ互いの唇を感じている。

恋の味。今まで味わったことがない不思議な味。でも、何度でも味わいたくなる。ものの四秒。たったそれだけ。永遠にも感じられた時間は、あっけなく終わりを迎えた。

「…………た、太郎くん」

「あはは…………あー恥ずかし……………」

でも、それで良かった。二人にとって。

これから先も、まどろっこしい言い訳を並べるかもしれない。でも、結局は相手のことを真っ先に考えている。

つまり、形なんてどうでも良いのだ。自分の思い描く形でなくても、受け入れる優しさ、余裕が藤井には備わっている。

恋愛において、どちらかが妥協する必要があるケースは必ず出てくる。それを、藤井は苦にしないのだ。

加えて、千花もまた藤井を受け入れようと変わろうとしている。それだけ互いに惹かれあっていた。

好きな相手が目の前に居てくれるだけで、幸せなのだ。

ただ、探り探りの恋愛模様であることには変わらない。それでも、二人は着実に。

「……………チヨコ、美味しいですから」

「すごい自信だね」

「それはもう。だって、愛情たっぷりですから」

「あはは。そりや美味しいに決まってるよ」

この青春を、ただひたすらに。

桜の下で君に見惚れる

人間。生活が充実すると、見える景色も変わってくる。

季節は春。肌を逆撫でするような空気から、優しく包み込む柔らかい空気に様変わり。太陽が微笑んでいるようで、人はまさしく陽気な気持ちを抱き始めている。

藤井太郎と藤原千花も、進級して高校三年生となった。この一年間は、二人にとって大きな意味を持つ一年である。

進路選択。これから人生を走っていく上で、レール選び。今年の決断で全てが決まるわけではない。だが、進学するにしても、就職するにしても、社会に出る第一歩になる。まだ高校生の二人にとって、その決断の重さを感じているのも事実だった。

「太郎くんっ。桜が綺麗ですよ」

桜色のワンピースを身に纏った藤原千花の声。藤井太郎は意識を彼女に戻した。

こんな二人ではあったが、相変わらず仲良く交際を続けていた。クリスマスイブの日からこの四月まで約四ヶ月間。マンネリを感じるような期間ではないが、互いを思う気持ちは日に日に大きくなっていく。

土曜日。桜が満開のこの季節にぴったりな、公園デート。周囲にはブルーシートを敷いて缶ビールを美味しそうに啜る花見客が大勢居た。

高校生の姿は割と少ない。いわばアウェー感を抱きつつ、二人はしっかりと互いの手を握って歩く。

「すごい人……花見って楽しいのかな」

「楽しいと思いますよ。お酒飲みながら、見る桜ってなんだかお洒落じゃないですか」

「そう……かな」

本音を言えば。

藤井は静かな公園で、二人で、桜を見たかったわけで。華やかな桃色、人の喧騒で汚れてしまっているようで、あまり良い気はしなかった。

その点、彼にとって千花の反応は意外だった。花見客の中を切り裂くように歩いているが、彼らには目もくれず。ただ桜の花びらを見上げています。

「人混み、苦手ですもんね。少し歩いたら休みましょう」

「そんなことは。気を遣わないでいいから」

「ダメですよ。太郎くんの方こそ気を遣わないでください」

藤井は、あまり人混みが得意ではない。それを彼女に言ったことは無かったが、デートを重ねていけば千花にもそれは理解出来る。だって彼女なのだから。藤井太郎のことが大好きな。

四ヶ月付き合ってみると、千花の新たな一面が見える。藤井から見ても、彼女はとにかく面倒見の良い女の子だった。

本人は意識していなくても、溢れ出る母性。彼女に包み込まれる子どものような、まるで新世界の扉を開けてしまったかのよう。

ごくり、と固唾を飲んだのは藤井。キスより先のことはしていない。彼にとって、意識するなという方が無理な話である。思春期の男子高校生にとって、藤原千花の存在は破壊力がありすぎた。

恋人なのだ。あんなことやこんなことをやってみたいと思う気持ちは自然。だが、それを彼女に言うことは気が引けた。純粋に、恥ずかしくて恥ずかしくて。

「人混み、抜けたみたいですよ」

「ホントだ」

桜並木はまだまだ続いている。

長くて綺麗な道。桜のアーチをくぐっているみたいで、千花は心躍った。

心なしか、藤井が手を握る力を強めた気がした。他にも人は居るが、自身たちと同じようなカップルが多い。だったら恥ずかしくないな、なんて日本人らしい感覚が彼女を襲った。

隣に居る愛しの彼の手のひらは、少し汗ばんでいる。かつて、自身

の手首を掴んだ時。その時は、慌てふためいて拭いていたのに。

あの頃とは違う。気を遣わないでいてくれている。よそよそしくない彼。でも、自身のことをすっかり女の子として見てくれている。胸が高鳴る。

「千花ちゃんはやさ」

「はい？」

「進路、どう考えてる？」

唐突だった。だったけど、いつかは触れないといけない話題だったから。不思議と驚きはしなかった。「うーん」と考えをまとめて、話し始める。

「外部進学を考えてますよ。都内で」

「そっか」

「太郎くんはどうするんですか？」

「俺は……」

歩きながら、藤井は頭を巡らせた。

実際のところ、大学進学を予定していた。父親もそのことを理解していたが、もう三年生の四月だというのに、ここに来て迷いが生じていた。

いい加減なのは、彼自身よく理解していた。なのに、決めきれない理由。それは、彼女にあった。

「……あはは。実はまだ決めてないんだ」

藤原千花に見合う男になるため。

交際を始めたあの日、彼女は「そのまま居てほしい」と言ったが、藤井としてはそういうわけにはいかないのだ。

彼女の隣に居るふさわしい男になるため。超名門校・秀知院学園に通う頭のイイ彼女に並ぶため。浪人してでも名門大学を目指すつもりで居た。それが、藤井の答えを濁らせた。

「太郎くんは何か隠しています」

「えっ……？」

張本人ですら、どうしてそんな言葉が出てきたのか分からなかった。女の勘、としか言えなかった。

それ以外に根拠という根拠は無い。ただ、藤井はなんだかんだ言つて先のことを考えているタイプの人間。そんな彼が、この時期になつても「決めていない」というのは違和感があった。

ああ、きつと。気を遣つてくれたんだ。優しい彼のことだから。千花はそう、言い聞かせた。

歩みを止めて、ジツと藤井の顔を見つめる。怒っているようにも見える彼女の顔。彼は分かりやすく戸惑つた。

「別に隠してなんか……」

「本当ですか……?」

「いや……」

千花は思った。自分は何と面倒な女なのだ、と。遠回りな聞き方と態度。率直に聞けばいいのに、素直に言葉をぶつけるのが怖い。

「都外に行くつもりなのかもしれない」自身が都内に残ると言つたから、もしかしたら。彼女の思考は巡る。愛しい彼と離れ離れになってしまうのではないか。遠距離恋愛なんてしたことがない千花にとって、大きな大きな不安材料。

暖かい風。春の風。ふわふわと。

来年の今ごろは、こうやって桜の風を浴びることが出来るのだろうか。これが最後になるのではないか。胸の中の暗闇から、伸びてくる魔の手。千花はどんとどんと、ネガティブな感情に苛まれていく。

「その……正直に言おうと」

「はい」

「良い大学に行くために浪人も視野に入れてる」

「良い、大学ですか」

胸の中の魔の手は、すぐに消えた。しかし、千花の頭の上に、クエスチョンマークが浮かぶ。自身の想像していた言葉ではなかったから。

桜並木の真ん中で、二人立ち止まって会話する。周りのカップルから見て、それは不思議な光景であることに違いない。しかし、喧嘩しているわけでもないため、そのまま通り過ぎていく。

「良い大学に行つて何かしたいことでもあるんですか?」

「……特には」

「だったらどうして?」

「それは……その」

恋人とは言え、藤井は言い淀んだ。

結局のところ、家柄のことを考えていたから。それは千花も気にしていること。認めてもらうために、自分が努力しないとイケないこと。「変わらないで良い」なんて言われても、藤井はそれを素直に飲み込むことが出来なかった。

ああ、私のせいだ。

彼の表情を見て、彼女は直感的にそう思った。藤井太郎という人間は、本当に優しい人。常に恋人である千花のことを気遣ってくれる。だから、ずっと考えていたのだ。名門大学に進もうとするのも、きつと父親に負けない肩書きを身に付けるため。

変わらないで、なんて言っても、やっぱり出来ない。千花自身がそう思っても、赤の他人である藤井からすれば彼女の父親は雲の上の存在。

自分が知らないところで、彼は一人で悩んでいたのだ。

「……ばか」

「えっ?」

「ばかっ! 太郎くんのおばかっ!」

叱咤。軽い衝撃に、桜の花びらが舞った。桜色の風が二人を包む。背中を押されるように、千花は再び藤井の手を握った。優しく、強く。

「そんなところで……気を遣わないでください」

「で、でも俺は……」

「太郎くんの将来は、太郎くんが決めて欲しいです」

いつの日か。四宮かぐやに言われたセリフ。「薄っぺらい優しさもどきは捨てなさい」藤井太郎の頭をよぎったソレは、目の前の彼女を見て確信に変わる。

こんなのは優しさなんかじゃない。ただの独りよがりだ。あの頃とは違う。今、藤原千花は自身の恋人なのだから。相談する余地はいくらでもある。

「……ありがとう」

感謝の言葉。素直に、真っ直ぐな。

藤原千花の言葉に否定も肯定もしなかったが、意図はしっかり伝わった。それが分かっただけで、千花の心は潤う。

ぎゅっと握り返してくれる彼の手。暖かくて、心地が良い。このまま眠ってしまいたいような、春の心地。

「……遠くに行っちゃいますか」

「ううん。都内に残るから」

「……良かった」

コツン、と千花の顔が当たった。藤井の胸に。あまりにも唐突だったから。彼は驚くばかりで、何も出来ない。ただ、心臓の鼓動が早くなるだけ。

彼女の突飛な行動には慣れたつもりだった。しかし、それとこれとは話が別。周りに人が居るのに、こんなこと。慌ただしい藤井の思考。これからどうするべきか、考えが纏まらない。

「こういう時はギュツツとしてほしいです……」

「あ、えっと、あ、ギュツと……」

「(可愛い)」

海が見えるベンチでキスした二人。とは言え、道の真ん中でこんなことになる。藤井も恥ずかしさで顔を覆いたくなる。

幸い、周りにはカップルしか居ない。多少いちゃついてもご愛嬌だ。と見て見ぬふりをしてくれるはずだ。そう信じて、藤井は千花の背中に腕を回した。

こうして抱きしめたのは、初めてだった。自身の恋人は、思っていた以上に華奢で、柔らかくて、力を込めたらすぐに折れてしまいそうなほどか弱くて。でも、愛おしくて愛おしくてたまらない。

藤井太郎の腕の中は、本当に暖かい。千花は彼の胸に顔を埋めて、心を撫でてくれそうな香りを感じる。

彼は都内に残ってくれる。会いたい時に会える距離に居てくれる。それが分かっただけで、本当に嬉しくて。藤原千花の体温が上昇していく。

桜並木。満開の桜たちの下で、恋人。

それは見事な絵になって、周りのカップルたちもつい二人に見惚れていた。

「……どこかでお茶して帰ろうか」

「そう、ですね」

どちらが、というわけでもなく自然と。それでも、名残惜しそうに離れて。

代わりに、そのまま互いの手を強く握って、繋がりを無くさないように恋人のことを考えていた。

「……今度さ」

「どうしました？」

「俺の部屋、遊びおいでよ」

高まる体温。これでもかと言わんばかりの熱が、藤井の体を覆った。

もう、我慢出来ないのが彼の本音だった。抱きしめたときのあの感触。お腹周りに感じた、彼女特有の柔らかさ。もつと、もつと藤原千花のことを知りたい。もつと、触れたい。もつと、愛したい。純粋なほどアツい思いが溢れ出ていく。

全くと言って良いほど、いやらしさの無い誘い方。内心、千花は分かっていた。ここで頷くということは、そういうことだと。

恐怖心というのは、全く無かった。むしろ、藤井太郎と同じで触れたい欲が彼女の中に出てきていた。まるで、引き金を引いたように。

「……来週の土曜日も空いています」

「じゃあ……その日」

千花は声を出さず、ただ頷いた。

来週の土曜日。ちようど一週間後だ。高鳴る心臓。痛くて痛くて、この場から逃げ出したくなる。

「桜が、綺麗」

「うん。すごく」

「来年もまた、来れるかな」

この日一番の春風で、木々が揺れる。散る花びらに見惚れていた藤

井に、千花の独り言に近い問いかけは届かなかった。

綺麗な光景に視線をやる藤井の横顔。彼女は見慣れていたつもりだったけど、今の彼はどこか大人びていて、きゅんと胸を締める。

春は桜を見て、夏は海に行つて、秋は紅葉に埋まって、冬は雪に見惚れる。そんな当たり障りのないことでも、藤井太郎が隣に居たら全く違う光景に様変わりする。

ずっと、ずっと、彼と一緒に見たい。握る手の力を強めると、藤井は千花の方を向く。

「来年も来ようね」

満たされていく心の海。穏やかで、水平線がハッキリと。

同じことを考えてくれていた。言葉が届かなくても、しっかりと想いは通じていた。千花は嬉しくて嬉しくて、この感謝を伝える言葉を探す。

ボキャブラリーの少なさに、思わずため息を吐きたくなる。だからこそ、出来ることだつてあるわけで。

「大好きですっ!」

勢いよく、藤井太郎に抱きつく藤原千花。驚きながらも、しっかりと受け止める彼の胸は、やっぱり高鳴つていて。

恥ずかしいのに、それにも増して幸福感が二人を包む。分かりやすく、真っ直ぐな恋心は、桜の風となつて二人の体を駆け抜けた。

その日の夜。二十時。千花は自宅のリビングでくつろいでいると、久々に父親である藤原大地が姿を見せた。

彼は普段、家に帰らないわけではない。政治家である以上、どうしても様々な付き合いが必要になる。そのため、娘たちが各々の部屋で寝る体勢になっている頃帰宅するのが常。だから、こうして顔を合わせるのも一週間に一度ぐらいなのだ。

「おかえりなさい、お父様」

「ただいま。千花だけかい？」

「二人は部屋に居ますよ」

「そうか」

父親と二人きりのリビング。少しだけ気まずかった。無論、それは千花の一方的な感情であるが。

彼には、恋人が出来たことを言っていない。これも大きな課題の一つで、タイミングによってはどんな反応をされるか分からない。だから慎重に事を進める必要があった。

「そういえば今日、公園に居たね。花見してたのかい？」

「へっ!？」

「そんなに驚く事なからう」大地はそう言うが、千花はこれに驚かないわけがない。

公園であんなことやこんなことをしてしまったのだ。それを見られてたのではないか、という一抹の不安はすぐに消える。

彼の声のトーンは、至って普通。怒ってる様子も無い。とりあえずは安堵して、呼吸を整える。

「そ、そうなんです。見頃でしたし」

「誰と行ったんだい？」

「え、えつと」

「そんなに狼狽えることもなからう。なにになに？ 実は彼氏とか？」

硬直していく体。千花は必死に考えた。

ここで否定してしまえば、告白するタイミングを見失うことになりかねない！ だけど、告白するのは今じゃない！ ああどうしたら……。困惑すら覚える彼女の表情に、さらに困惑したのは、揶揄っただけのつもりだった大地だ。

「えつ、ちよつと、えつ?」

「え、えつと……」

「う、う、嘘だ、嘘だよ、ね?」

「(太郎くんごめんなさい……)」

藤原家に響き渡った野太い男の声。

藤井太郎の勝負の時は、案外すぐ目の前にやって来たのである。

恋味リングはいかがが？

十四時になる少し前。藤井太郎は、ひどい吐き気を催していた。少し早い「五月病」かと疑うような怠さ。発熱をしているわけではないが、体温が非常に高いような錯覚に陥っていた。

「太郎くん……大丈夫ですか？」

そんな彼を、隣で心配そうに見つめるのは藤原千花。顔色もあまり良く無い。時折「オエツ」とえずく恋人。そんな姿を見たのは初めて。どうして良いか分からないが、一つだけ確実に言えることがあった。

彼は今、緊張している。それも死ぬほど。と言うのも、今二人が居るのは、ホテルのような豪邸。藤原千花の家なのだ。

本来なら、今日は二人でデートをする予定だったのに。藤井の家で。そして、ようやくと言っていいほどイチャつく計画だったのだ。それが蓋を開けてみれば、まさに正反対の状況。天国から地獄だ。

そもそも、どうしてこんなことになったのか。答えは一つ。千花の父親、藤原大地にバレてしまったのだ。恋人の存在を。

千花としては、隠し通せるならそうしたかった。だが大地から問いかけられた時、首を横に振るということは、藤井の^{恋人}ことを否定してしまうこと。それに躊躇ってしまったのだ。

「だ、大丈夫……大丈夫……」

バレてからは早かった。藤井に報告する間もなく、家に招く手筈を整えたのは藤原大地。で、彼の空いている日が二人のデート日だった。千花から連絡を受けた藤井は、二つ返事で大地の提案を飲み込んだ。

ここで逆らってしまえば、社会的に消される。彼の^{シックスセンス}第六感が警鐘を鳴らしたから。

そして迎えた運命の日。土曜日。

家とは思えない応接室に通された藤井は、その空気感にただただ圧

倒されていた。一方、千花は普通だった。自分の家であり、そこで自分の父親と話すだけ。何より、千花は大地のリアクションを一度見ている。驚いてはいたが、怒った様子も無い。だから、二人が想像する最悪の展開は無いだろうと踏んでいた。

本来なら、そのことを藤井に伝えるべきなのだろう。しかし、彼女はそれをしなかった。何故か。答えは単純で、ビビっている彼が可愛かったから。いつもしつかりしていて、落ち着いている恋人。その彼が、ここまで弱々しい姿を見せたのだ。千花の中に眠る母性がくすぐられて、胸が高鳴って仕方がない。

約束の時間は十四時。少し過ぎているが、大地は姿を見せない。焦らされているようで、藤井は落ち着かない。キョロキョロと辺りを見渡して、そこで初めて、自分がいかにも高級そうなソファに座っていたと気づく。

「待たせたね。遅れて申し訳ない」

ハツとして、藤井は声のする方を見た。重厚感のある声だった。耳に届いてから、無意識に立ち上がっていて。政治家という生き物と初めて面と向かう。黒縁メガネがよく似合う、大人だ。高級そうなスーツを着ていて、ビリビリと空気が痺れる。

「どうぞ」

立ち上がっていた藤井に、大地は腰掛けるよう手を差し伸べた。

藤井が思っていた以上にその声色は優しく、ふわりと風が吹き抜けた感触。促されるままに、彼は腰を落とした。黒革のソファに。

「遅いですよ、お父様。太郎くん待たせるなんて」

「悪かった。少し用事があってね」

藤井は固唾を飲んだ。目の前にいるこの人は、政治家なのだ。土曜日とか関係無い。そんな人がわざわざ、時間を割いて自分に会うのだ。高校生の彼には、大人である大地の思考回路は読めない。何を考えて、何のつもりで娘の彼氏に会うのか。必然と、ネガティブな考えに陥る。それが安直なものだと分かっている、それだけ今の藤井は追い込まれていた。

「それで、君が藤井君か」

「は、はいっ！」

両手を膝の上に乗せて、元氣よく返答する藤井。まるで面接だ。それを横でクスクスと笑う千花。だが、彼女の微笑む声は藤井に届いていなかった。

「ふ、藤井太郎と言います。桜川高校に通う高校三年生です。じ、実家はラーメン屋です」

「桜川高校か。なら、男子校だね？」

「そ、そうです」

「高校生にしては落ち着いた服装だね。趣味？」

「そう、ですね。地味なのが好きなんです……」

「ご実家がラーメン屋さんなんて、羨ましいよ」

「いえそんな……案外すぐ飽きますよ」

「そう？ 私も好きでね。今度食べに行ってもいいかい？」

「え、ええ。美味しいかどうかは分かりませんが……」

優しい声だ。怒っている様子は微塵も無い。藤井は不思議な感覚だった。勝手に怒られると思っただけに、強張っているのは自身の体だけ。優しく笑う大地に、釣られて口角が上がる。

上手く笑えているわけではないが、初めて上がった千花の家。これに安心したのは、彼女自身だった。せっかく招いて、嫌な思い出しが無いというのは避けたかったから、藤井につられて千花も微笑む。

「太郎くん。別にお父様は怒ってないんですよ？」

「そ、そうなの？」

「おい千花……変なことを吹き込んだな？」

「そんなことはないですけどお……」

藤井が勝手にビビっているだけなのだが、千花はそれを口にできなかった。怒っていない旨を伝えていない時点で彼女はクロなのだが、余計な口を挟むと小遣いを減らされる可能性もある。何事もなかったようにあははと笑う。政治家のような腹黒さ。藤井も苦笑いするしかなかった。

「そうだ千花。今日美味しいリンゴを頂いたんだ。悪いが、切ってくれないか？」

「えーっ。どうして私が？」

「リンゴぐらい切れないと、藤井君も悲しむぞ」
「むう……」

本来なら、家で雇っているお手伝いさんにやってもらうこと。だが、娘の千花にそれを頼んだのには、訳があった。千花からすれば、大地の言う通り家庭的な一面を見せるアピールでもあるが、大地の狙いはそこではない。

藤井に一言言って、応接室を出て行く千花。ドアが閉まったことを確認して、大地は一つ咳払いする。

「さて、ようやく二人になれたね」

「えっ……？」

少しだけ抜けた力が、再び筋肉を硬直させた。

背筋も伸びて、また暴れ始める胃液。その様子を察した大地は、優しく右手を差し出して見せた。

「そんなに身構えないで。私も本当に怒っていないから」

「そ、そうなんですか？」

それならそうでいい話だが、藤井からしたら拍子抜けである。

だが、一呼吸置けたのも束の間。大地は言葉を続ける。

「男同士の話だ。正直に答えて欲しい。……千花とはどこまでシたのかな」

「……………はい？」

大地は後悔した。カッコいい頼れる父親のメンツを保つために、絶対に口にしないでおこうと決めた言葉。だが、どうしても気になってしまうのが父親の性。ふんわりと、でもど直球に問いかける。

これに困ったのが藤井だ。目が点になるとは、まさにこのこと。聞こえなかったフリをしてとぼけて見せたが、大地は恥ずかし気もなく続ける。「どこまでシたの？」と。

(何言ってるんだこいつ……)

それもそうだ。娘の恋人に対して、一発目に聞く言葉ではない。しかし、きらりと光るレンズの向こうにある眼光鋭い視線が突き刺さる。

「怒らないから、言つてごらん」

先生の常套句である！

生徒に対して、自白を強要する時に使う圧倒的チート！　そしてその結末は一つ。普通に怒られる。答えずとも怒られる。答えなくても怒られる。最悪な沼にハマってしまったと、気づいた時にはもう遅かった。

「チューはした？」

「えつと……」

「怒らないから」

「まあ……」

「……したの？」

「はい」

「……そつ、かあ……」

嗚咽に近いため息を、藤井は初めて聞いた。

藤原大地は、とにかく娘たちを溺愛している。その子が見知らぬ男といちやついた現実に向かい、絶望している画である。

「一応聞くけどその先は？」

「えつと……まだです」

「まだ？」

「……あ、いや、えつと、その、それは言葉の、綾というか、何というか」

本来なら、今日がそうなる予定だった。とは、口が裂けても言えなかった。藤井は誤魔化すも、これではヤル気満々と受け取られても仕方がない。実際そんなのだが。

だが、藤原大地はこんなことが聞きたかつたわけではない。思い切り咳払いをして、会話を強制的にリセットする。

「ほら、緊張しているように見えたから。リラックスさせてあげたくてね」

「は、はあ……」

適当な嘘を吐いて、もう一度咳払い。今度こそ、纏う雰囲気を変えて言葉を紡ぎ始めた。

「変なことを聞いてすまなかつた。ただね、私も父親だ。娘は何より大切なんだ」

「……はい」

「だから、君のことを教えてくれないかな？」

ついに、来た。

やんわりとした言い方ではあるが、藤井は覚悟した。家柄。ここで判断されるかもしれない、と。ゴクリと固唾を飲んで、息を吐く。

大地は優しく微笑んでいる。政治家らしい、薄い笑い方。やはり、今彼が何を考えているのか藤井には読めなかつた。でも、一つだけ分かつたこと。藤原大地には、嘘が通じない。直感がそう言う。ここで変に見栄を張るのは逆効果に違いないと。

「僕の家庭は、普通です」

大地は少し目を見開いた。少し驚いた様子。言葉を紡ごうとするも、早かつたのは藤井の方だった。

「母親は居ません。少しでも父親を助けたくて、休みの日は家の手伝いをしています。進路は……家から通える大学に進学するつもりです」
一通り、自身の説明を終えた藤井。あとは大地のリアクション待ちなのだが、返答待ちのこの時間がとても長く感じられる。少し目を伏せて、考えている様子の彼を見ることしかできない。

「聞き方が悪かつたかな」

「えっ……？」

ポツリと溢したその言葉に、藤井は両手で拳を作る。でも、大地はやはり怒った様子はない。むしろ、笑っている。

「ご家庭のことじゃなくて。藤井君の趣味とか、好きなモノとか。そんなことが聞いたら良いなと思って問いかけたんだけどね」

「あ……そ、そうだったんですか。す、すみません……何か誤解しちゃって」

そこでようやく、藤井は冷静になった。

藤原大地

自身に怒っていないというこの人が、いきなり家庭のことを問いかけてくるはずがないと。そういう話は、もつと時間が経ってからでも良い。藤井の態度に問題があれば話は別だが、彼は至って普通の高校

生。大地の目にもそう映っている。

だからこそ、大地は不思議だった。まだ高校三年生の藤井太郎が、いきなり家庭の話をぶつ込んできたのだから。これではまるで、結婚を乞う挨拶ではないかと。彼がそこまで考えているようには見えなかったが、気になった大地は問いかける。

「どうしてそんな誤解を？」

「……その、正直に言いますと。僕は千花さんとお付き合いできる人間じゃないと思っていました」

「どうして？」

「これまで千花さんのような人が、周りに居なかったからです」

角が立たないように、藤井なりに考えて考えて言葉を捻り出す。

「周りに居なかった」という言い方に、大地は引つ掛かりを覚える。

しかし、それはすぐに解消される。いきなり家庭の話を持ち出してきたのは、それが理由だろう。大地も政治家だ。会話の裏を読み取る癖が付いている。

「なら、どうして千花と付き合いおうと思えたの？」

「好きだからです」

「随分とシンプルな理由だね」

「もう、家柄の差なんてどうでもいいぐらいに千花さんに惚れてしまいました」

ああ真っ直ぐだ。真っ直ぐすぎて、清々しい。難しい言葉や、回りくどい言い方じゃない。ど真ん中ストレート。一六〇キロだ。

気怠く、憂鬱で進展のない国会答弁ばかり聞いていた大地にとって、彼の力ある発言はどんな答弁よりも美しく説得力がある。今の首相には藤井太郎の爽快さを見習ってほしいぐらいに、大地の心は晴れやかだった。

「あはははっ！」

だから、声をあげて笑ってしまうのだ。決して見下した笑いじゃない。自身の最愛の娘のことを、心から好きでいてくれる喜び。それだけ。不思議と嫉妬は無かった。

「大丈夫だよ、藤井君。今日が初対面だが、君はしっかりした良い子

だ。ご家庭のことも、大切に育てられたのがわかる」

「そんな……僕は」

「フォーマルな服装も、言葉遣いも、声のトーンも。礼儀正しくて心地が良い。千花が惚れたのも分かる気がするな」

「恐れ多いほどの絶賛。藤井は戸惑った。」

でも、千花の父親からそう言われることに抵抗は無かった。むしろ、自身の彼女に対する思いが伝わってくれたようで、嬉しかった。

それと同時に、藤原大地という人間はしっかりと話をしてくれる人。藤井の中でその認識が出来上がる。娘の恋人とか、高校生とかそんな先入観を捨てて、目の前にいる人間のことだけを見てくれる人だ。

ようやく、体から力が抜けた。

ずっと筋トレをしていたかのような疲労感。でも、確かに残る心地良さ。

「正直、千花に関しては浮いた話が一度も無くてね。恋人とかはもつと先になるだろうと思ってた」

「……はい」

「出合いも君のご実家かな？」

「そうです。落とし物の生徒手帳を秀知院に届けて、その日の夜にまた来てくれたんです。それからちよくちよく話すようになって」

「ラーメンより、藤井君に会うために行ってたんだろう。あの子が恋、か。何というか、親だけど不思議な感覚だな」

大地の言うことも、藤井は納得できた。

確かに、千花は好かれることはあっても、好きになることは無かった。現に多くの男から告白されているのだから、経験があっても不思議ではない。

「それだけ、君のことが大切なんだ。だから、千花のことも大切にしてあげてくれ。私からは、それだけだ」

「……はい！ 絶対に悲しませません」

「あはは。高校生なんだから、もっと気楽に」

ああ、新鮮なリングが、萎れてしまう。

少し開いた扉の向こうで、藤原千花は立ち尽くしていた。でも、今のままでは部屋に入れない。彼の顔を見てしまったら、きっと、好きが爆発してしまうから。

盗み聞きなんて、らしくないことしなければ良かった。千花は少し後悔する。でも、そのおかげで二人の会話を途中から聞くことが出来た。大地が自身にリンゴを切らせた理由は、きっとこれだったのだろう。

立ったまま、切り分けたリンゴをひと齧り。

「甘い……」

それはそれは、自身には勿体ないほどの恋の味だった。

家柄のことを呆気なく乗り越えた二人。障壁という意味では何も無くなったに等しい。だから、これから先は言い訳が出来ない。しっかりと、彼のことを見て、自身のことを見られないといけない。

「リンゴ、美味しいですよー!」

勇気を振り絞って、部屋に戻る。大地と藤井、二人と目が合うが対照的な表情。誠心誠意、父親とぶつかってくれた千花最愛の恋人は、少しかだけ疲れた目をしていた。それでも、顔色はさつきよりもだいぶ良い。

「太郎くん」

「なに?」

「これからもよろしくお願いします」

「急に改まってなに?」笑う藤井太郎の横で、千花はもう一度リンゴを齧る。やっぱり、とてもとても甘い。

笑う藤原大地に小言をぶつける千花。藤原家の日常に、藤井が馴染んでいる。あれだけ家柄の差を気にしていたのに、自身でも驚くほどこの光景がしっくりきていて。

それがすごく幸せで、涙が溢れそうになったから。だから、藤原千花はもう一度リンゴを齧ってみせた。

雨の音で誤魔化そうか

その日は、強い雨が降っていた。

春も中頃。季節の変わり目であることを知らせるかの様な豪雨。窓の外に広がる黒い空を眺めながら、藤井は一つ息を吐いた。

思い返されるのは、あの日のこと。藤原千花の父親、大地との会話。自身が思っていた以上に柔らかい人で、本当に快く付き合いを認めてくれた。まだ高校生だから、気楽に。なんて言ってくれるほど。

「千花ちゃんに会いたいなあ……」

自室のベットに横になって、つぶやく。力の無い声は、やがて天井にぶつかって消えていく。

千花にはあの日以来、二週間近く会えていなかった。桜が見頃だった季節は終わって、梅雨の足音が強まっている。せつかくの休みだったが、彼女にも用事がある。三年生になってより忙しさを増している千花。最後の生徒会活動に注力する彼女の邪魔になってはいけない。そうは分かっているけど、最愛の恋人に会えないのはやはり辛い。タイミングが合わない苛立ちが、勉強する気力を削いだ。

背中に感じる慣れた感触。そろそろ干した方が良い布団だったが、今日の雨では無理だ。また明日、また明日と言いつけさせる。

「そんな太郎くんのために、参上しましたよっ」

「……えっ？　ち、千花ちゃん？」

体を起こして、開けっ放しにしていたドアを見る。するとそこには、藤原千花の姿があった。白のワンピースがよく似合う。だからこそ、こんな狭い家には不釣り合いでもある。

彼女が藤井の家に上がったのは、今日が初めてだった。だから、彼の目から見て今の状況は違和感でしかない。そもそも、今日は約束も何もしていないのだから。

「実は用事が無くなって。さっきメールしましたけど、見てないです

か？」

「……ほんとだ。気付かなかったよ」

「ふふっ。下でお義父さんから『部屋に居るから上がっていきなさい』って」

「親父が？ 付き合ってることまだ言っていないのに……」

「太郎くん、分かりやすいですから。お言葉に甘えて、勝手に来ちゃいました」

藤井の父親から渡された鍵をジャラリと見せつける。不思議そうな顔をしていた彼も、ようやく事態を飲み込むことができた。彼女が家に入ってきたことにも気付かない辺り、それだけブーツとしていたということだ。

「隣、どうぞ」

「はい」

別に床が汚れているわけでもない。彼女が座れる座椅子だってある。だが、藤井の口からは隣に来るように促す言葉。彼が普段眠っているベッドに腰掛けることに、ほんの少しの抵抗感。嫌ということじゃなくて、純粋な申し訳なき。

でも、千花の心は素直に頷いた。抵抗感より、興味の方が勝ったのである。鞆を床に置いて、ちょこんと腰を下ろす。少し沈んだ感覚に、藤井は違和感を覚えた。

自身のベッドより、少し硬め。心のどこかで期待していたような、雲の上に居るような感覚はなかった。

「すごくシンプルなお部屋ですね」

「まあ、テレビぐらいだよ。最近点けてないけど」

「スマホが有ればどうにでもなりますもんね」

「こそ」

彼の部屋は彼女の言う通り、テレビと勉強机ぐらいしか置いていない質素な部屋だった。その代わり、中央に置かれているテーブルの上にはイヤホンだったり、CDが乱雑に置かれていた。

いかにも男の子っぽくて、千花は口元が緩んだ。完璧に片付いているよりも、こういう生活感のある彼を見れて、どこか嬉しかったから

だ。

素っ気ない藤井の返答から、言葉が続かなかった。

千花は彼の隣に座っているとは言え、ギリギリ肩を抱ける距離。この微妙な距離感が、会話を続けるか否かの判断を鈍らせていた。

ドアも、窓も閉まっている。聞こえるのは、外で強く打ちつける雨の音だけ。今まさに、ここは密室状態だ。そこでようやく、千花はこの状況が異質なモノであると気付く。

二人きり。思春期の男女が二人。それは、そういうことだ。

胸が跳ねる。肝心なところに今頃気付いてしまったからか、今は藤井の顔を直視出来ないで居た。無論、それは彼も同じなのだが。

用事が早く終わって、その足でラーメン天龍にやって来た千花にとって、この展開はある意味特殊イベント。想定していないといえそうですが、本人はここに来るまで「ラツキー」程度にしか思っていなかった。

「雨、酷かったでしょ?」

「へっ……?」

「千花ちゃん?」

「あ、えっと……そうですね」

だから、あからさまに狼狽えてしまうのだ。

あははと苦笑いして誤魔化して見たものの、反応の鈍い彼女に気付かないはずもない。藤井は少し懐疑的な視線を向ける。

「もしかして」

「はい……?」

「具合悪い?」

「えっ」

「いや、雨に濡れたのかなって。寒くない?」

「……あはは。もうっ。大丈夫です」

藤井太郎は、どこまで行っても藤井太郎なのだ。

変に緊張していた自分が可笑しくなって、千花は頬を緩めた。そして彼に向ける視線は柔らかくて、包み込む様なモノ。

彼なりの優しさに笑って返す。少しだけ申し訳なかったけど、これ

で彼も安心してくれるのが分かっていたから。千花の思い通り、藤井は安堵の表情を浮かべていた。

でも、消えない事実がそこにはあった。

今、この家に、二人きり。

意識するな、と言う方が酷な話なのである。藤井は、千花に悟られないようにチラリ、またチラリと視線をやる。

白のワンピースを着ている彼女はいつもと違って、どこかしおらしくかった。元より、彼の前だと生徒会で見せる奔放な一面は形なりを潜めている。藤井自身そのことは分かっていたのに、この違和感は胸に居座っている。

「……二人きりですね」

千花の口から漏れた言葉には、色んな意味が込められている。

藤井は、その意味を考えようとしなかった。考えてしまうと、きっと、自分は自分を抑えられなくなる。分かっていたから。

返答を待っていた彼女にとって、藤井太郎のリアクションは期待を裏切ったモノであることには違いない。恋人である自身が勇気を振り絞って言った言葉だ。単純だけど、深い意味が込められたセリフ。そこは読み取ってほしい、なんて我儘を説明する気にはなれなかった。

「……二人きりだね」

なんてつまらない返答だろう。藤井は自嘲した。

ここで気の利いたセリフをぶつけることが出来たのなら、きっと大きな進展が二人を待ち受けていたはずなのに。自身が蓄えてきたボキャブラリーはこの程度かと嫌気が差す。

千花は、彼の部屋の良い匂いによく慣れてきた。まるでアルコールが入っているような、頭がふわつく感覚。もちろん、酒の匂いなんて最初からしないのだが。

隣に居る彼を見る。何も無い天井を見上げていて、まるで自身を避けているように見える。だから千花は、自ずと動き出す。

彼の隣にピタリとくっついて、左腕に自身の腕を絡ませる。当然、天井を見上げていた藤井の視線は彼女に向かう。

「せつかくですから」

「千花、ちゃん」

肩にコツンと当たる恋人の頭。肘のあたりには、彼女特有の柔らかな感触。左腕ごと包み込むような包容力すら感じてしまう。

すぐくドキドキする場面であるのに、藤井は意外と冷静だった。自分でも首を傾げてしまうぐらいに、不思議で。

いや、それ以上に。すぐく、心地が良かった。彼女とこうして、二人きりでのんびりとくつついていることが。そこには、いやらしさなんてものは存在しない。とつても綺麗で、潔白で、優しさに溢れた空気分。

「……あつたかいです」

「うん。俺も」

「眠たく、なりますね」

互いの体温を感じている。平熱よりも高いソレは、風邪を引いているのではないかと思わせるほど。でも、そんな野暮なことはもう聞かない。二人は、もう二人だけの世界に入り込んでいるのだから。

藤井の鼻を抜けるのは、千花の香り。シャンプーの甘い匂いが、彼の心臓を鷲掴みする。彼女を離すなど言われているような錯覚に陥る。無論、そう言われずとも離すつもりなんて毛頭に無いのだが。

雨の音。先ほどよりも強く、窓に打ち付けている。下手をすれば彼女の声すらかき消してしまうほど。もっと綺麗な家に住みたいだなんて思っている、割と気に入っているのが本音。

「ねえ」

「なに？」

「こういう時って……どうするのが正解なんでしょう」

千花の問いかけに、藤井は何も言わなかった。

いや、言えなかつたのだ。恋愛経験の乏しい彼にとつて、彼女の質問に答えるだけの知識は持ち合わせていない。生憎。

正解なんていうのは、きつとある。藤井は考えるが、正解を導き出すまでの方程式すら組み上がらない。彼女の熱で汗ばんでくる左腕に意識が引つ張られて、上手く頭も回らなかつた。

(……俺は、この子を)

どんな綺麗事を並べても、藤井の奥底には確かにある。

藤原千花を、抱きたいと。それは、至って普通の感覚なのだ。彼女は、たった一人の存在。恋人が恋人を抱きたいという思春期の少年らしい素直な感情が湧き出る。

そこで、彼女の問いかけに戻る。そもそもの話、何故彼女は正解を導き出そうとしているのだろうか。彼の中で生まれる疑問。彼女の質問に対してではなく、自身の疑問を解消するべく思考が回る。

千花もまた、藤井と同じなのだ。

彼のように恋愛経験が乏しく、こういった場面に遭遇したのは今日が初めて。どうすれば良いのか分からないから、だから彼に問いかけた。

なのに、藤井はその質問に対して何も言わない。黙って考えているだけ。言ったは良いが恥ずかしくなった千花は、ただ彼の左腕にしがみつく力を強めるしか無かった。

「千花ちゃん」

「はい」

「俺は千花ちゃんが好きだ」

「私も太郎くんが好きです」

「だから」

「……だから?」

——君が欲しい。

なんて、クサイ言葉は出てこなかった。

ここまでできて、恥ずかしさを捨て切れない自分に驚く。だが、言葉等待つ彼女を待たせるわけにもいかない。藤井は、左腕にくっついた彼女をゆっくり剥がして、向かい合っ見て見せた。

二人、目が合う。座高は藤井の方が高い。だから彼女を見下す形になってしまっていたが、そのおかげで上目遣いの千花を見ることが出来たのだ。

藤井の胸は、まあ高鳴った。血液がすべて下半身に集まっているんじゃないか、なんて勘違いしてしまうほど。でも間違いなく、彼の全

身を流れる血液は沸騰しそうなほど熱く、赤く燃えている。

「あ——」

吸い寄せられるように、唇が重なった。

千花も少し驚いてはいたが、すぐに彼を受け入れた。瞼を閉じて、五秒ほど。藤井の方から離れて、また二人見つめ合う。

蕩けそうな目をしていたのは、千花だった。

自分からするのは、やっぱり恥ずかしかったりする。だから、こうやって彼に促すしか出来ないのだ。でも、それを察して行動に移してくれる辺り、藤井太郎は自身にとって最高の相手なんだと実感する。

何より、口づけの幸福感。初めてのキッスから少し経っているというのに、その新鮮味は消えることがない。藤井と同じように、千花の血液もまた燃えたぎっている。

「千花……」

「……あ」

今日、二度目のキッス。

一度目のような、軽く触れるようなモノではない。藤井は、初めて千花の唇を優しく噛んだ。

筋肉が反射する千花を、彼はそのまま抱きしめて。千花もまた、彼の腰に腕を回した。対抗するように、彼の唇を噛み返す。

甘い。甘い。甘すぎて、体が蕩けてしまう。二人きりの世界。彼らはただただ恋人の存在を確かめていて、口内に侵入するソレすら受け入れた。巻き込み巻き込み、巻き込み返す。互いの味。初めて感じた恋人。お互いに、下半身に集まる快感の元が疼き始めていた。

何分だろう。無我夢中に互いの唇を噛んでいた二人だったが、息苦しくなったのか。藤井の方から離れた。伸びる糸に視線は落ちない。ただただ、相手の瞳に吸い込まれていた。

そのまま、藤井は千花の両肩に手を置いて、優しく、優しくベッドに倒す。彼女は驚くことなく、ただただ藤井の顔に見惚れていた。

「もう……我慢が」

「……ま、待ってください」

「ど、どうして」

「声……聞こえちゃうかも……」

途端に冷静になった千花は、ようやく彼から顔を背けた。

心に広がる海の中から、ひよこつと顔を出した羞恥。二人きりだから、感覚が鈍っていたのだろう。だから、ここで一旦。冷静になるようにと無意識のうちに警鐘を鳴らした。

だが、その行為が藤井には逆効果だった。

出会った中で、今日が一番だった。彼女の頬は、まるで林檎のように丸く腫れていて、覆い被さっている彼の鼓動を早めたのだ。

「雨、酷いから大丈夫」

「理由になってないですよ……」

三度目の口づけは、とても長かった。

やがてそれは、彼女自身に口づける引き金となって。

その日は、強い雨が降っていた。

藤原千花の声は、藤井太郎にだけ届いていた。

それが恋と背中を押す

雨の季節が始まった。路地裏は暗く、空から落ちる水滴を弾くしか能がない。重そうな雲が包み込むこの空間は、季節の情緒を醸し出しているもんだから、雨が嫌いな人間からするとあまり良い気はしなかった。

——この音を聴くと、頭をよぎる。藤井太郎は誰も居ないカウンターを眺めながら、濡れた布巾を横に滑らせる。あの時の、あの彼女の声を思い出すだけでゾクリと背筋が笑う。

雨のせいで客足は鈍い。平日とはいえ、この寂しさは店主もため息しか出ない様子。店番を彼に任せて、買い物に行つてくると外に出た。「準備中」の札を店のドアにぶら下げて。思い返せば、こういう日に彼女はよく姿を見せた。だから二人で話す機会も増えたし、こういう関係になることが出来た。

だから——なんて淡い期待を抱く。準備中の札を掛けていたのに、ガラリと引き戸を引く音が響いた。姿を見せた人物は、彼の予想の斜め上をいった。

「——あ、あの」

「あ……君は」

彼と目があつて、ペコりと頭を下げた。可愛らしい桃色の傘を片手に、おさげ髪が特徴の彼女は、藤井もよく知る人物だった。

伊井野ミコ。白銀御行や四宮かぐやと同じ、秀知院学園の生徒会メンバー。白銀が十月に留学してしまうため、次期生徒会長の呼び声高い少女である。

そんな彼女が、何故ここに？——なんて疑問を抱く前に、もう一度目が合う。

「あ、ああ、適当に座つていいから」

「……はい」

ぎこちなさが残る会話。——それもそのはず。この二人には浅からぬ因縁があるわけで。遡れば去年の梅雨になる。

今や愛しの恋人となった藤原千花の生徒手帳を届けに行った際、対応したのがこの伊井野だ。これだけ聞けば至って普通なのだが、残念ながらそういうわけにもいかないのである。

秀知院学園の体育祭まで会うことが無かったとはいえ、心のどこかでは気にかけていたのも事実。互いのベクトルは違えど、関係性は途切れることなく水面下で繋がっていた。

そのおかげで、体育祭の日、藤井は千花と会うことが出来た。彼を初めて男として認識する出来事があった。当の本人、伊井野ミコはその事実を知らない。——とはいえ、彼女も鈍感ではない。ましてや、尊敬する藤原千花の変化に気づかないはずもなかった。

だからここに来た。彼が千花の恋人であると知った上で。

決して綺麗とは言えない丸椅子が鳴る。軽い伊井野であっても、あまり良い気はしない。

「……」

水面下で繋がっていた、とは良く言った場合。言い換えれば、話したことが無い部類に入るのには目に見えている。

藤原千花の恋人——その一つだけで突撃した彼女がふと冷静になったとしよう。

(……気まずい)

視線を泳がせて、店を見回しているように見えるが、実際何も考えていない。おさげ髪が泣いているように見える。そもそも、ここはラーメン屋である。食事目的の人間が訪れるのだから、そんなキョロキョロとされると藤井も身構えてしまう。

だがその行動が、彼女の目的を表面上に浮き上がらせた。

「えっと……何か用かな」

伊井野はハツとして、厨房に居る彼の顔を見上げた。最後に会ったのは、秀知院の文化祭以来。その頃よりも雰囲気は大人びていて、たった一つ上の先輩感が薄れていた。

案の定、藤井は心の中で笑う。おおよその見当はついていなかったから。彼女がこの店に来たことも無いし、来るようなタイプでも無い。

だから、ラーメンを食べに来たというよりは自身に会いに来た。そう結論付けるのはあまりにも容易かった。

「あ、あの」

「ん？」

「本当に、ごめんなさい」

だからこそ意外だった。彼女の口から謝罪の言葉が出てきたことが。

藤井の目から見ても、伊井野ミコが千花のことを尊敬しているのは明らかで、てつきりまた小言を言われると思っただけに。

いま目の前にいるのは、生徒会監査、そして風紀委員の彼女ではない。ただの一人の女子高生。たった一つ下の後輩であることを思い出したような感覚。伊井野の表情は真剣そのもので、揶揄しているようにも見えなかった。

「急にどうして？」

「色々失礼なことを言ったから……。その……謝らないとつてずっと思ってたんです」

「そんないいのに。まあ、悲しかったけどさ。もう気にしてないよ」

恥ずかしそうに笑う藤井を見て、伊井野の頭に浮かんだのは尊敬する藤原千花の顔だった。

目の前に居る彼と同じような笑顔を見せる。彼の隣に彼女が居る。その光景が簡単に想像出来たのだ。これはそう、体育祭の日に見た光景と似ている。その時よりも幸せそうであるのは確かで、二人の関係が上手くいっているのは明白だった。

思わず口元が緩んだ。思い返せば、彼の前ではいつも仏頂面。嫌いだったわけではないけれど、藤原千花と仲が良さげな事実があまり好ましく思えなかった。

それがスツと消えていく。絶対的な根拠は無くても、彼女が幸せであるなら——なんて感情のおかげで。

「なんか、雰囲気変わった？」

片手で数える程度しか会った事は無かったが、藤井がそんなことを言ってきた。

「何を根拠に」と頭では分かっていたが、伊井野は心の奥底を覗かれた気分で足元から熱があがっていく。揺らぐ瞳を誤魔化すように、差し出されたオレンジジュースに口付けた。

「藤井先輩って、意外と鋭いんですね」

「意外かな……？」

「ふふっ」

揶揄ったつもりはなかったけれど、照れ臭そうに頭を掻く彼が少し可笑しかった。上品に口元を抑えてクスクス笑ってみせた伊井野は、そこに残る微かなオレンジの味を噛み締めながら。

鼻の奥に残る梅雨の匂いを掻き消す甘さ。体の奥に染み渡っていった、頭の中に浮かぶのは彼の顔。嫌いなはずだったあの子の顔。

「先輩は——恋をして変わりましたか？」

その質問の意味を理解するのに、時間は掛からなかった。藤井太郎は伊井野ミコの纏う違和感の正体に辿り着いたのだから。

藤原千花とは違った甘い香りを放っている少女。年下とは思えないやけに大人びたオーラ。黙っていると飲み込まれそうだったから、彼は軽く咳払いをして答える。

「変わったと思う。毎日楽しいし」

素直な声である。そこに嘘はない。伊井野もそれは理解していたから、真つ向から否定することはなかった。しかし——そんな綺麗なモノではないと、彼女は思う。

「恋というのは、ひどく、残酷です」

元々が妄想癖のある少女。自身の発言は全て全力で本気である。周りがどう思うかは別にして、共感を求めたつもりはない。

だが今はどこか、自身を俯瞰してみている自分が居た。そうやって、誰かに言うことで落ち着きを求めている伊井野ミコという存在を見つめていた。

違う。これは同情だ。目の前の彼に同情して欲しくて、情けない顔をしている。そんな自分が可哀想だと思ってしまう。伊井野にとつて、何もかもが初めての感情だったから。

「——うん。そうだね」

同情。彼女が求めていたソレは、思っていたよりも胸に響かない。ああ、だつて、彼は私に同情なんてしていないんだもの——。哀れなワタシ。こんな姿を晒すために来たわけじゃないのに。馬鹿らしい。ああ可哀想——。なんて自身に呆れて。伊井野が顔を上げると、藤井と目が合った。笑っていた。「でも、良い思い出ばっかりだよ」

そんなわけがない。それは結果論に過ぎない。伊井野は反論しうになつたが、謝つたばかりなのに新たな種を蒔くわけにはいかないと自重した。

そもそも地頭の良さが違うから、彼のことを簡単に論破する自信はあつた。フワフワとした彼の思考を乱すことぐらい簡単な——はずだと思つていた。

「そう……ですか」

ところが、伊井野は何も言えなかつた。その原因は、当の本人もよく理解していない。

きつと、自分とは違うんだ。相手は藤原先輩だもの。アイツよりも良い人だし、捻くれていないし——。随分と偏つた思考である。だが、藤原千花も十分に面倒で重い女であることを伊井野は知らない。好きなモノの裏側には目を瞑るタイプである。

石上優は失恋から立ち直ろうとしていた。皮肉なモノで、その相手の尽力もあつて、石上のことを悪く言う人間は居なくなつていた。だから、あの頃よりも幾分と明るくなった。

伊井野ミコは彼の失恋を喜んだ。やった。これで私にも——なんて汚い考えを抱く自分が嫌いで嫌いで堪らなかつた。それなのに、胸の高鳴りは治らない。こちらもまた、皮肉なモノである。

「聖人なんて、居ないから」

ふと、藤井がそんなことを言つた。伊井野はハツとして、俯きかけた顔を上げた。ツーンと鼻が痛む。鼻炎のせいだと彼女は思うことにして。

「……いきなりどうして?」

「ん、いや、なんとなく」

そう言いながらも、彼は何か言いたげだ。伊井野が少しムツとする
と、藤井は「怒らないでよ」と前置きして話し始めた。

「君、融通効かないタイプじゃん。頭も固いし。だからすぐ綺麗な
恋を期待してるんじゃない？」

反論の余地しかない。裏腹に、伊井野の胸はこれまでに無いほど痛
んだ。

恋というのは、ひどく美しくて、人を幸せにしてくれるモノ。その
はずなのに、今の自分はそうじゃない。むしろツラくて、苦しくて、吐
き気がする。この青春の味に。このままだと、胸が潰れてしまう。

彼を好きになってしまった。嫌いだった石上優を、心から自分のモ
ノにしたいと思ってしまった。それは罪なのか？ いいや違う。た
だの青春の一ページ。伊井野ミコにとって、その一ページは密度が高
くて、あまりにも厚い。

「俺だって、最初はそう思ってた。でも違った。恋は君の言う通り、ひ
どく残酷だと思う」

元々が妄想癖のある少女。故に、幼少期から築き上げられた「恋」の
ブランドは、胸の中だけに留まることが出来なくなっていた。

同時に、彼女は理解することになる。現実はこんなに甘くないと。
だから、残酷だと表現してみせた。

藤井太郎もそれに同意した。その意味を彼女が問いかけると、彼は
少し考えて話す。

「上手くいくことの方が少なかったから」

「……具体的には？」

「えーっと、あんまり言いたくないな……」

伊井野は唇を尖らせる。

「分かりました。藤原先輩に言っておきます。口説かれたって」

「お、脅し!? わ、分かったからスマホしまつて!」

「誤魔化すのはナシでお願いします」

いつからだろう。石上とのこんなやり取りも無くなっていて、ある
のは微妙な空気と会話。彼に好意を抱かせようと無意識に動いてい
るせいだ。

少なからず、伊井野は石上優への好意を自覚している。しているのだが、あまりにも彼のこれまでのプロセスが複雑化しているせいで、積極的に動くことを躊躇わせていた。

子安つばめに振られ、伊井野ミコに靡なびいた——そう言われるのは嫌だった。まして、彼がそんなことを陰で言われるのも耐えられなかった。

私を見て欲しい。私だけを見つめて欲しい。私のことを——心から好きになって欲しい。それは、彼女の純粹で、素朴なまでの願い。乙女の恋はいつまで経っても真つ直ぐである。初恋と呼ぶには、少し重すぎるほどに。

「俺、一度振られてるんだよ」

「……えっ?」

伊井野が思っていた以上に重い言葉が飛んできた。でもそれは、不思議と彼女の心を軽くした。だって彼は、振られても藤原千花と付き合っている。「ごめんなさい」と咄嗟に謝罪の言葉が出てきたが、藤井は気にしている様子は無かった。

「でも、やっぱり諦められなくて。もう一回チャンス貰ってき。それでようやくくっつて感じ」

「……それはきつと、藤原先輩も好きだったから」

彼女の言う通りである。既定路線なんですよ、と続けた伊井野はまた言い過ぎたと後悔する。だが、彼は「ううん」と首を横に振る。

「そんなの分かんなかったよ。本当に脈無いんだなって思ったし」

「……」

「その時にならないと、分からないモノなんだね。人の心ってさ」

相手の感情が読み取りたいと思っただけは無かった。無かったけれど、石上の心が読めたらどれだけ楽だろうと伊井野は思う。

でもそれは、諸刃の剣。知りたくないことまで知ってしまうから。心に残った子安つばめへの恋心を覗いて、受け止められる自信は無かった。だから、彼女は残り少なくなったオレンジジュースを喉に流し込んで誤魔化した。

さつきほど甘くなくなっていたソレは、伊井野を現実の海に引き上

げる。深いため息をしたところで、胸の重さは変わらない。

やがて訪れる静寂。彼女は感情を吐き出すことに慣れていないから、ただ口に残る甘味の余韻に浸るしかなかった。

「——怖いんだよね」

唐突に彼が言った。伊井野はただ意味が分からなくて、言葉を漏らすこともしなかった。

「好きな人が、遠くに行ってしまうのが」

石上優が失恋したことで、誰かのモノになる可能性は一旦無くなった。とはいえ、かつての彼の姿はもう無くて、クラスの中にも良い意味で溶け込んでいる。

靡いたとは言われたくないけれど、誰かのモノになるのも嫌だ。その狭間で揺れ動くしかない伊井野ミコの純粹で捻くれた恋心。それは確実に彼女の胸を蝕んでいく。

だけど確実に言えるのは、藤井太郎の言う通りだということ。誰かのモノになるのは、この上なく嫌悪する。伊井野にとって、それが恋心なのだから。

「なら、なりふり構ってられないんじゃない?」

彼女が否定も肯定もしていないのに、藤井がそう言ったのは態度がわからさまだったからだ。まるでかつての自分を見ているようで、少し息苦しさすら覚えた。

でもそう。今の伊井野に余裕は無い。だから、ムカつくほどに染み込んできた。藤井の言葉一つひとつが、自身の妄想で出来上がった夢の中に。

「藤井先輩って良い人ですね」

「そう? ありがとう」

「藤原先輩を泣かせたら、許しませんからっ」

「君って何か言い方重いよね……」

「ごちそうさまでした」伊井野は立ち上がって、彼に一礼する。その辺の行儀が良いから、彼も黙って見届けるしか出来ない。どちらかと言えば、四宮かぐやに近いドス黒さを藤井は感じつつも。

引き戸を開けると、雨が止んでいた。桃色の傘は少し寂しそうにト

ンツと地面を叩く。

久々に青空を見上げた気がして、伊井野ミコは笑った。自分の心の中と同じ気がしたから。

それからしばらくして、夏が始まる少し前に、彼女はまた、ほんの少しだけ大人になったのは別の話。